太宰府市の文化財第 130 集

太宰府・国分地区遺跡群 4

－国分千足町遺跡第 1・2・3・7 次調査－

平成 29(2017) 年

太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財第 130 集

太宰府・国分地区遺跡群 4

－国分千足町遺跡第 1・2・3・7 次調査－

平成 29(2017) 年

太宰府市教育委員会

序

本書は、太宰府市の国分地区で実施した発掘調査の報告書です。

調査地は、筑前国分寺跡の南西に位置し、現在まで周辺一帯では弥生時代から古代にかけての遺跡が確認されています。特に平成 24 年には本遺跡の北東隣接地で戸籍計帳関係木簡が出土し、話題となりました。

今回の調査では、竪穴住居跡や弥生土器が多量に廃棄された流路など弥生時代中期の集落跡が確認されました。また、奈良時代の掘立柱建物群も確認され、古代大宰府における筑前国分寺周辺部の土地利用を考える上で貴重な成果が得られています。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

結びになりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成 29 年 3 月
太宰府市教育委員会
教育長　木村甚治

例言

1. 本書は太宰府市国分３丁目で行われた国分千足町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。第１次調査については、測量データ不足で明確な座標値を得ていない。
3. 遺構の実測及び写真撮影は山本、狭川、緒方、城戸、山村、宮崎が行った。
4. 遺構の空中写真撮影は、PHOTOオオツカ、㈲空中写真企画が行った。
5. 出土した鉄製品の保存処理は主に㈱タクトが行った。
6. 遺物の実測は、山本麻里子、福井円、吉富千春、今岡一恵、山村、宮崎が行った。
7. 表入力・写真整理は瀬戸口みな子、市川晴美、吉村有紀が行った。
8. 遺物の整理接合・復元作業は馬場由美、住山景子、末永亜由子が行った。
9. 遺物の写真撮影は㈲システム・レコ（代表 仲村定美）、山村が行った。
10. 図の浄書は、山本麻里子、福井円、吉富千春、今岡一恵、山村、宮崎が行った。
11. 本書に用いた分類は以下のとおり。

    須恵器・・・太宰府市教委『宮ノ本遺跡Ⅱ　－窯跡篇－』（太宰府市の文化財第10集）1992

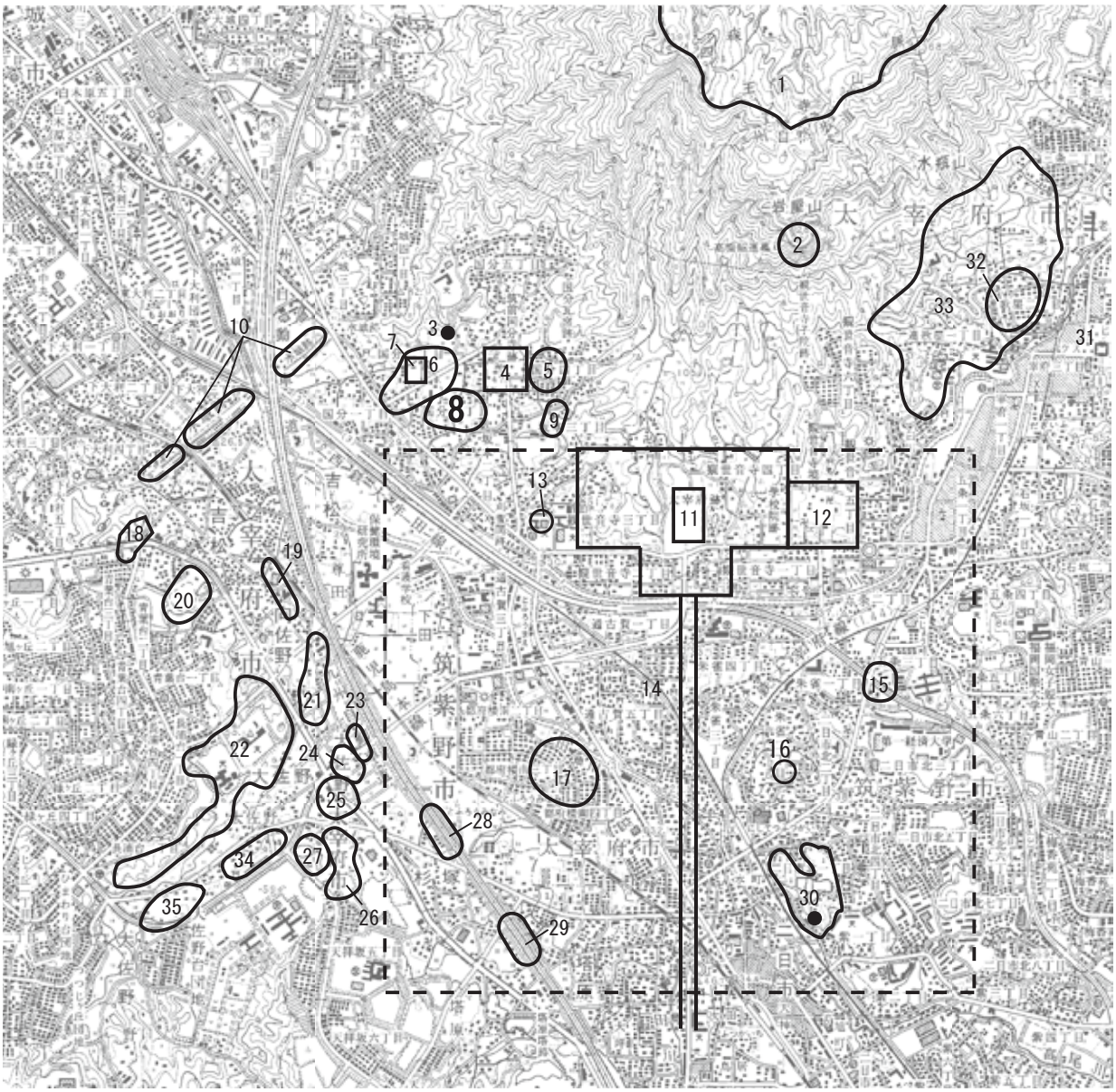
    土器・・・・太宰府市教委『大宰府条坊跡Ⅱ』（太宰府市の文化財第７集）1983

    瓦・・・・・九州歴史資料館『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』2000
12. 執筆は、第１・２・７次調査を宮崎、第３次調査を山村、編集は宮崎が担当した。

目次

Ⅰ、遺跡の位置と歴史 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
Ⅱ、調査体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
Ⅲ、調査および整理方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
Ⅳ、調査報告
1、国分千足町遺跡第1次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
(1) 調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
(2) 基本層位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
(3) 検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
(4) 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
(5) 小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
2、国分千足町遺跡第2次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
(1) 調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
(2) 基本層位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
(3) 検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
(4) 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
(5) 小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
3、国分千足町遺跡第3次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
(1) 調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
(2) 基本層位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
(3) 検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
(4) 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
(5) 小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
4、国分千足町遺跡第7次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
(1) 調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
(2) 基本層位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
(3) 検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
(4) 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
(5) 小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 122
5、国分千足町遺跡第4次調査出土遺物補遺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139
Ⅴ、調査まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 140

写真図版・・・主な遺構および遺物写真
附録・・・・・CD（遺構および遺物写真）



1. 大野城跡
2. 岩屋城跡
3. 陣ノ尾一号墳
4. 筑前国分寺跡
5. 辻遺跡
6. 国分松本遺跡
7. 筑前国分尼寺跡
8. 国分千足町遺跡(報告地)
9. 御笠団印出土地
10. 水城跡
11. 大宰府政庁跡
12. 観世音寺
13. 遠賀団印出土地
14. 大宰府条坊跡(方形破線内)
15. 君畑遺跡
16. 般若寺跡
17. 市ノ上遺跡
18. 神ノ前窯跡
19. 原口遺跡
20. 篠振遺跡
21. 前田遺跡
22. 宮ノ本遺跡
23. 雛川遺跡
24. フケ遺跡
25. 尾崎遺跡
26. 脇道遺跡
27. 殿城戸遺跡
28. 剣塚遺跡
29. 唐人塚遺跡
30. 峯・峯畑遺跡（●は峯火葬墓）
31. 太宰府天満宮(安楽寺跡)
32. 浦城跡
33. 原遺跡
34. 京ノ尾遺跡
35. カヤノ遺跡

Fig.1　太宰府市とその周辺の遺跡（1/30,000）

略称

国松・・・国分松本遺跡
正尻・・・国分正尻遺跡
千足・・・国分千足町遺跡
尼 ・・・・筑前国分尼寺跡
国 ・・・・筑前国分寺跡
辻 ・・・・辻遺跡
御・・・御笠団印周辺遺跡
堀・・・堀田遺跡
条・・・大宰府条坊跡
水・・・水城跡
川・・・川添遺跡
陣ノ尾・・・陣ノ尾遺跡
妙見・・妙見遺跡

Fig.2　調査地と周辺調査地点（1/5000）

Ⅰ、遺跡の位置と歴史

太宰府市は、北に四王寺山、北東に宝満山、南に脊振山地東端の天拝山に囲まれ、さながら盆地的な様相を示している。これらの山々が途切れている北西に福岡平野が、南東に筑後平野が広がっている。

調査地がある国分地域は、四王寺山の南西裾に位置し、南西部が開けるものの、それ以外は四王寺山から派生した丘陵に囲まれ、その最上部に筑前国分寺が建立されている。土地は扇状地形で緩やかに御笠川に向かって傾斜し、北端を陣ノ尾川、南端を大谷川が流れている。この陣ノ尾川、大谷川に囲まれた穏やかな微高地には、試掘調査等によって、流路が幾条走ることがわかってきている。

この地域で最も古い遺物は後期旧石器で、尼寺跡第 16 次調査で三稜尖頭器が出土しているものの、その後の縄文土器同様に僅かに散見される程度である。

弥生時代前期後葉から中期になると、この地域で主たる遺構群である集落や甕棺墓が見られる。特に国分松本遺跡第 4 次調査一帯では、100 基を超える弥生中期の甕棺墓が営まれる。市内でこのような大規模な甕棺墓群が確認されているのは、このほかに市東部高雄地区の吉ヶ浦遺跡だけである。また、大規模ではないものの、北側の陣ノ尾丘陵では甕棺や銅戈が出土している。その頃の集落は、甕棺墓群の東側に展開している。

弥生時代後期になると遺構は見られなくなるが、弥生時代終末期から古墳時代初期になると、再び遺構が確認され、方形の竪穴住居や箱式石棺墓群が展開している。

古代になると、弥生時代の集落と重なるように遺構が広がっている。扇状地の奥にある筑前国分寺は、天平 13(741) 年に聖武天皇の詔によって全国に建立された国分寺のひとつで、西海道では早い段階で造営されていたと考えられている。

その筑前国分寺前面からは、水城東門を抜けた官道に向かう東西道路が確認されていて、その途中で国分寺から西に 400m 付近には筑前国分尼寺の推定地があり、調査で確認できた尼寺の存続時期は 8 世紀後半から 9 世紀後半の 100 年間と推定されている。

筑前国分寺の東方には国分寺の瓦を供給したとされる瓦窯があるほか、周辺の丘陵斜面では大宰府政庁関連施設の瓦を供給したとみられる 10 世紀代の瓦窯（松倉、坂本、来木など）が確認されている。

また、国分松本遺跡からは 13 点の木簡が出土した。なかでも戸籍・計帳関係木簡は、嶋郡の戸口の変化を記録したもので、「嶋評」「進大貳」などの文字があり、685 ～ 701 年の間に記録されたものと推定されている。

太宰府地域には古代に大宰府政庁が置かれ、南側には大宰府条坊と呼ばれる都市が整備された。政庁の博多側には水城跡の土塁が築造されたほか、大野城・基肄城・阿志岐城などの古代山城が周囲に山々に築造されるなど、いわゆる羅城を形成していたと考えられる。

参考文献

太宰府市『大宰府市史　考古資料編』1992 年

太宰府市教委『筑前国分尼寺跡・陣ノ尾遺跡』1981 年

太宰府市教委『筑前国分尼寺跡Ⅱ』1991 年

太宰府市教委『筑前国分尼寺跡Ⅲ』1995 年

太宰府市教委『辻遺跡』1997 年

太宰府市教委『太宰府・国分地区遺跡群 1』2004 年

太宰府市教委『太宰府・国分地区遺跡群 2』2006 年

Ⅱ、調査体制

（昭和 60 ／ 1985 年度）・・・第 1 次調査

総括	教育長	藤　寿人			
庶務	社会教育課長	花田勝彦			
	文化財係長	黒板　力			
	主　　事	岡部大治			
調査	技　　師	山本信夫	狭川真一		

（平成 2 ／ 1990 年度）・・・第 2 次調査

総括	教育長	長野治己			
庶務	教育部長	西山義則			
	社会教育課長	関岡　勉			
	文化財係長	鬼木冨士夫			
	主任主事	岡部大治			
	主　事	白水伸司			
調査	主任技師	山本信夫	狭川真一	城戸康利	
	技　　師	緒方俊輔	山村信榮		
	技師（嘱託）	中島恒次郎	狭川麻子		

（平成 3 ／ 1991 年度）・・・第 3 次調査

総括	教育長	長野治己				
庶務	教育部長	中川シゲ子				
	文化課長	佐藤恭宏				
	埋蔵文化財係長	富田譲				
	文化振興係長	大田重信				
	主任主事	岡部大治	川谷豊			
調査	主任技師	山本信夫	狭川真一	城戸康利	緒方俊輔	
	技　　師	山村信榮	中島恒次郎	塩地潤一		

（平成 24 ／ 2012 年度）・・・第 7 次調査

総括	教育長	關　敏治（～ 12 月 21 日）
		木村甚治（12 月 25 日～）
庶務	教育部長	古野洋敏
	文化財課長	菊武良一
	文化財副課長	城戸康利
	保護活用係長	友添浩一
	調査係長	山村信榮
	事務主査	橋川史典
	主　事	古川あや

調査	主任主査	井上信正
	技術主査	髙橋学　　宮崎亮一
	主任技師	遠藤茜
（文化財課事務取扱）		中島恒次郎（都市計画課　景観・歴史のまち推進係 係長）

（平成 28 ／ 2016 年度）・・・報告書発行

総括	教育長	木村甚治
庶務	教育部長	緒方扶美
	文化財課長	城戸康利
	保護活用係長	江坂研治
	調査係長	山村信榮
	事務主査	廣見京子
	主事	有田ゆきな　久木原駿史　伊藤裕貴
調査	主任主査	井上信正　髙橋学　宮崎亮一
	主任技師	遠藤茜
	技師	沖田正大　中村茂央
（文化財課事務取扱）		中島恒次郎（都市計画課　景観・歴史のまち推進係 係長）

Ⅲ、調査および整理方法

調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群 I』（太宰府市の文化財第 14 集　1989）、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』（太宰府市教育委員会 2001 年 9 月改訂）に基づいている。

調査では、表土剥ぎをバックホーによって行った。遺構図や土層図は適時 1/10、1/20 等で記録し、遺構全体図は人力によって 1/20 の縮尺で実測を行った。第 1 次調査については、一部測量データ不足があり、明確な座標値を得ることができていない。

整理に際し、基本的に時期が特定できそうな遺物については、実測作業を行っている。一緒に出土している遺物については、出土遺物一覧表も同時に確認して頂きたい。なお、第 1･7 次調査については、多量の弥生土器が出土したため、選別段階で特徴的なもの、希少なもの、口縁部や底部については、1/4 以上残存しているものを抽出し、その中でもより残りが良いものを実測し報告している。

これらの調査で得られた出土遺物や実測図等は太宰府市文化ふれあい館に保管している。

Ⅳ、調査報告

1、国分千足町遺跡第１次調査

(1) 調査に至る経緯

太宰府市大字国分字千足町 495-23、495-24 （現在．国分３丁目）である。筑前国分寺の南西側に広がる扇状地状のなだらかな土地で、北側 200m 付近には筑前国分尼寺推定地があり、西側 200m には古代官道東門ルート推定ラインや江戸時代の日田街道が存在する。

調査原因は、共同住宅建設に伴うもので、1985（昭和 60）年４月 19 日、確認調査を実施したところ、弥生中期の遺構が確認されたため、調査を実施することとなった。調査期間は 1985（昭和 60）年５月 16 日～６月 17 日で、開発者の費用負担で実施した。。調査対象面積 1176 ㎡、調査面積 281 ㎡。調査は山本信夫、狭川真一が担当した。

なお、調査現場の測量については、一部データ不足があり、明確な座標値を得ることができていない。

(2) 基本層位

調査前は水田で、厚さ 0.2m の耕作土を除去すると厚さ 0.2m の床土がある。床土には瓦片を含んでいる。そして、その直下に礫入りの茶色粘質土の地山が広がり、遺構が確認された。調査区北側には流路（SX001）が検出されたが、その上面だけ灰褐色土が覆い、北側に向かってそれは厚くなり、北端で厚さ 0.6m になっている。SX001 の埋土を除去すると地山の砂層となる。

(3) 検出遺構

竪穴住居

1SI015（Fig.5、Pla.1）

東西 2.55m、南北 2.6m の方形で、深さは最大 0.1m だが、大きく削平を受けているのか、全体的に 0.02m 前後しか残っていない。埋土を除去すると底面には浅いピットと北端に深い土坑を検出したが、柱穴と明確に言えるものは確認できていない。埋土状況や焼土などの生活痕跡状況については、記録がなく不明だが、形状から竪穴住居として報告する。

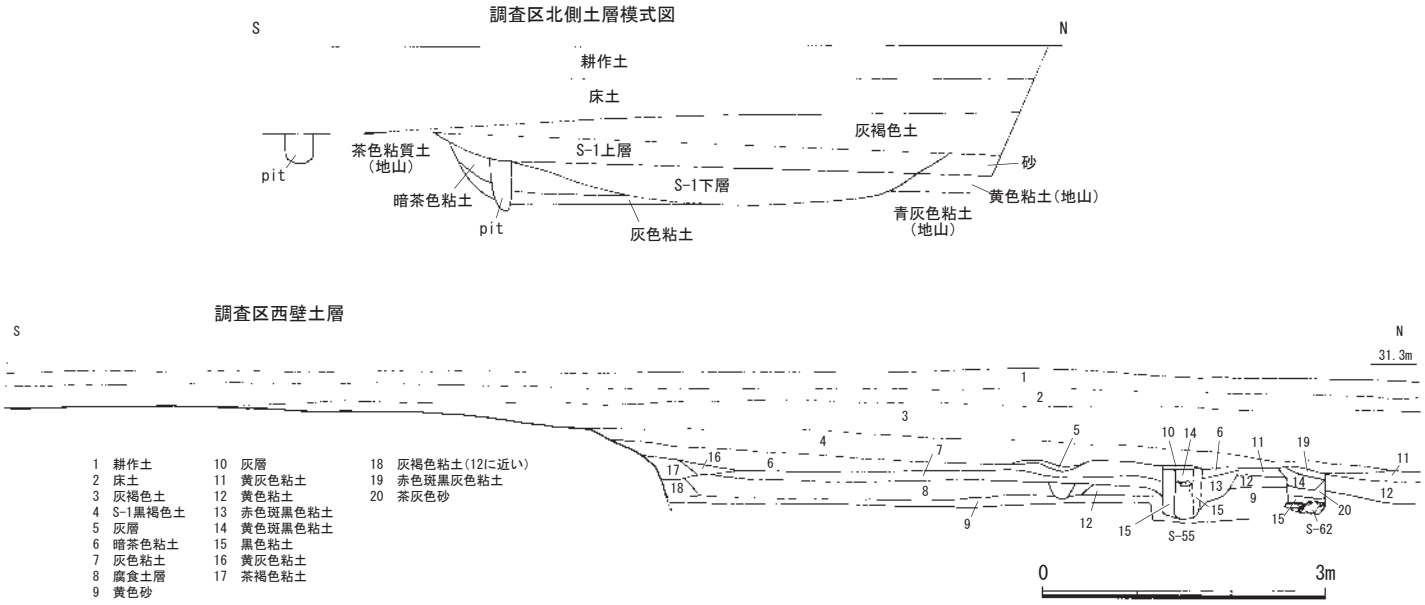


Fig.3　第１次調査区土層実測図（1/80）

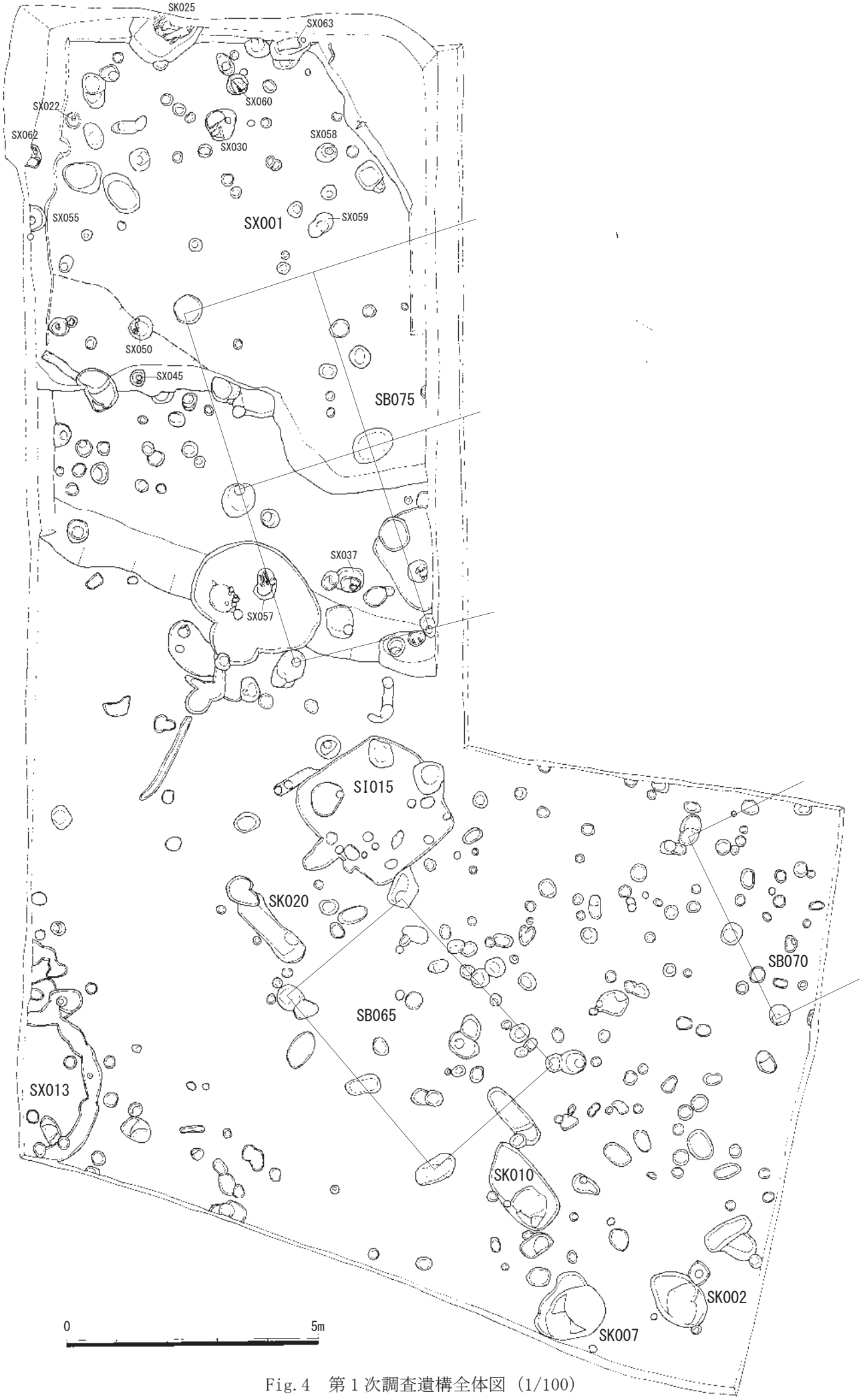


Fig.4　第１次調査遺構全体図（1/100）

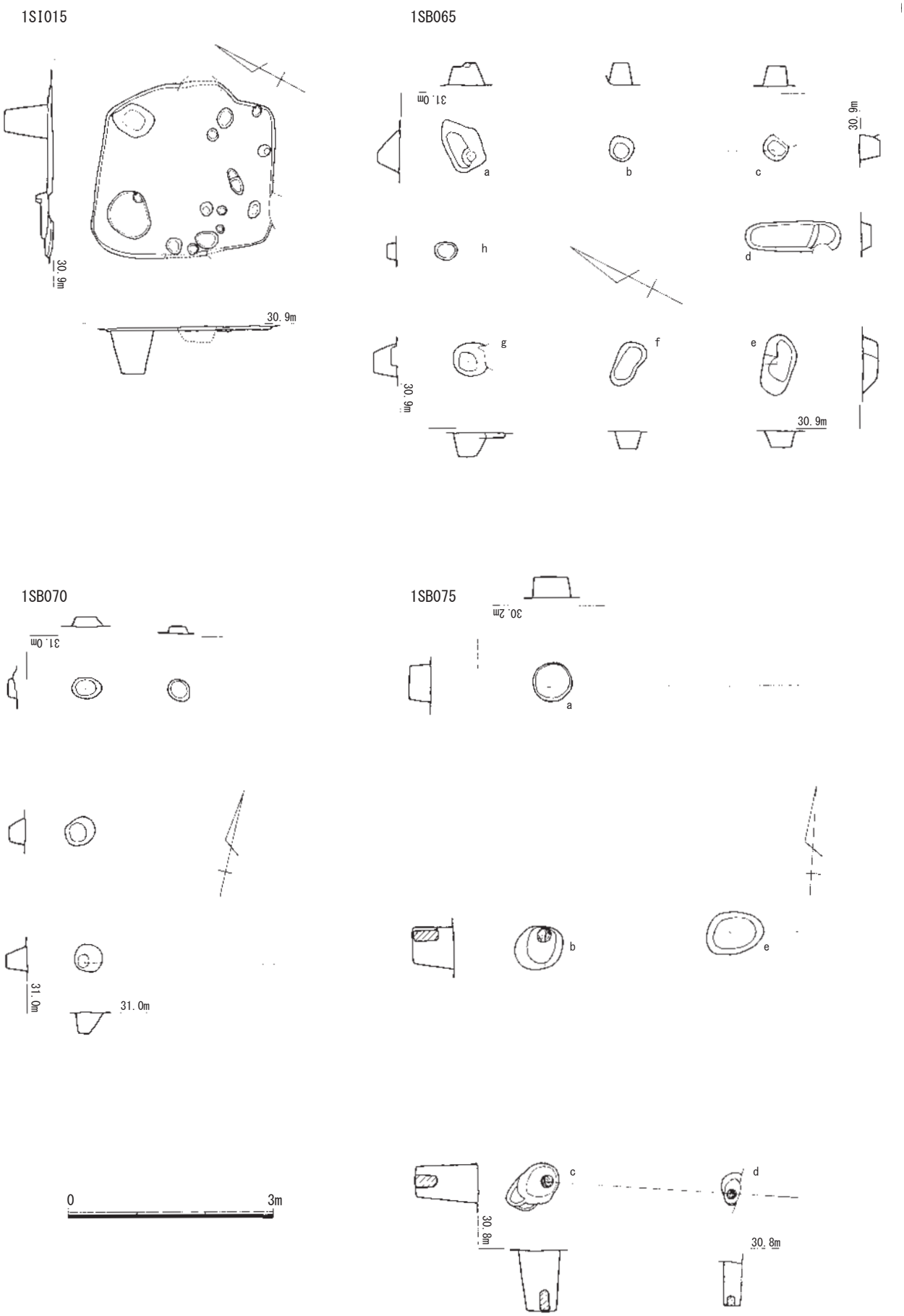


Fig.5　1SI015、1SB065・070・075 遺構実測図（1/80）

掘立柱建物

1SB065（Fig.5）

整理時に確認したもので、東西柱間は約 2.2m で、全体規模は 2 間 ×2 間（約 3×4.4m）である。掘り方は径 0.35 ～ 0.5m 前後の円形で、深さ 0.3m 前後である。

1SB070（Fig.5）

整理時に確認したもので、調査区端のため、全体規模は 2 間 ×2 間以上（南北 4× 東西 1.7m 以上）。南北柱間は 2.1m と 1.9m、東西柱間は 1.4m である。掘り方の大きさは 0.3 ～ 0.4m、深さ 0.1 ～ 0.3m の円形である。

1SB075（Fig.5）

整理時に確認したもので、流路（1SX001）の埋土に切り込んでいるため、流路埋没後に建てられた建物である。2 間 ×2 間以上の総柱掘立柱建物と推測したが、柱穴のひとつは削平され残っていないという前提のため、当初から柱穴がないとなると、1 間 ×2 間以上の掘立柱建物となる。柱材が 3 つの掘り方に残されていて、柱材は径 0.14 ～ 0.18m で、東西柱間は 2.7m、南北柱間は 3.6m である。掘り方は径 0.48 ～ 0.6m、最深 0.9m の円形である。

土坑

1SK002（Fig.6）

長軸 1.32m、短軸 0.9m の楕円形土坑で、土坑底の一部がさらに深くなり、全体で深さ 0.2m である。

1SK007（Fig.6）

東西 1.45m、南北 1.3m、深さ 0.5m の円形状の土坑である。土坑内は 2 つの土坑からなっている。

1SK010（Fig.6）

長軸 1.9m、短軸 0.96m の長方形の土坑で、土坑底の一部がさらに深くなり、全体で深さ 0.24m である。

1SK020（Fig.6）

長軸 1.66m 以上、短軸 0.57m、深さ 0.25m の長方形の溝状の土坑である。

1SK025

調査区端で検出され、さらに調査区外に続いている。短軸 1.15m、長軸 1.3m 以上、深さ 0.44m の長方形の土坑である。底面には長軸に沿って木材が検出された。

流路

1SX001

調査地の北側で検出され、さらに調査区外に続いている。深さは北側に向かって深くなり、最深 0.75m である。埋土は黒褐色土で、それを除去すると暗茶色粘土面があり、そこに柱材が残る柱穴が検出されている。遺物は弥生中期前半の土器を多く含むが、摩滅が目立ち、接合する土器片は多くないため、この地より上方から流されてきた遺物である可能性が高い。暗茶色粘土の下層は灰色粘土や腐食土が堆積し、腐食土には自然木や加工木材が含まれていたが、土器は含まれていなかった。それを除去すると砂層の地山となる。

その他の遺構

1SX013（Fig.6）

幅 0.35m 前後、深さ 0.1m 前後の溝が、外周で径約 3m の円形を呈している。調査区端のため全形は明確でない。

柱穴

柱材が遺存するピットで、SX001 の流路内で確認されたものがほとんどで、地下水があったことによ

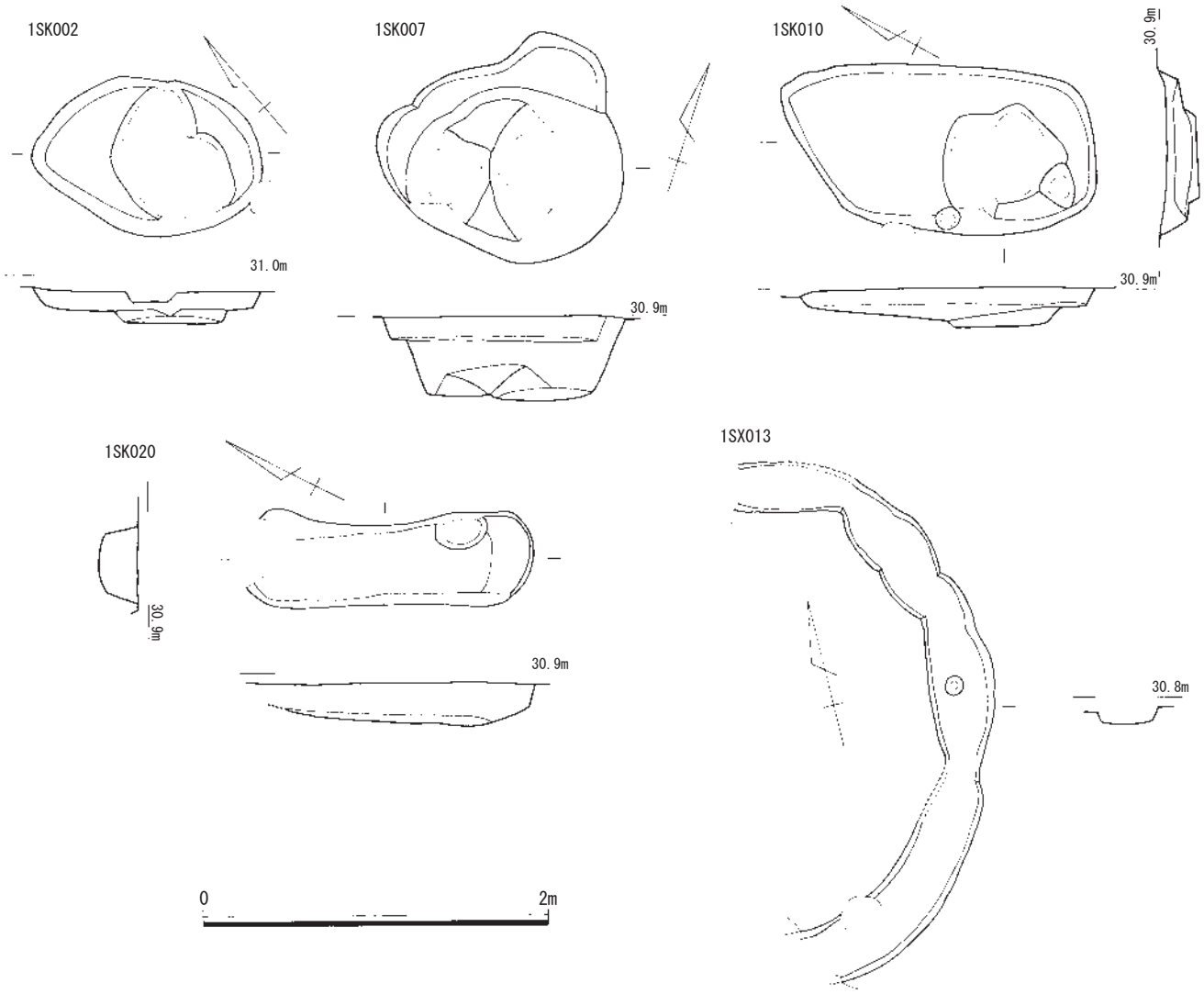


Fig.6　1SK002・007・010・020、1SX013 遺構実測図（1/40）

り、腐食することなく残存したものと推測される。ここで報告するのは、現状で建物として成立しなかったものだが、自然木ではなく明らかに人為的に造られており、何らかの建造物であったものと推測される。

1SX022（Fig.7）

径 0.32m、深さ 0.42m の円形ピットである。径 0.08m、残存高 0.2m の丸太材が遺存していた。丸太先端部は加工され尖らせていた。埋土下半は灰色砂、上部は黒色粘土である。

1SX037（Fig.7）

径 0.35m 前後、深さ 0.65m のピットで、径 0.12m、残存高 0.2m の丸太材が遺存していた。丸太材の底には 0.2m 程の礫が据えられている。埋土は礫の下半が暗灰色粘土、それより上は黒色粘土である。

1SX045（Fig.7）

SX001 の埋土に掘り込まれた円形ピットで、径 0.3m 前後、深さ 0.48m。径約 0.1m、残存高 0.32m と 0.2m の 2 本の木材があり、木材の下部は切断加工されている。埋土は黒色粘土。

1SX055（Fig.7）

調査区端にあり、径 0.52m の円形ピットで、中央に径 0.17m、残存高 0.28m の丸太材が遺存する。埋土は黒色粘土。

1SX058（Fig.7）

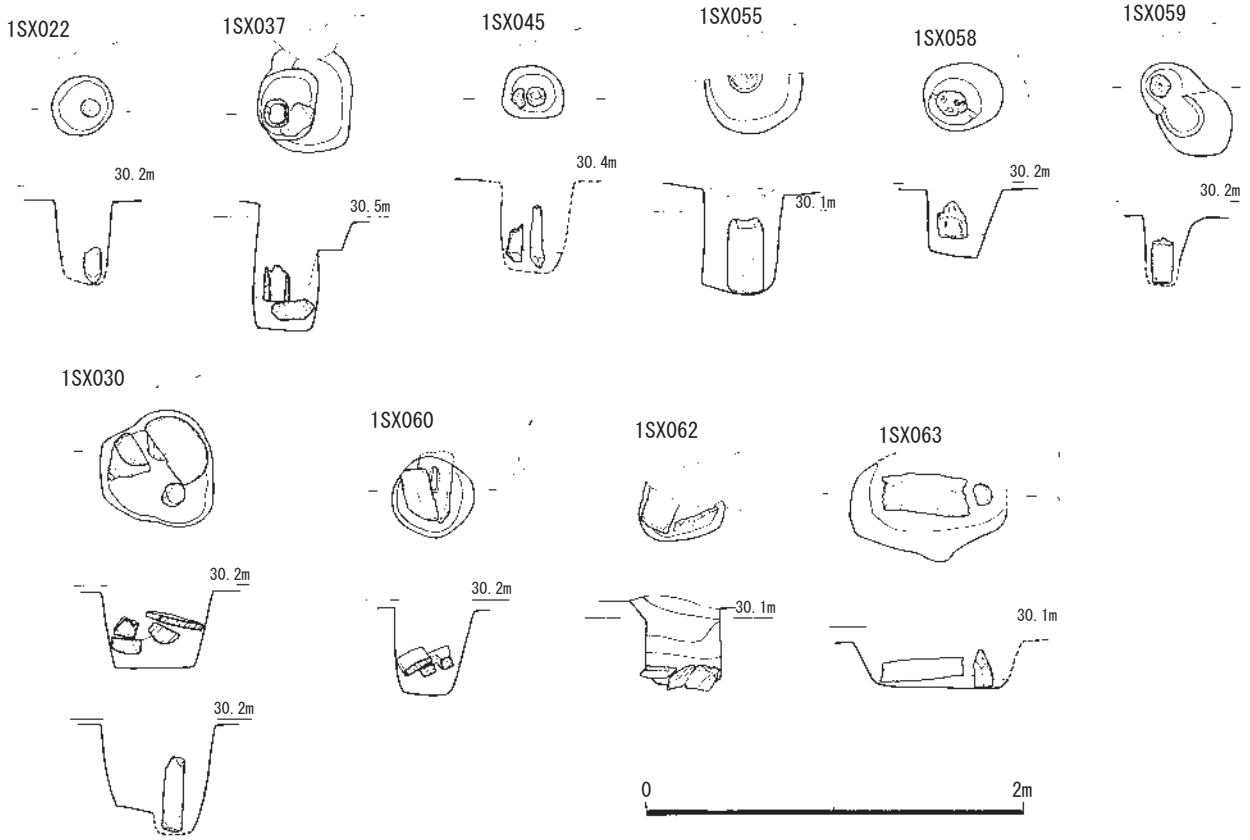


Fig.7　柱穴・木材検出ピット遺構実測図（1/40）

径 0.36 ～ 0.42m、深さ 0.37m の円形ピットで、径 0.16m、残存高 0.2m の丸太材が遺存する。埋土は材の下は灰色砂質、材周囲は黒色粘土である。

1SX059（Fig.7）

径 0.3m、深さ 0.36m の円形ピットで、径 0.11m、残存高 0.26m の丸太材が遺存する。埋土は灰色砂質。

木材検出ピット

1SX030（Fig.7、Pla.2）

径 0.6m、深さ 0.4m の円形土坑で、土坑内に扁平板材などが置かれていた。埋土は板材より下が灰色砂礫で、板材を含む上面は黒色粘土である。また、同じ土坑内に柱材がある。

1SX050

径 0.48m、深さ 0.1m の円形ピットで、木片が遺存していた。

1SX057

大きさ 0.6×0.35m、深さ 0.3m の楕円形ピットで、ピット内には木片が並べられている。

1SX060（Fig.7、Pla.2）

径 0.4m、深さ 0.45m の円形ピットで、ピット内には加工された板材が 2 枚遺存していた。埋土は板材より下部は灰色砂、上部は黒色粘土である。礎板の可能性も考えられる。

1SX062（Fig.7）

調査区端で確認された径0.46mの円形ピットで、板材が2枚遺存していた。礎板の可能性も考えられる。

1SX063（Fig.7）

幅 0.6m、長さ 0.82m 以上、深さ 0.21m の楕円形状の土坑である。土坑内には径 0.1m 前後の丸太材と長さ 0.46m、幅 0.2×0.1m の木材が遺存する。埋土は底面近くが灰色砂礫で、それ以外は黒色粘土である。

(4) 出土遺物

竪穴住居

1SI015 出土遺物（Fig.8）

弥生土器

甕（1、2） 1は口縁部の小片である。2は平坦な底面を持つ。

支脚（3） 小片で形状が明確ではないが、支脚の底部と推測される。復元底径6.4㎝。

土製品

投弾（4） 縦4.15㎝、最大径2.2㎝。色調は淡灰色や暗灰色を呈する。

1SI015B 出土遺物（Fig.8）

弥生土器

甕（5、6） 内外面とも摩滅し調整不明。6は平坦な底部で、復元底径6.6㎝。

掘立柱建物

1SB065

1SB065c 出土遺物（Fig.8、Pla.13）

弥生土器

甕（7～9） 口縁部は、「く」の字形を呈する。7は復元口径21.6㎝。摩滅が目立つが内外面ともハケ目が残る。8は復元口径15.1㎝。9は体部内面にハケ目が残る。

甕もしくは壺（10、11） やや丸味のある底部である。内外面とも摩滅し調整不明。10は底径6.3㎝。

1SB065d 出土遺物（Fig.8）

弥生土器

甕（12、13） 12は口縁部より体部がやや張っている。内外面とも摩滅。13は僅かに上げ底で、復元底径9.0㎝。

壺（14） 復元口径17.6㎝。口縁端部は肥厚させている。内外面とも摩滅するがヨコナデ調整。

1SB065h 出土遺物（Fig.8）

石製品

扁平石製品（15） 両端を欠損し、現存長4.8㎝、最大幅3.45㎝、厚さ0.65㎝。表裏側面とも研磨され、細かい擦痕が残る。中央に穿孔がある。周縁部に刃部はないが、石包丁を転用した可能性もある。

1SB075

1SB075a 出土遺物（Fig.8）

弥生土器

甕（16～18） 16・17ともヨコナデ調整。18は底部が平坦で復元底径7.7㎝。外面はタテハケ、内面は摩滅するが、内底に炭化物が薄く付着する。

1SB075c 出土遺物（Fig.8）

弥生土器

小壺（19） 薄い器壁で、胎土は0.5㎝以下の砂粒を含み、色調は黄橙色を呈する。

器台（20） 天地が明確ではないが、復元口径11.6㎝。摩滅し調整不明。

1SB075d 出土遺物（Fig.8）

弥生土器

壺（21） 底径2.5㎝。内外面ナデ調整。色調は淡黄橙色を呈する。

甕（22） 平坦な底部である。内外面摩滅し調整不明。

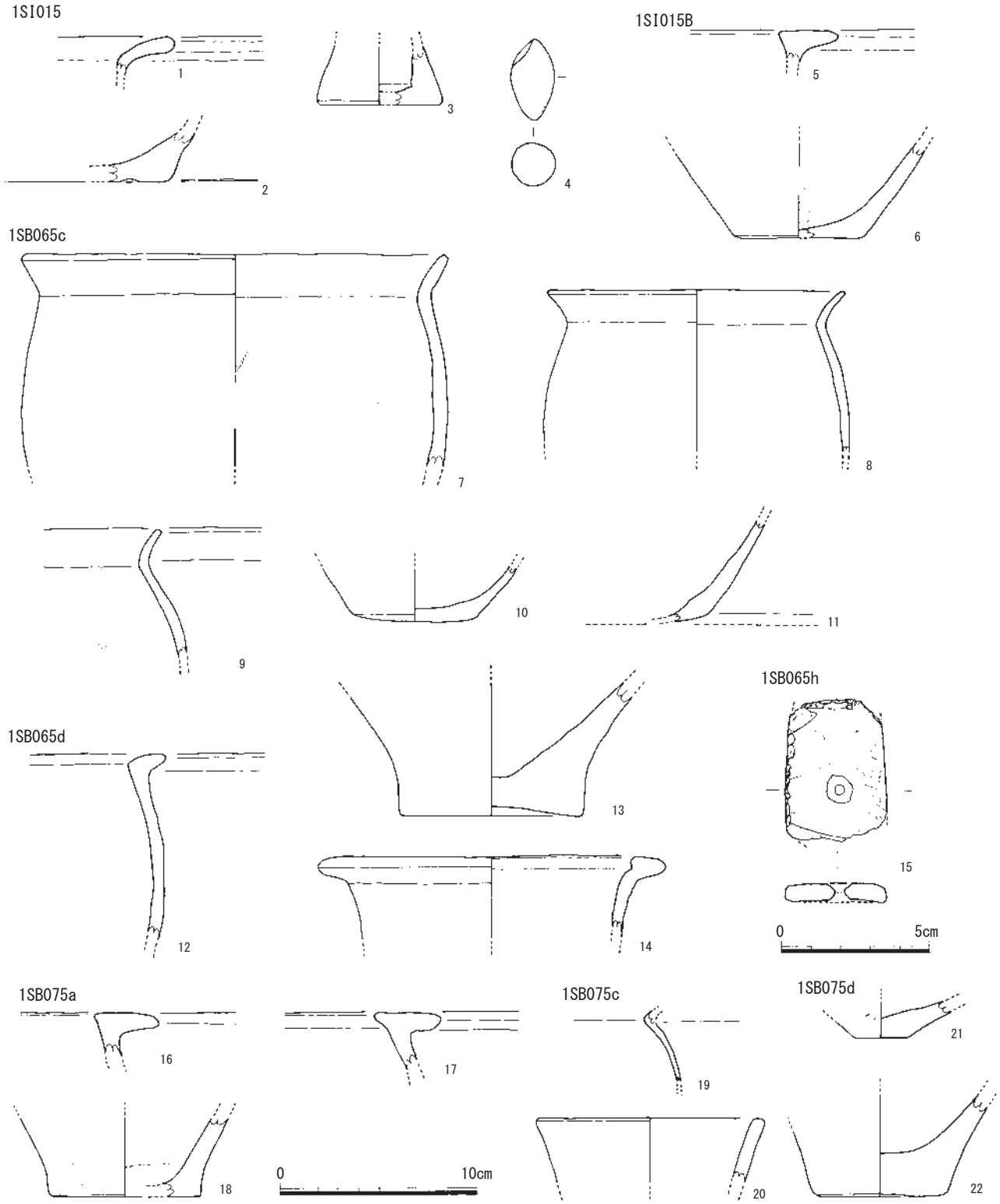


Fig.8　1SI015、1SB065・075 出土遺物実測図（1/3、15 は 1/2）

土坑

1SK002 出土遺物（Fig.9）

石製品

石核（1、2）　2 点とも黒曜石製。1 は細かく剥離しているが一部自然面が残る。大きさは 2.95×2.65×2.0 ㎝。2 は剥離面が風化している部分が半分ほどある。大きさは 2.85×2.9×2.2 ㎝。

1SK007 出土遺物（Fig.9）

弥生土器

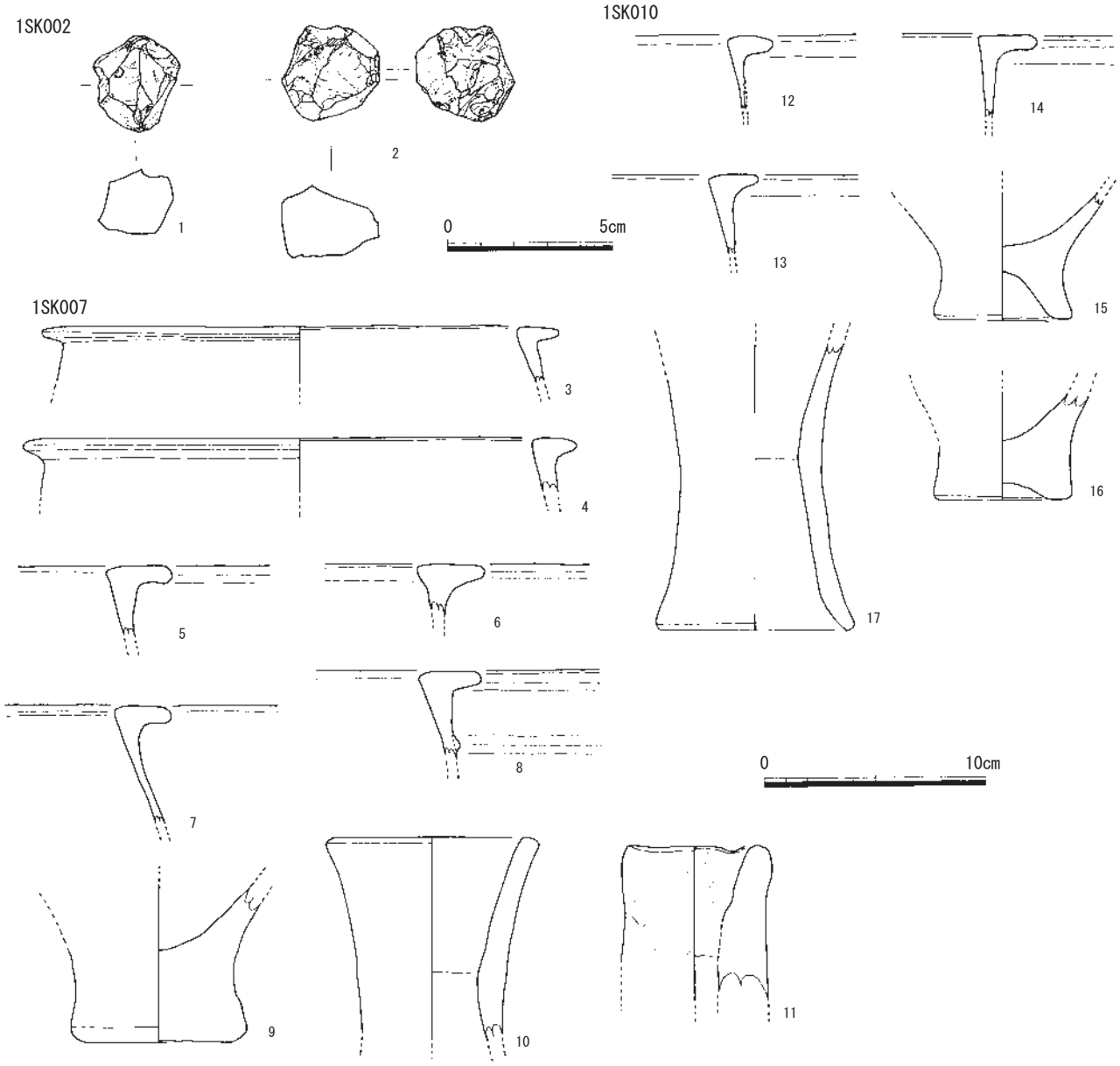


Fig.9　1SK002・007・010 出土遺物実測図（1/3、1・2 は 1/2）

甕（3 ～ 9）　全体的に摩滅が目立ち、調整不明瞭。3 は復元口径 23.4 ㎝。4 は復元口径 25.0 ㎝。8 は口縁部外面下に低い突帯を巡らす。9 は厚底で平坦な底部である。底径 8.0 ㎝。

器台(10)　天地が明確ではないが､復元口径 9.5 ㎝。摩滅が目立ち調整不明。色調は薄茶色を呈する。

支脚（11）　胎土は比較的精製され、色調はやや暗い茶灰色を呈する。内外面ともナデ調整で、指頭圧痕が残る。

1SK010 出土遺物（Fig.9、Pla.13）

弥生土器

甕（12 ～ 16）　全体的に摩滅し調整不明。14 は口縁部がやや長いＬ字形を呈する。15 の底部は大きく上げ底とする。復元底径 6.25 ㎝。16 はやや上げ底で、復元底径 6.2 ㎝。内面底部には炭化物が薄く付着する。

器台（17）　胎土は細かい砂粒を多く含み、色調は薄茶色を呈する。内外面とも摩滅し調整不明。底径 9.0 ㎝。

1SK020 出土遺物（Fig.10）

弥生土器

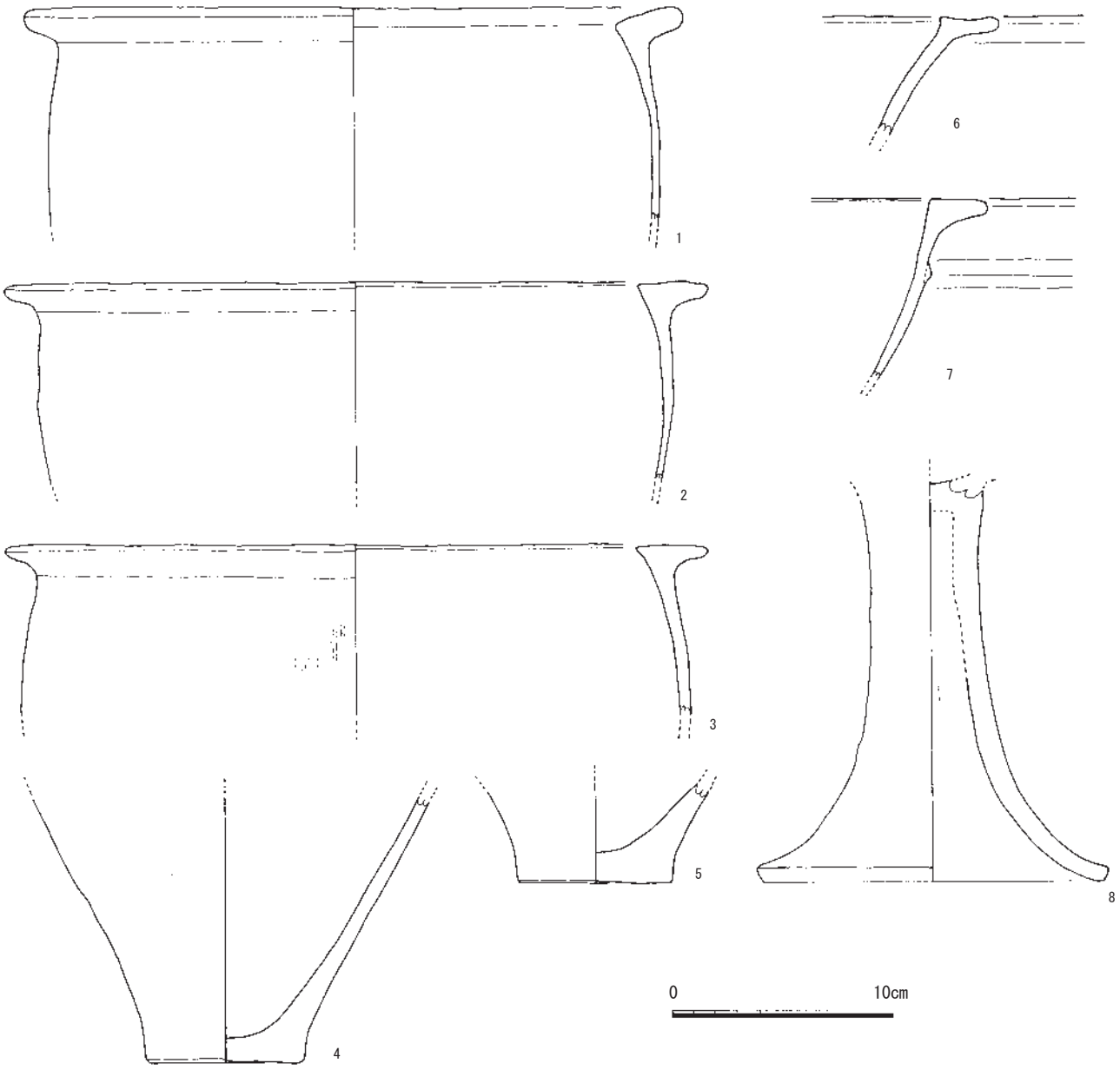


Fig.10　1SK020 出土遺物実測図（1/3）

甕（1 ～ 5）　復元口径 30.0 ～ 32.0 ㎝。内外面とも摩滅するが、4 は外面タテハケで、2・3 の外面にも僅かにタテハケが残る。4・5 の底部は平坦に仕上げる。色調は黄橙色を呈する。

壺（6）　口縁部は鋤形口縁である。

鉢（7）　口縁部外面下に断面三角形の低い突帯を貼付する。

高坏（8）　復元脚部底径 16.0 ㎝。内外面とも摩滅し調整不明。色調は暗黄色や淡橙黄色を呈する。

1SK025 出土遺物（Fig.11 ～ 14）

弥生土器

甕（1 ～ 29）　復元口径 26.0 ～ 36.0 ㎝。口縁部は逆 L 字形であるが、13・24 はやや口縁部が長く僅かに垂れている。21 ～ 25 は口縁下に低い断面三角形の突帯を貼付する。22 は断面 M 字形に近い突帯を貼付する。摩滅が目立つが、調整が確認できるものは、全て外面タテハケ、内面ナデ調整である。1 は若干「く」の字形の口縁部で、体部外面に沈線が巡る。13・22・24 は口縁部内側も突出している。22 の口縁端部には刻み目のような痕跡が確認できる。7 の口縁部と 18・21 の外面と 25 の突帯上下に煤が薄く付着する。26 の底部はやや上げ底で、外面タテハケ、内底には薄く炭化物が付着する。復元底径 7.0 ㎝。27 は復元底径 10.0 ㎝。外面タテハケ、内底に僅かに炭化物が付着する。28 は復元底径 9.8 ㎝。内

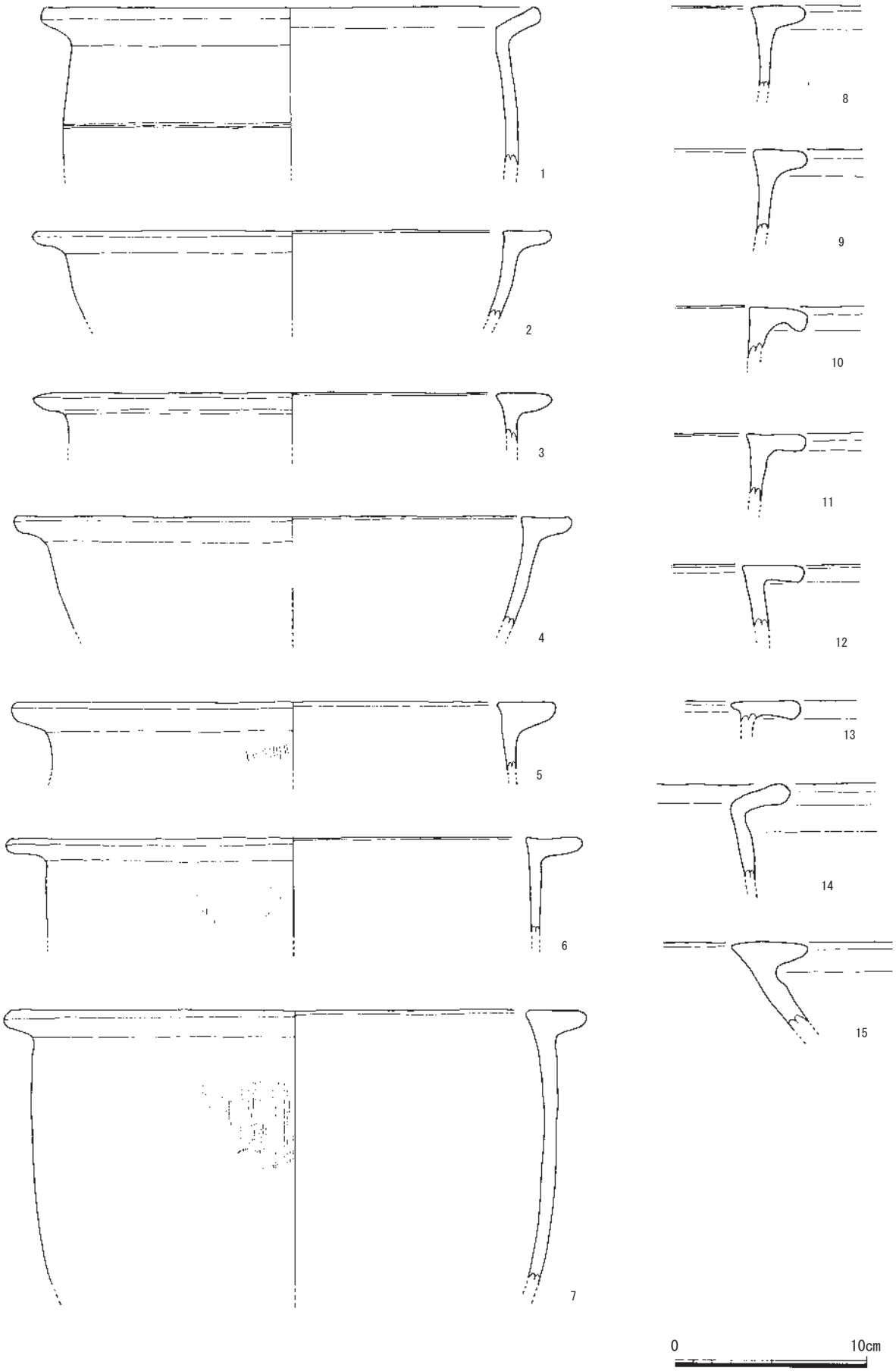


Fig. 11　1SK025 出土遺物実測図①（1/3）

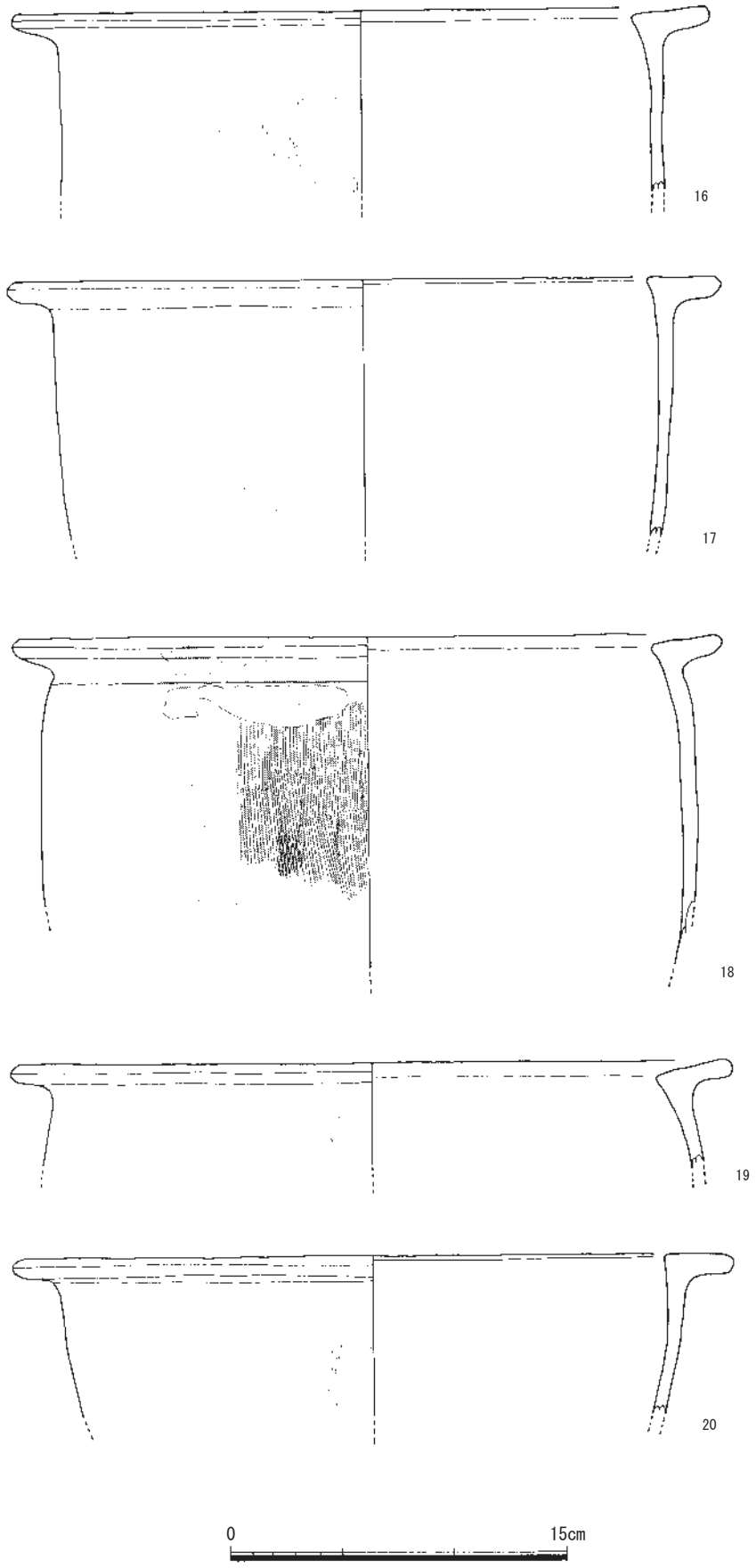


Fig.12　1SK025 出土遺物実測図②（1/3）

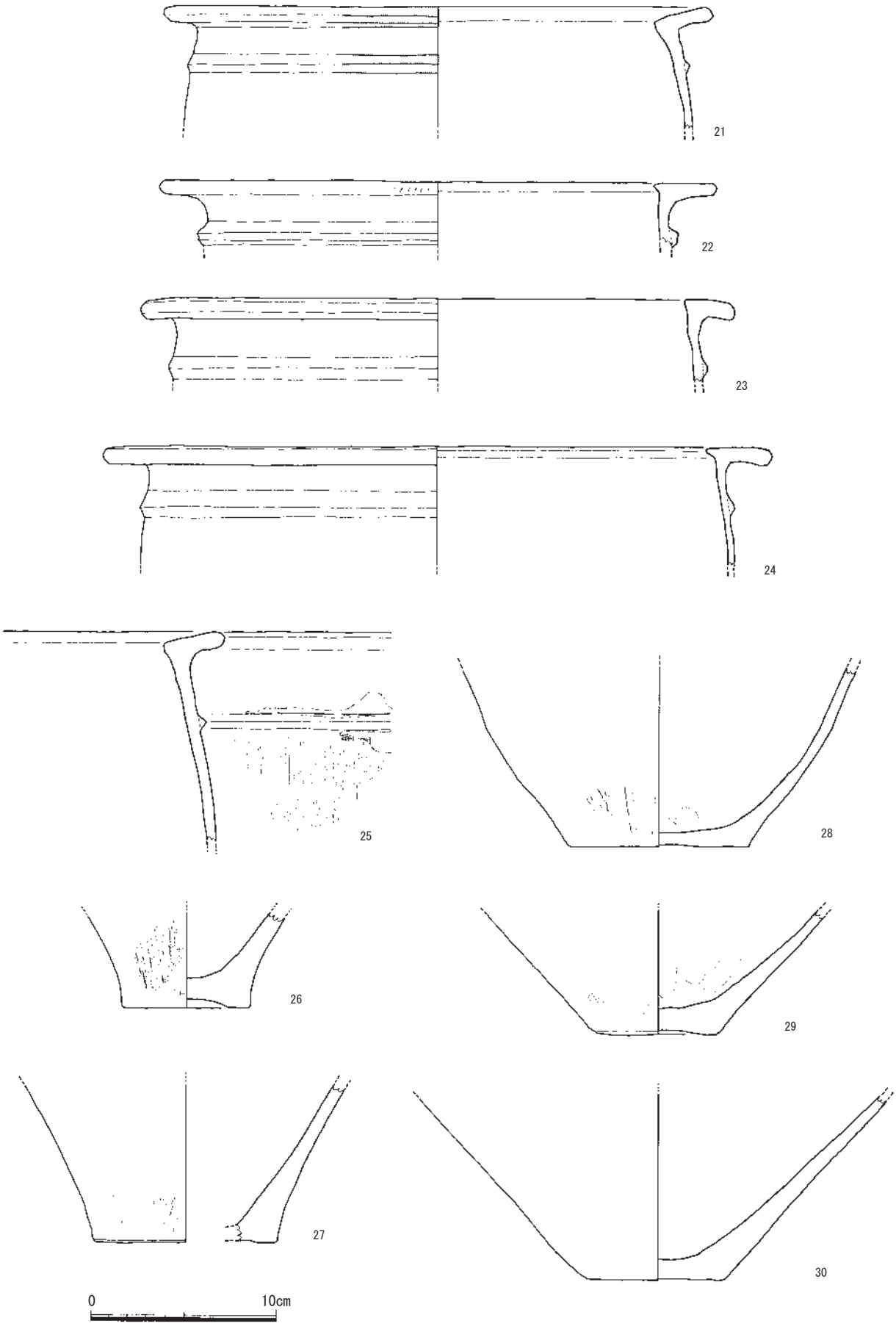


Fig. 13　1SK025 出土遺物実測図③（1/3）

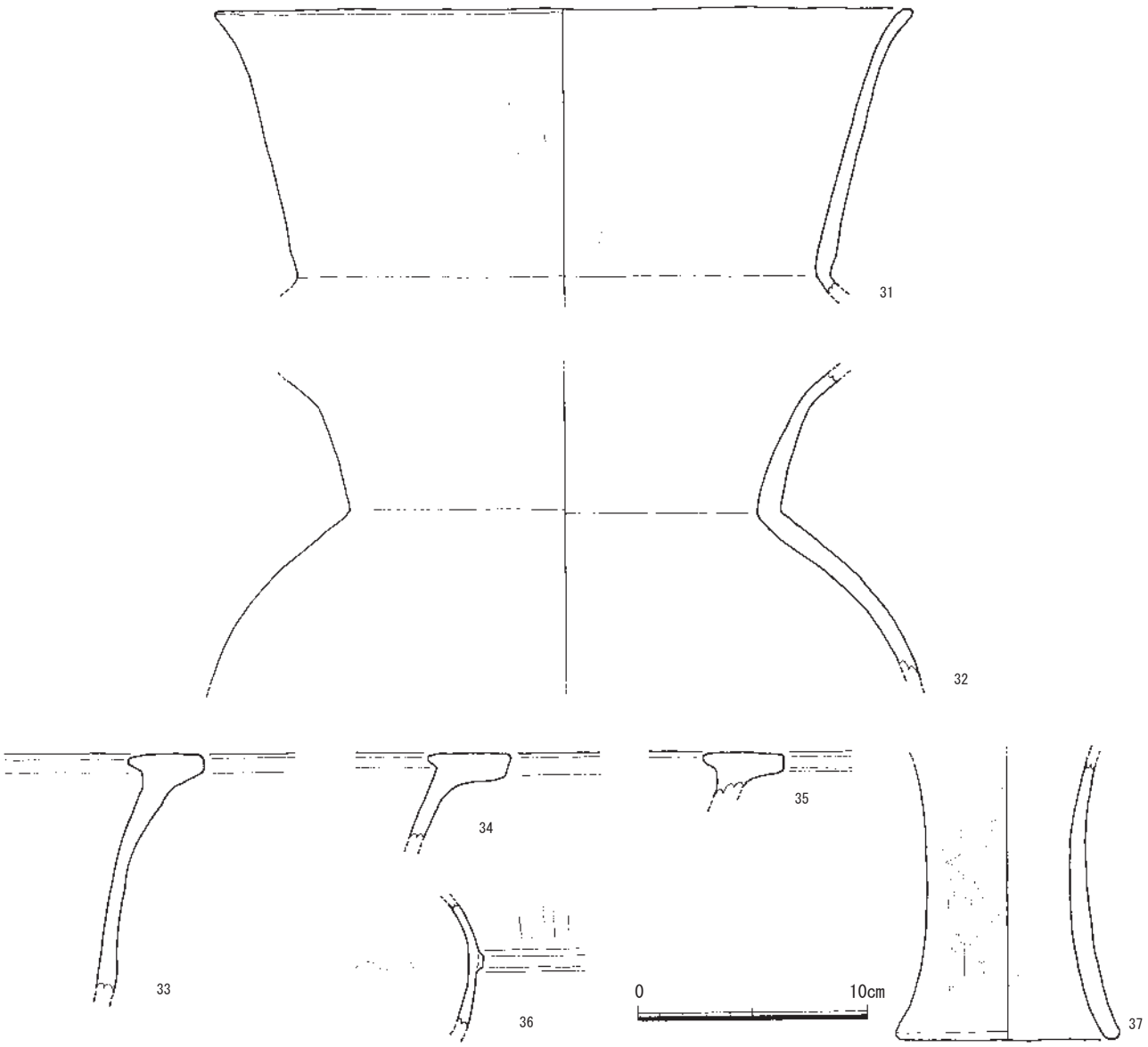


Fig.14　1SK025 出土遺物実測図④（1/3）

面ナデ、外面最下部にタテハケが残る。

壺もしくは甕（29、30）　29 は底径 6.3 ㎝。内面ナデ、外面タテハケ。30 は底径 7.4 ㎝。内外面摩滅し調整不明。

壺（31 ～ 36）　31 は広口口縁で、摩滅が目立つが、内外面ともミガキが僅かに残る。32 は内外面摩滅するが、頸部にミガキがみられる。また、外面は黒褐色に塗られている可能性がある。33 は内面横方向のミガキだが、単位不明瞭。外面は不定方向のナデ調整である。33 ～ 35 は肥厚した口縁部である。口縁部はナデ調整。36 は M 字形の突帯を貼付する。突帯より上部には縦方向の櫛目を施す。外面は暗褐色を呈する。

器台（37）　下部径 10.0 ㎝。外面タテハケ、内面下部が僅かにヨコハケ調整。

流路

1SX001

1SX001 出土遺物（Fig.15）

弥生土器

甕（1、2）　外面タテハケ、内面ナデ調整、口縁部はヨコナデである。復元口径は、1 が 28.4 ㎝、2 が 30.0 ㎝。

甕もしくは壺（3）　復元底径は7.4㎝。内面は縦方向のナデ、外面はミガキのような痕跡が残る。

壺（4）　内面は細かい横方向のミガキを施す。外面にはうっすらと縦線がみられる。

1SX001 最上層出土遺物（Fig.15）

弥生土器

甕（5～14）　5・6は逆L字形の口縁部で、復元口径32.0㎝。摩滅が目立つが、5の外面には僅かにタテハケが残る。7は復元口径31.6㎝で、口縁部は内側にも突出している。色調は淡橙色を呈する。9～12は、「く」の字形の口縁部下に低い断面三角形の突帯を貼付する。13は平坦な底部で、復元底径10.0㎝。14は底部に円孔を設けている。

甕もしくは壺（15）　復元高台径10.8㎝。

小甕もしくは壺（16）　復元底径3.6㎝。

袋状口縁壺（17）　口縁付近を袋状に作る。復元口径8.4㎝。胎土は茶色粒を含むが精製されている。

壺（18）　口縁端部に刻み目を施す。現存範囲は全て丹塗りされていたようで、部分的に朱が残る。

高坏（19）　口縁部から内面にかけて丹塗りされている。

1SX001 上層出土遺物（Fig.16・17、Pla.13）

弥生土器

甕（1～21）　1は復元口径32.2㎝。断面三角形の口縁端部には刻み目が施され、口縁下に断面三角形の突帯を貼付する。摩滅が目立ち調整不明瞭。2は復元口径25.0㎝、外面タテハケ調整。3は復元口径27.6㎝。4は復元口径16.8㎝。外面タテハケ、内面ナデ調整で、口縁部から外面にかけて朱塗りされる。5・6は口縁部内側にも突出がみられる。7・13の口縁部はやや長い断面三角形を呈する。11・12・15・16は若干「く」の字形の口縁部である。13～16は口縁部下に断面三角形の突帯を貼付する。17～19は上げ底の底部で、外面はタテハケが残る。20は平坦な底部である。21は復元底径7.6㎝。内底に薄く茶褐色の付着物がみられる。

壺（22～24）　22は肥厚した口縁部で、色調は暗黄橙色を呈する。23は外面に断面台形の突帯を2条貼付し、外面は朱塗りが部分的に残る。24は底径5.3㎝。内外面摩滅し表面がぼろぼろである。

鉢（25～27）　25は復元口径10.0㎝。内面と口縁部はヨコナデ、体部下半はミガキのような痕跡を残し、中位に突帯を貼付する。色調は黒茶色を呈する。26は復元底径5.0㎝。外面ナデ、内面はやや強いナデ調整。色調は黒茶色を呈する。27は復元口径32.6㎝。

壺もしくは高坏（28）　内外面朱塗りされている。

蓋もしくは高坏（29）　復元径13.7㎝。内面ナデ、外面はミガキの後に朱塗りしている。

石製品

石包丁（30、31）　30は、横15.9㎝、縦5.4㎝、厚さ0.5㎝。2ヶ所に穿孔があり、表裏に細かい擦痕が残る。輝緑凝灰岩製。31は、厚さ0.4㎝で、全体的に表面が荒れている。これは当初から劣化していたのか、使用後に摩滅したかは不明瞭である。

扁平片刃石斧（32）　幅3.5㎝、厚さ1.0㎝。全面研磨され、表裏の中央付近が僅かに凹んでいる。白灰色の珪質泥岩製。

石斧（33）　自然石利用したものとみられ、加工は側面と先端部を中心に行われている。石斧のようにも見えるが、その他の用途も考えられる。泥岩製。

削器（34）　側辺部に細かい剥離調整を行い、刃部を作り出す。現存長5.95㎝、現存最大幅3.8㎝、厚さ1.15㎝。安山岩製。

叩き石(35)　円柱状の石材で厚さは3.6×5.45㎝、上半部は欠損する。先端部に叩きの使用痕が残る。

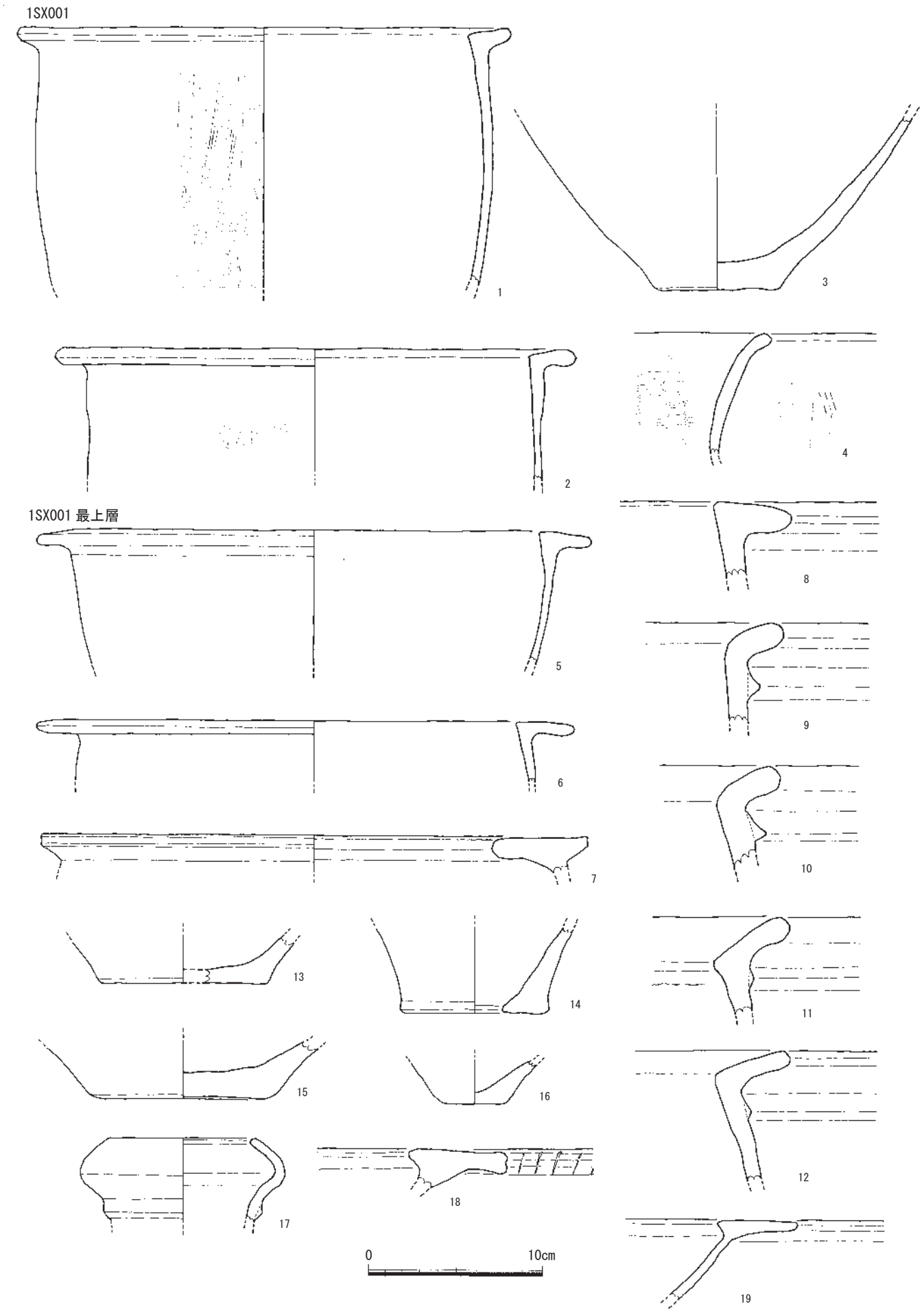


Fig.15　1SX001・001 最上層出土遺物実測図（1/3）

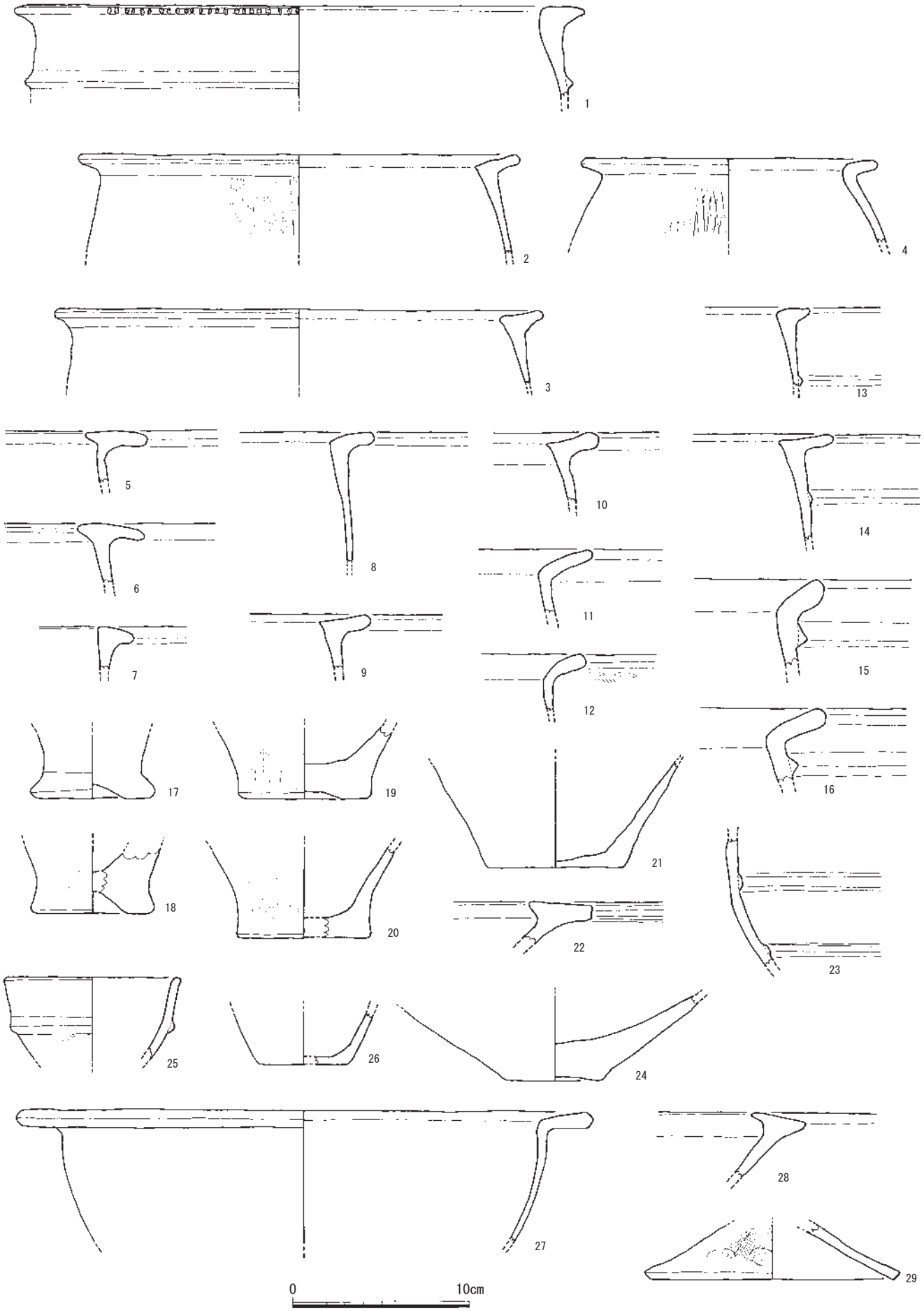


Fig.16　1SX001 上層出土遺物実測図①（1/3）

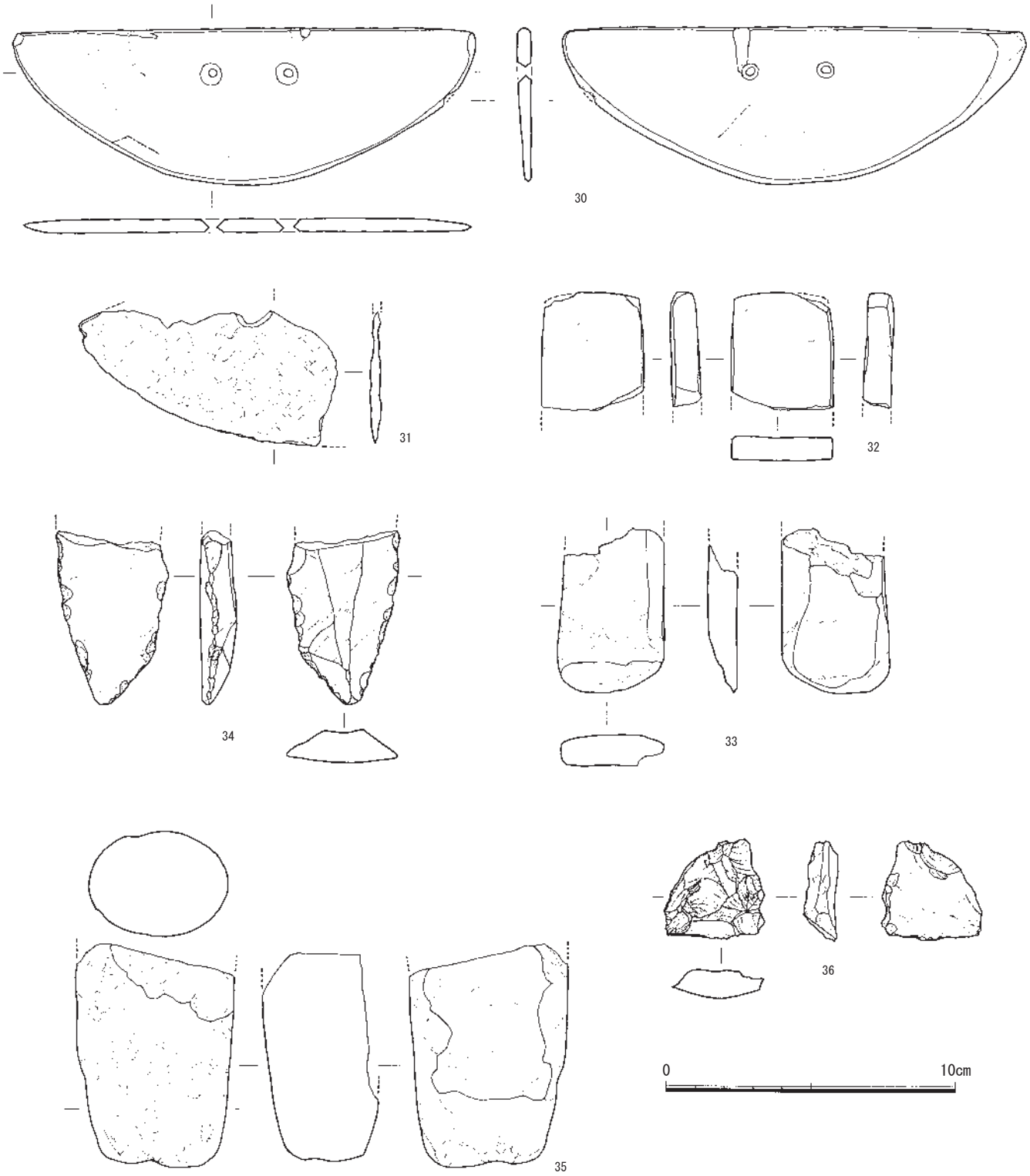


Fig.17　1SX001 上層出土遺物実測図②（1/2）

剥片（36）　大きさは 3.45×3.5×1.1 ㎝。黒曜石製。

1SX001 下層出土遺物（Fig.18 ～ 28、Pla.13）

弥生土器

甕（1 ～ 78）　1 ～ 14 は口縁部外面下に突帯を貼付する。2・6 は断面 M 字突帯であるが、他は断面三角形の突帯である。全体的に摩滅が目立つ。復元口径 27.0 ～ 34.0 ㎝。8 は口縁部に円孔を穿つ。9 は内外面ともハケ調整である。10 は外面に僅かに煤が付着する。11 は外面タテハケ、内面横方向の細か

いミガキを施す。15 ～ 40 は復元口径 23.8 ～ 35.0 ㎝。18・22 は口縁端部が短く断面三角形を呈する。22 は内外面摩滅しボロボロで、色調は暗茶灰色を呈する。41 ～ 44 は外面にタテハケの後に沈線が巡らせる。内面はナデ調整。42 ～ 48 は口縁部が断面三角形のように短い。外面はタテハケ、内面ナデ調整。51 ～ 53 は口縁部を「く」の字形に曲げる。40 は口縁部がやや長く、外面に煤が付着する。41 は復元口径 20.0 ㎝。外面に煤が付着する。42 は口縁端部に刻みを施す。43 の口縁端部には煤が付着する。46 は外面に煤が付着する。48 は外面がボロボロである。54・55 は口縁部が断面 T 字形の大甕で、色調は黄白色を呈する。56 ～ 78 は底部である。底部底面は、大小差はあるが上げ底となる。特に 56 ～ 59・62・63・65・66 は特に上げ底となる。また、56・57・60・61 は厚底である。摩滅していないものは外面タテハケである。61 の内底には薄く炭化物が付着する。

甕もしくは壺（79 ～ 81）　底径 6.2 ～ 8.6 ㎝。79 は外面底部付近に煤が付着する。

壺（82 ～ 115）　82 ～ 88 は広口壺。82 は外面が丁寧なナデ、内面は横方向のミガキ。83 は外面摩滅、内面は横方向のミガキ。復元口径 16.2 ～ 27.0 ㎝。85 は外面に縦方向の工具痕が残る。89 ～ 99 は口縁部が短めの鋤形口縁で、復元口径 22.4 ～ 30.6 ㎝。88 は内面がミガキの後丹塗りされる。89 は口縁部に刻みを施す。頸部の付け根に突帯を巡らす。90・91 は内外面とのナデ調整。93 は内面ミガキ、外面は黒灰色に塗られている。94 は口縁端部の上下に刻み目を施す。外面タテハケ、内面は横方向のミガキ。95 は内面ミガキ、外面はヨコナデ。98 は外面ヨコナデ、内面ナデ。口縁部上面に丹塗りが残る。99 は内外面ともミガキを施す。100 は内外面に僅かに丹塗りが残る。袋状口縁壺の頸部か。101 は外面に 5 条の突帯を貼付する。102 は瓢型の壺で、内面は摩滅するが、外面はヨコナデで、外面は丹塗りする。103 は壺と推測したが、全形が明確ではない。外面に突出する部分を作る。104 は外面 2 ヶ所に小さな突帯を貼付する。内面ナデ、外面はミガキで黒灰色に塗られている。105 は胴部最大径に断面三角形の突帯を貼付する。内面ナデ、外面は細かいミガキ調整。外面は茶褐色に塗られている。106 は、外面に断面 M 字突帯を貼付する。外面はミガキで、茶褐色に塗られ、一部黒褐色の筆書きが残る。107 は外面ミガキ、内面ナデ調整。断面 M 字形の突帯を貼付する。108 は内面ナデ、外面ミガキか。109 は外面に細かいミガキを施す。胎土は白色砂粒が多く、茶灰色を呈する。110 はやや小さな壺で、外面タテハケ、胴部最大径に浅い沈線が巡る。底径 6.1 ㎝。111 ～ 115 は、底径 5.4 ～ 8.4 ㎝。全体的に摩滅するが、114 は外面にハケのような痕跡が残る。115 は外面ミガキで煤が付着する。胎土は黄白色であるが、外面は暗褐色を呈する。

蓋（116 ～ 119）　116 は復元口径 28.0 ㎝。内外面ナデ調整で、色調は白黄色を呈する。117 は復元口径 28.4 ㎝。内面ナデ、外面は細かいタテハケを施す。口縁部内外面はヨコナデである。色調は黄白色を呈する。118 は内面ヨコハケ、外面ハケ調整。119 は外面丹塗りで、内面はヨコナデか。

鉢（120 ～ 122）　120 は復元底径 12.5 ㎝。内外面とも摩滅し調整不明。121 は外面タテハケ、内面ヨコナデ。122 は口縁部が逆 L 字形を呈し、口縁下に突帯を貼付する。口縁部から外面は丹塗りされている。

把手（123）　外面ナデ調整。

高坏（124 ～ 127）　摩滅が目立つ。124 は内面ナデ、外面タテハケ。125 は底径 9.8 ㎝。外面タテハケが残る。126・127 は内外面とも朱塗り。

器台（128 ～ 135）　128 は復元底径 10.0 ㎝。外面タテハケ。129 は復元口径 9.0 ㎝。外面タテハケ。130 は復元口径 8.8 ㎝。内外面ともナデ調整。131 は復元底径 10.0 ㎝。外面タテハケ。132 は復元底径 9.0 ㎝。133 は底径 8.0 ㎝。指頭圧痕が残る。134 は器壁が厚い。底径 9.7 ㎝。135 は復元底径 9.65 ㎝。外面タテハケ。

土製品

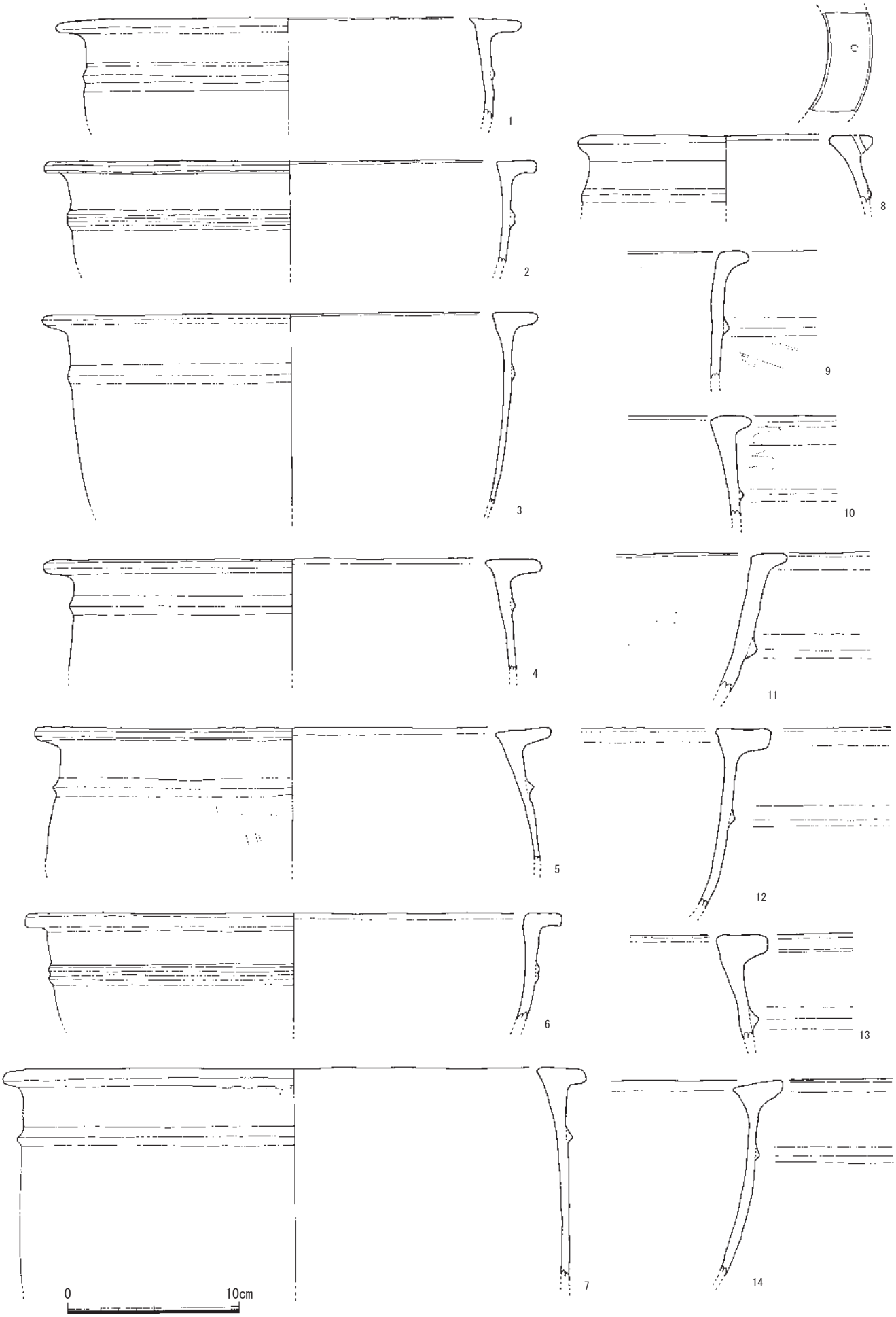


Fig.18　1SX001 下層出土遺物実測図①（1/3）

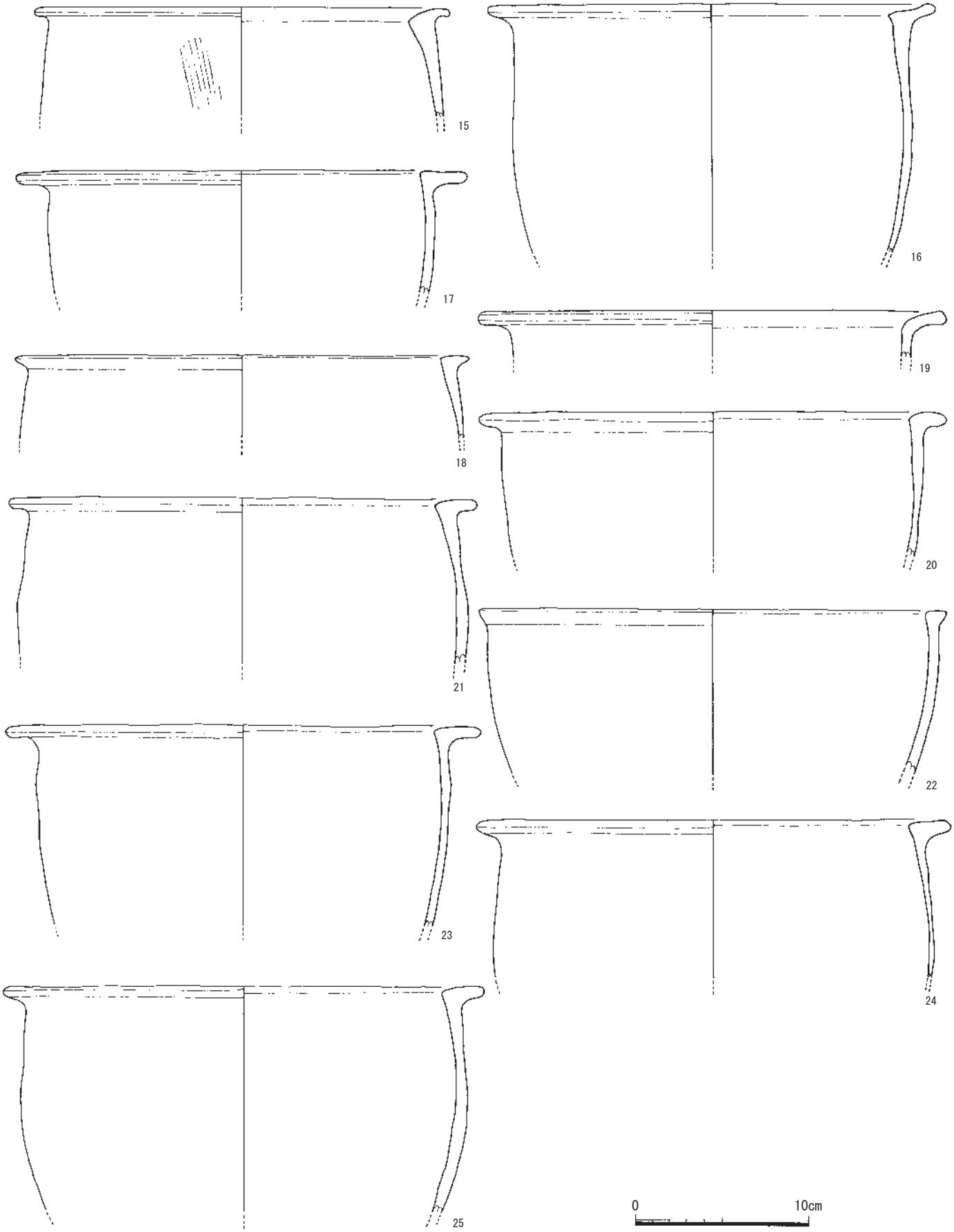


Fig.19　1SX001 下層出土遺物実測図②（1/3）

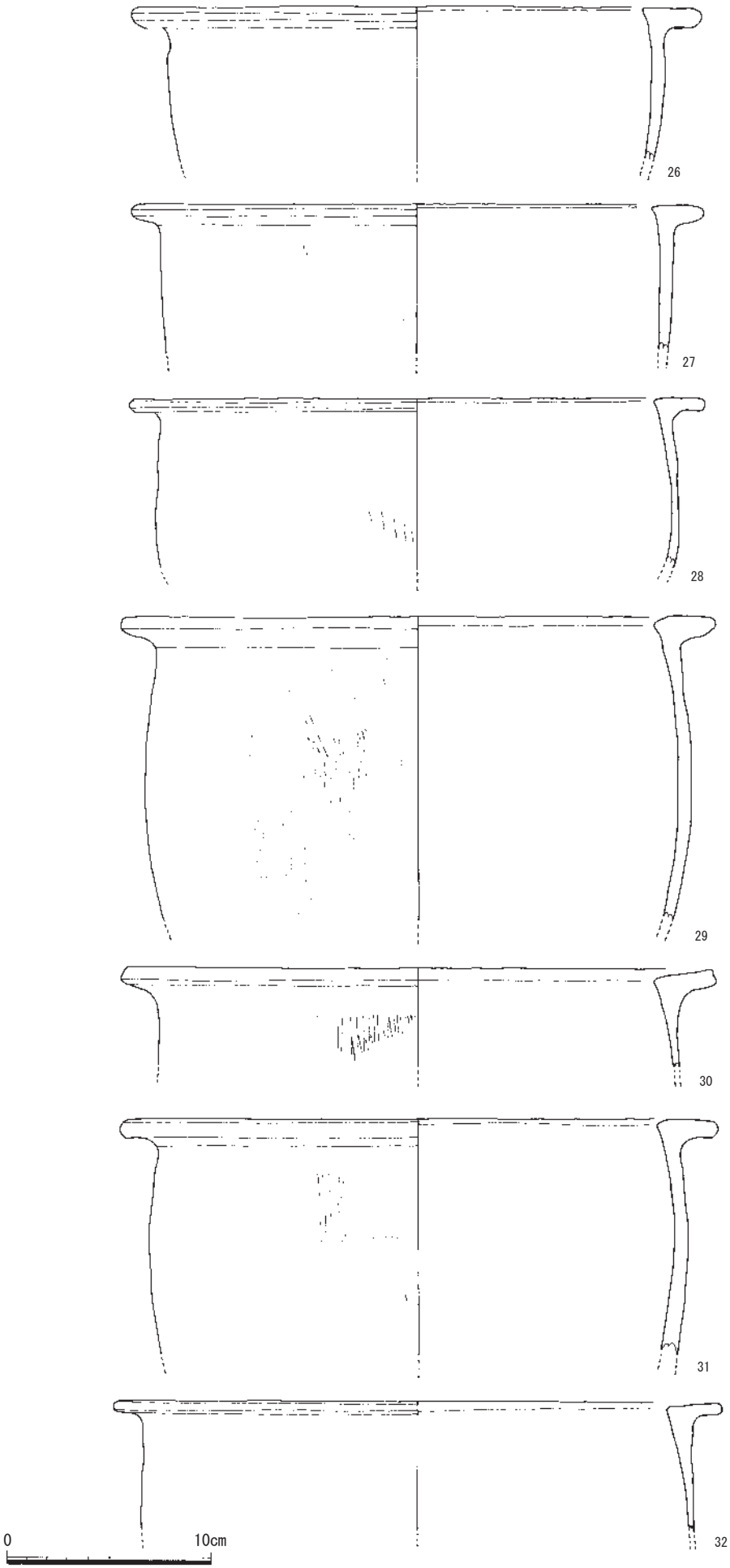


Fig.20　1SX001 下層出土遺物実測図③（1/3）

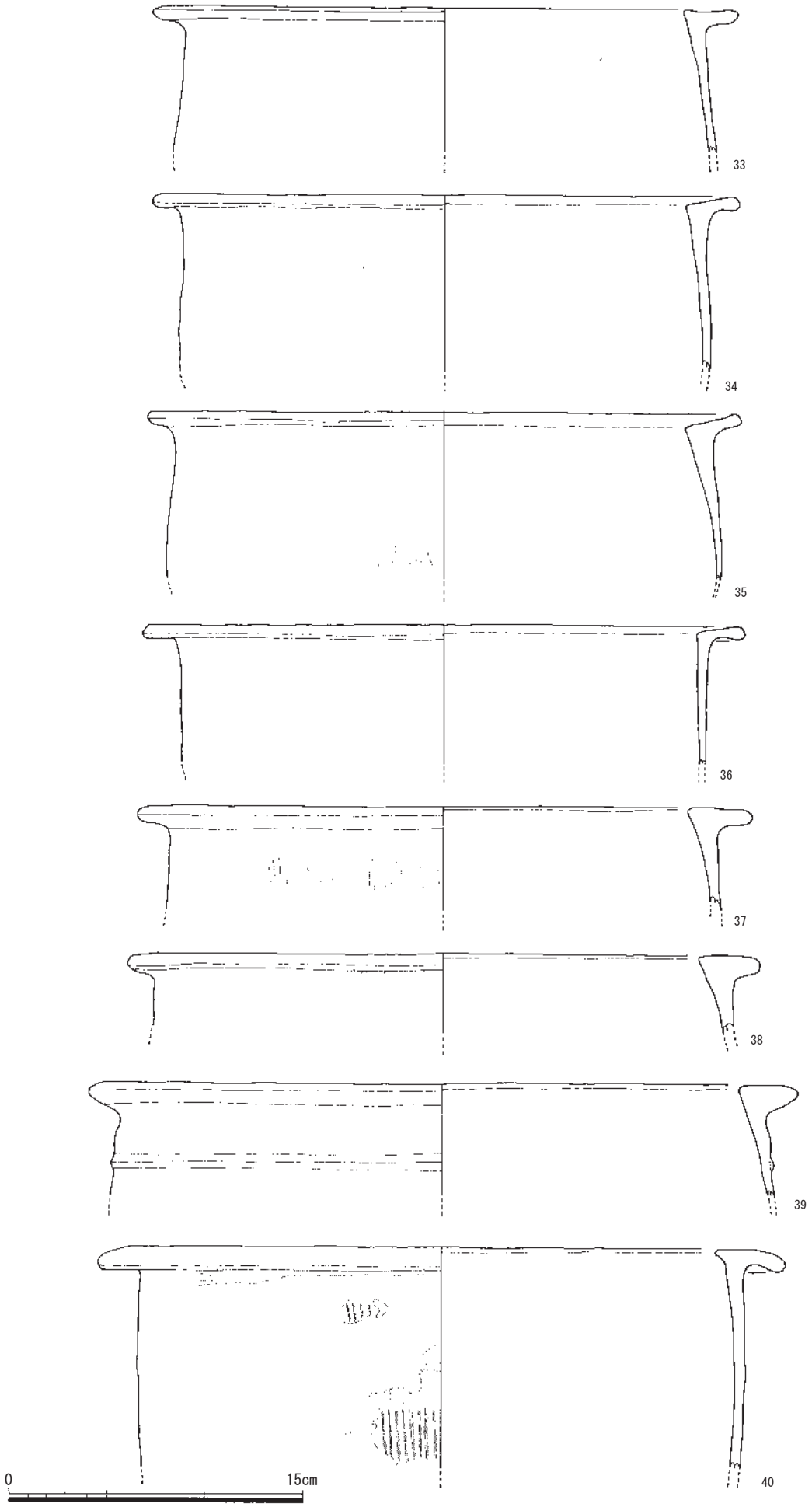


Fig.21　1SX001 下層出土遺物実測図④（1/3）

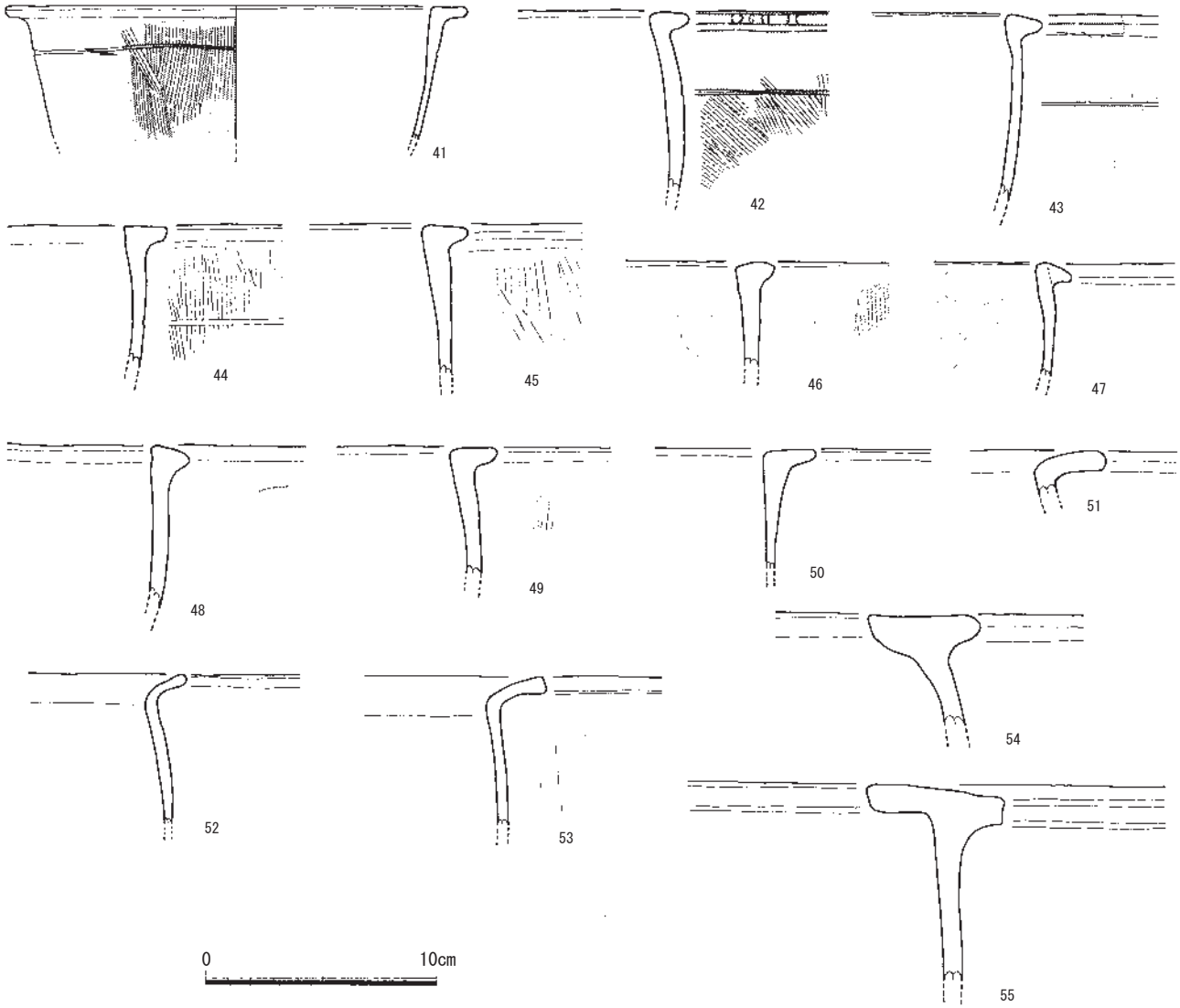


Fig.22　1SX001 下層出土遺物実測図⑤（1/3）

棒状土製品（136）　2 片に分かれているが、同一製品とみられる。最大径 7.5 ㎝、高さは約 15 ㎝。底部には窪みがある。胎土は 0.7 ㎝以下の白色砂粒を多く含み粗い。色調は暗黄橙色を呈する。

紡錘車（137）　径 4.05 ㎝、厚さ 1.15 ㎝。中央に径 0.6 ㎝前後の円孔を設ける。

石製品

砥石（138、139）　2 点とも欠損欠落が目立つ。138 は砂岩で 2 面使用され、使用面は緩やかに凹んでいる。139 は 2 面使用されている。

石包丁（140 ～ 142）　140 は欠損し円孔が僅かに残る。周辺部には刃部を削りだしているが、研磨痕が残っていない。厚さ 0.25 ㎝。141 は研磨されてなくザラザラしている。142 は内外面とも研磨されてはなく、製作途中と推測される。

石斧（143）　大きく欠損しているが、太型蛤刃石斧と推測される。

扁平片刃石斧（144）　先端部は欠損する。現存長 5.2 ㎝、幅は 2.2 ㎝、厚さ 1.15 ㎝。全面研磨され、細かい擦痕が残る。白灰色の珪質泥岩製。

石錘（145）　長さ 5.1 ㎝。中央に浅い沈線が巡る。

1SX001 暗茶色粘土出土遺物（Fig.29、Pla.14）

弥生土器

甕（1 ～ 22）　1 ～ 4 の口縁部は、断面三角形を呈する。外面は細かいタテハケで、内面はナデ調整。3・

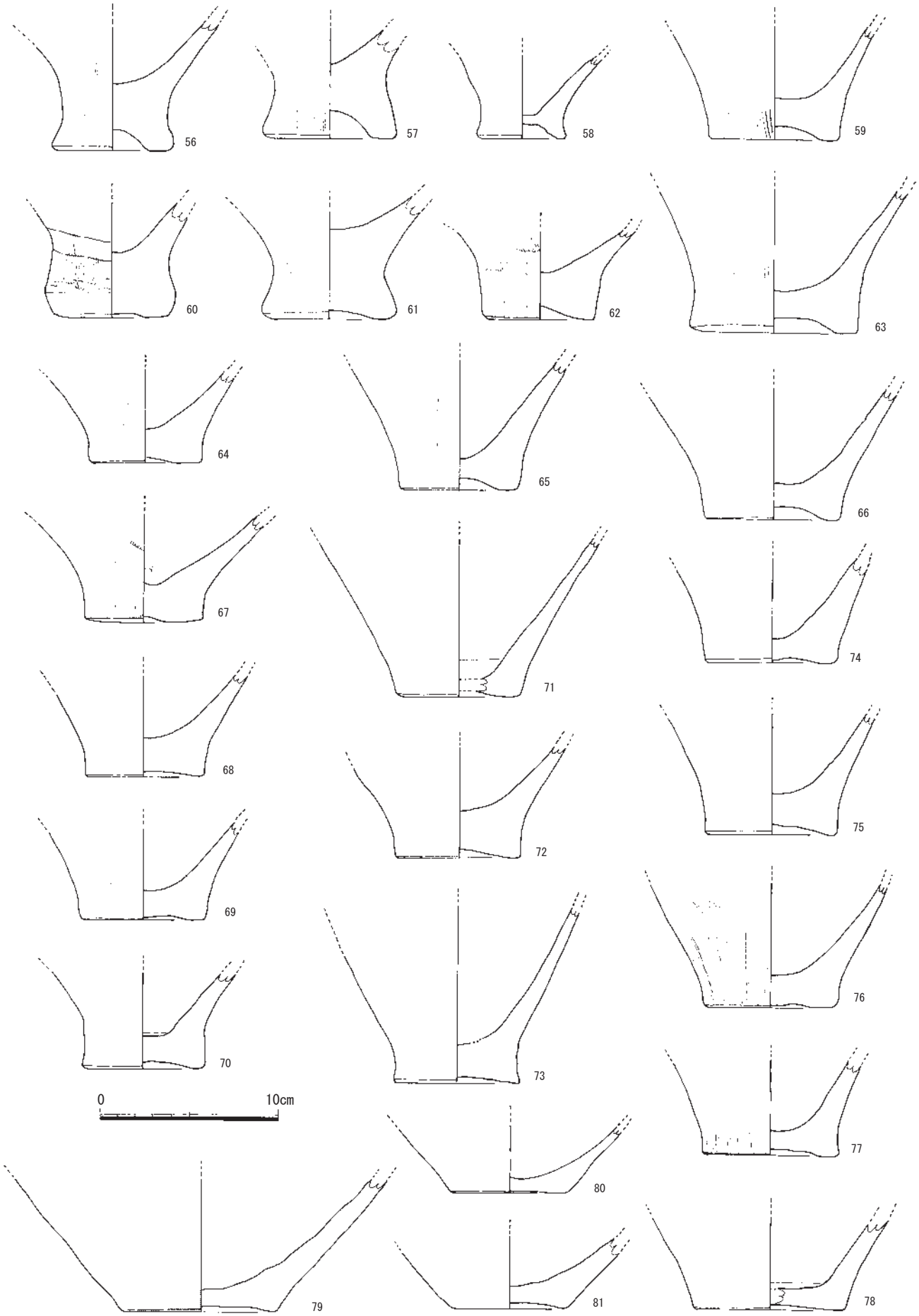


Fig.23　1SX001 下層出土遺物実測図⑥（1/3）

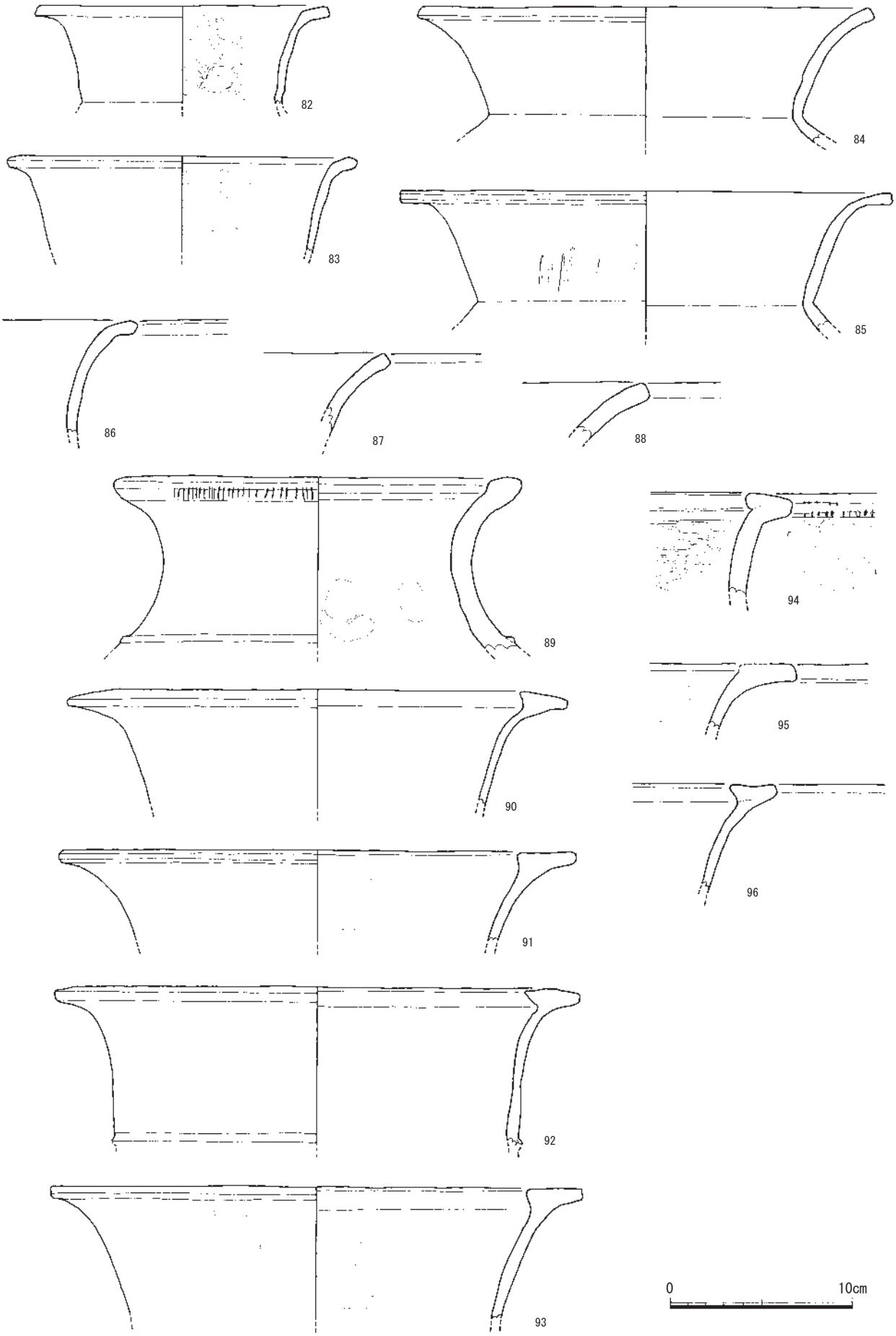


Fig.24　1SX001 下層出土遺物実測図⑦（1/3）

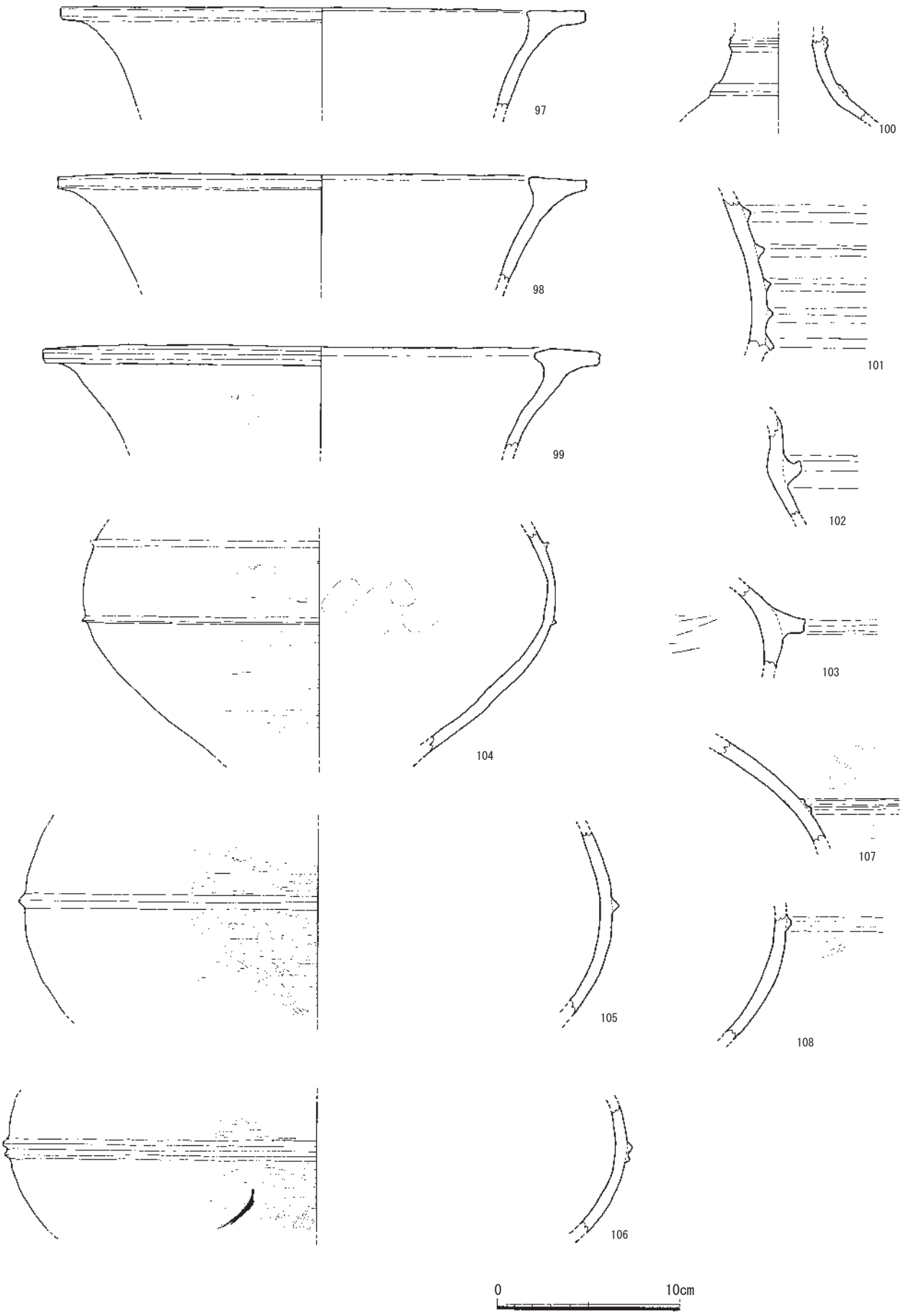


Fig.25　1SX001 下層出土遺物実測図⑧（1/3）

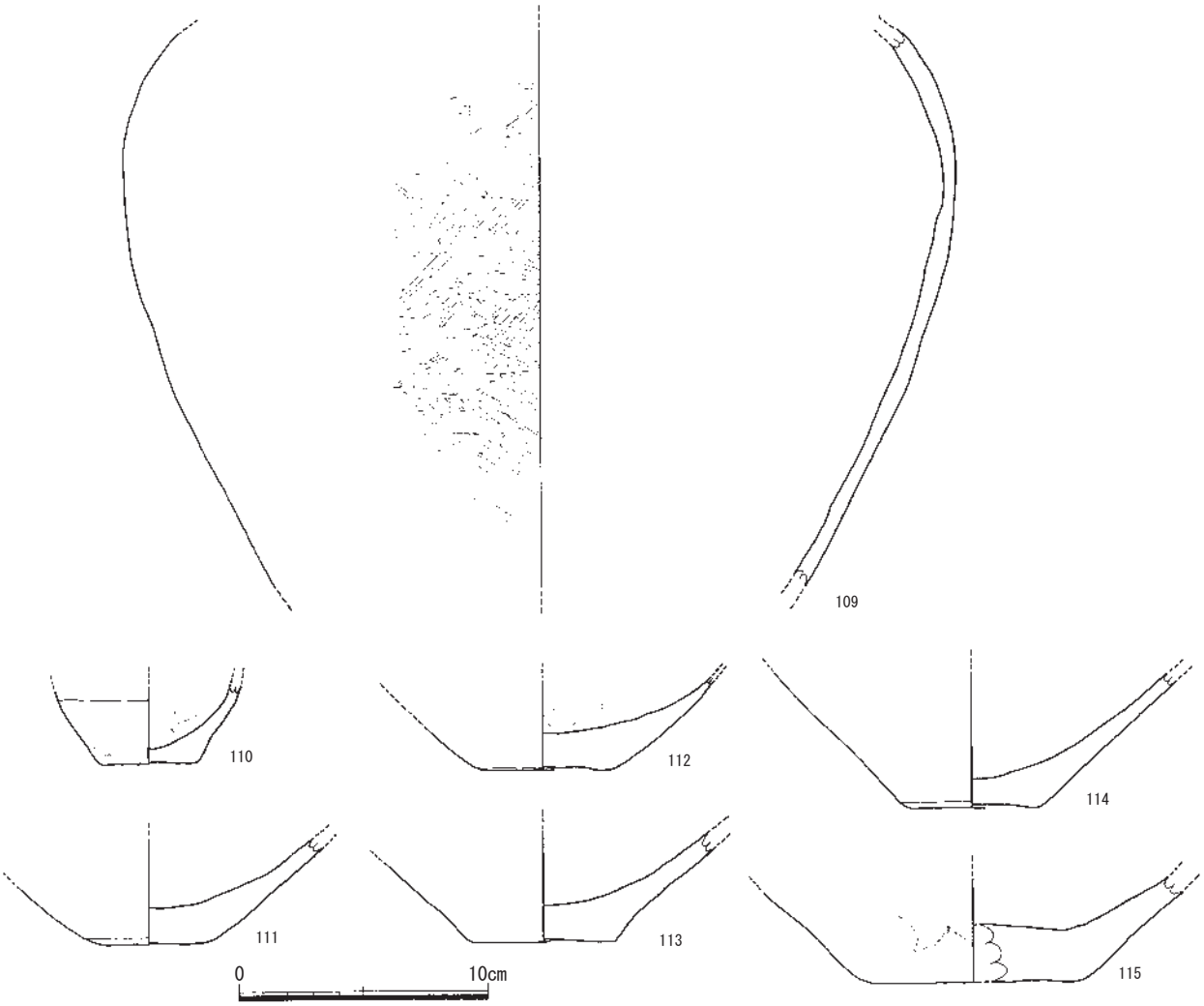


Fig.26　1SX001 下層出土遺物実測図⑨（1/3）

4の色調は暗茶褐色を呈する。4は胎土が粗く、全体的に摩滅でボロボロである。5は逆L字形の口縁部で、端部には刻み目を施す。6は外面に細かいタテハケの後浅い沈線を巡らす。7は口縁部を大きく曲げる。8が口縁部を緩く曲げる。10は口縁部を断面三角形とし、体部は張っている。11は口縁部をやや長く作る。上面にハケ目が僅かに残る。12は外面タテハケの後、断面三角形の突帯を貼付する。13～17は厚底で、17が平底以外は上げ底でもある。13は外面にタテハケが僅かに残るが、他は摩滅し調整不明。18～20は平底である。18は内底に厚く炭化物が付着する。19は内外面タテハケだが、内面は摩滅が目立つ。内20は外面タテハケ、内面は縦方向のナデ。22は底部に孔を穿つ。

壺（23、24）　23は真っすぐ立ち上がり、口縁部を外反させる。摩滅するが外面にタテハケが僅かに残る。24は復元底径7.3㎝。内外面とも摩滅する。

石製品

石剣（25）　両端を欠損する。現存長8.6㎝、幅4.0㎝、厚さ1.0㎝。全面研磨し断面菱形を呈する。岩脈をうまく利用し模様のように見える。

1SX001 灰色粘土出土遺物（Fig.30、Pla.13）

弥生土器

甕（1～15）　1～9は断面三角形に近い短めの口縁部で、外面タテハケである。1の口縁部は一部剥落した面にタテハケが確認できる。よって直線的な体部にハケ目を施した後、口縁部を貼付したことがわかる。2は外面に沈線が巡り、煤が付着する。調整はタテハケに見えるが、ナデの可能性もある。

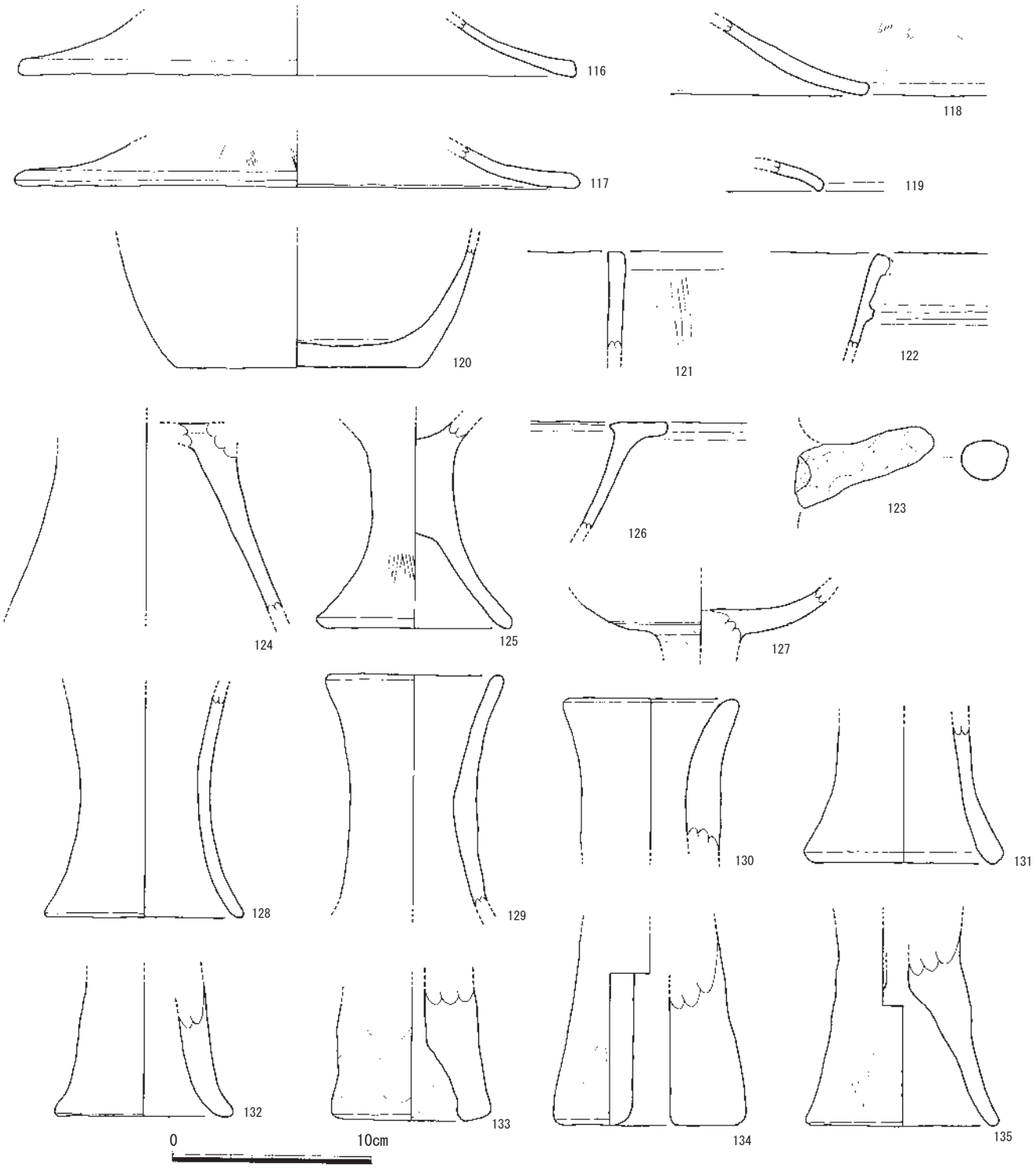


Fig.27　1SX001 下層出土遺物実測図⑩（1/3）

5 は内外面ナデ調整で、外面には沈線を 1 条施す。10 は口縁部を緩く曲げ外反させる。外面タテハケ、内面ヨコハケで、体部はヨコナデ。小片のため傾きが明確にし難く、壺の可能性もある。11 ～ 14 は厚底で若干上げ底の底部である。摩滅が目立つが、11・14 の外面にはタテハケが残る。15 は平底で、内外面とも摩滅し調整不明。

甕もしくは壺（16）　平底で、復元底径 8.8 ㎝。内外面摩滅し調整不明。

壺（17）　外面はミガキ、底部外面はナデ調整。底部復元径 9.7 ㎝。

小壺（18）　やや小振りの壺で、外面は摩滅するが僅かにハケ目が残る。底径 5.8 ㎝。

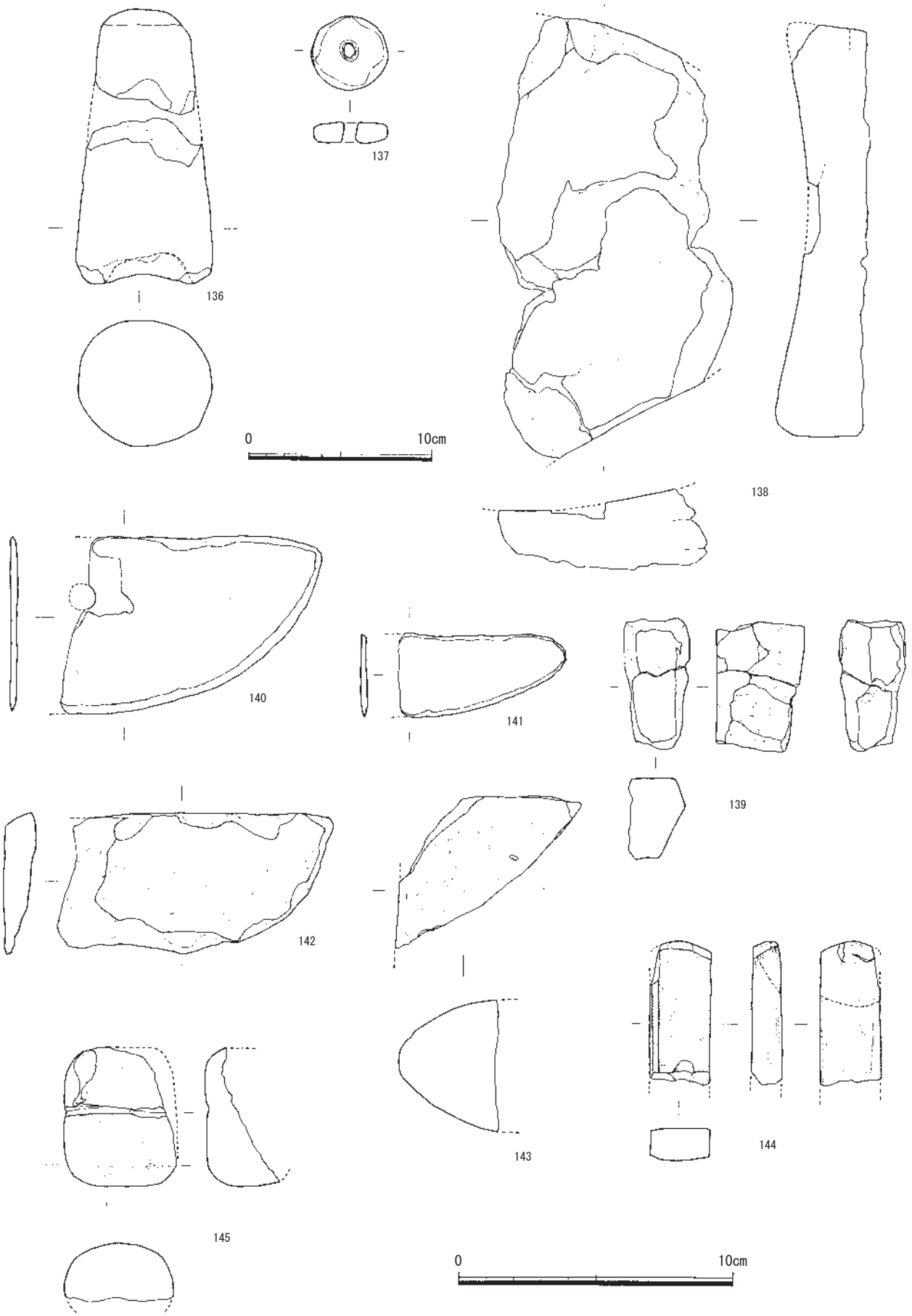


Fig.28　1SX001 下層出土遺物実測図⑪（1/3、石製品は 1/2）

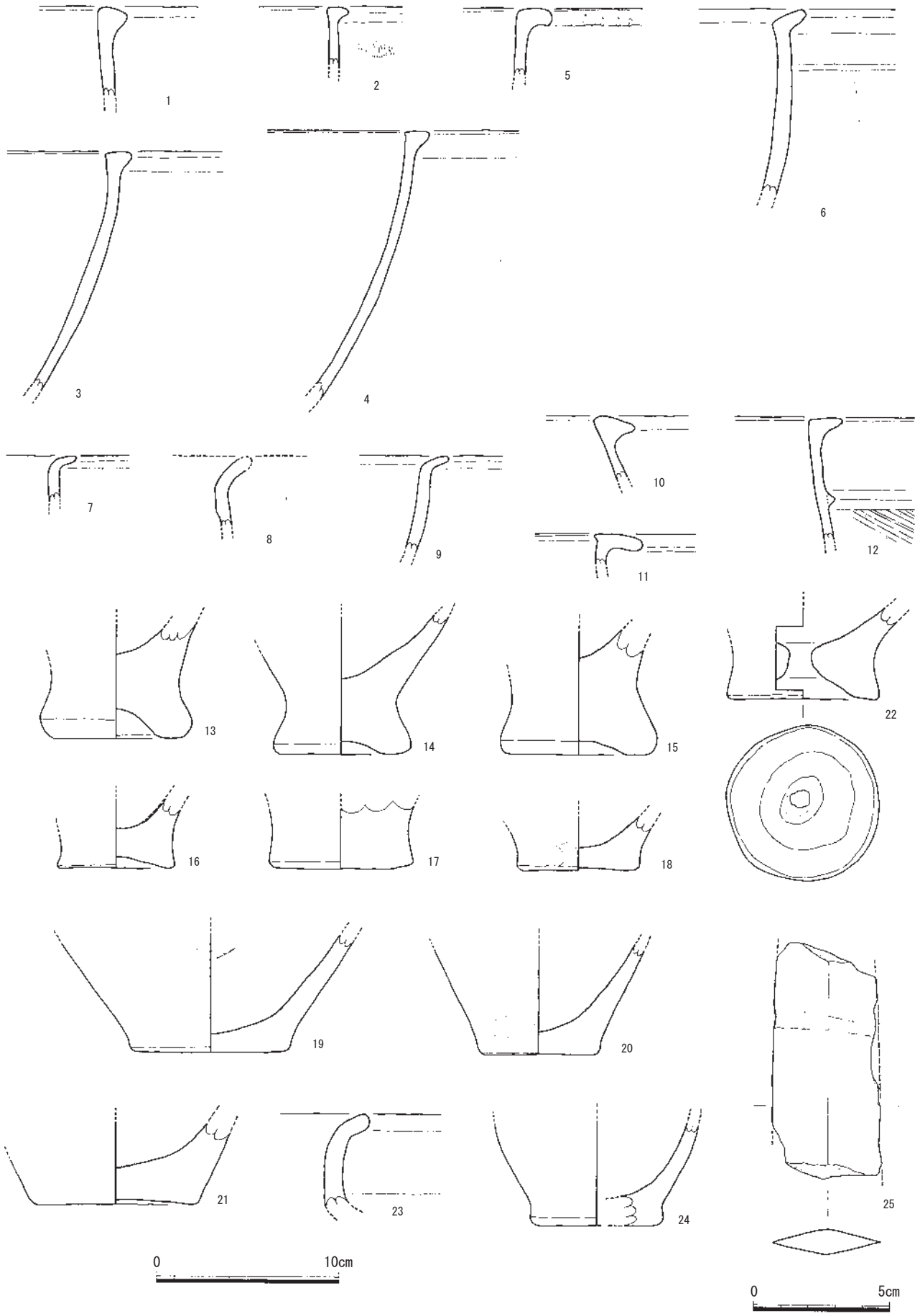
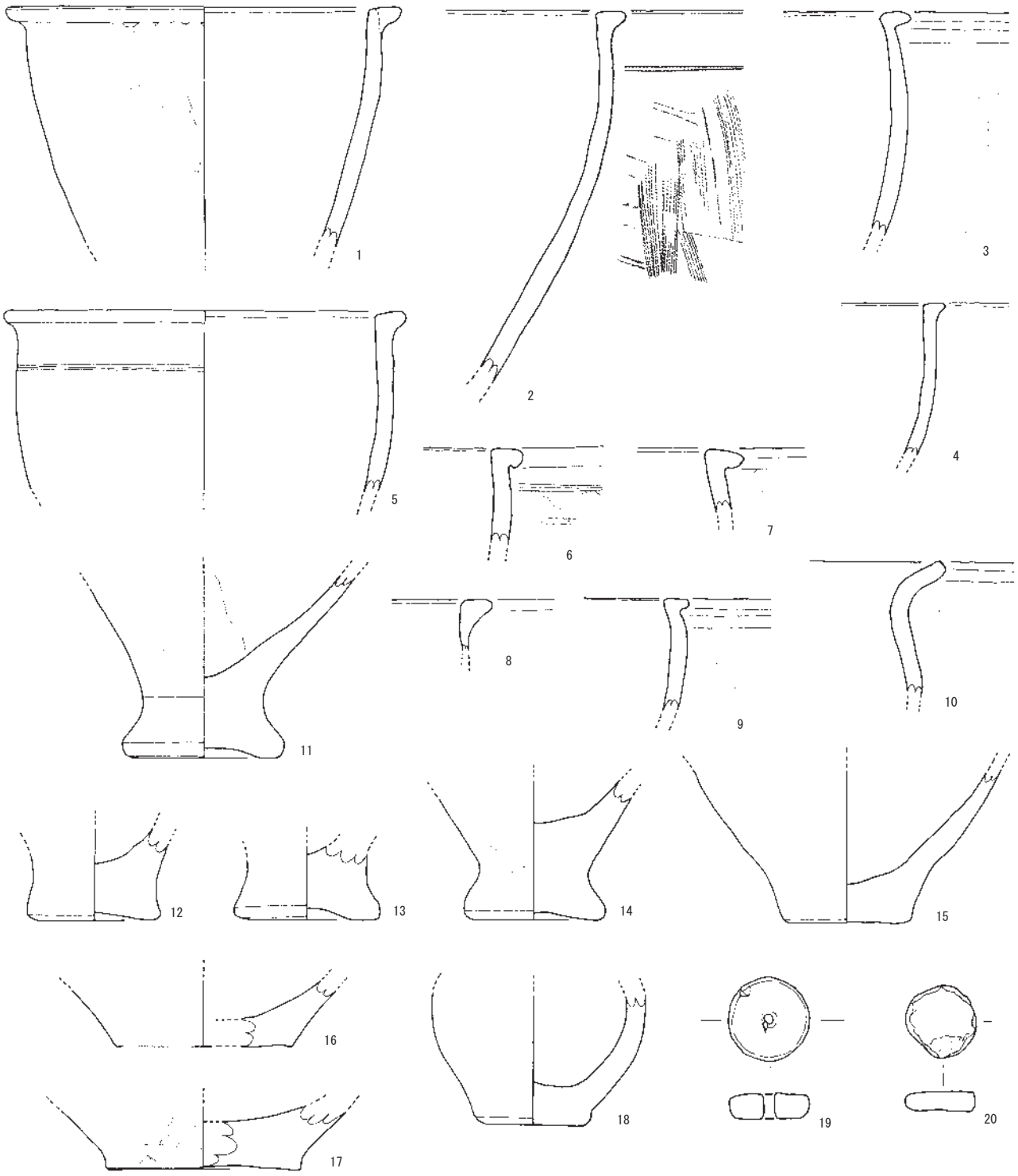


Fig.29　1SX001 暗茶色粘土出土遺物実測図（1/3、25 は 1/2）

1SX001 灰色粘土



1SX001 灰色粘土最下層

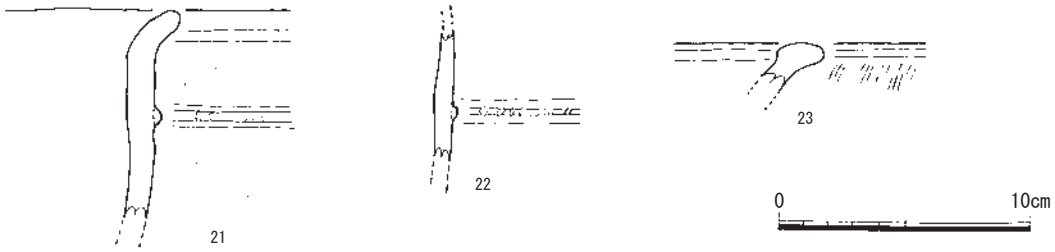


Fig.30　1SX001 灰色粘土・灰色粘土最下層出土遺物実測図（1/3）

土製品

紡錘車（19）　径 4.0 ～ 4.1 ㎝、厚さ 1.3 ㎝、径 0.5 ㎝の円孔がある。

土製円板（20）　径 3.5 ～ 3.6 ㎝、厚さ 1.0 ㎝。胎土は 0.2 ㎝以下の砂粒を多く含み、色調は黄白色を呈する。

1SX001 灰色粘土最下層出土遺物（Fig.30）

弥生土器

甕（21、22）　21 の口縁部は直線的な体部から緩く外反する。体部には刻み目突帯が貼付されるが、口縁端部に刻みがあるかは不明瞭。外面は僅かにタテハケが残る。色調は暗茶黒色を呈する。22 は外面に刻み目突帯を貼付する。

壺（23）　口縁部を僅かに肥厚させる。外面タテハケ、内面ナデ調整。

その他の遺構

1SX013（S-12）出土遺物（Fig.31）

弥生土器

小甕（1 ～ 3）　色調は茶灰色を呈する。1 は復元口径 10.0 ㎝。2 は小片のため､傾きが不明確である。3 は僅かに丸味のある底部で、底径 4.2 ㎝。

柱穴

1SX055 出土遺物（Fig.31）

弥生土器

甕（4）　平坦な底部で、復元底径 9.2 ㎝。内面ナデ、外面タテハケ。底部外面はナデ調整。

木製品

柱材（5）　丸太材で、上部中心部は空洞となっている。腐食しているが両断面に伐採痕が残る。長さ 40.9 ㎝、径 17.4×16.1 ㎝。

木材検出ピット

1SX030 出土遺物（Fig.31、Pla.14）

弥生土器

甕（6、7）　6 は口縁部が L 字形を呈する。7 は底部近くの破片で、形状から若干厚底の底部を呈すると推測される。外面はタテハケで、内面は炭化物が付着する。

木製品

加工材（8、9）　8 は、丸木を半裁したままで、半裁面に加工はみられない。片方は二方面に斜めにカットしているが、一方の面は平坦だが加工は不明瞭である。現状では確認できないが、腐食前は樹皮が残っていた可能性が高い。大きさは縦 23.6 ㎝、幅 18.3×8.1 ㎝。9 は、丸木を伐採し、さらに半裁しているため、一方の断面には伐採痕が明瞭に残る。上面は腐食しているため、加工は不明瞭である。表面は加工がないようで、現状では確認できないが、腐食前は樹皮が残っていた可能性が高い。大きさは縦 16.7 ㎝、幅 19.5×9.2 ㎝。

円盤状板材（10）　半月状の板材で、表面の加工は腐食し不明瞭である。長軸 40.2 ㎝、短軸 23.5 ㎝、厚さ 3.0 ㎝。

1SX050 出土遺物（Fig.31）

弥生土器

壺もしくは高坏（11）　口縁端部の小片で、外面には僅かにハケ目が残る。

甕もしくは壺（12）　甕もしくは壺の体部とみられ、台形の突帯を貼付する。内面摩滅するが、外面

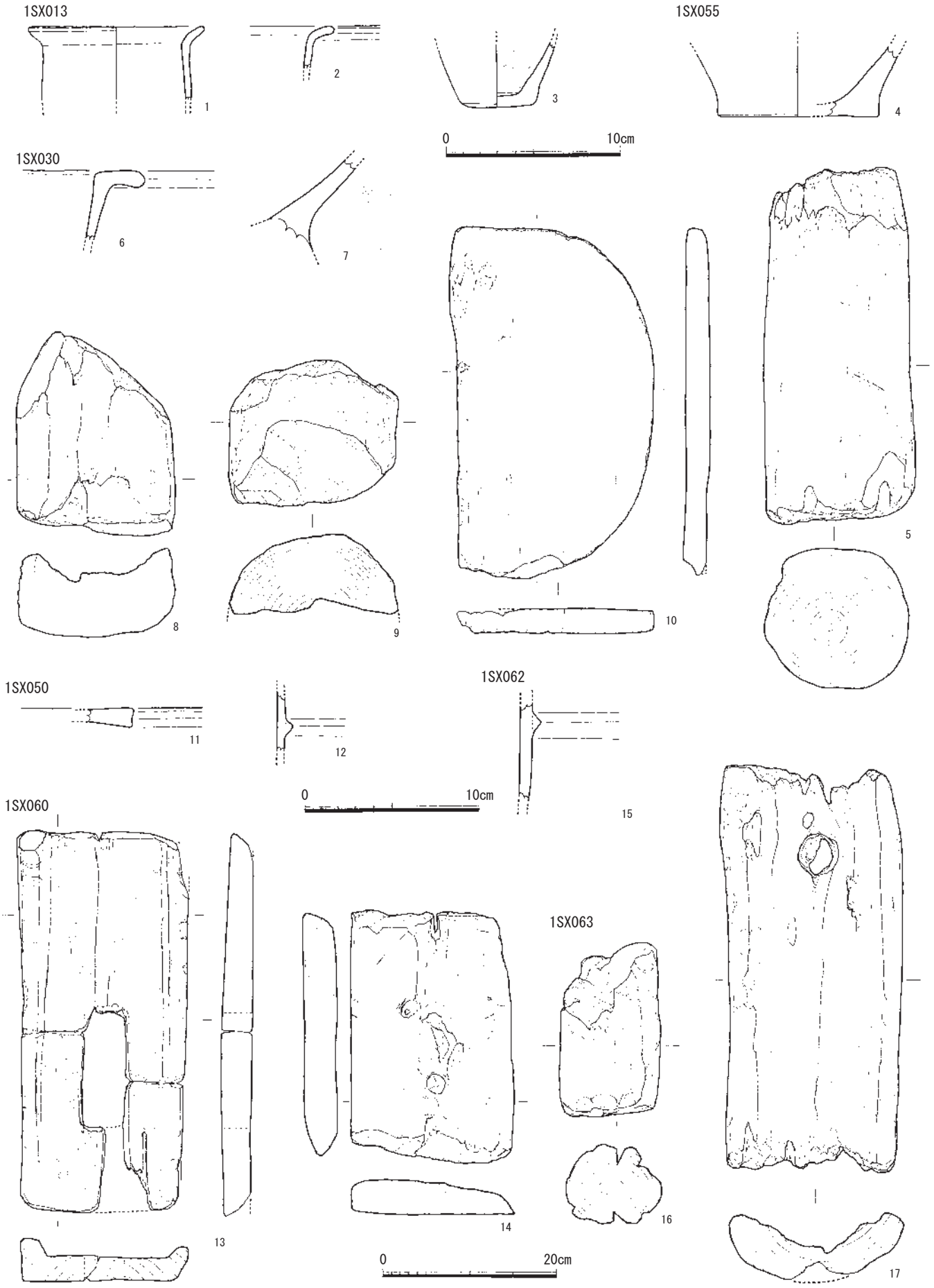


Fig.31　その他の遺構、柱穴、木材出土ピット出土遺物実測図（1/3、木製品は 1/6）

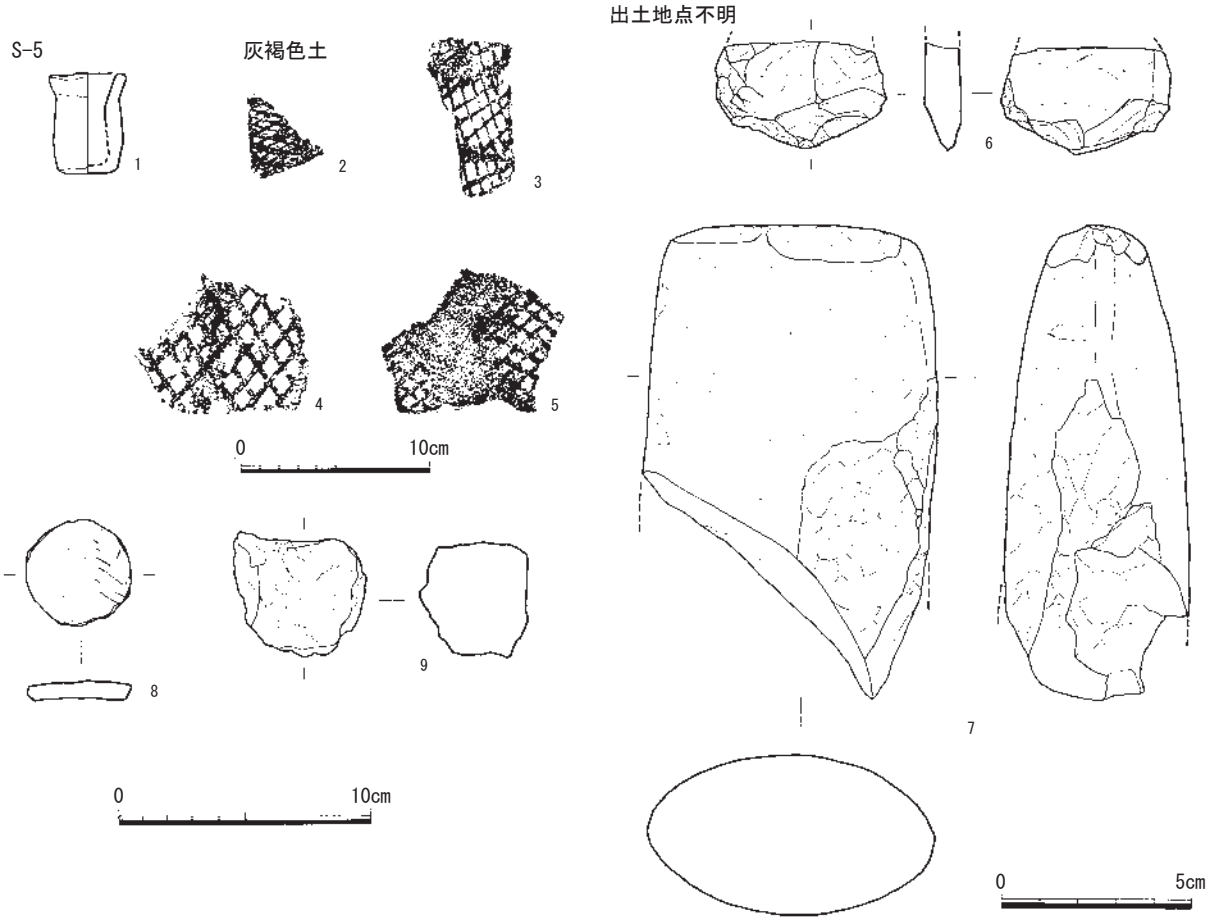


Fig.32　灰褐色土、その他の出土遺物実測図（1/3、瓦は1/4、6・7は1/6）
は丹塗りである。

1SX060 出土遺物（Fig.31、Pla.14）

木製品

板材（13、14）　13は、大きさは縦44.0㎝、横19.6㎝。厚さは3.0㎝で、長辺の両側のみ厚く削り出されていて、最大厚4.9㎝である。中央付近に13×5㎝程の長方形孔を穿っている。加工は明確に確認できない。14は、樹木の節部分を使用した方形板材で、縦29.1㎝、横18.8㎝、厚さ4.0㎝。両端を加工しているように見える。

1SX062 出土遺物（Fig.31）

弥生土器

甕（15）　外面はタテハケで、三角形の突帯を貼付する。うっすらと煤が付着する。

1SX063 出土遺物（Fig.31）

木製品

柱材（16）　縦20.0㎝、径11.6×9.2㎝。下方断面はカット面そのままとみられるが腐食する。

加工材（17）　縦46.6㎝、幅21.0㎝、最大厚5.2㎝。腐食し加工痕は明確ではないが、断面U字形を呈するため、意図的に抉った可能性がある。樹木の節部分が使用されている。

その他の遺構出土遺物（Fig.32）

弥生土器

ミニチュア土器小壺（1）　手づくねで作られた土器で、色調は暗灰色を呈する。口径3.0㎝、器高4.0㎝、底径2.4㎝。S-5より出土。

灰褐色土出土遺物（Fig.32）

瓦類

丸瓦（2 ～ 4）　2 は小さく横長の格子叩き。3 はやや不定形な格子叩き。4 は縦長の格子叩き。

平瓦（5）　小さな方形格子叩き。

第 1 次調査出土遺物（出土地点不明）（Fig.32）

石製品

掻器（6）　縦 2.8 ㎝、幅 4.5 ㎝、厚さ 1.0 ㎝。端部を剥離加工している。安山岩製。

太型蛤刃石斧（7）　半分ほど欠損する。現存長 12.5 ㎝、現存最大幅 7.7 ㎝、厚さ 4.2 ㎝。玄武岩製。

土製品

土製円板(8)　表面はヘラ描き文があり、壺の肩部付近を再利用したものと推測される。径 4.15 ～ 4.2 ㎝、厚さ 0.7 ㎝。

土塊（9）　胎土は 0.5 ㎝以下の砂粒をやや多く含み、色調は橙黄色を呈する。一部面が存在する。

(5) 小結

調査地北側で検出された流路（1SX001）は、弥生中期初頭に埋没し始め、弥生中期前半に埋没する。それが埋没した後の弥生中期中葉頃に掘立柱建物（1SB075）が建てられている。流路の底面には柱材や木製加工品が遺存しており、礎板などの可能性もあることから、不安定地盤で建物を建築する工夫が行われたとみられる。

また、流路（SX001）の上流延長上とみられる国分松本遺跡第 11･13 次調査では、流路に奈良時代までの遺物が包含されていたことから、1SX001 が埋没し陸地化した後も、第 11･13 次調査付近だけ流路が湿地状に残されていた可能性が高い。

Fig.33　第１次調査遺構略測図（1/150）

表.1　国分千足町遺跡第1次調査　遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	1SX001	流路		弥生中期初頭～前半	F～J・3～6
2	1SK002	土坑		弥生時代	AB1.2
3		ピット	S-5→3		B1
4		ピット群			A～E1
5		ピット	S-5→3		B1
6		ピット			D1
7	1SK007	土坑		弥生中期初頭～前半	AB2
8	1SB065	土坑			C2.3
9	1SB065	ピット		弥生中期	D4
10	1SK010	土坑		弥生中期初頭～前半	B2.3
11	1SB065	ピット		弥生後期後半	C2
12		ピット群		弥生後期？	C5
13	1SX013	円形溝		弥生後期	C5.6
14		ピット			D5.6
15	1SI015	竪穴住居		弥生中期後半？	DE3.4
16		ピット			F4
17	1SB065	ピット	S-17→15	弥生中期	D3
18		ピット		弥生中期中葉	D4
19		ピット			E4
20	1SK020	土坑			D4
21		ピット群			B～E.3～6
22	1SX022	ピット群	ピット1個に柱材遺存。S-1→22？	弥生中期	IJ5
23		ピット群	S-1→23？		位置不明
24		ピット群	S-1→24？	弥生中期	IJ4
25	1SK025	土坑	板材遺存。	弥生中期中葉	J5
26		窪み	S-1最下	弥生中期	IJ3
27		土坑		弥生中期後半	FG3
28		ピット	S-28→27	弥生中期前半～中葉	G3
29	1SB075	柱穴	柱材遺存。	弥生中期	F3
30	1SX030	ピット	板材遺存。	弥生中期初頭～前半	I4
31		ピット		弥生時代	F3
32		土坑		弥生中期	F3
33		ピット	S-27の下。弥生土器甕出土。	弥生後期	F3
34		ピット			F3
35		土坑		弥生中期	F4
36		ピット			G3.4
37	1SX037	ピット	柱材遺存。	弥生時代	F4
38		ピット群			F4
39		ピット			G4
40	1SB075	柱穴	柱材遺存。		G4
41		ピット群		弥生中期	GH4・5
42		ピット		古墳時代	H5
43		ピット		弥生中期	G5
44		ピット群			G5
45	1SX045	ピット群	柱材遺存。	弥生時代	H5
46		ピット群		弥生中期	A～E.2・3
47		ピット	S-35の下		F4
48		ピット		弥生時代	G3
49		土坑		弥生時代	F5
50	1SX050	ピット	木片遺存。	弥生中期中葉	H5
51	1SB075	柱穴	柱材遺存。		F4
52		ピット		弥生中期	I5
53	1SB075	ピット		弥生中期中葉	H5
54		ピット		弥生中期	H5
55	1SX055	ピット	柱材遺存。	弥生中期前半	I6
56		ピット		弥生時代	E4
57	1SX057	ピット	板材遺存。	弥生時代	F4
58	1SX058	ピット	柱材遺存。	弥生時代	I4
59	1SX059	ピット	柱材遺存。		I4
60	1SX060	ピット	板材遺存。		J4
61		ピット		弥生時代	I5
62	1SX062	ピット	板材遺存。	弥生中期	I6
63	1SX063	ピット	木材遺存。		J4
64		ピット	木片遺存		J4
65	1SB065	掘立柱建物		弥生後期中葉～後半	B～D.2～4
70	1SB070	掘立柱建物		？	DE1
75	1SB075	掘立柱建物		弥生中期中葉	F～H.3～5

表.2　国分千足町遺跡第1次調査　出土遺物一覧表

S-1

弥生土器	甕、甕口縁、甕底、壺口縁、壺底、甕×壺、破片
木製品	木片

S-1最上層

須恵器	坏蓋、甕
弥生土器	甕口縁、甕底、壺口縁、袋状口縁壺、甕×壺 高坏、器台、破片
瓦類	平瓦(無文)
石製品	剥片(黒曜石)、丸石

S-1上層

弥生土器	甕口縁、甕底、壺、壺口縁、壺底、器台、鉢 丹塗り土器、破片
石製品	石包丁、石斧、扁平片刃石斧 叩き石、削器、剥片(安山岩、黒曜石)

S-1下層

弥生土器	高坏、大甕、小甕、甕、甕×壺、壺、壺×高坏、 器台、把手、支脚、蓋、鉢、器台、把手、甑型土器
石製品	砥石、石包丁、扁平片刃石斧、石斧、扁平石、 剥片(黒曜石)、石包丁？、石錘
土製品	紡錘車、棒状土製品

S-2

弥生土器	破片
石製品	石核(黒曜石)、丸石

S-5

弥生土器	ミニチュア土器小壺

S-6

弥生土器	支脚、破片

S-7

弥生土器	甕口縁、甕底、支脚、器台、破片

S-8

弥生土器	甕口縁、甕底、壺口縁、破片
石製品	丸石

S-9

弥生土器	甕口縁、破片
石製品	石包丁

S-10

弥生土器	甕口縁、甕底、器台、破片

S-11

弥生土器	甕、器台、甕×壺

S-12

弥生土器	小甕、破片

S-13

弥生土器	破片

S-15

弥生土器	甕口縁、甕底、支脚、破片
土製品	投弾

S-15B

弥生土器	甕口縁、甕底、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-17

弥生土器	甕口縁、壺、丹塗り土器片、破片

S-18

弥生土器	甕口縁、甕底、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-20

弥生土器	高坏、甕、甕底、壺
石製品	剥片(黒曜石)、石斧、丸石

S-22

弥生土器	甕口縁、壺、破片

S-24

弥生土器	甕口縁、甕底、壺?、丹塗り土器、支脚、破片

S-25

弥生土器	甕、甕口縁、甕底、壺、壺口縁、広口壺、甕×壺 器台、破片
石製品	石包丁?
木製品	木片

S-26

弥生土器	甕、甕底、破片
木製品	木片

S-27

弥生土器	甕口縁、甕底、小壺、丹塗り土器、破片

S-28

弥生土器	甕、甕口縁、丹塗り土器、破片

S-29

弥生土器	甕底、壺底、破片
土製品	土塊
木製品	柱材(S-29でない可能性あり)

S-30

弥生土器	甕口縁、甕底、破片
木製品	加工材、円盤状板材、板材、木片

S-31

弥生土器	破片

S-32

弥生土器	甕口縁、破片

S-33

弥生土器	甕、破片

S-35

弥生土器	甕口縁、甕底、支脚、破片

S-37

弥生土器	破片
木製品	柱材(S-37でない可能性あり)

S-41

弥生土器	甕口縁、甕底、支脚?、破片

S-42a

弥生土器	甕口縁、破片

S-42b

須恵器	破片
弥生土器	甕口縁、甕底、壺、破片
木製品	木片

S-43

弥生土器	甕?、壺?、支脚、破片

S-45

弥生土器	壺、破片
木製品	木片

S-46

弥生土器	甕口縁、破片

S-48

弥生土器	破片

S-49

弥生土器	甕底、壺、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-50

弥生土器	甕口縁、甕底、丹塗り土器、壺×甕、 壺×高坏、支脚、破片

S-51

弥生土器	椀?、甕底、小壺、器台、破片
木製品	木片

S-52

弥生土器	甕底、壺、支脚?、破片
石製品	石剣

S-53

弥生土器	甕口縁、甕底?、破片
石製品	砥石?

S-54

弥生土器	甕口縁、破片

S-55埋土中

弥生土器	破片

S-55

弥生土器	甕口縁、甕底、破片
木製品	柱材

S-56

弥生土器	破片
木製品	柱材、板材（共にS-50可能性あり）

S-57

弥生土器	破片
木製品	木片

S-58

木製品	柱材？（S-58ではない可能性あり）

S-60

木製品	板材

S-61

弥生土器	甕口縁、壺×高坏、破片

S-62

弥生土器	甕、破片
木製品	板材

S-63

弥生土器	壺(丹塗り)、破片
木製品	柱材、加工材、木片

S-64

木製品	柱材、木片（共にS-64ではない可能性あり）

灰褐色土

国産陶器	椀?
弥生土器	甕口縁、甕底、丹塗り土器、器台、支脚、破片
瓦類	平瓦(縄目、格子)、丸瓦(縄目、格子)

暗茶色粘土

弥生土器	甕、甕口縁、甕底、壺、小壺、丹塗り土器、破片
石製品	石剣、玄武岩片

灰色粘土

弥生土器	甕、甕口縁、甕底、甕×壺、壺、小壺、破片
石製品	砥石?
土製品	紡錘車、土製円板

灰色粘土最下

弥生土器	甕、壺、刻目突帯、破片

腐植土

木製品	木片

表採

弥生土器	甕、壺、破片
石製品	礫

表土

須恵器	壺?
弥生土器	甕、壺、破片
瓦類	平瓦(縄目、格子)

出土地不明

白磁	破片(1)
弥生土器	高坏、甕、壺、器台、円盤形加工品、支脚、丹塗り土器、破片
瓦類	平瓦(格子)
石製品	剥片(黒曜石、安山岩)、太形蛤刃石斧、掻器
土製品	土製円板、土塊

2、国分千足町遺跡第 2 次調査

(1) 調査に至る経緯

太宰府市大字国分 (現国分 3 丁目)489-2 で、筑前国分寺跡の南西約 300m に位置する。

1988（昭和 63）年 8 月に宅地造成に対する文化財についての問い合わせがあった。1989（平成元）年5月 20 日、確認調査を実施し、遺構が確認された対象地北半部を中心に発掘調査を実施することとなった。発掘調査は 1990（平成 2）年 8 月 7 日～ 9 月 30 日にかけて、開発者の費用負担で実施した。調査は城戸康利が担当した。調査対象面積 966 ㎡、調査面積 427 ㎡。

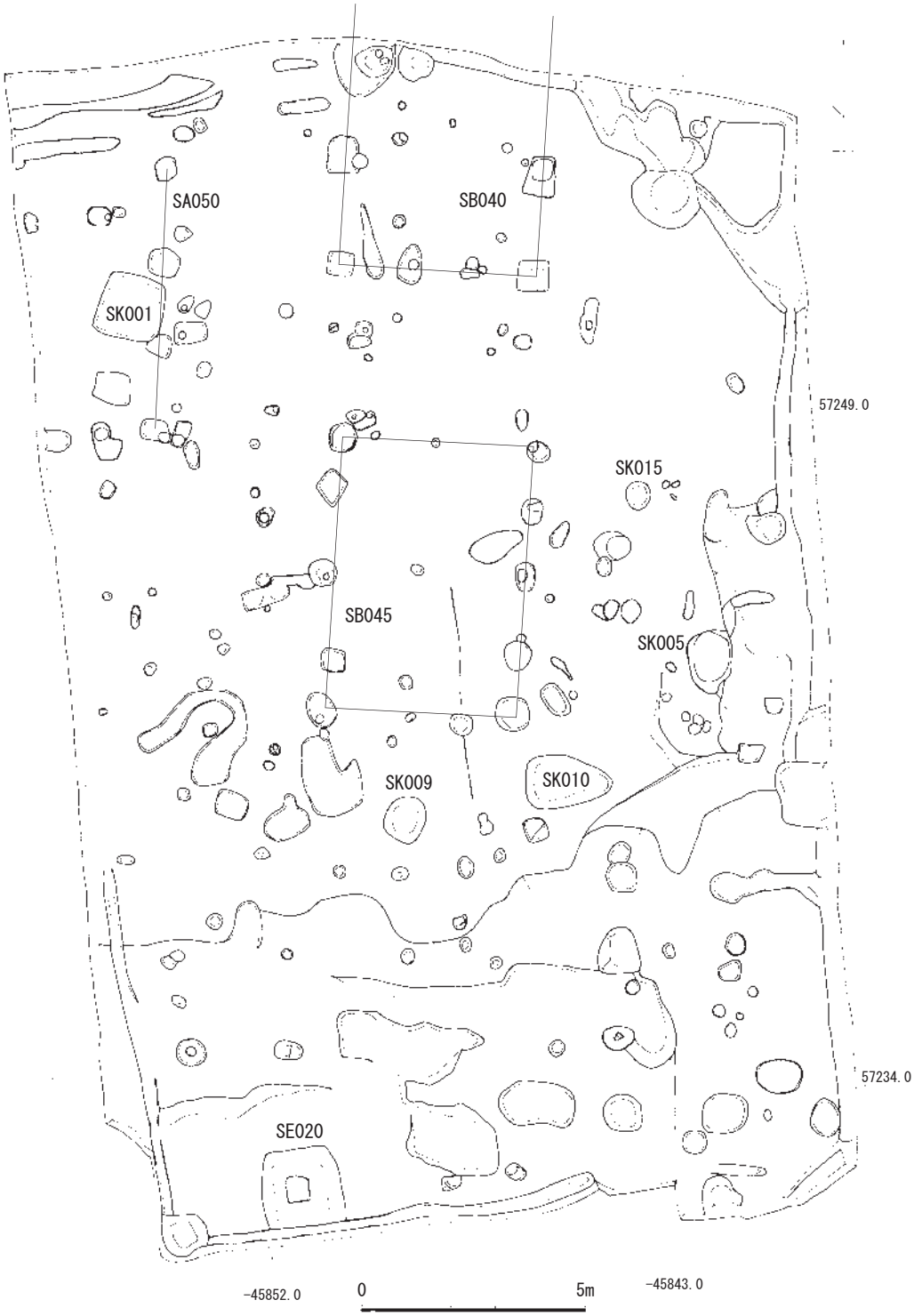


Fig. 34　第 2 次調査遺構全体図（1/150）

(2) 基本層位（Fig.35）

遺構面は1面で、北から南へ低くなっており、耕作土上面からの遺構面の深さは、北端で0.25m、南端で0.7～1.2mほどである。さらに調査区外南側は9世紀前半代と考えられる氾濫原となり遺構は残存していない。このことから本調査は氾濫原の端部に位置し遺構はかなり削平されていると考えられる。調査地は水田の耕作土や床土が全体を覆い、その下に黄色土があり、それを除去すると遺構が検出されるが、南側ほど遺構検出面は深いため、包含層が覆っている。包含層は南側ほど厚くなる粘質の暗灰色土である。地盤は礫や砂質で硬い淡褐色土、その下層に砂っぽい黄茶色土、さらにその下には明茶色のやや粗い砂質土である。

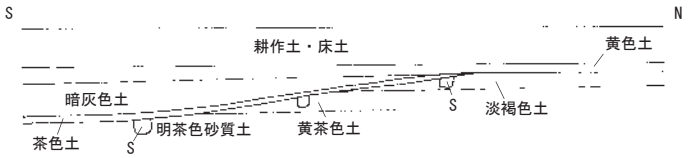


Fig.35　第2次調査区土層模式図

(3) 検出遺構

掘立柱建物

2SB040（Fig.37、Pla.4）

桁行2間（2.4m）以上、梁間3間（4.4m）の南北棟で、北側は調査区外に続いている。掘り方は一辺0.7m前後の方形であるが、梁間の掘り方は方形をなしていない。柱間は、桁行は約2.4m、梁間は両側が約1.6m、中央が約1.2mである。

2SB045（Fig.37、Pla.4）

桁行2間（6.2m）×南北2間（4.3m）の南北棟である。掘り方は径0.6m前後の円形で、梁間は中央の掘り方が径0.2mと小さい。柱間は桁行が約3.1m、梁間は約2.15mである。

柵列

2SA050（Fig.36）

南北3間の柵列で全長6mである。掘り方は一辺0.5～0.6mの隅丸方形状で、柱間は約2mである。

井戸

2SE020（Fig.38、Pla.5）

調査区内で南端にあり、大きく削平されているとみられる。掘り方は東西1.8m、南北1.76m、深さ0.48mの方形で、その中央には0.56×0.5m、深さ0.08m程の方形井戸枠痕跡が確認できる。

土坑

2SK001（Fig.38）

東西1.48m、南北1.46m、深さ0.29mの方形土坑である。

2SK005（Fig.38、Pla.5）

東西1.0m、南北1.4m、深さ1.0mの楕円形土坑である。

2SK009（Fig.38）

東西8.6m、南北1.0m、深さ0.6mの楕円形土坑である。

2SK010（Fig.38）

東西1.9m、南北1.2m、深さ0.36mで、イチジ

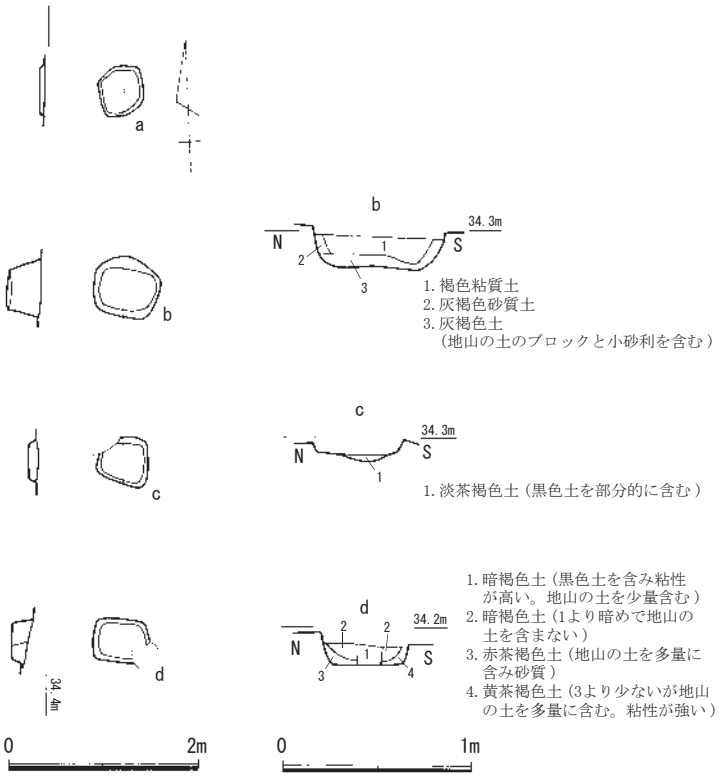


Fig.36　2SA050遺構実測図（1/80、1/40）

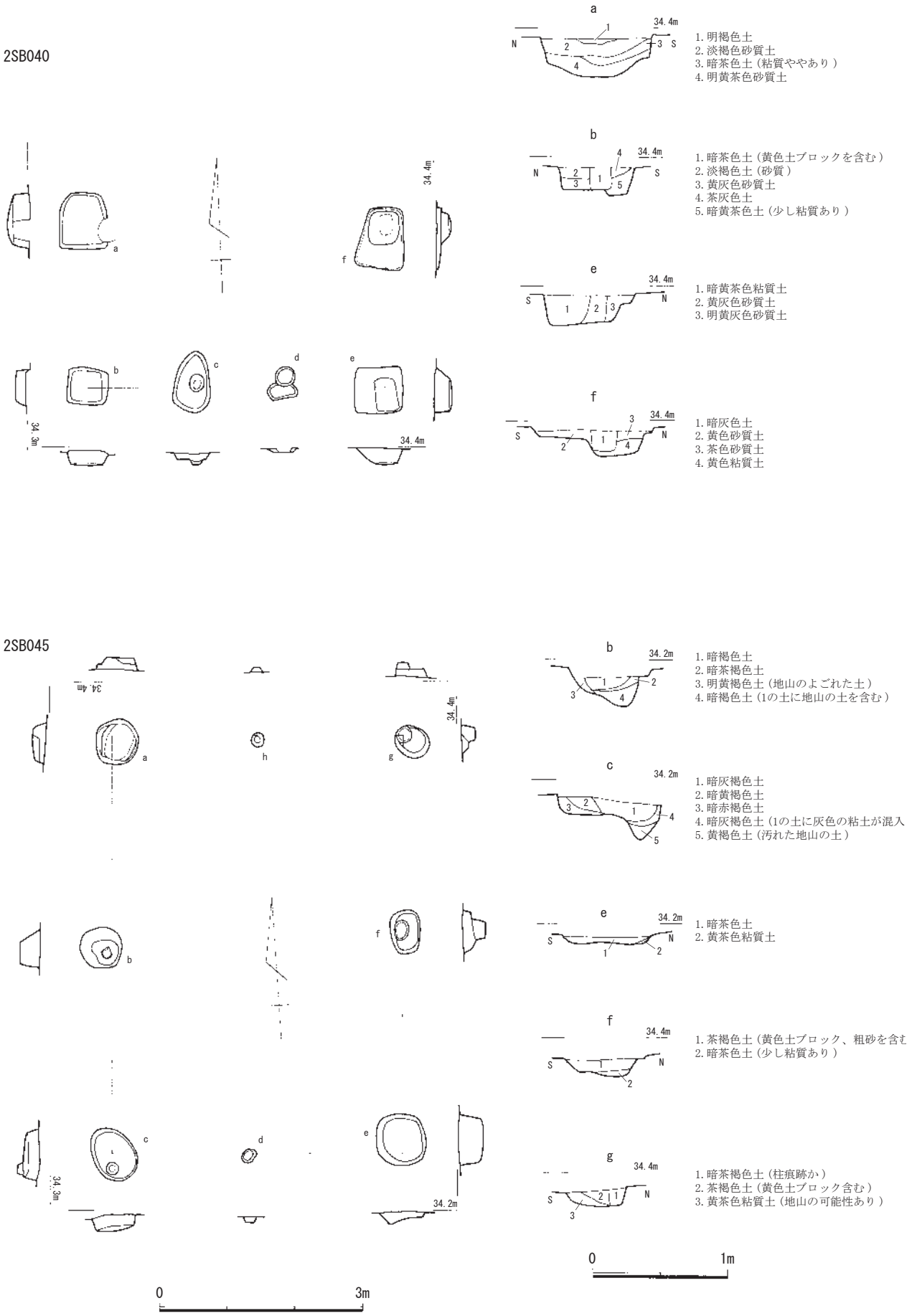


Fig.37　2SB040・045 遺構実測図（1/80、1/40）

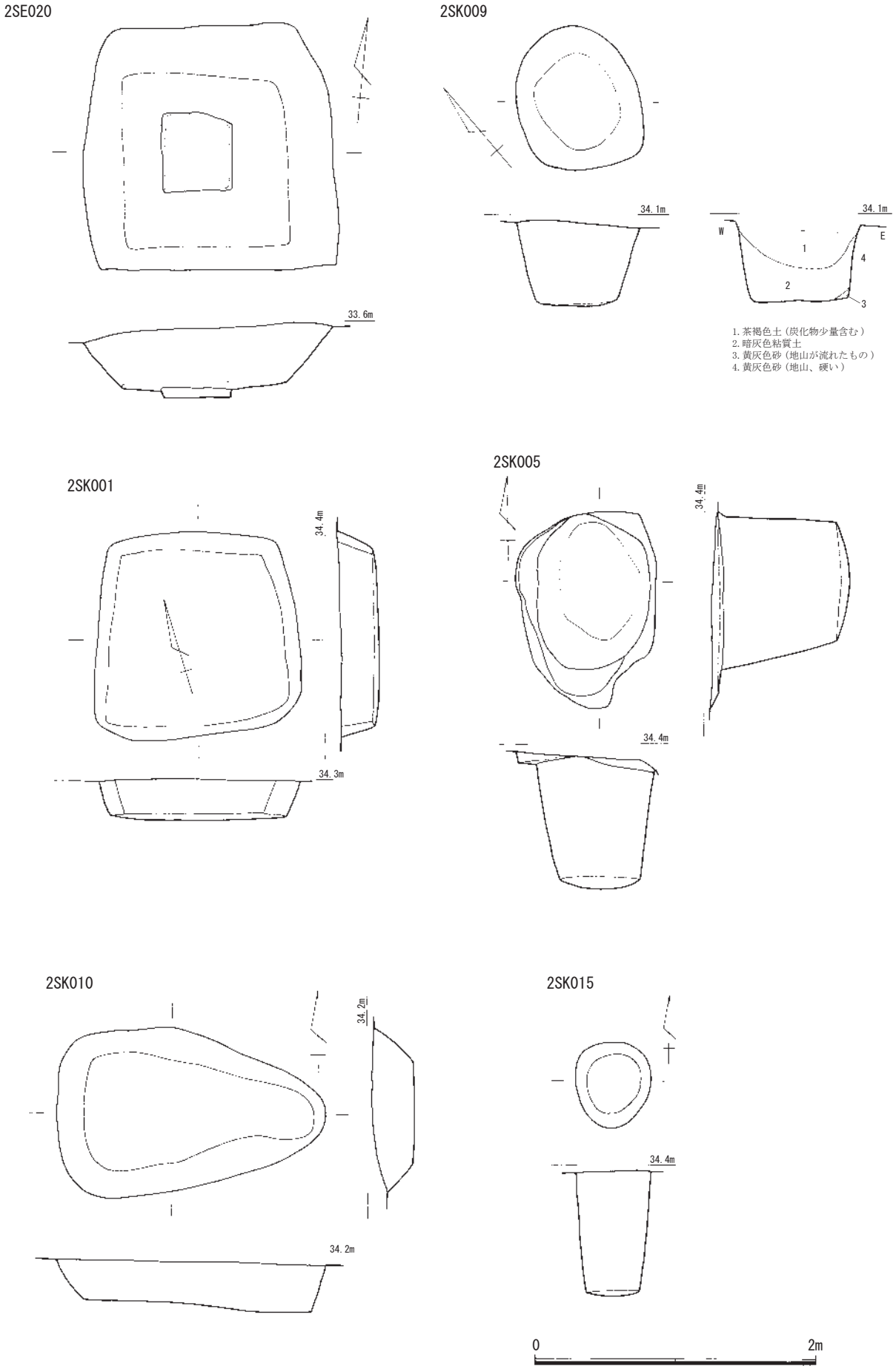


Fig.38　第２次調査井戸・土坑遺構実測図（1/40）

ク形をした土坑である。

2SK015（Fig.38）

東西0.54m、南北0.6m、深さ0.89mの円形のピットである。

(4) 出土遺物

掘立柱建物

建物の掘り方から出土した遺物は僅かであったため、図化できるものを掲載した。

2SB045b（S-16）出土遺物（Fig.39）

弥生土器

甕（1） 復元底径9.6㎝。全体的に摩滅するが外面に僅かにタテハケのような痕跡が残る。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は内面が黒灰色、外面は淡橙黄色を呈する。

2SB045c（S-18）出土遺物（Fig.39）

須恵器

甕もしくは壺（2） 焼成良好で、内外面回転ナデ、色調は暗灰色を呈する。

弥生土器

甕（3） L字形に曲げた口縁部で、色調は淡橙黄色を呈する。

2SB045e（S-27）出土遺物（Fig.39）

弥生土器

甕（4） 口縁端部の小片で、色調は淡橙黄色を呈する。

土坑

2SK001 出土遺物（Fig.39・40、Pla.14）

須恵器

蓋3（5、6） 5は口縁端部を若干折り曲げている。6は口縁端部が断面三角形ではなく、丸味のある形状をなす。

土師器

坏d（7） 復元口径15.8㎝、器高2.5㎝、復元底径7.6㎝。全体的に摩滅し調整不明。色調は橙色を呈する。

皿a（8） 復元口径23.0㎝。底部は若干丸味があり、口縁端部は僅かに外反し、内側に段が施されていたような痕跡がみられる。胎土は精製され、色調は橙色を呈する。

瓦類

丸瓦（9） 全体的に摩滅が目立つが、欠損は一部だけで、長さ37.0㎝、現存最大幅16.2㎝。焼成還元不良で、色調は橙白色を呈する。内面は布目が明瞭に残り、外面は粗い縄目叩きの後、縄目をナデ消している。

軒平瓦（10） 全体的に摩滅が目立つが、欠損は一部だけである。長さ37.1㎝、最大幅32.5㎝。瓦当面は上外区が23個の珠文、下外区と脇は鋸歯文、それらに囲まれて扁行唐草文が施されている。凸面は縄目叩き、凹面には模骨痕と布目がうっすら残る。

2SK005 出土遺物（Fig.41）

須恵器

坏c（1、2） 2点とも色調は灰白色を呈する。1は低い高台を貼付する。

土師器

坏aもしくはd（3） 底部のみで、全形は不明瞭。全体的に摩滅し調整が明瞭ではないが、底部外面

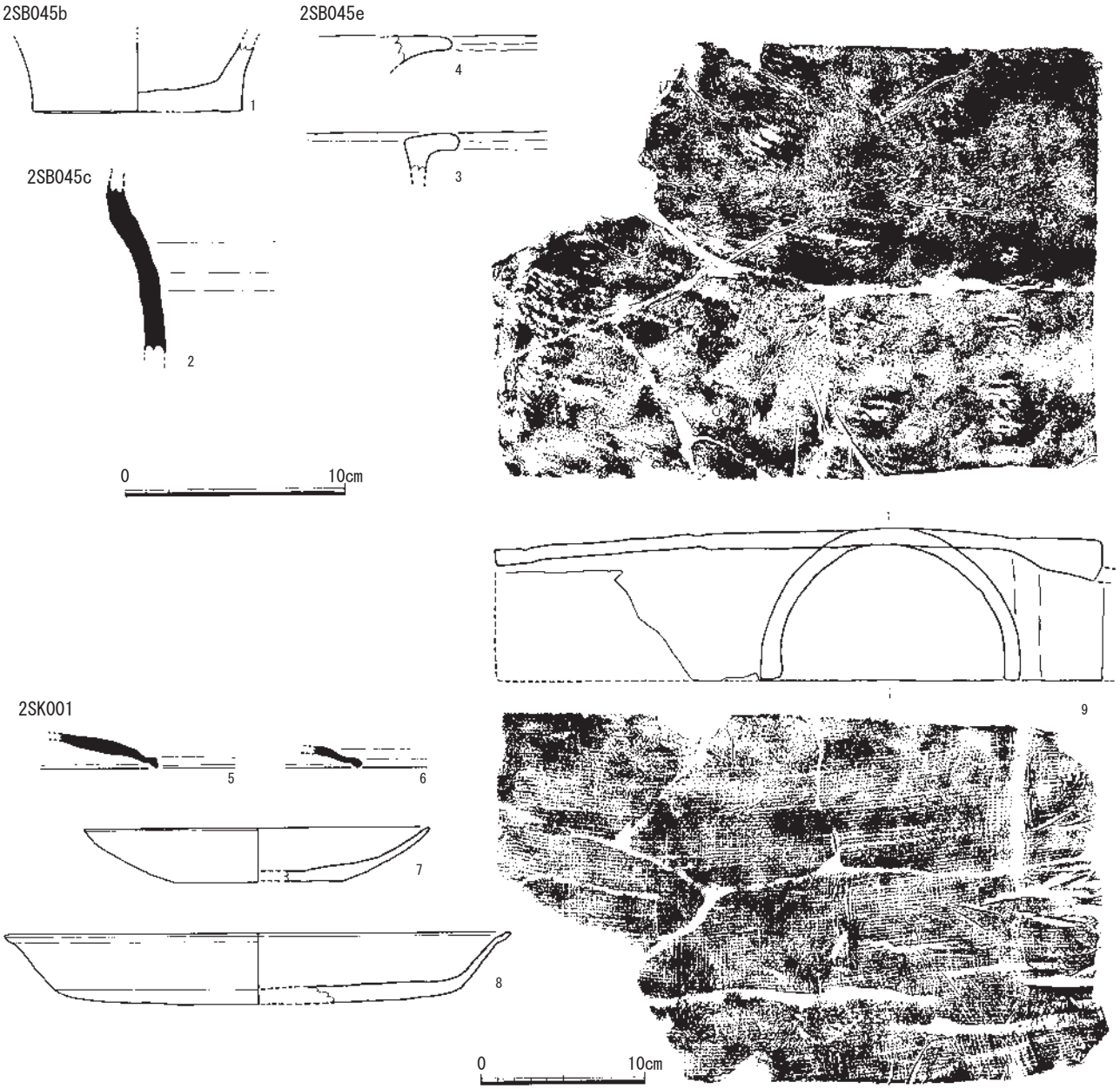


Fig.39　2SB045・2SK001 ①出土遺物実測図（1/3、9は1/4）

には板状圧痕が残る。色調は橙褐色を呈する。

黒色土器

甕（4）　A類。胎土は白色砂粒や茶色粒を多く含み、全体的に摩滅するが外面下半に煤が付着する。

瓦類

丸瓦(5)　焼成良好で、色調は白灰色を呈する。凹面は布目が残り、凸面は縄目叩きをナデ消している。

平瓦（6）　凹面は布目、凸面は縄目叩きを施す。側面はヘラケズリ調整。焼成良好で色調は白灰色を呈する。

2SK009 出土遺物（Fig.41）

須恵器

蓋3（7、8）　2点とも口縁端部は貧弱な断面三角形を成す。色調は灰白色を呈するが、8の端部は黒色を呈する。

蓋（9）　蓋の小片で、外面上半部に墨書があるが、文字の内容は不明である。

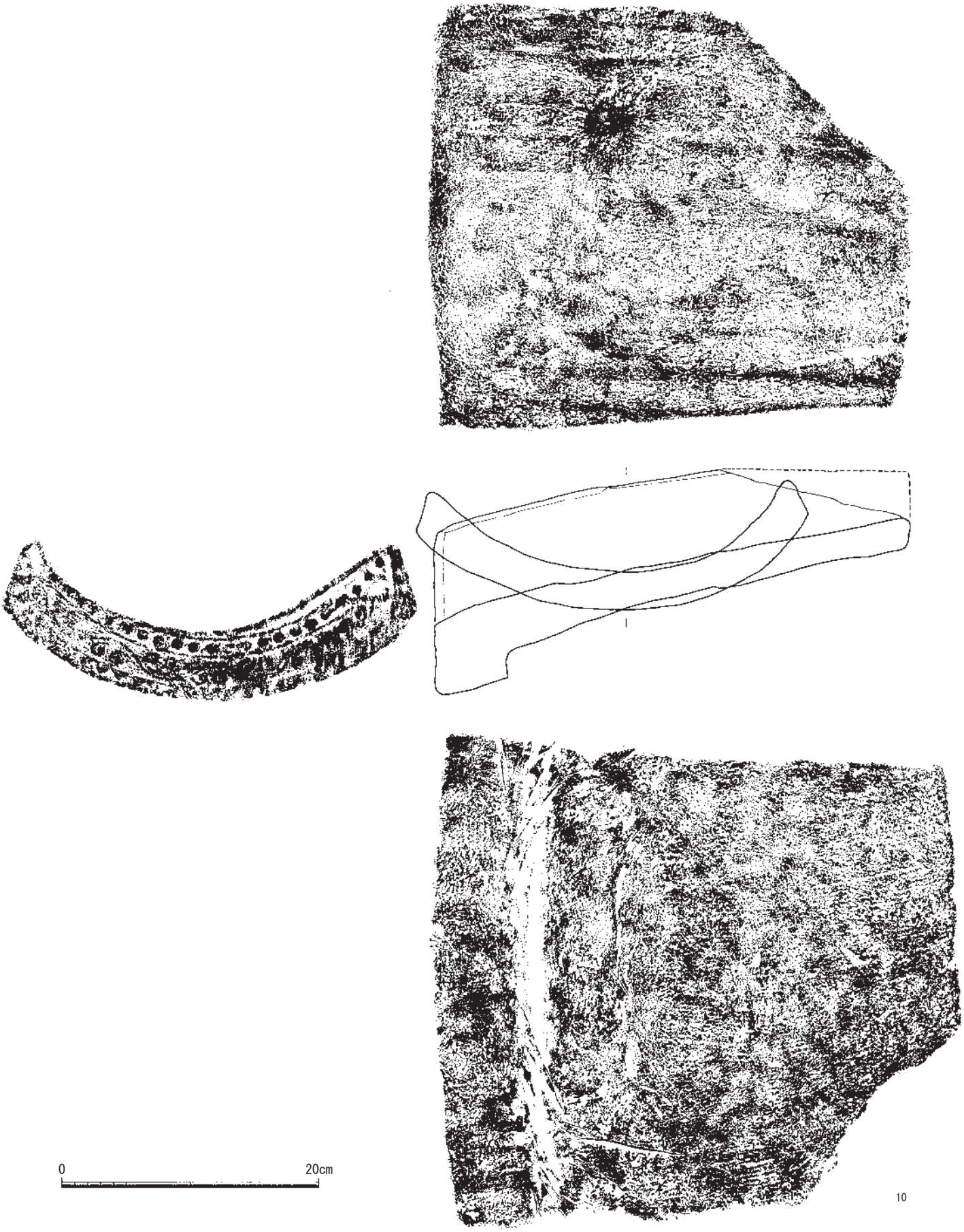


Fig.40　2SK001 ②出土遺物実測図（1/4）

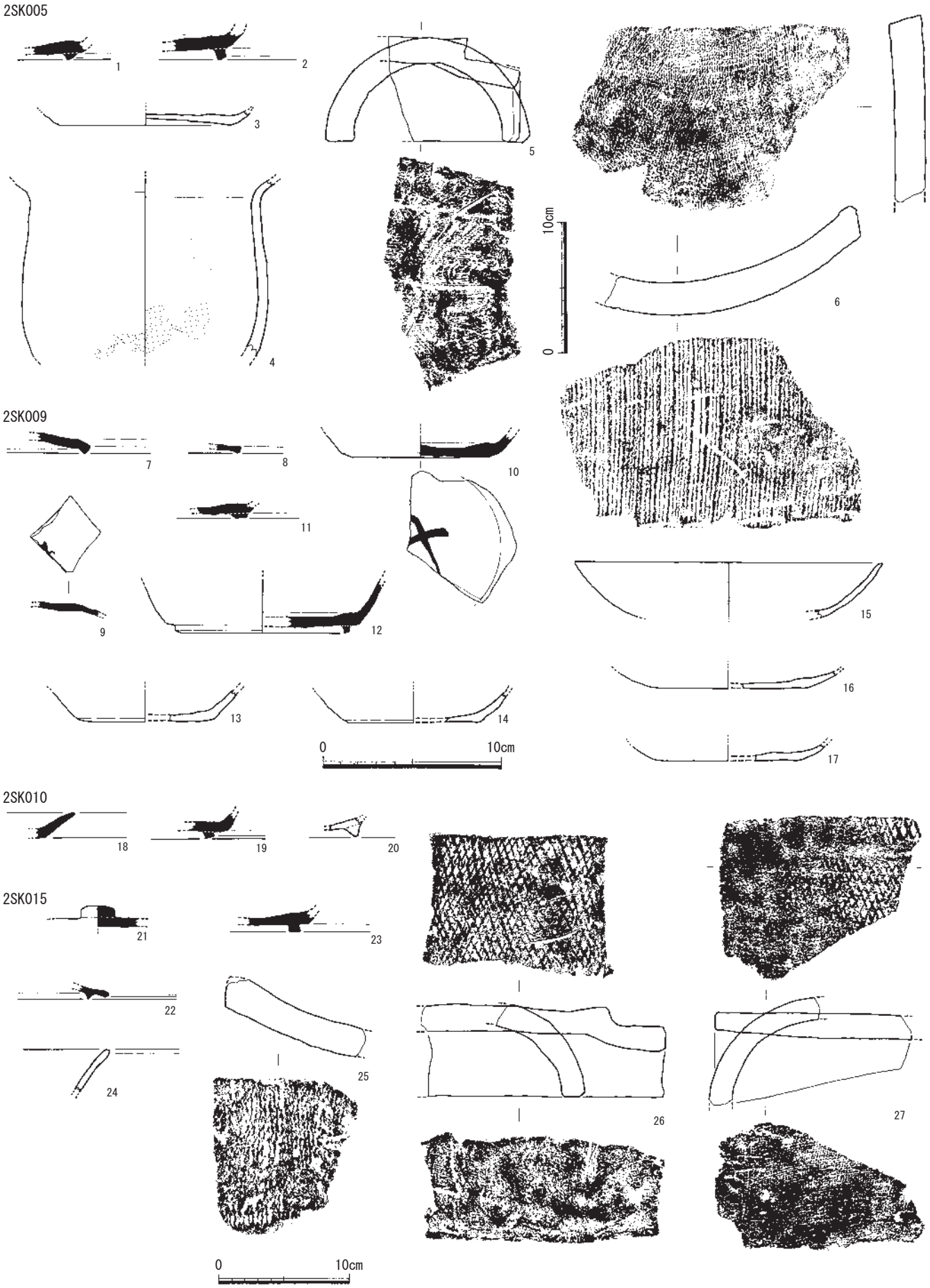


Fig.41　2SK005・009・010・015 出土遺物実測図（1/3、瓦は 1/4）

坏ａ（10）　復元底径 9.0 ㎝。色調は灰白色で外面底部は粗いナデ、その他は回転ナデ調整である。底面外面に墨書が薄く残るが、文字か記号かは不明である。

坏ｃ（11、12）　11 は低い高台を貼付する。12 は細い高台を貼付し、復元高台径 10.0 ㎝。底部内面は不定方向のナデ、外面はナデ、その他は回転ナデ調整。

土師器

坏ａ（13、14）　2 点とも底部は平坦で、体部と底部境は若干丸味がある。13 は復元底径 8.0 ㎝。色調は黄白色を呈する。14 は復元底径 8.0 ㎝。色調は橙黄色を呈する。

坏ｄ（15 ～ 17）　3 点とも色調は橙色や暗橙色を呈する。15 は復元口径 17.6 ㎝。内外面にミガキａが残る。16 は復元底径 9.0 ㎝。底部は回転ヘラケズリである。17 は復元底径 8.5 ㎝。底部は回転ヘラケズリである。

2SK010 出土遺物（Fig.41）

須恵器

皿（18）　器高 1.5 ㎝で、色調は灰色で、口縁端部は黒色を呈する。

坏ｃ（19）　若干潰れた高台を貼付する。色調は暗灰色を呈する。

土師器

椀ｃ（20）　小片で摩滅が目立ち調整不明である。色調は白黄色を呈する。

2SK015 出土遺物（Fig.41）

須恵器

蓋ｃ（21）　ボタン状のツマミを貼付する。

蓋１（22）　焼成良好で色調は灰色を呈する。内外面とも回転ナデ調整。

坏ｃ（23）　断面方形の高台を貼付し、内外面とも回転ナデ調整である。

土師器

坏（24）　内外面とも回転ナデ調整。色調は白黄色を呈する。

瓦類

平瓦（25）　焼成が若干不良で摩滅が目立つが、凸面は縄目叩きを施し、側面はヘラ切りである。

丸瓦（26、27）　2 点とも凸面に小さな格子叩きを施す。凹面は布目が残る。焼成は良好で淡灰色などを呈する。

井戸

2SE020 掘り方と枠中出土遺物（Fig.42）

須恵器

坏ｃ（1、2）　1 は復元口径 14.2 ㎝、器高 3.0 ㎝、復元高台径 10.4 ㎝。底部端に低い高台を貼付する。色調は灰色を呈する。2 は復元高台径 7.8 ㎝。色調は暗青灰色を呈する。

土師器

坏ｄ(3)　外面は回転ヘラケズリ､内面はミガキａが施されている。焼成良好で色調は橙黄色を呈する。

椀ｃ（4）　復元口径 17.4 ㎝、器高 5.3 ㎝、復元高台径 8.8 ㎝。直線的に外反する体部で、内外面とも回転ナデ調整で、色調は黒茶色を呈する。

移動式竈（5）　庇の前面部分で、内外面ともナデ調整で指頭圧痕が残り、部分的に煤が付着する。

瓦類

平瓦（6、7）　6 は凹面に布目、凸面には粗い縄目叩きが施されている。色調は黒灰色を呈する。7 は凹面には糸切りと布目痕跡が残る。凸面には縄目叩きを施す。側面はヘラ切りである。色調は暗灰色や

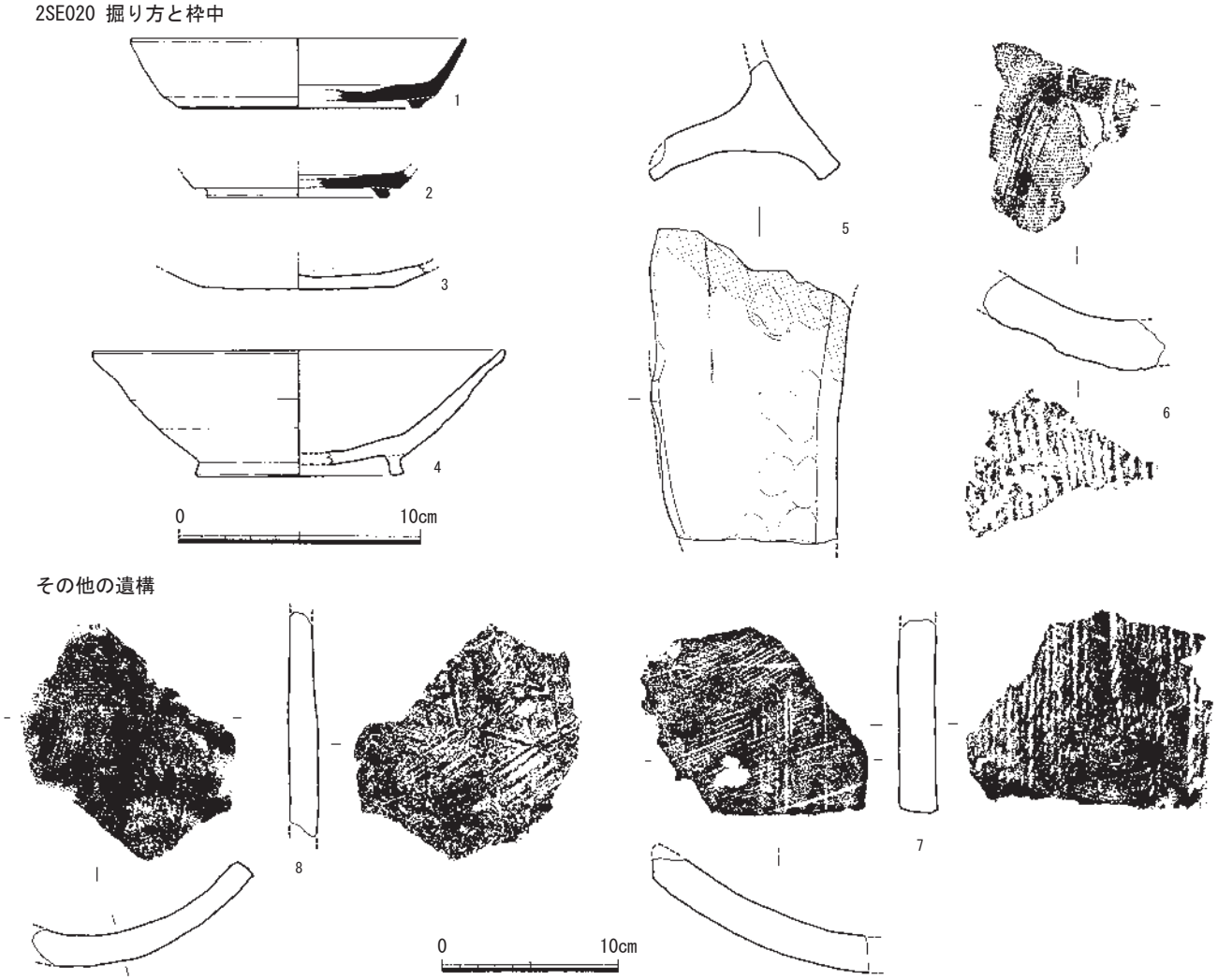


Fig.42　2SE020、その他の遺構出土遺物実測図（1/3、瓦は 1/4）

黒茶色を呈する。

その他

その他の遺構出土遺物（Fig.42）

瓦類

平瓦（8）　凸面は「未」の文字と平行叩きを施す。S-7 より出土。

(5) 小結

今回の調査で検出した遺構について、弥生土器は出土するものの、遺構に直接伴うものはなく、全て 8 世紀後半～ 9 世紀初頭にかけての遺構であった。掘立柱建物（2SB040・2SB045）と柵列（2SA050）については、出土遺物が僅かで、その遺物は弥生土器や須恵器であったが、時期を決定するには乏しい状況である。弥生土器については、周辺の調査で弥生中期の集落が確認されていることもあり、遺構に混入することはあり得る環境である。これらのことから、掘立柱建物と柵列についても、周囲の遺構と同じく 8 世紀後半～ 9 世紀初頭頃のものと推測される。

Fig. 43　第２次調査遺構略測図（1/200）

表.3　国分千足町遺跡第2次調査　遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	2SK001	土坑		8世紀後半～末	C7・8
2	2SA050a	ピット群	一部がS-50	古代	B7
3	2SA050b	ピット	S-50の一部	古代	B7
4		ピット			C7
5	2SK005	土坑		8世紀末前後	E3
6	2SB045a	ピット群	一部がS-45	奈良時代	D6・7
7		攪乱	湿抜き	近代～	A～G、3～5
8		ピット群		奈良時代	D4
9	2SK009	土坑		9世紀初頭	F6
10	2SK010	土坑		平安初期	F4
11		ピット		古墳時代以降	F7
12		ピット群		古代	F5・6
13		ピット		古代	H6
14		ピット		古代	H7
15	2SK015	土坑		平安初期	D4
16	2SB045b	ピット	S-45の一部		E6
17		ピット	暗褐灰色土、礫少し含む		E6
18	2SB045c	ピット	S-45の一部	古墳時代以降	F6
19	2SA050d	ピット	S-50の一部		D7
20	2SE020	井戸		8世紀後半～末頃	I6
21	2SA050c	ピット	S-50の一部		C7
22	2SB040b	ピット	S-40の一部		B6
23	2SB040a	ピット	S-40の一部		B6
24	2SB040e	ピット	S-40の一部		B5
25		ピット		奈良時代	H4
26	2SB040f	ピット	S-40の一部		B5
27	2SB045e	ピット	S-45の一部		F5
28		ピット			E5
29	2SB045f	ピット	S-45の一部		E5
31		ピット			D5
32	2SB045g	ピット	S-45の一部		D5
40	2SB040	掘立柱建物		8世紀後半～9世紀初？	A～C.5・6
45	2SB045	掘立柱建物		8世紀後半～9世紀初？	D～F.5・6
50	2SA050	柵列	S-2.3.19.21	8世紀後半～9世紀初？	B～D7

表.4　国分千足町遺跡第2次調査　出土遺物一覧表

S-1

須恵器	蓋3、破片
土師器	蓋×皿?、皿a、坏d、甕、破片
瓦類	丸瓦(縄消し)、軒平瓦

S-2

須恵器	坏
瓦類	平瓦(格子)

S-3

須恵器	壺?
土師器	破片
瓦類	平瓦、丸瓦

S-4

石製品	砥石?

S-5

須恵器	坏c、甕、壺、破片
土師器	坏、坏a×d、甕
黒色土器A類	椀、甕
瓦類	平瓦(縄目、格子、無文)、丸瓦(縄消し)

S-6

須恵器	蓋3、坏蓋、破片
土師器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-7

須恵器	蓋、坏a、坏c、甕、鉢?
肥前系磁器	椀
国産陶器	土管、土瓶
弥生土器	甕
瓦類	平瓦(縄目、格子、無文)、丸瓦(格子、無文)

S-8

須恵器	蓋3、甕
瓦類	破片

S-9

須恵器	蓋3、坏、坏a、坏c、甕、蓋(墨書)
土師器	坏a、坏d、甕
瓦類	平瓦(縄目)

S-10

須恵器	蓋、坏、坏c、皿、甕
土師器	蓋、椀c、甕、甕類
瓦類	破片
金属製品	鉱滓

S-11

土師器	甕

S-12

土師器	坏、甕類

S-13

土師器	高坏
瓦類	平瓦(無文)

S-14

須恵器	破片

S-15

須恵器	蓋1、蓋c、坏c、甕、壺?
土師器	坏、甕
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(格子、無文)

S-16

弥生土器	甕

S-18

須恵器	甕、破片
土師器	甕?
弥生土器	甕

S-20掘り方と枠中

須恵器	坏c、破片
土師器	坏、坏d、椀c、カマド
瓦類	平瓦(縄目)

S-20枠内

須恵器	破片
土師器	甕?

S-25

須恵器	坏c、破片

S-27

弥生土器	甕

暗灰色土+黄色土

須恵器	蓋3、高坏
土師器	蓋3、高坏
黒釉陶器	天目椀
瓦類	丸瓦(縄消し)

黄色土

須恵器	蓋3、蓋c、坏c、甕、壺、破片
土師器	破片
瓦類	平瓦(縄目、破片)、丸瓦(縄目、格子)

茶色土

須恵器	蓋3、蓋c、坏a、坏c、甕、鉢
土師器	坏a、椀c、甕
黒色土器A類	椀
瓦類	平瓦(縄目、格子、無文)、丸瓦(無文)
石製品	剥片(黒曜石)

3、国分千足町遺跡第3次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市国分三丁目4-28(584番8)で、共同住宅の基礎工事によって遺構に影響が及ぶため、発掘調査を実施することとなった。調査は緒方俊輔が担当し、狭川真一、山村信榮、塩地潤一が補佐し、1991(平成2)年6月24日～9月4日に実施した。開発対象面積は1000㎡で、調査面積は840㎡である。

(2) 基本層位

調査地付近は四王寺山の南西裾に広がる扇状地の標高38mに位置する。調査前の調査地は畑地で、南側約50mに大谷川があり西に流れる。

基本的な層位は、耕作土である灰色土、黄灰色土が20～30cmほど堆積し（以上が表土)、近世までの遺物を含む茶褐色の遺物包含層が、厚さ15cmほど堆積し遺構面を部分的に覆っていた。後述する住居跡や掘立柱建物の遺構の深さが10cm足らずの箇所もあり、耕作による土地改変により1mから50cm程度の削平を受けているものと考えられる。

(3) 検出遺構

掘立柱建物

3SB010（Fig.45）

東西3間、南北3間の方形プランで、検出長は東西5.7m、南北5.1m、方位はN-2° 40′ -Wを測る。柱穴eには直径20cmの一段深い穴が残存していた。掘方の残りは浅く10cm程度で、柱は柱穴eの所見から径20cm程度であったことが知られる。柱穴gから須恵器壺の高台が出土し8世紀以降の所産で、南北に長い3SB040とはセット関係にある建物と考えられる。

3SB040（Fig.46、Pla.7）

東西3間（南側は2間)、南北5間の南北に長い長方形プランで、検出長は5.2×12.8m、方位はN-1° 50′ -Wを測る。Kとℓを除く柱穴で直径20cmの柱痕跡が確認されている。柱穴の掘方は方形を呈し、aの柱痕跡の下には沈み込みを避けるため小礫が置かれている。筑前国分寺周辺では最大級の建物である。8世紀後半の3SK038に切られる。8世紀後半以降の所産である。

竪穴住居

3SI020（Fig.47、Pla.8）

調査区の南西側で検出された遺構で、南北6.2m、東西4.8m、深さ0.1mの南北に長い長方形プランを呈す。埋土は炭が多く混じる褐灰色土の上に焼土や木炭塊がのる。床面中央が方形に一段低く、壁際には幅15cmほどの壁溝が巡り、東側中央では2か所が中央に向かってL字形に張り出している。主柱は明確でなくa,d,cが候補として考えられる。eはL字に張り出す溝の間にあり、床面より20cmほど掘りくぼめられている。東側の壁際中央の埋土中より初期須恵器の高坏片が出土している。

3SI030（Fig.48、Pla.8）

調査区中央にあり南北6.2m、東西6.6m、深さ0.1mの方形プランを呈す。埋土は褐色土で壁際には幅10cmほどの壁溝が切れ切れに巡っている。中央に床の北側が赤く焼けた窪みhがあり炉跡の可能性がある。その周辺は方形の浅い窪みgがある。主柱はb,c,d,iの4本とみられる。床面で布留式新相段階の甕が出土している。

井戸

3SE002（Fig.49、Pla.9）

調査区中央付近で3SI030の東側を切る形で検出された遺構で、直径5m、深さ4mを測る。断面形は

Fig. 44　第 3 次調査遺構全体図（1/200）

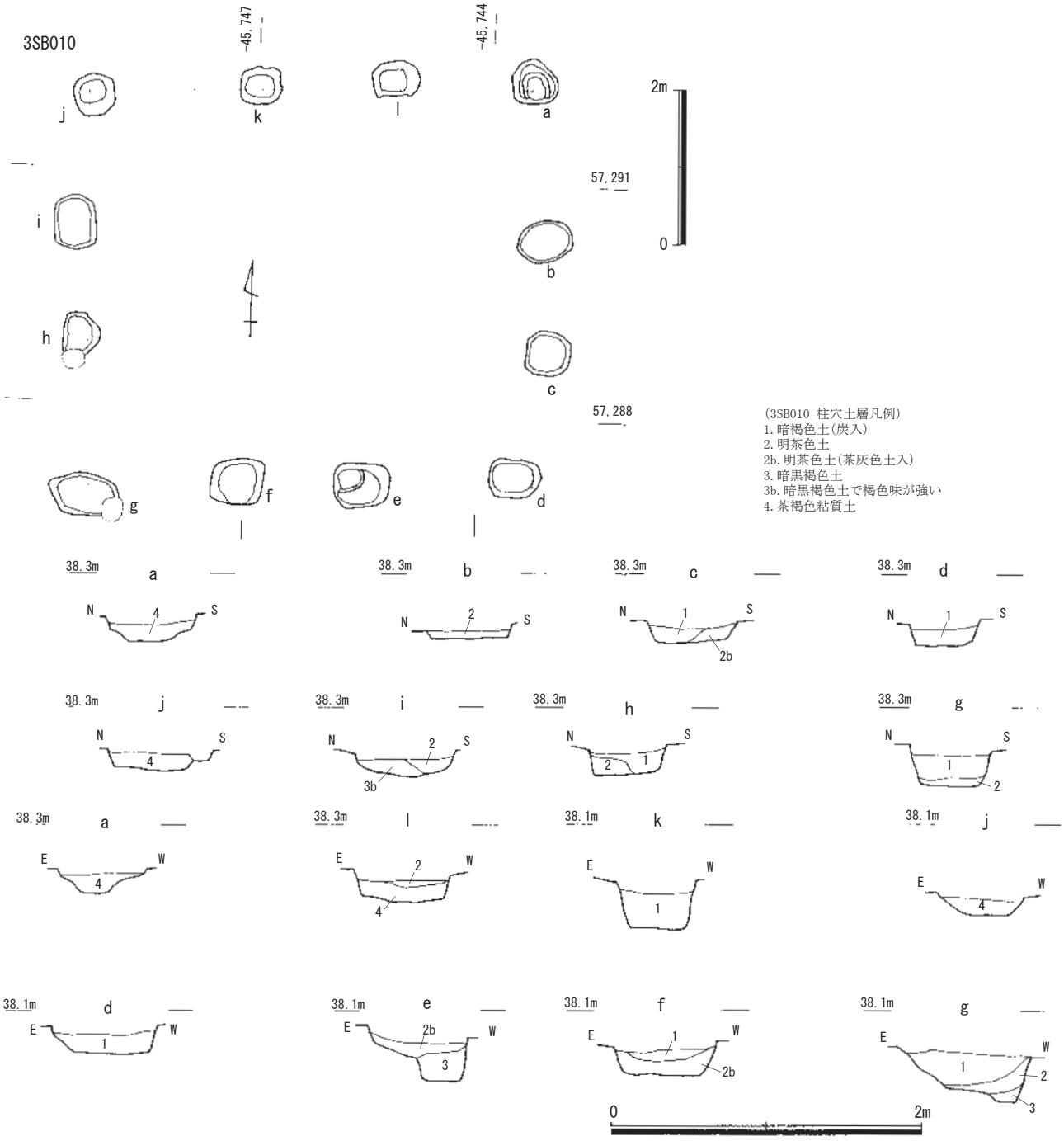


Fig.45　3SB010 遺構実測図（1/80、1/40）

上位が円形の漏斗状に開く形状で、下位は方形で深さ 50cm の段が付く。井戸枠などの木質は残っていなかった。8 世紀後半から 9 世紀初頭頃の遺物が出土している。検出された位置から掘立柱建物に関連する遺構と考えられる。

3SE036（Fig.49、Pla.9）

調査区南側で発見された遺構で、掘方の長径は 4.1m、井戸枠の内径は 0.5m、深さ 1.8m を測る。枠は下位が高さ 0.8m の円形の桶状の木製品で、上位は角亜礫の積み石によって構築されている。瓦を主体とする 9 世紀後半以降の遺物が出土している。

土坑

3SK003（Fig.48）

2.1×1.2m の東西に長い方形の遺構で、深さ 0.2m を測り、上位に褐色土、下位に淡褐色土があり、

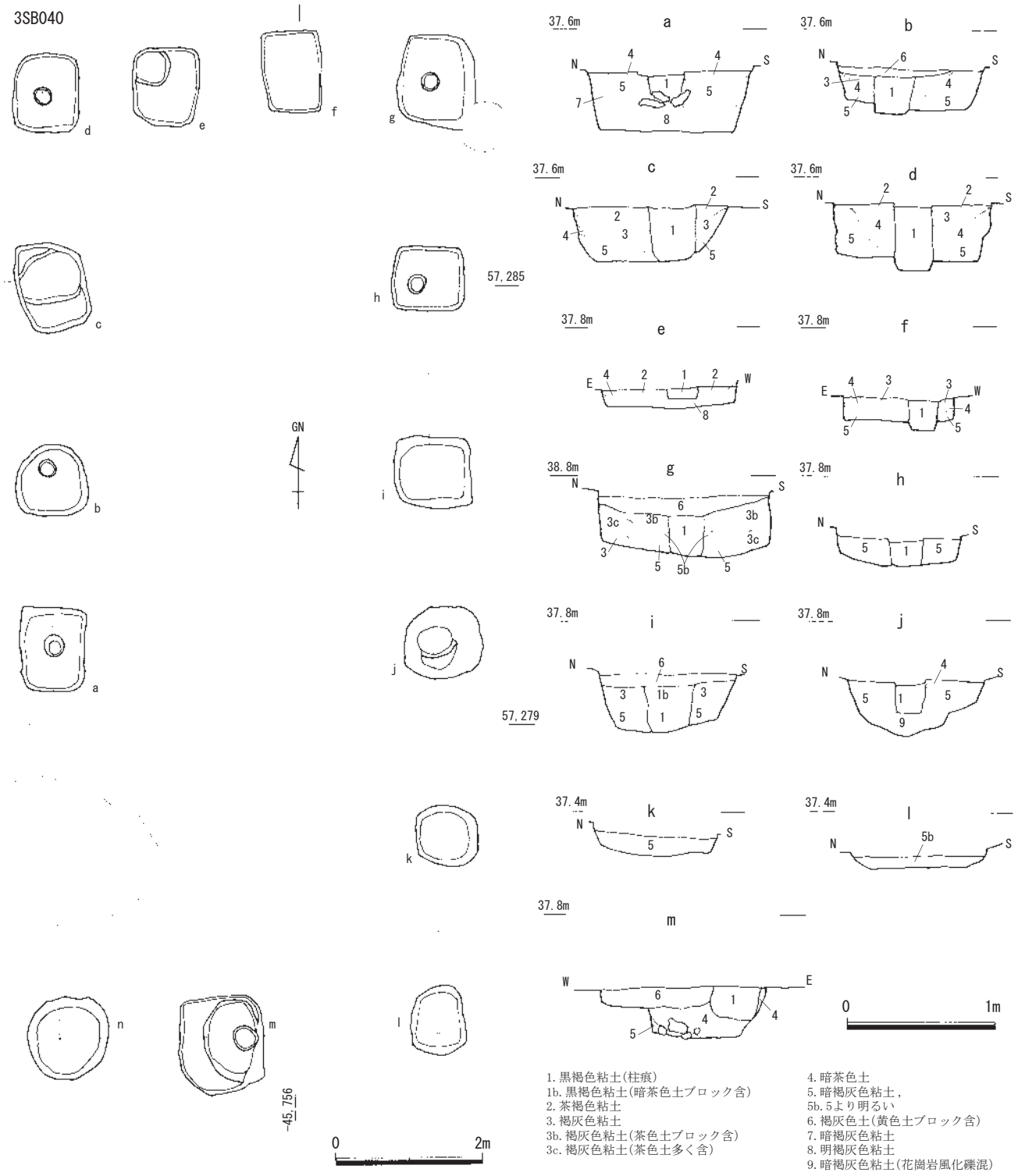


Fig. 46　3SB040 遺構実測図（1/80、1/40）

その間に薄く木炭が堆積する。

3SK035（Fig. 49）

調査区南側で 3SE036 を切る遺構として検出された。直径 1.6m、深さ 0.6m を測る。9 世紀後半以降の遺物が出土している。

3SK038（Fig. 48）

調査区南側の 3SB040 の西側で検出された平面形が楕円形を呈す遺構で、南北 1.8m、東西 2.3m 以上、

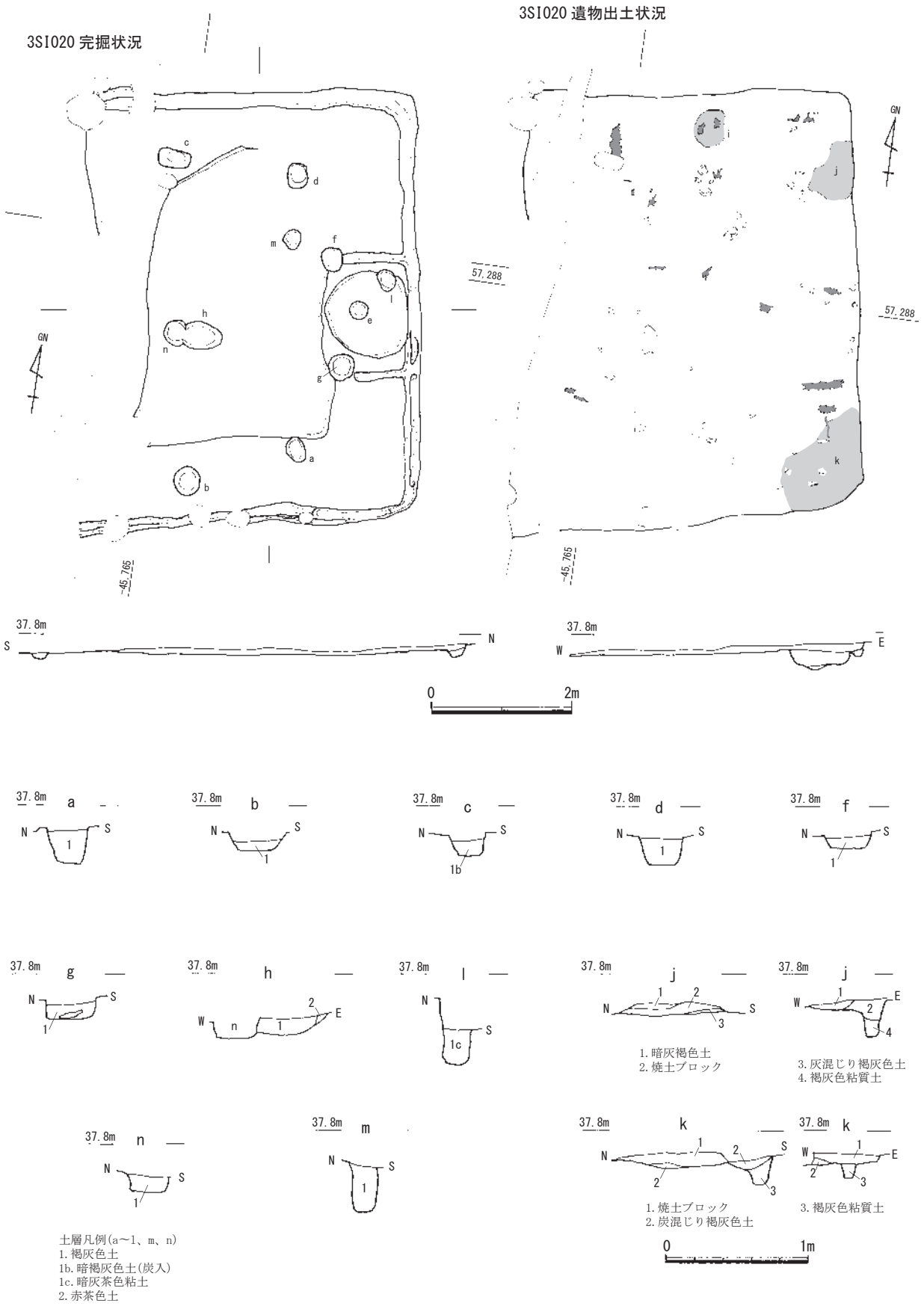


Fig.47　3SI020 遺構実測図（1/80、1/40）

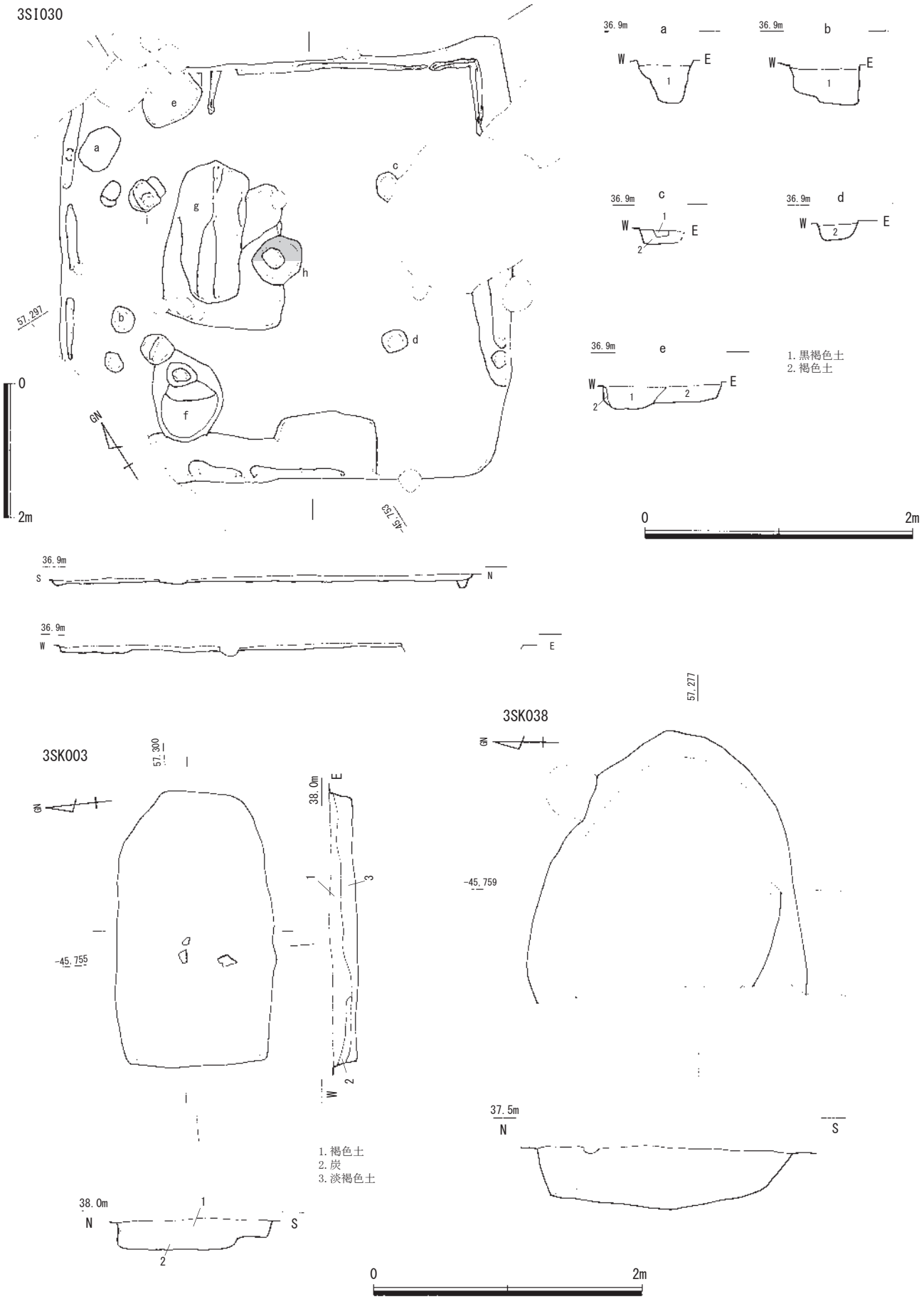


Fig.48　3SI030、3SK003・038 遺構実測図（1/80、1/40）

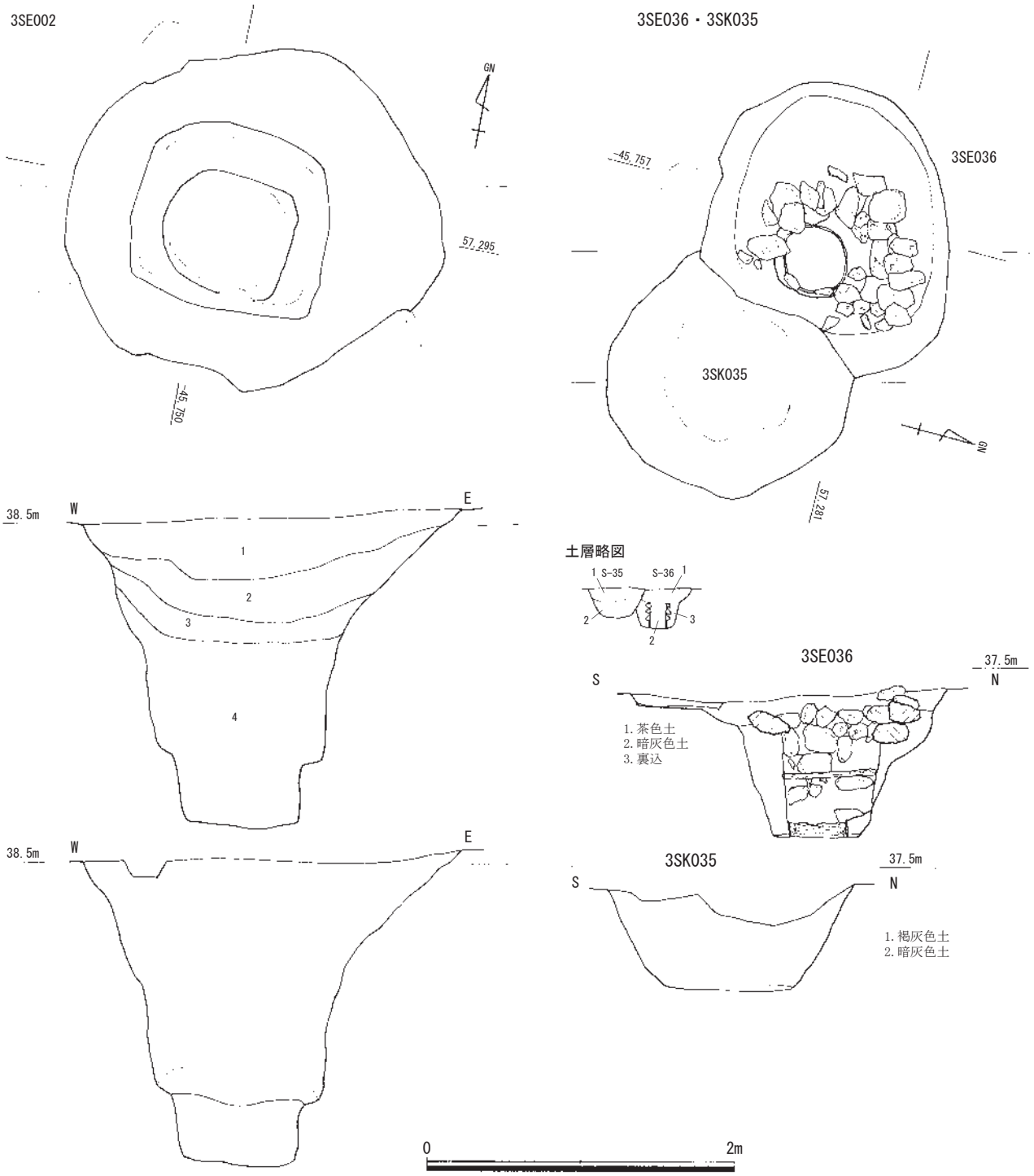


Fig.49　3SE002・036、3SK035 遺構実測図（1/40）

深さ 0.5m を測る。

(4) 出土遺物

掘立柱建物

3SB010 出土遺物（Fig.50）

須恵器

壺 a もしくは b (1)　高さ 1.5cm ほどの外に開き気味の高台片で、焼成は還元し硬質である。

3SB040c 出土遺物（Fig.50）

土製品

鞴羽口（2）　直径5cmほどに復元される鞴羽口の小片で、厚さは1.4cmを測る。内面は明るい橙色、芯は黄灰色、外面は灰色～黒色を呈す。小型品で小鍛冶炉や銅の溶解炉などの用途のものか。

3SB040m出土遺物（Fig.50）

須恵器

坏a（3）　底径8.0cmに復元されるもので、底部は切り離しのままで、削りなどの手間は省かれている。軟質で灰白色を呈す。8世紀後半の所産。

竪穴住居

3SI020e出土遺物（Fig.50、Pla.14）

土師器

高坏（4）　口径17.8cm、高さ13.0cm、底径13.6cmを測る。酸化焼成で橙褐色を呈す。坏部の外面下半部が緩い稜線を持って屈曲する。脚部は直線的に開き、端部が短く屈曲する。布留式土器の新相段階の所産と考えられる。

3SI020出土遺物（Fig.50、Pla.14）

須恵器

高坏（5）　無蓋式高坏の坏部片で外反せずに丸く屈曲する体部を持ち、外面には上位と中位に2条の低い突帯を表現する。最終的な焼成は還元焼成で、胎土は硬質で緻密。外面は暗灰色、芯はセピア色を呈す部分がある。須恵器であれば初期段階のもので、半島の陶質土器の可能性もある。

土師器

高坏（4）　口径17.0cmを測る。酸化焼成で橙褐色を呈す。坏部の外面下半部は緩い傾斜を持って屈曲する。坏部底に突状の突起を設け脚部と接合している。色調は黄橙色を呈す。

小型丸底壺（7～12）　9を除き口径が胴部径より大きな形状で、直線的に開く口縁部に球形の胴部が取り付く。7の口縁部は中央がやや膨らむ古式の様相を呈す。9と10はやや体部が厚く、内面のナデも指で掻き上げるような状況で新しい様相を持つ。色調は全体に赤みを帯びた黄橙色から明褐色を呈す。布留式の中相から新相段階の所産。

甕（13）　く字形に屈曲して緩く外反して開く口縁部の小片である。

金属製品

椀形滓（14）　厚さ1cm程度の鉄錆で覆われた小片で、外縁は直線とカーブを持つため平面形が小判型を呈すものと思われる。

3SI030出土遺物（Fig.50、Pla.14）

土師器

甕（16）　口径16.4cm、高さは現状で23.3cmを測る。口縁は体部最大径より小さく、く字形に屈曲し短く直線的に立ち上げる。体部外面には細く細かいハケ目が施され、内面は上方斜位にケズリが施される。体部中央付近では器壁の厚みは0.5cmほどである。体部は長胴だが器壁は厚めであり、布留式の中相から新相段階の所産といえる。

小型丸底壺（15）　ごく短く上方に立ち上がる口縁と丸底を呈す。内面は粘土紐を押しつぶしたような指押さえの跡があり、口縁内面にハケ目が横方向に見られる。器壁が厚く新しい傾向を示している。

井戸

3SE002暗黒色土出土遺物（Fig.51）

須恵器

蓋（1、2）　1は口径16.5cmに復元され、口縁端部が三角形を呈す。2は環状のツマミが付くbタイ

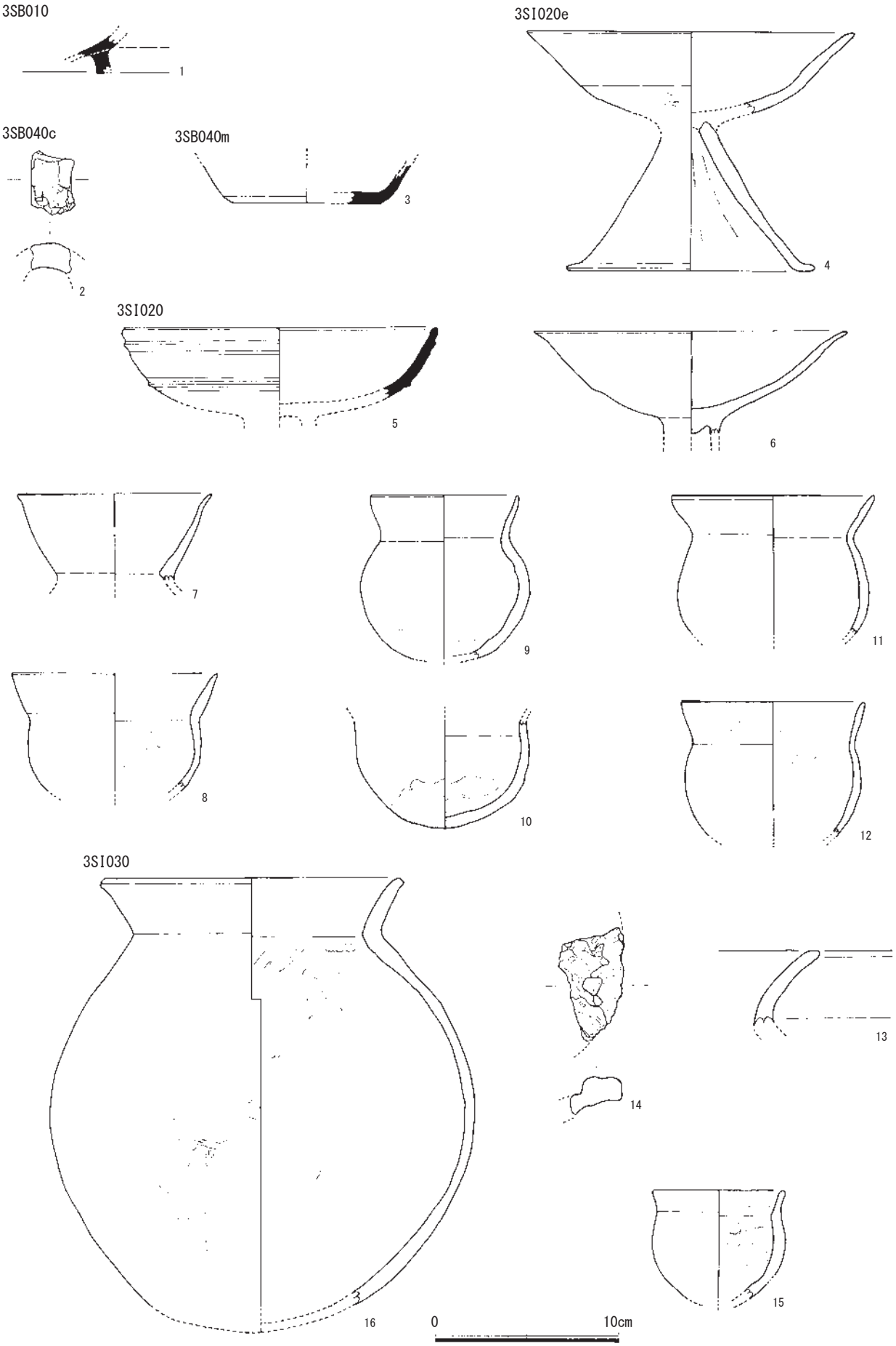


Fig.50　3SB010・040、3SI020・030 出土遺物実測図（1/3）

プのもので、内面は平滑になり墨の痕跡が見られ、転用硯であることがわかる。還元焼成で暗灰色を呈し硬質である。

坏（3）　3は13.6cmに復元され、大きく開きながら開く形状の口縁を持つ。8世紀でも後半の新しい傾向のものと言える。還元焼成で灰色を呈し硬質である。

平瓶（4）　口径3.4cm、器高7.6cm、底径4.6cmとかなり小振りなミニュチュア製品である。そろばん玉形の胴部に直立した煙突状の口縁が中心を外した位置に付けられる。天井部にあった把手は欠損している。高台を付ける前に胴部下半は回転ヘラケズリを施しており、正規品の製法を忠実に模倣している。硬い還元焼成で灰色を呈す。

土師器

坏a（5、6）　5は器高12.8cm、高さ3.8cm、底径7.6cmを測り、底部はやや丸底傾向で口縁端部はやや外に開く。淡い橙褐色を呈す。6は白みを帯びた褐色を呈し、底部は丸底傾向のもの。内外面に墨痕があり、外面は複数が重複するようだが「介」の字が読み取れる。

坏d（7、8）　7は器高14.0cm、高さ3.3cm、底径7.5cmを測り、底部はやや丸底傾向で口縁端部はやや内反り気味。調整はナデのみでミガキを施さず、このタイプのものとしては新しい傾向を示す。色調は淡い橙褐色を呈す。8は底径8.6cmに復元され平底を呈す。

皿a（7）　緩く「く」字形に短く屈曲する口縁を持ち、底部外面は回転ヘラケズリを、内面には回転を利用したミガキaを施す。8世紀でも古式の傾向を示す。

椀c（10、11）　10は底径が11.2cmに復元され、外に開く高台が体部との境の底部外側に付けられる。11は径が7cm程に復元されるもので、外底部に墨書で異体字「本」の文字が見られる。色調は、10は白みを帯びた灰色、11は明るい橙色を呈す。

鉢b（12）　口縁端部が短く緩く屈曲して開く形状もので、明るい橙色を呈す。

甕a（13）　く字形に屈曲して開く口縁を持ち、内面は斜位のケズリが施される。灰褐色を呈す。

黒色土器A類

皿a（14）　口径14cm、器高2.5cm、底径6.9cmを測る。薄く端正な作りで、口縁端部が若干屈曲して開く形状で、内面には手持ちの細直線状のミガキが施される。

椀もしくは坏（15）　直線的に開く口縁を持つ。内面にミガキbが施される。

土製品

鋳型（16）　内側は極めの細かい砂状の面となり、外面は粗い土を張り合わせたような状態となる。内面が製品表面側で曲面となっている。

石製品

被熱痕跡のある石（17）　花崗岩礫で表面に帯状に煤が付着している。

3SE002暗茶色土出土遺物（Fig.52、PLa.14）

緑釉陶器

鉢（1）　黄色味を帯びた白色の精製された胎土で、薄い緑色を帯びた透明釉に、外面は濃緑色の釉が流れるように掛けられている。形状から鉢と考えられるが、三彩である可能性もある。

金属製品

鉄塊系遺物(2)　長さ4.3cm、幅1.8cm、厚さ1.5cmを測る。鉄錆に覆われた多面で棒状の形状を呈する。

3SE002暗褐色土出土遺物（Fig.52、Pla.14）

越州窯系青磁

椀(3)　端部がやや厚く丸みを持って内側に緩く反る口縁を持つ。黄白色のざらっとした胎土を持ち、

3SE002 暗黒色土

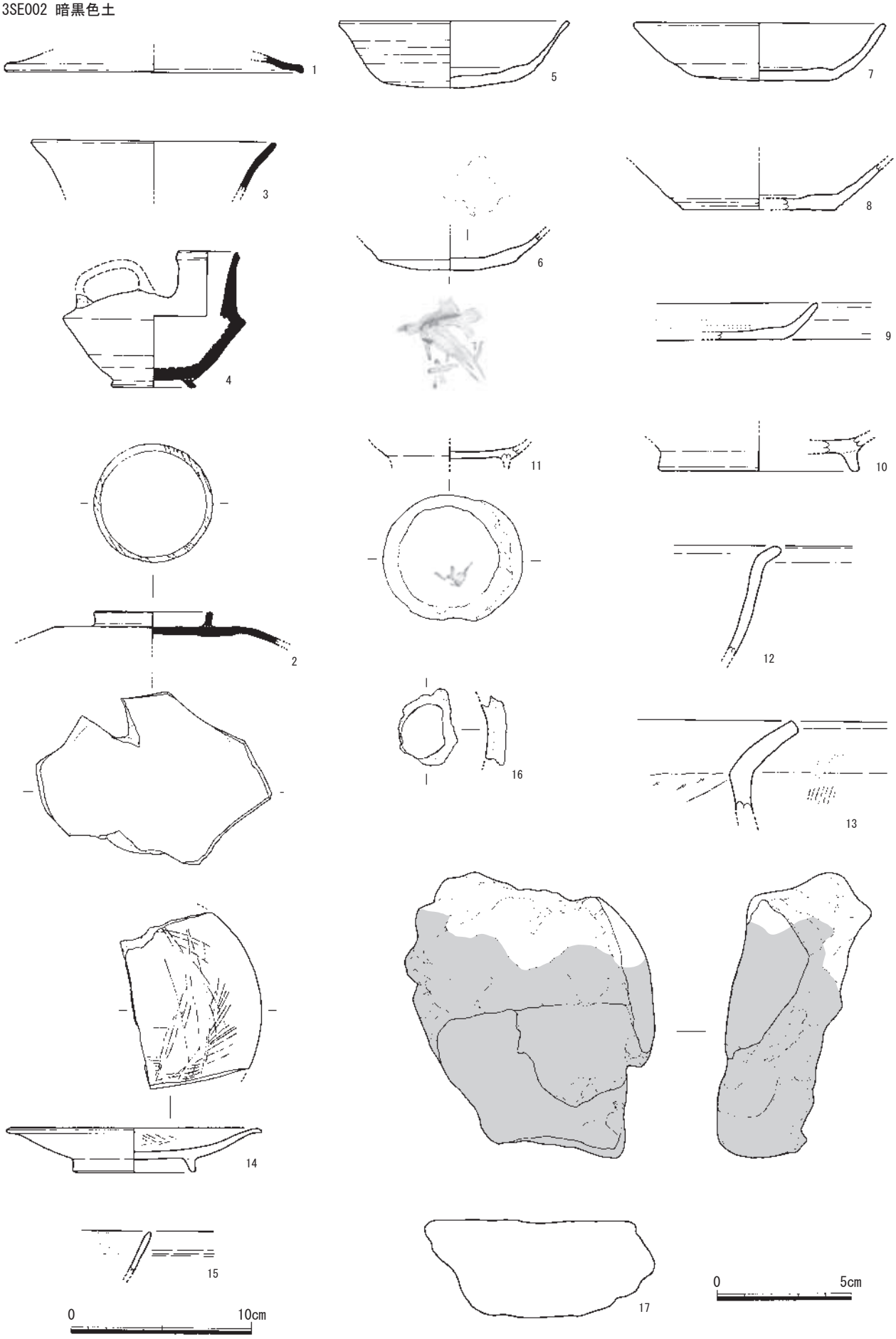


Fig.51　3SE002 暗黒色土出土遺物実測図（1/3、17 は 1/2）

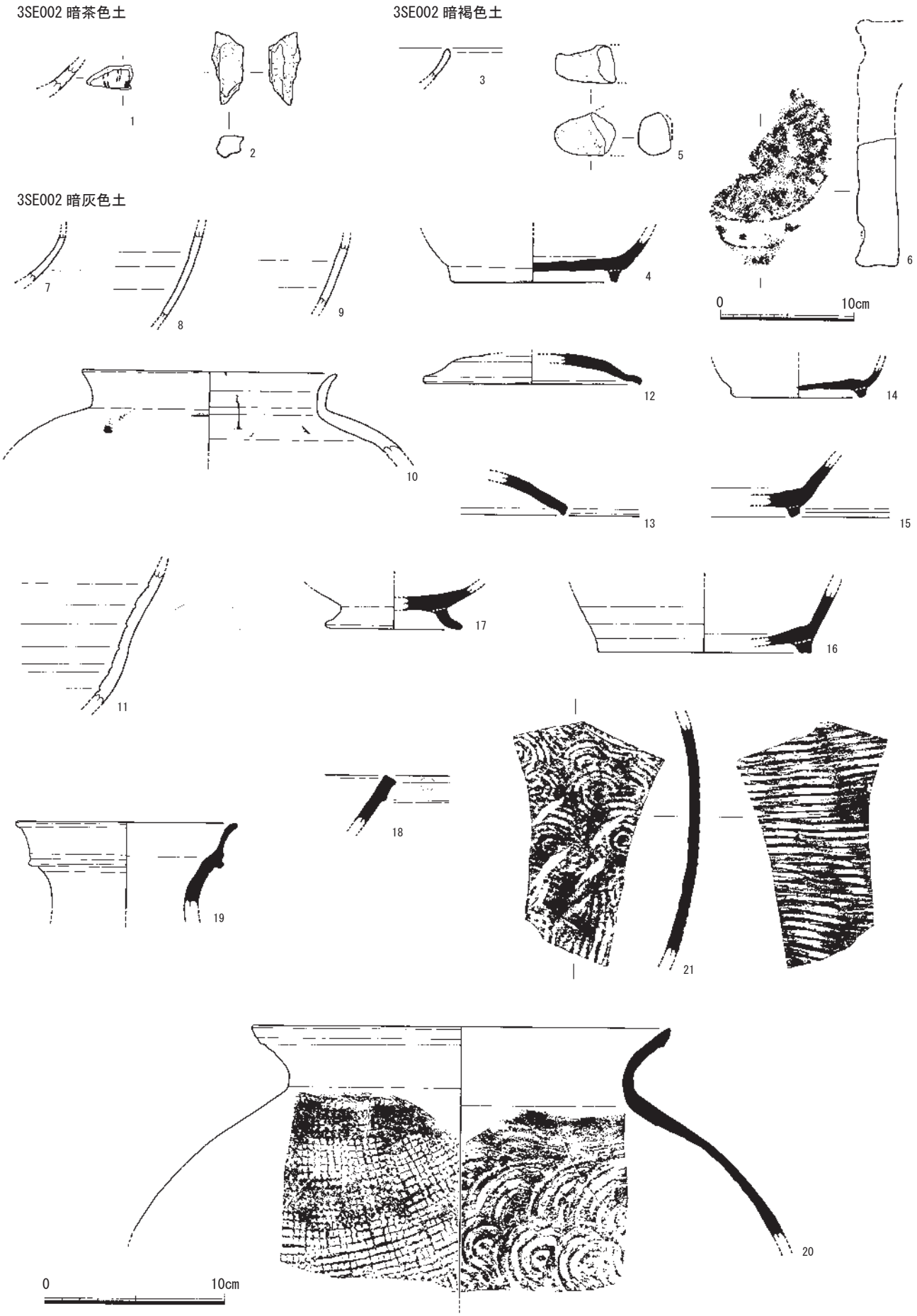


Fig.52　3SE002 暗茶色土・暗褐色土・暗灰色土①出土遺物実測図（1/3、6 は 1/4）

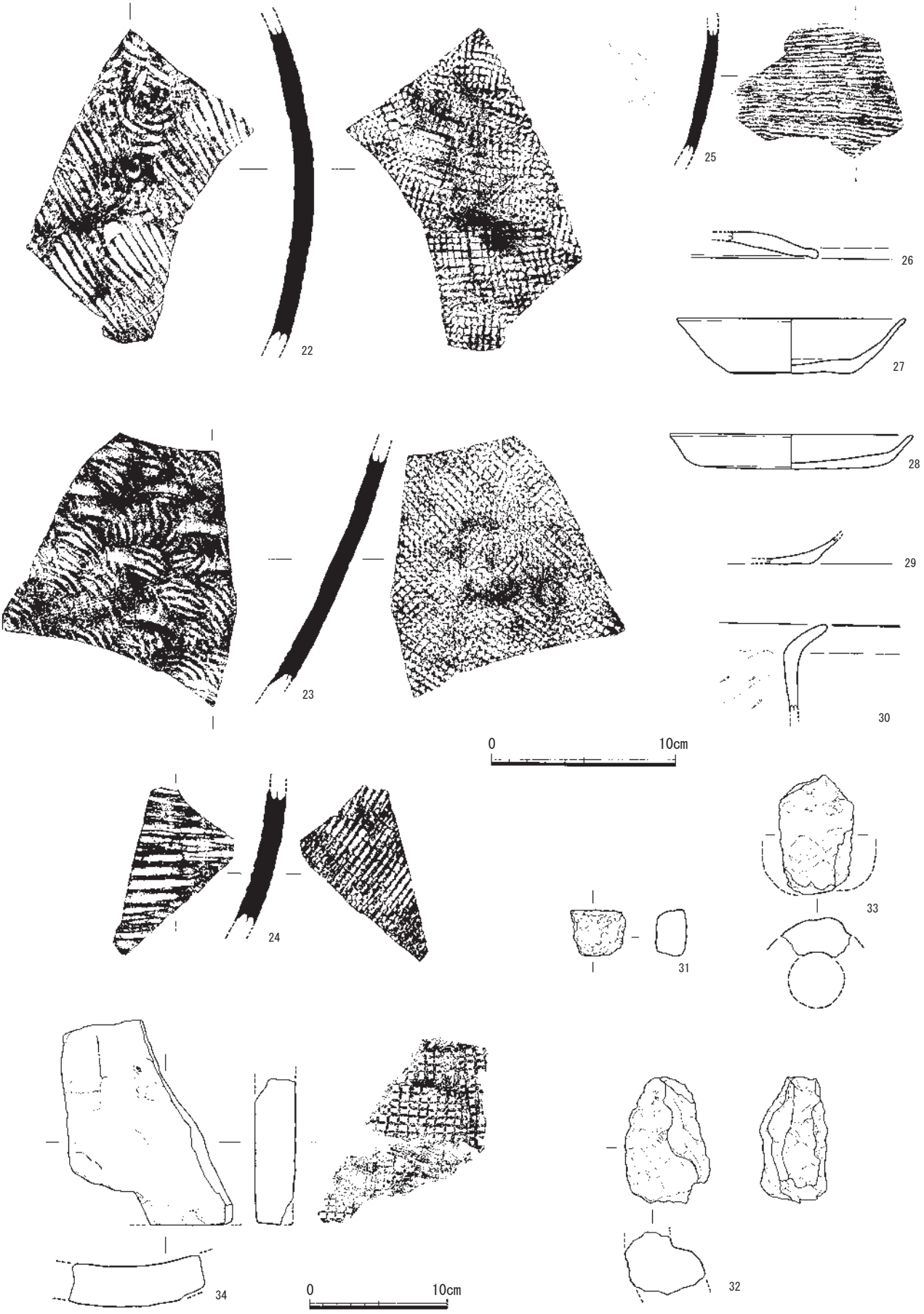


Fig.53　3SE002 暗灰色土②出土遺物実測図（1/3、34 は 1/4）

黄緑色の不透明な釉が施される。長沙窯系青磁の可能性もある。

土製品

鋳型（5）　長さ 3.5cm、幅 2.5cm の細かい砂が固まったような状態のもので、中子のような用途のものか。

瓦類

軒丸瓦（6）　外周が珠文帯の鴻臚館系の瓦当面を持つ。厚さ 3.4cm を測る。軟質な還元焼成で灰白色を呈す。

3SE002 暗灰色土出土遺物（Fig.52・53、Pla.14）

須恵器

蓋 3（12、13）　口縁端部が三角形を呈すもので、12 は口径 12.2cm、器高 1.8cm を測る。天井部に回転ヘラケズリを施す。両者とも硬質な還元焼成で明灰色を呈す。

坏 c（14 ～ 16）　高台が体部の外寄りに付けられた c4 タイプのもので、16 は底径が 12.2cm に復元される。どれも硬質な還元焼成で明灰色を呈す。

脚付坏(17)　短く急に外に開く脚を持つ。径は 7.6cm に復元される。硬質な還元焼成で暗灰色を呈す。

鉢（18）　口縁端部がくぼんだ方形状に厚い形状を呈する。硬質な還元焼成で白灰色を呈す。甕の口縁である可能性もある。

壺 d（19）　外面は稜線を持って屈曲する二重口縁を持つ。口径 12.4cm に復元される。硬質な焼成で芯は酸化、表面はおよそ還元化している。肥後荒尾地方の窯の産と考えられる。

甕（20 ～ 25）　硬質で 25 のみ表面が酸化しているが、他は還元焼成で暗灰色を呈す。調整は 21 と 25 が外面に平行刻みの、他は格子目のタタキ具を使用し、内面には同心円の青海波文様の当て具痕跡がある。23 は平行刻みの当て具が併用されている。

土師器

蓋（26）　緩く S 字状に屈曲する口縁端部を持つ。軟質でくすんだ茶褐色を呈する。

坏 a（27）　口径 12.6cm、器高 3.0cm、底径 7.0cm を測る。調整はナデのみでミガキはない。

皿 a（28、29）　29 は口径 12.8cm、器高 2.1cm、底径 10.8cm を測る。ナデ調整。

甕 a（30）　く字形に開く口縁に直線的に伸びる胴部を持つ。外面には縦方向のハケ目、内面は斜位のヘラケズリの痕跡が見られる。焼成は硬質で、淡い黄褐色を呈する。

緑釉陶器

壺（10）　肩の張る胴部から短く外反する口縁を持つ。精製された黄白色の胎土に緑色味を帯びた透明釉がかけられ、流し掛けの手法で濃緑色の釉を施す。

越州窯系青磁

椀（7）　精製された黄茶色の胎土に淡黄色の釉が掛けられる。長沙窯系の製品である可能性もある。

中国陶器

壺（8、9）　精製されざらざらした淡赤褐色の胎土に黒褐色の釉が掛けられる。肩衝の長胴になるタイプのものか。

無釉陶器

壺（11）　器壁が厚さ 0.6cm ほどのもので、外面は不定方向にナデを施し押圧で中央が若干窪み、内面は浅い横方向の沈線が入る。還元焼成で硬質、淡灰褐色を呈す。鴻臚館跡の平安期の出土品などに見られる、朝鮮半島系の須恵質の土器と思われる。

土製品

炉壁（31、32）　橙茶色の胎土に31は黒褐色の鉱物質の、32は黒褐色でガラス質の付着物が見られる。31は焼けた面が上面と側面の連続した2面であり、炉の上面と思われる。

鞴羽口(33)　直径6.5cmほどに復元される筒状の口の部分で、外面の先端ほど黒色の鉱物化しており、反対側は茶色の土師質になっている。

瓦類

平瓦（34）　厚さ3cmの黄灰色の酸化焼成の瓦で、幅5cm程の板状のタタキ具による長軸に対して横位の正格子のタタキを施す。格子目は水城跡東門側の瓦窯跡で出土した鴻臚館式期（奈良時代）のものに似ている。厚みがある点も含め平安期のものより古式のものと考えられる。

3SE036 裏込土出土遺物（Fig.54・55）

土師器

椀ｃ（1）　底径8.1cmを測り、灰白色を呈す。断面三角形の低い高台が付けられ、坏の底部はやや押し出し気味に膨らむ。Ⅷ期以降の所産か。

土製品

炉壁（2）　茶褐色を呈す厚さ3.1cmほどの板状のもので、片側は平坦な面になり褐色の付着物が見られる。炉の内側の断片と考えられる。

瓦類

軒丸瓦（3）　厚さ2.6cmほどの乳灰褐色を呈す軟質のもので、子葉を線で表現するタイプの瓦当面を持つ。九州歴史資料館分類230形式に相当し、大宰府政庁第Ⅲ期成立期（940年以降）の所用瓦である。

丸瓦（4～7）　1.8～2.2cmほどの厚みを持ち、還元焼成で灰色を呈し、4と7は軟質、他は硬質の焼成である。長軸方向に長い幅3cmほどの斜格子のタタキ目を持ち、大半が筑前国分寺跡南西角での第21-1次調査で分類したC2類に該当する。

平瓦（8、9）　2.0cmほどの厚みを持ち、還元焼成で暗灰色を呈し、9は軟質、8は硬質の焼成である。側辺は分割の切り込みが内側のみにあり、外側寄りは破面のままとなっている。長軸方向に長い幅4cmほどの斜格子のタタキ目を持ち、筑前国分寺跡第21-1次調査で分類したC2類に該当する。

3SE036 茶色土出土遺物（Fig.55）

須恵器

甕（8）　厚さ1.2cmほどで、還元焼成で硬質であり薄灰色を呈す。外面は並行刻みのタタキ目、内面には青海波文の当て具痕が残る。

土師器

椀ｃ（9）　底径8.4cmに復元され、丸底気味の底部に開く形状の高台が付く。白っぽい褐色を呈す。

瓦類

丸瓦（10、11）　厚さ1.5～2.1cmほどで、還元焼成で硬質であり暗青灰色を呈す。C2類に該当する斜格子のタタキ目を持つ。側辺小口には内側に分割のための切り目があり、外側は破面のままである。

平瓦（12～14）　厚さ2.2～2.5cmほどで、酸化気味の軟質な焼成であり、13は淡い橙色、他は白っぽい灰褐色を呈す。C2類に該当する斜格子のタタキ目を持つ。

3SE036 暗灰色土出土遺物（Fig.55、Pla.14）

土師器

坏ａ（15、16）　15は口径10.9cm、器高2.6cm、底径7.6cmを測る。平底で直線的に開く体部を持つ。口縁端部が帯状に黒色化する。16は口径11.3cm、器高2.8cm、底径7.8cmを測る。少し膨らみ気味の底でやや内湾気味に開く体部を持つ。

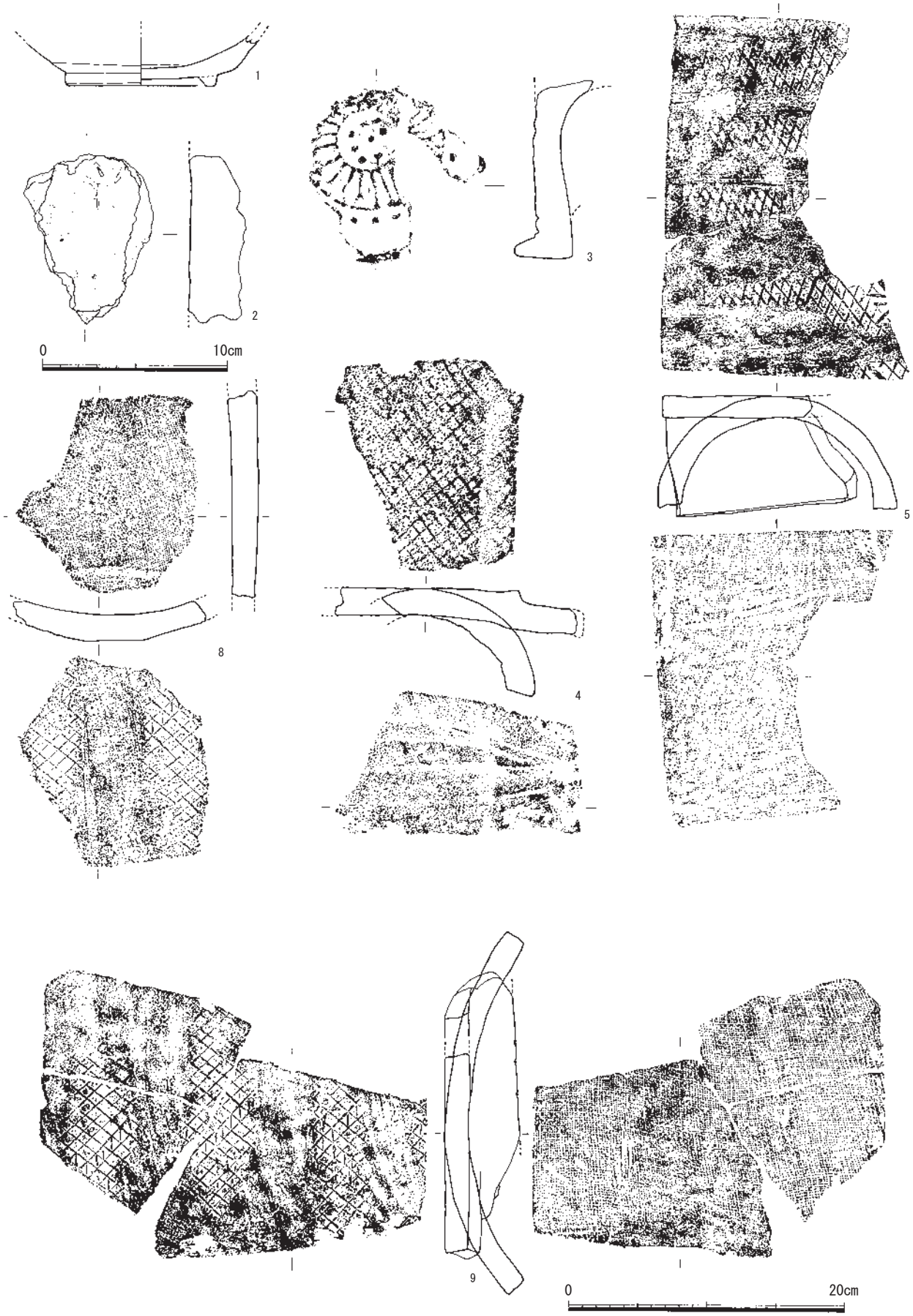


Fig.54　3SE036 裏込土①出土遺物実測図（1/3、瓦は 1/4）

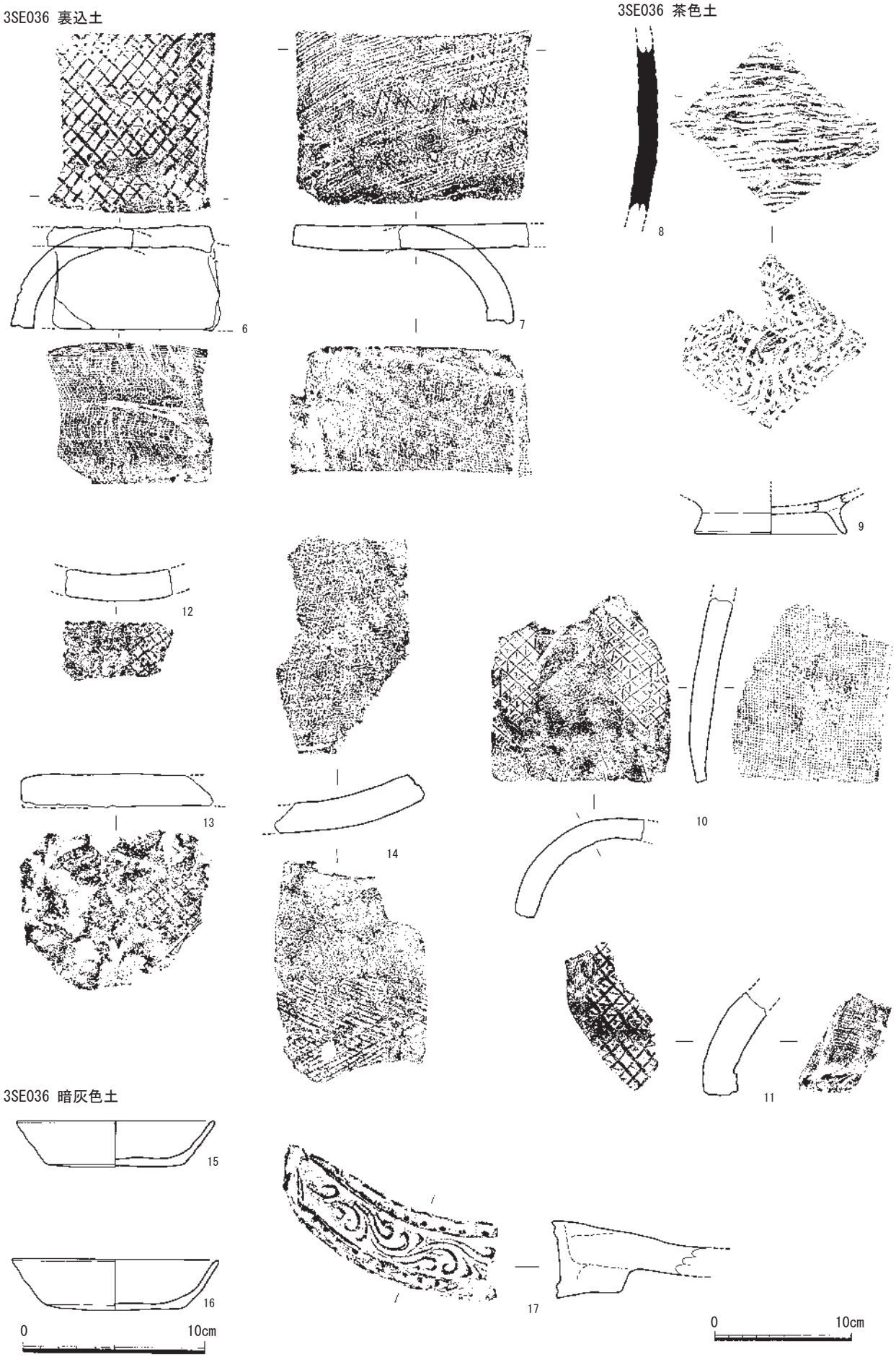


Fig.55　3SE036 裏込土②・茶色土・暗灰色土出土遺物実測図（1/3、瓦は 1/4）

瓦類

軒平瓦（17）　瓦当面の幅が5.8cmを測り、軟質な還元焼成で表面は黒味を帯びた灰色を呈す。瓦当面は上下の縁に珠文帯があり、中に左から右に流れる偏行唐草文が表現される。九州歴史資料館瓦分類の601A型式に当たる。

3SK003 褐色土出土遺物（Fig.56）

須恵器

蓋（1）　口縁端部は曖昧な三角形を呈す形状で、硬質な還元焼成で灰色を呈す。重ね焼きのためか口縁上面の縁の部分だけ帯状に暗灰色を呈す。

坏ｃ（2）　低平で幅広い高台を有す。軟質な還元焼成で黒味を帯びた灰色を呈す。

皿ａ（3）　器高2.0cmで底部からゆるく屈曲して直線的な体部につながる。硬質な還元焼成で明るい灰色を呈す。重ね焼きのためか口縁外面の縁の部分だけ帯状に暗灰色を呈す。

鉢ｂ（4）　底径10.6cmに復元され、体部外面から底部は回転ヘラケズリを施す。やや軟質な還元焼成で明るい灰色を呈す。

土師器

坏ｄ（5）　やや膨らむ底部から斜めに体部が開く形状で、底部外面は回転ヘラケズリを施す。酸化焼成で薄い橙色を呈す。

3SK035 暗灰色土出土遺物（Fig.56）

土師器

甕（8）　全体に丸くカーブしながら開き、端部が丸く処理された口縁を持つ。

黒色土器A類

椀ｃ（6、7）　6は高台径が7.8cmに復元され、丸底気味の底部に直線的に開く形状の高台が付く。7は高台径が8.0cmを測り、断面三角形の高台が付く。内底面は黒色化し外面は白味のある灰褐色を呈す。

瓦類

平瓦(9～12)　厚さ1.6～2.3cmで内面にはやや目の粗い布目が残る。硬質な還元焼成で灰色を呈す。C2類に該当する斜格子のタタキ目を持つ。10は「介」の字のある文字瓦である。

3SK035 褐灰色土出土遺物（Fig.56・57）

須恵器

甕（13）　厚さ0.9cmほどで、硬質な還元焼成で灰色を呈す。外面には格子目の叩きを、内面には平行刻み目の当て具痕が残る。

土師器

椀ｃ(14)　高台径は9.0cmに復元される。丸底気味の底部に先の丸い短い高台が付く。灰褐色を呈す。

甕（15）　体部に把手を付けた部分の破片で、内面に同心円の当て具痕が明瞭に残る。

瓦類

丸瓦（16）　厚さ1.5cmほどの還元焼成で硬質なもので明るい灰色を呈す。側辺の小口は内側のみに分割の切り込みの痕跡がある。C2類に該当する斜格子のタタキ目を持つ。

平瓦（17～21）　1.6cmから2.1cmほどの厚さのもので、17は酸化焼成で淡い橙色を呈し、他はやや軟質の還元焼成で白っぽい灰色を呈す。21は半分が酸化焼成で淡い橙色を呈す。20は内面の布の目が大きく新しい様相を呈す。C2類に該当する斜格子のタタキ目を持つが、17は二重格子目の叩き具を使用し新しい要素を持つ。

3SK038 出土遺物（Fig.57）

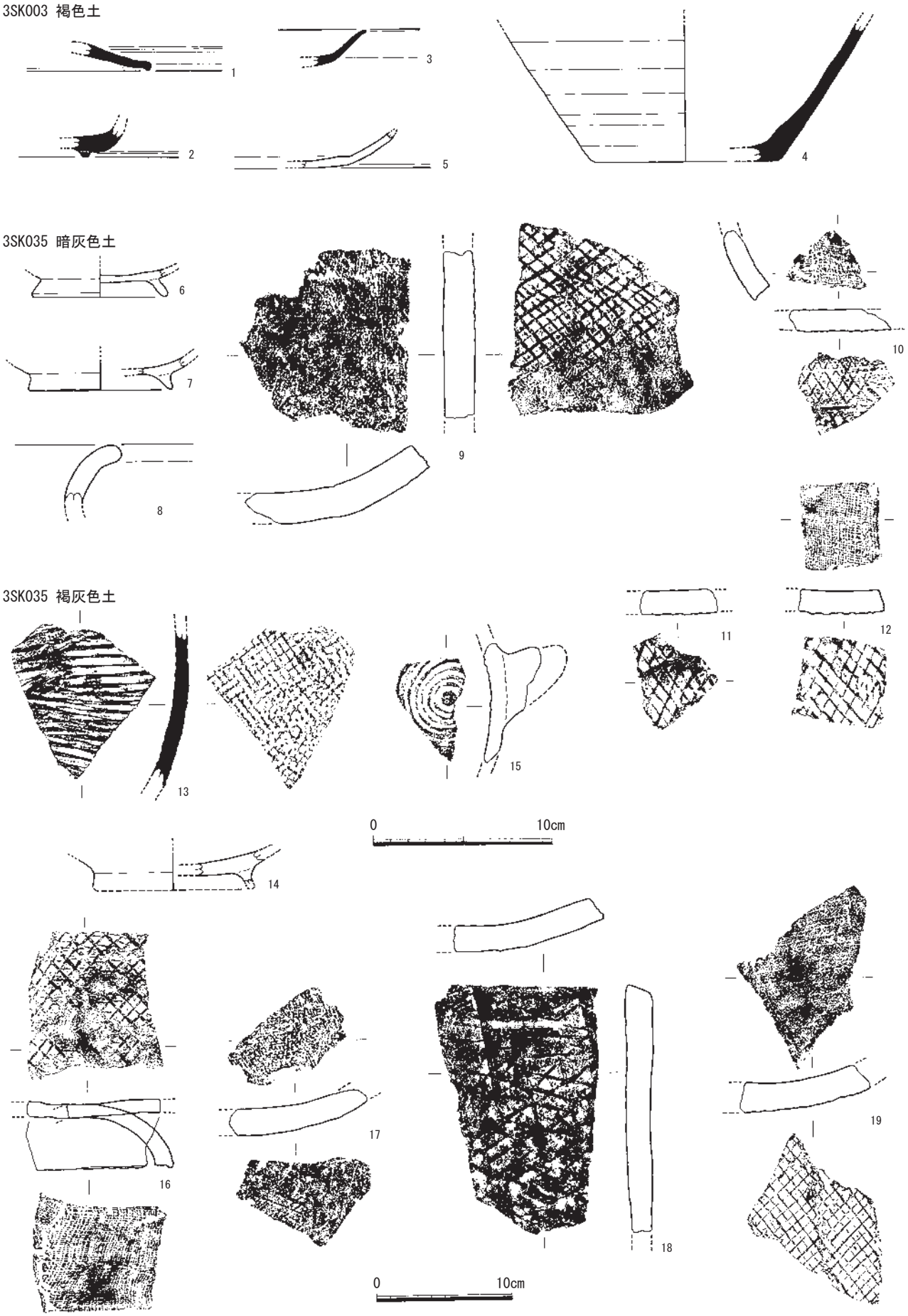


Fig.56　3SK003 褐色土・暗灰色土、3SK035 褐灰色土①出土遺物実測図（1/3、瓦は 1/4）

須恵器

蓋 c3（1 ～ 3）　中央部に欠損があるがナデの痕跡から全てつまみを有する c タイプの蓋である。天上部は回転台から切り離し後に粗くナデを施す。硬質な還元焼成で青味を帯びた灰色を呈す。1 は口径 17.8cm、器高 2.3cm を、2 は口径 17.8cm、器高 1.7cm、3 は口径 14.1cm、器高 1.7cm に復元される。

坏 c（4、5）　内側に寄った位置に角高台を付け、底部と体部の境にはケズリは施さないタイプの坏である。硬質な還元焼成で青味を帯びた灰色を呈す。1 は口径 13.7cm、器高 4.3cm、高台径 8.2cm に、2 は高台径 9.3cm に復元される。

土師器

皿 a（6）　平底でゆるく直線的に短く開く口縁を持つ。底部外面は回転ヘラケズリを、内面から体部外面には回転を利用したミガキ a を施す。口径 21.8cm、器高 1.9cm、高台径 18.2cm に復元される。酸化焼成で橙色を呈す。

甕(7)　ゆるいカーブを描いて開く形状の口縁を持つ。やや先に向かって薄くなる。淡い灰褐色を呈す。

金属製品

鉄塊系遺物（8）　長さ 5.5cm、幅 4.7cm、厚さ 4.0cm を測る。全体に茶褐色の鉄錆に覆われている。

3SD001 出土遺物（Fig.57）

瓦類

丸瓦（9、10）　1.8 ～ 2.0cm ほどの厚みを持ち、硬質で淡い灰色を呈す還元焼成の製品である。C2 類に該当する斜格子のタタキ目を持つ。

3SD015 出土遺物（Fig.57）

土師器

坏 a（11、12）　やや膨らみを持つ底部から直線的に開く口縁を持つ。軟質な酸化焼成で黄褐色を呈す。11 は口径 13.4cm、器高 3.6cm、底径 9.2cm。12 は口径 13.0cm、器高 3.6cm、底径 8.0cm を測る。

長沙窯系青磁

椀（13、14）　緻密で硬質な白灰色を呈す胎土を持ち、くすんだオリーブ色で若干光沢のある薄い釉を施す。高台はボタン状で中央部は抉り取って窪みとしている。接合しないが両者は同一個体である可能性がある。そうした場合、体部はゆるいカーブを描きながら内側に反る形状を呈す。

壺（15）　精製された硬質で灰色を呈す還元化した胎土を持ち、黒褐色のややムラのある釉を施す。肩衝の形状で口縁は短く若干のカーブを持って開く。内面の釉は口縁から肩口まで掛けられる。

中国陶器

甕（16）　肩が強く張る形状で、口縁は一旦垂直に立ちあがって、先端は短く三角形の形状で横に折れる形状を呈す。硬質な酸化焼成で胎土はザラザラで白色粒を含み、赤みの強い橙色を呈す。釉は暗緑灰色のものが外面と内面は口縁内側まで施されている。

石製品

チャート原石（17）　長さ 2.9cm、幅 2.7cm、厚さ 1.8cm を測る。赤褐色を呈す。関門層群に由来し人的に持ち込まれたもので、縄文時代の所産か。

3SX026 出土遺物（Fig.57）

金属製品

鉱滓（18）　長さ 4.8cm、幅 2.8cm、厚さ 2.5cm を測る。全体に多孔質で茶褐色の鉄錆に覆われている。

3SX033 出土遺物（Fig.58）

土製品

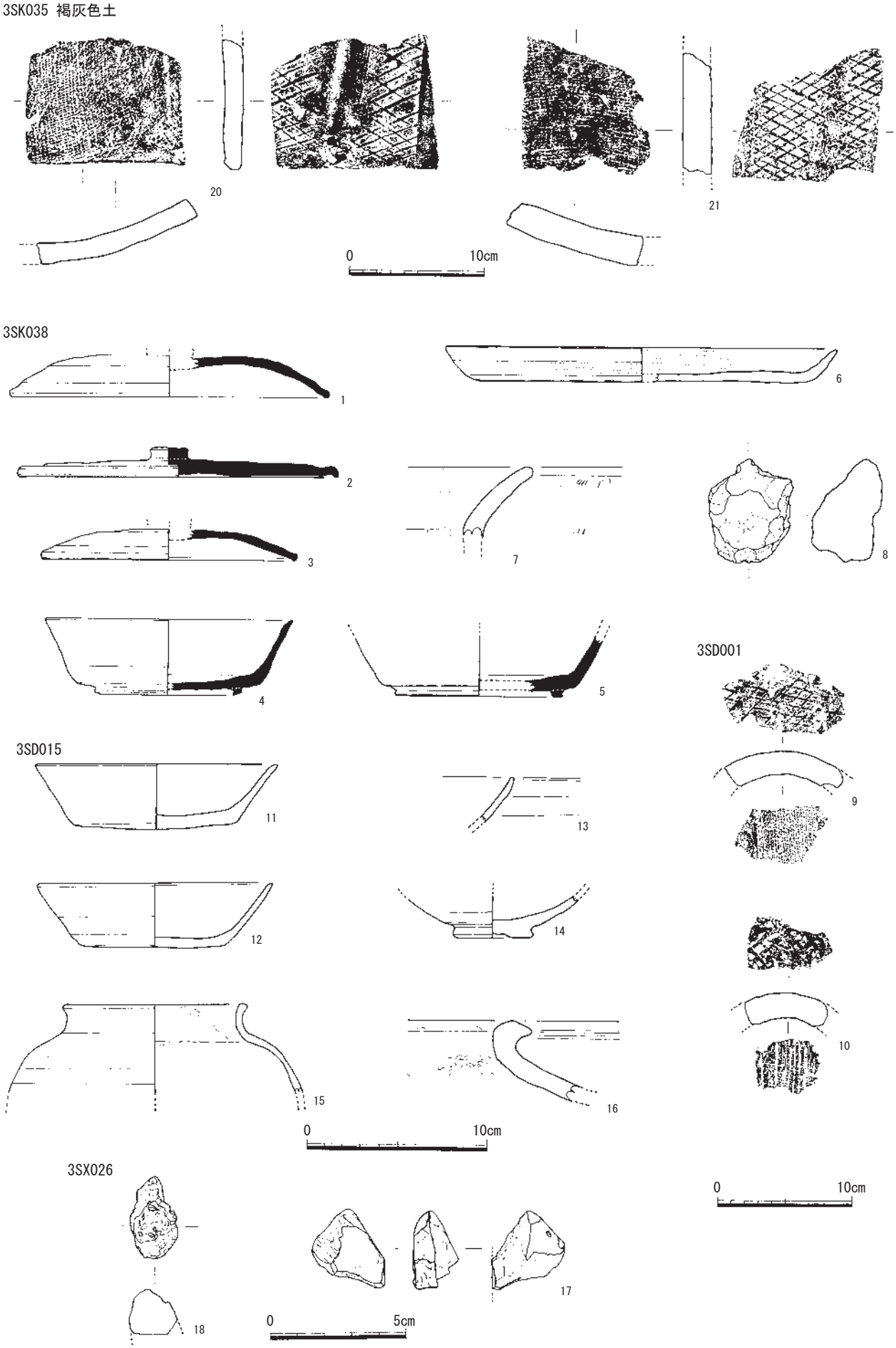


Fig.57　3SK035 褐灰色土②、3SK038、3SX026、3SD001・015 出土遺物実測図（1/3、17 は 1/2、瓦は 1/4）

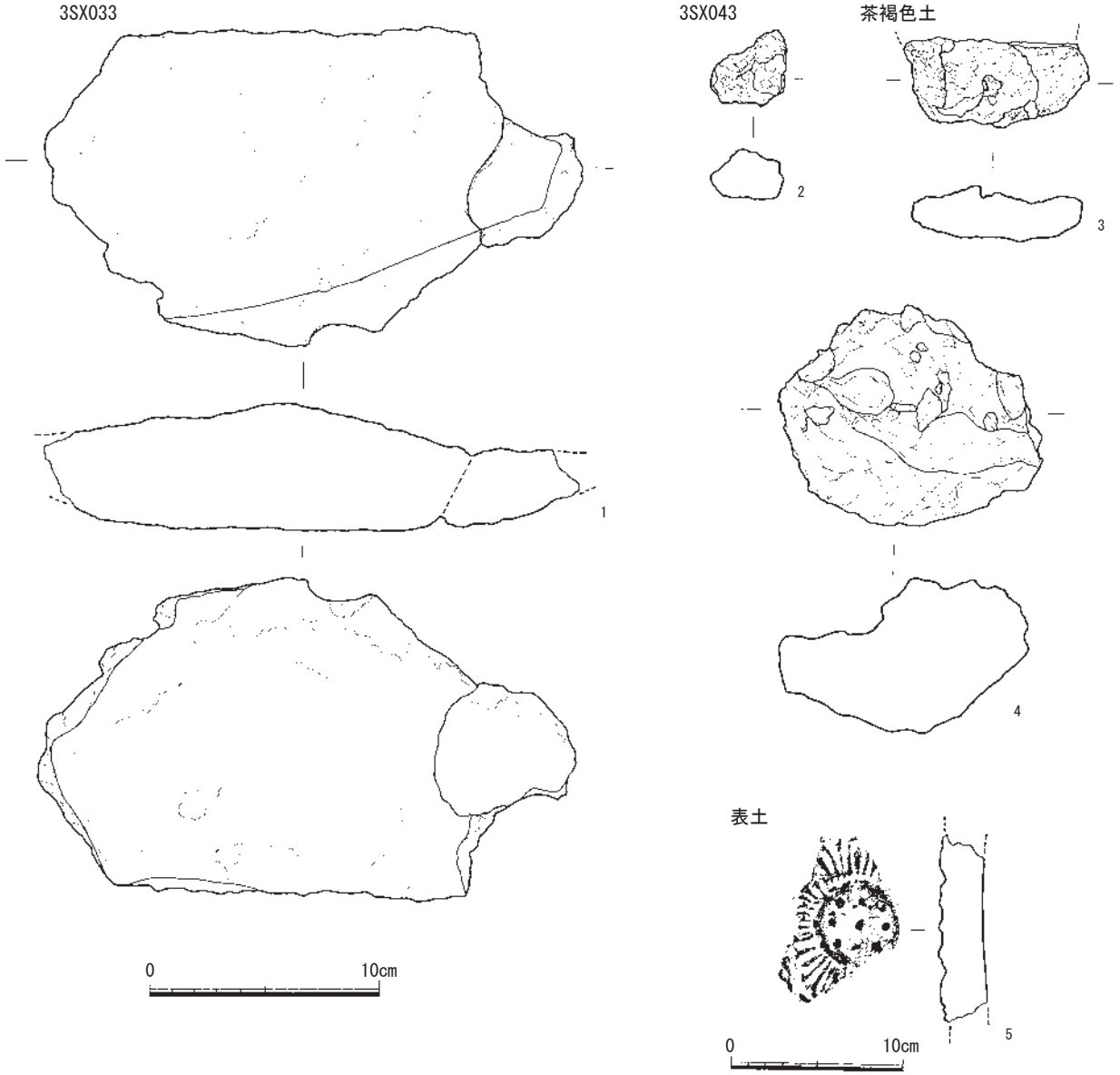


Fig.58　3SX033・043、茶褐色土、表土出土遺物実測図（1/3、5は1/4）

炉壁（1）　長さ23.2cm、幅13.7cm、厚さ5.5cmを測る。花崗岩塊のような質感で片側は丸底風で対面は表面に鉄錆がしみ込んだような状態となっている。

3SX043出土遺物（Fig.58）

金属製品

鉱滓（2）　長さ3.4cm、幅3.4cm、厚さ2.1cmを測る。多孔質で茶褐色の鉄錆が付着している。

茶褐色土出土遺物（Fig.58）

金属製品

椀形滓(3､4)　3は小判型の椀形滓の破片で長さ8.2cm､幅4.0cm､厚さ2.5cmを測る。4は半球形を呈し、長さ11.4cm、幅9.6cm、厚さ6.8cmを測る。

表土出土遺物（Fig.58）

瓦類

軒丸瓦（5）　複子葉弁で中房に1+8の珠文を有す鴻臚館系の製品である。硬質な還元焼成で表面は灰色を呈す。

(5) 小結

本遺跡は2棟の3SI020・030の住居跡からなる4世紀中頃から5世紀頃の集落、2棟の掘立柱建物3SB010・040からなる8世紀後半の官衙的様相、8世紀末から9世紀初頭の井戸3SE002、溝3SD015、9世紀後半から10世紀前半頃の井戸3SE036、土坑3SK035、のおよそ4期の遺構が重複して検出された。

4世紀中頃から5世紀頃の集落は御笠川上流域ではほとんど知られておらず、国分周辺では同時期の古墳も未発見であり、成立した背景が見えにくい。3SI030からは椀形滓が出土しており、小規模な小鍛冶程度の金属加工がおこなわれていた可能性がある。

8世紀から9世紀前半にかけては、2棟の掘立柱建物を中心に井戸や土坑が形成され、転用硯などもあり官衙的な様相を観ることが出来る。8世紀末から9世紀初頭頃の井戸3SE002や溝3SD015には長沙窯系青磁や越洲窯系青磁などの初期輸入陶磁器、半島系の陶質土器、緑釉陶器の複数の鉢や壺などの奢侈品があり、同時期の大宰府条坊内の遺跡と比較しても優位な遺物を消費している。3SE002では鋳型や鞴羽口などがあり、域内で小規模な銅製品などを扱った鋳造作業がおこなわれたことを示唆している。これらのことから、この場所は筑前国分寺の政所院や大衆院といった寺院に付帯する関連施設が展開していた可能性が考えられる。そうした場の利用は井戸3SE036、土坑3SK035の存在から10世紀代まで続いたようである。

Fig.59　第３次調査遺構略測図（1/200）

表.5、国分千足町遺跡第3次調査　遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	切り合い等	時期	地区番号
1	3SD001	溝	10→1	9世紀～	7ライン
2	3SE002	井戸		8世紀末、9世紀初～	R8
3	3SK003	土坑		8世紀後～	T10
4		ピット群	2→4		R9
5		ピット群			O9
6		ピット			V11
7		溝			6ライン
8		ピット群			T9
9		ピット群			S10
10	3SB010	掘立柱建物 a～l		8世紀～	P9
11		ピット群			R9
12		ピット群			P9
13		ピット		8世紀前～	Q6
14		ピット			O7
15	3SD015	溝	20→15	8世紀末、9世紀初～	P14
16		ピット群		7世紀後～	S8
17		ピット群			P8
18		ピット群			R9
19		ピット			O7
20	3SI020	竪穴住居		5世紀前～?	OP13
21		ピット			Q7
22		ピット			P7
23		ピット群		8世紀～	N13
24		ピット		8世紀～	O12
25		土坑			S13
26	3SX026	ピット群		8世紀～	Q13
27		ピット群		8世紀～	P14
28		ピット		5世紀～	P14
29		ピット		8世紀～	Q12
30	3SI030	竪穴住居		4世紀中～	R9
31		土坑		5世紀～	Q10
32		土坑	2→32	8世紀後～	R8
33	3SX033	ピット	30→33		R10
34		ピット	30→34		R10
35	3SK035	土坑	36→35	9世紀後～	M11
36	3SE036	井戸	36→35	9世紀中～	M11
37		窪み			K11
38	3SK038	土坑		8世紀中～	K11
39		ピット			K11
40	3SB040	掘立柱建物　a～n		8世紀中～	M11
41		ピット			P7
42		ピット			P7
43	3SX043	ピット			P9
44		ピット	14→3		T10
46		ピット			U11
47		ピット		5世紀～	O12
48		ピット			M11
49		ピット	49→37		K11
51		窪み	51→37		K11
52		ピット	52→37		K11
53		ピット	53→37		K11
54		ピット	54→49→37		K11
56		ピット			R8

表.6　国分千足町遺跡　第3次調査　出土遺物一覧表

S-1

須恵器	坏c3、甕、壺a?
土師器	破片
瓦類	丸瓦(須恵質、格子目c3)、平瓦(須恵質、縄目)、 平瓦(土師質、縄目)

S-2暗黒色土

須恵器	蓋3、蓋b(転用硯)、鉢b、小型平瓶
製塩土器	壺I
黒色土器A類	皿a、椀×坏
土師器	坏a(墨書)、坏d、皿a、椀c、椀c(墨書)、小甕、 甕a、鉢b?
国産陶器	三彩鉢
瓦類	平瓦(須恵質、縄目)、平瓦(瓦質、縄目)、 丸瓦(須恵質、無文)
金属製品	鉱滓、鋳型、皿盤状土製品
石製品	自然石(花崗岩、被熱)

S-2暗茶色土

須恵器	坏、坏c3
黒色土器A類	皿c
土師器	坏a
国産陶器	緑釉；鉢
瓦類	平瓦(瓦質、縄目)
金属製品	鉄塊系遺物

S-2暗褐色土

須恵器	蓋3、大蓋、坏a、坏c3、大坏×大皿c3、大甕、鉢b
土師器	坏a、坏d、甕
国産陶器	施釉陶器；坏?
越州窯系青磁	椀
瓦類	平瓦(瓦質、縄目)、丸瓦(瓦質、無文)、 軒丸瓦(土師質、鴻臚館式)
土製品	鋳型?

S-2暗灰色土

須恵器	蓋3、蓋c、坏a、坏c3、脚付坏、甕、壺b、 壺d、鉢a3
製塩土器	破片
越州窯系青磁	椀；破片(1)
土師器	蓋3、蓋c、坏c3、坏d、皿a、甕a、甕把手、壺
無釉陶器	朝鮮系壺(1)
緑釉陶器	壺(1)
中国陶器	壺；褐釉(1)
瓦類	平瓦(瓦質、縄目)、平瓦(須恵質、縄目)、 平瓦(土師質、縄目)、平瓦(土師質、格子目A)、 丸瓦(瓦質、縄目)、丸瓦(瓦質、無文)
土製品	炉壁、鞴羽口

S-3褐色土

須恵器	蓋3、坏c3、皿a、小甕、鉢b
土師器	坏d、甕
瓦類	平瓦(瓦質、無文)

S-3炭層

土師器	供膳具
瓦類	平瓦(瓦質、無文)

S-3淡褐色土

須恵器	蓋c
土師器	供膳具

S-4

須恵器	供膳具
土師器	坏d

S-5c

土師器	供膳具

S-5d

土師器	甕?

S-6

土師器	甕?
瓦類	平瓦(瓦質、縄目)

S-8

須恵器	壺?
土師器	供膳具

S-9

土師器	供膳具

S-10

須恵器	鉢a2
土師器	甕?、供膳具

S-10c

瓦類	平瓦(瓦質、無文)

S-11

土師器	甕?
瓦類	平瓦(須恵質、無文)

S-12

須恵器	蓋1、甕
黒色土器A類	破片
土師器	供膳具
瓦類	丸瓦(須恵質、無文)

S-13

須恵器	蓋2、坏c3、高坏b
瓦類	平瓦(瓦質、縄目)

S-14

須恵器	坏c3、甕
土師器	坏c3、甕a

S-15

須恵器	蓋1、坏c3、小甕、甕、壺f?
越州窯系青磁	椀；I?(1)
長沙窯系青磁	椀(1)、壺(1)
土師器	坏a、甕a
中国陶器	甕；破片(1)※未分類
瓦類	平瓦(瓦質、縄目)
石製品	チャート原石

S-16

須恵器	蓋1、蓋3
土師器	破片

S-17

須恵器	甕、壺?
土師器	椀c

S-18

土師器	甕?、供膳具

S-19

瓦類	平瓦(須恵質、縄目)

S-20①

金属製品	椀型滓

S-20②

土師器	高坏

S-20③

土師器	甕×壺

S-20④

土師器	甕、壺、丸底壺

S-20⑤

土師器	高坏、丸底壺

S-20⑥

土師器	高坏

S-20⑦

土師器	丸底壺

S-20⑧

土師器	甕、丸底壺

S-20⑨

土師器	丸底壺

S-20⑩

土師器	丸底壺

S-20⑪

土師器	丸底壺

S-20⑫

土師器	丸底壺

S-20⑬

土師器	高坏

S-20⑭

土師器	壺?

S-20⑮

土師器	高坏、甕、壺?

S-20⑯

土師器	壺

S-20⑰

土師器	甕?

S-20⑱

土師器	甕

S-20⑲

土師器	甕、小壺?

S-20東側壁溝

土師器	甕、壺

S-20焼土j

土師器	甕?、甕×壺
土製品	焼土塊

S-20焼土k

土師器	甕?

S-20ℓ

土　師　器	高坏、甕、小壺

S-20褐灰色土

土　師　器	高坏、甕、丸底壺
瓦　類	平瓦(瓦質、縄目)(混入品)

S-20

土　師　器	甕
須　恵　器	高坏 (陶質土器？)

S-22

土　師　器	破片

S-23

須　恵　器	小蓋?、甕、供膳具
土　師　器	甕?、供膳具

S-24

土　師　器	供膳具
瓦　類	破片(瓦質)

S-25暗褐色土

須　恵　器	甕、硯?
土　師　器	甕、供膳具

S-25明茶色土

土　師　器	甕?

S-26

須　恵　器	蓋3、坏c3
土　師　器	供膳具
金　属　製　品	鉱滓

S-27

須　恵　器	供膳具
土　師　器	供膳具

S-28

土　師　器	甕?、供膳具

S-29

土　師　器	供膳具

S-30北側

土　師　器	甕、丸底壺、小型丸底壷

S-30c

土　師　器	破片

S-30g

土　師　器	破片

S-30m

土　師　器	破片

S-30褐色土

土　師　器	高坏、甕

S-31

土　師　器	甕?

S-33

須　恵　器	大甕
瓦　類	平瓦(瓦質、縄目)
土　製　品	炉壁

S-34

製　塩　土　器	壺
土　師　器	破片

S-35

須　恵　器	蓋c、坏c
土　師　器	皿a、甕
金　属　製　品	鉄塊系遺物
瓦　類	平瓦(須恵質、格子目c2)

S-35褐灰色土

須　恵　器	坏c3、甕
土　師　器	椀c、甕把手
瓦　類	平瓦(瓦質、格子目c2,c3)、平瓦(瓦質、縄目)、 平瓦(土師質、二重格子目c2)、 丸瓦(須恵質、格子目c2)

S-35暗灰色土

須　恵　器	坏c3、壺d?
黒色土器A類	椀c
越州窯系青磁	壺；破片?(1)
土　師　器	坏a、甕a?、移動式竈
瓦　類	平瓦(須恵質、格子目c3)

S-36裏込

須　恵　器	坏蓋、坏a、甕
製　塩　土　器	壺
土師質土器	椀c、甕
瓦　類	平瓦(瓦質、縄目)、平瓦(瓦質、格子目c3)、 平瓦(土師質、縄目)、平瓦(須恵質、格子目c3)、 軒丸瓦(瓦質)
土　製　品	炉壁

S-36茶色土

須　恵　器	蓋3、坏c3、甕
製　塩　土　器	壺I
土　師　器	坏、椀c、甕
瓦　類	平瓦(瓦質、縄目)、平瓦(瓦質、格子目c2)、 平瓦(瓦質、無文)、丸瓦(須恵質、格子目c3)、 丸瓦(瓦質、無文)

S-36暗灰色土

須　恵　器	蓋3、甕
土　師　器	坏a
瓦　類	軒平瓦(須恵質、601A型式)

S-37

須　恵　器	蓋3、坏c3、甕
土　師　器	坏d、高坏、甕
瓦　類	平瓦(瓦質、縄目)、丸瓦(瓦質、無文)

S-38

須　恵　器	小蓋3、蓋3?、蓋c3、坏c3、大甕、甕、壺蓋、 小壺
製　塩　土　器	壺
土　師　器	坏d、皿a、甕a
弥　生　土　器	甕(須玖Ⅱ式)
瓦　類	平瓦(瓦質、縄目)、丸瓦(須恵質、無文)
金　属　製　品	鉄塊系遺物

S-39

須　恵　器	坏、鉢?
土　師　器	甕、供膳具
瓦　類	平瓦(土師質、縄目)

S-40掘り方

土　師　器	甕?

S-40a掘り方下層

土　師　器	高坏

S-40a掘り方

土　師　器	破片

S-40a柱痕

須　恵　器	壺b?
土　師　器	小壺?

S-40

須　恵　器	小壺
土　師　器	丸底壺

S-40b掘り方

土　師　器	破片

S-40b最上層

土　師　器	破片

S-40b

須　恵　器	供膳具
土　師　器	供膳具

S-40c

土　師　器	甕、供膳具

S-40c掘り方

土　師　器	高坏、甕
土　製　品	輔羽口

S-40e掘り方

土　師　器	破片

S-40g掘り方

須　恵　器	坏、大坏c×壺a×b

S-40g最上層

土　師　器	小壺?

S-40h掘り方

土　師　器	甕?

S-40i掘り方

土　師　器	高坏、甕?

S-40j掘り方

土　師　器	甕?
瓦　類	平瓦(須恵質、縄目)

S-40j最上層

須　恵　器	坏a、甕
土　師　器	破片

S-40k

土　師　器	小甕?

S-40m

須　恵　器	坏a
瓦　類	丸瓦(須恵質、無文)

S-41

土　師　器	坏×椀

S-42

土師器	椀c
瓦類	平瓦(瓦質、縄目)、破片(須恵質、格子目c3)

S-43

須恵器	甕
土師器	供膳具
金属製品	椀形滓

S-44

須恵器	供膳具
土師器	供膳具

S-46

須恵器	皿a
土師器	破片
瓦類	破片(須恵質)、破片(土師質)

S-47

土師器	供膳具
木製品	木炭

S-48

須恵器	供膳具
土師器	破片
瓦類	平瓦(瓦質、縄目)

S-49

須恵器	蓋c、坏
土師器	坏c3
瓦類	丸瓦(土師質、無文)
石製品	丸石(被熱)
土製品	鞴羽口?

S-51

須恵器	壺×鉢
土師器	甕

S-52

須恵器	供膳具
土師器	供膳具

S-53

須恵器	坏a2
土師器	甕
瓦類	平瓦(瓦質、無文)

S-54

須恵器	坏
土師器	坏?

S-56

土師器	供膳具

茶褐色土

須恵器	蓋3、坏c3、大椀×大皿c3、甕、大甕、壺b～f、鉢b
土師器	高坏b
瓦類	平瓦(瓦質、縄目)、平瓦(土師質、縄目)、 平瓦(須恵質、格子目c2)、平瓦(須恵質、無文)、 丸瓦(須恵質、格子目c3)
金属製品	椀型滓

灰色土

須恵器	蓋3、蓋c、坏、坏c3、高坏b、皿a、小甕、甕、壺b
土師器	高坏、小甕、甕把手
国産陶器	坏×椀(砂目)、壺、瓶?
瓦類	平瓦(須恵質、格子目c2)、平瓦(瓦質、無文)、 平瓦(瓦質、縄目)、丸瓦(須恵質、格子目c3)、 丸瓦(瓦質、無文)
石製品	砥石(中砥)

表土

須恵器	蓋2、蓋3、坏蓋c、坏a、坏c3、高坏b、皿a、甕、 大甕、鉢a3
製塩土器	坏I
越州窯系青磁	椀；I(1)　　壺；I?(1)
土師器	蓋c、坏d、高坏、椀c、甕、甕把手、坩
肥前系陶磁器	染付；皿、椀
国産陶器	大甕(近世)
瓦類	平瓦(瓦質、無文)、平瓦(瓦質、縄目)、 丸瓦(瓦質、無文)、軒丸瓦(須恵質、鴻臚館式)
金属製品	鉄塊
石製品	安山岩コア

P6試掘トレンチ埋土

須恵器	坏、甕
瓦類	平瓦(瓦質、縄目)、平瓦(土師質、縄目)、 平瓦(瓦質、無文)

4、国分千足町遺跡第７次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市国分３丁目 492-1 で、遺構面の標高 31.5 ～ 33m で南西に向かって下がっていく立地である。

2012（平成 24）年４月、共同住宅建設に伴う埋蔵文化財についての照会があり、４月 27 日に確認調査を行い、耕作土直下の全面で遺構が確認された。その後、事業者と協議を重ね、建物部分のほか周囲擁壁部分について、遺構に影響があると判断されたため、開発者の費用負担で発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は 2012（平成 24）年 10 月 12 日～ 2013（平成 25）年１月 25 日に実施した。開発対象面積は 1223.93 ㎡で、調査面積は 780 ㎡である。調査は宮崎亮一が担当した。

なお、調査地以外の駐車場等は未調査で、遺構は地下に保存されている。

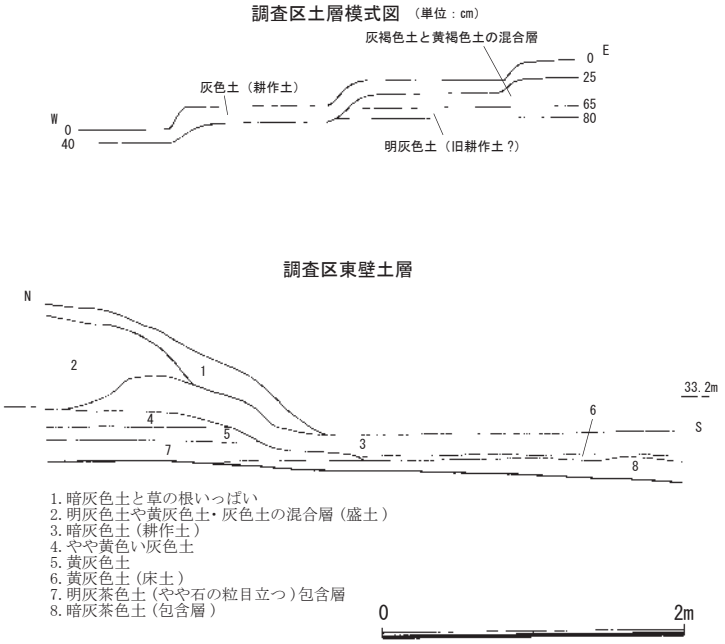


Fig.60　調査区土層図（1/50）と模式図

(2) 基本層位（Fig.60）

調査地一帯には西側に向かって下がっていく４枚の田圃があり、その西側２枚と東側２枚の一部の田圃が調査対象地である。その耕作土（灰色土）が厚さ 0.2m、その下に暗茶色土の包含層が厚さ 0.15m 程あり、それを除去すると、地山は北半分が淡茶色土や淡灰色土に礫が混じる層、南半分は淡黄褐色土や橙黄色土の地山で、それに切り込んで遺構が確認できる。西側ほど田圃が下がっていく関係と同様に西側ほど削平が目立つ。遺構の埋土は、ほとんど茶褐色土で、深いピットなどは下部ほど灰色粘質土になる。

(3) 検出遺構

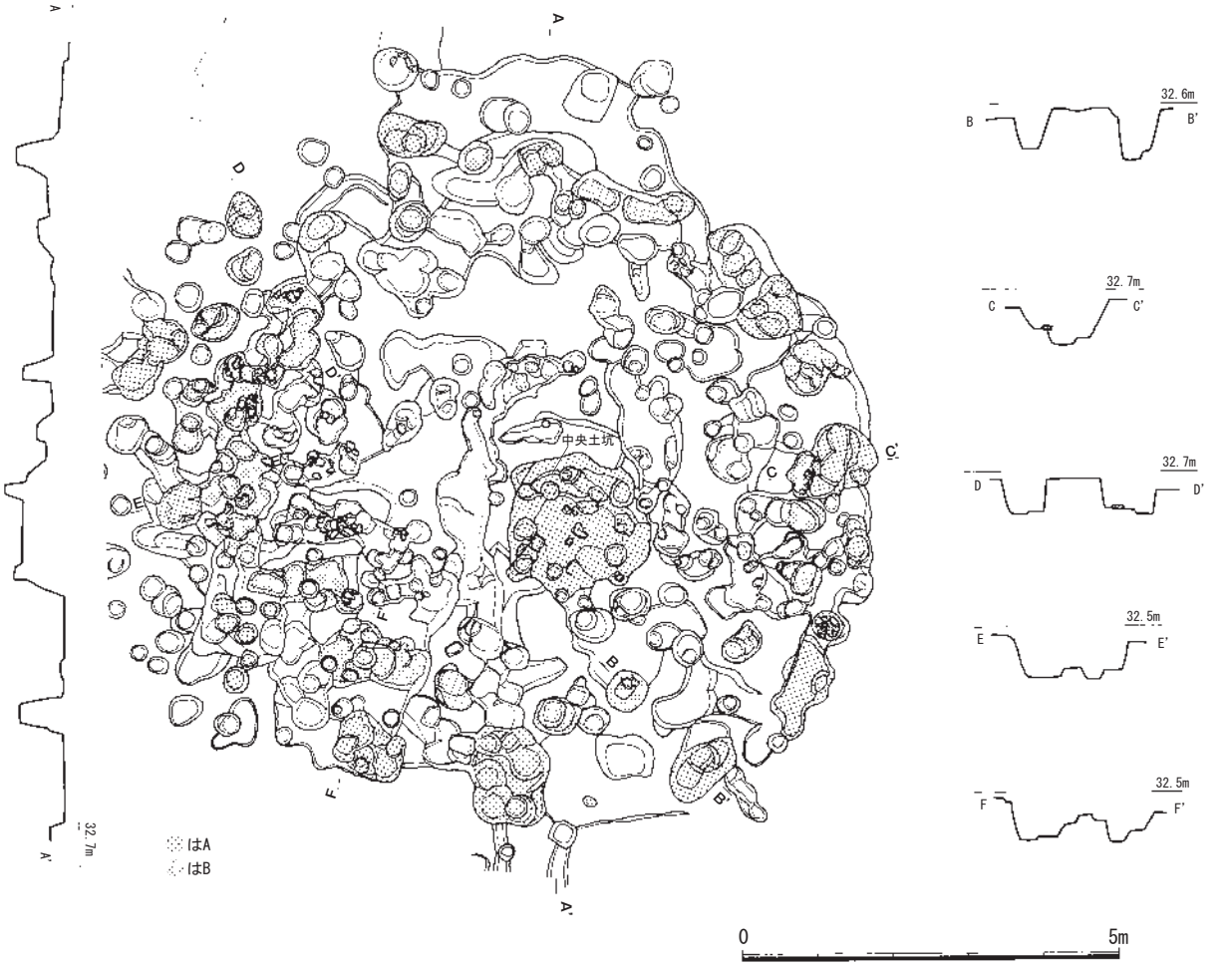
竪穴住居

7SI001（Fig.62、Pla.11）

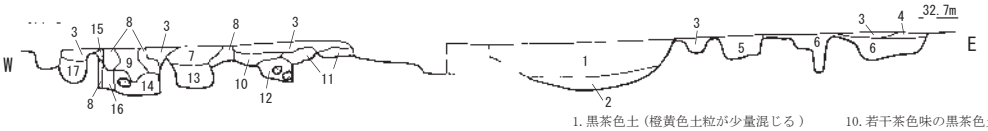
大型の円形竪穴住居である。上面が削平され、竪穴部分は消失し、貼り床部分が検出された。遺構検出段階では北側に張り出した部分があり、平面形がいわゆる帆立貝形をなしている。埋土は茶褐色土で、包含層直下という状況から、最上面には古代の遺物がごく僅かに含まれているものの、時期はその他の遺物から弥生時代中期中頃とみて良いだろう。

遺構内部の床面に多数の柱穴や凹凸が検出された。これらは約３重の円を描くように掘られているように見え、数回の建替えがあったと推測される。よって、その柱穴のうち一連のものとみられるくくりを A・B とその他の３つに分けて報告する。

まず A は大周りの柱穴のくくりで、南北 9.2m、東西 10.3m のやや楕円形の大型竪穴住居と推測される。柱穴はその周縁部に約 2m 間隔で並び、大きさ 1m 前後の掘り方を持つ柱穴が掘られている。この遺構を検出した際、部分的に黄褐色土が露出している部分がみられた。これは後述するとおり、貼り床や地山

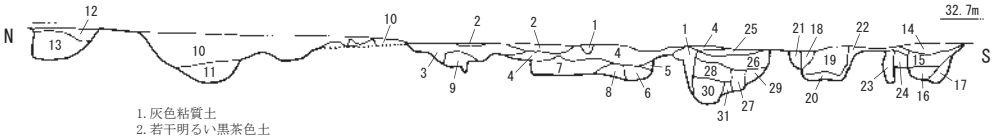


東西土層図



1. 黒茶色土（橙黄色土粒が少量混じる）
2. 黒色粘質土（ごくわずかに炭混じる）
3. 黒茶色土
4. 暗灰色土（やや明るい）
5. 黒灰色土
6. 暗灰色土に黄灰色土（地山の土）混じる
7. 黄橙色土に灰色土少量混じる
8. 灰色粘質土
9. 黒茶色土（灰色土少し混じる）
10. 若干茶色味の黒茶色土
11. 灰茶色土に黄橙色土混じる
12. 茶灰色土に黄橙色土混じる
13. 茶灰色土に黄灰色土混じる
14. 暗灰色粘土（炭混じり）
15. 橙茶色土
16. 灰色土に黄橙色土ブロック混じる
17. 灰色土

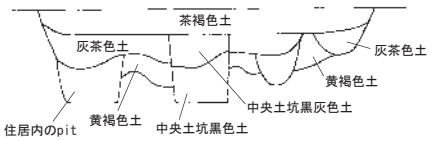
南北土層図



1. 灰色粘質土
2. 若干明るい黒茶色土
3. 黒茶色土と灰色粘質土と黄灰色土の混合層
4. 黒茶色土（灰色粘土や橙黄色土少量含む）
5. 灰茶色土と黄灰色土の混合層
6. 灰色味がつよい黒茶色土
7. 茶黒色土に黄灰色土多く混じる
8. 灰茶色土と黄灰色土の混合層
9. 灰茶色土に黄灰色土混じる
10. 明黒茶色土（橙黄色土ブロック混じる）
11. 明黒茶色土と明灰色土の混合層（黄灰色土少し混じる）
12. 淡明黒茶色土
13. 明黒茶色土（10と同じか？）
14. 黒茶色土
15. 暗灰茶色土に黄灰色土混じる
16. 灰茶色土に黄灰色土ブロック混じる
17. 明灰茶色土（黄色土ブロック混じり）
18. 灰色味の強い黒茶色土
19. 灰茶色土と黄灰色土の混合層
20. 暗灰色粘質土
21. 灰茶色土と黄灰色土の混合層
22. 黄色土に淡灰色土混じる
23. 淡灰色粘質土
24. 黄色土と明灰茶色土の混合層
25. 灰茶色土
26. 明灰茶色土と黄灰色土の混合層
27. 灰色土
28. 淡暗灰色粘土に黄灰色土混じる
29. 明白灰色土（ややざらざら）
30. 暗灰色粘質土
31. 30に礫含む

0　3m

7SI001 模式図



中央土坑模式図

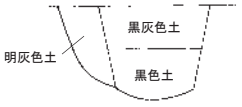


Fig.62　7SI001 遺構実測図（1/100、1/80）

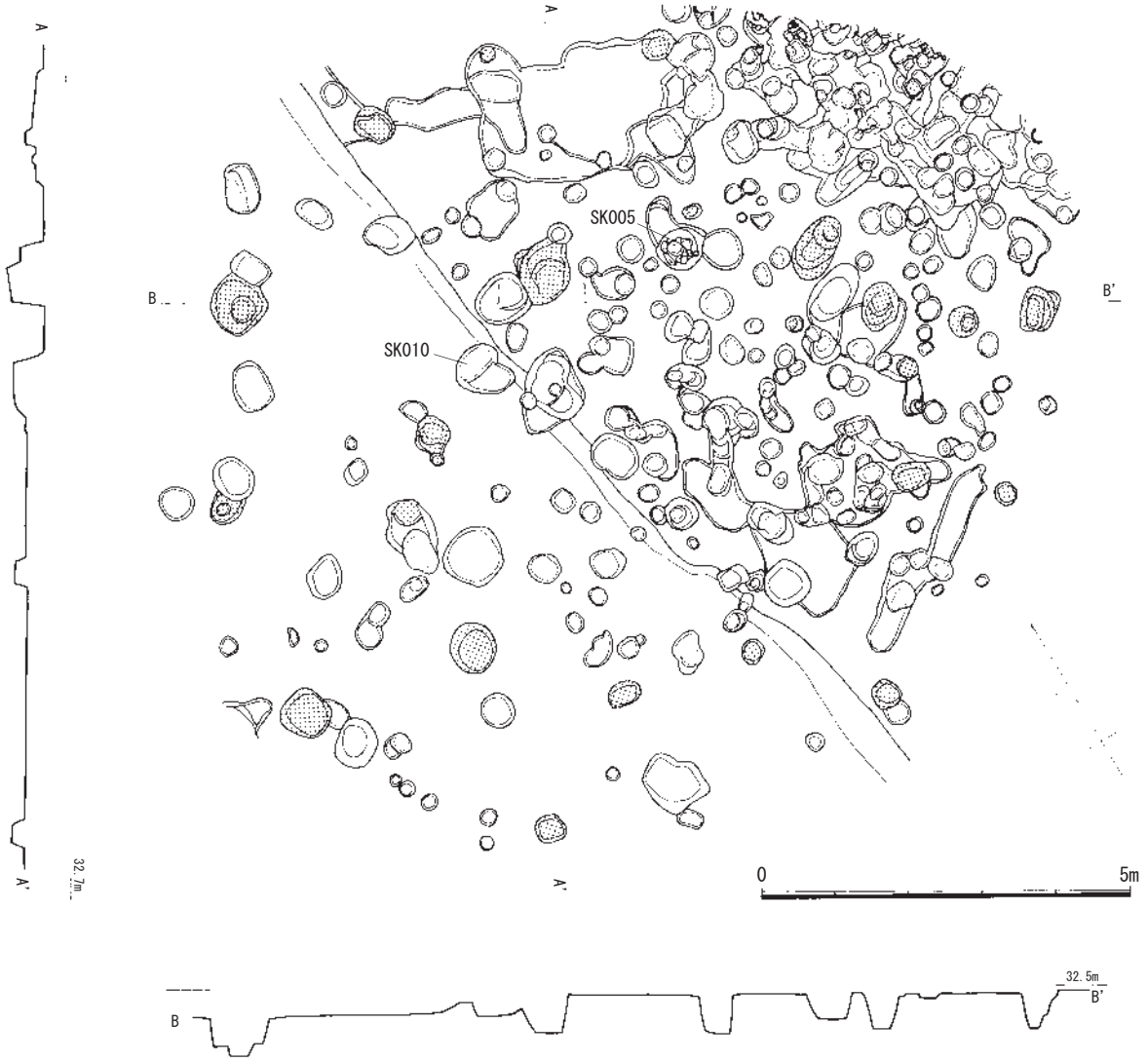


Fig.63　7SI035 遺構実測図（1/100）

だったことから、遺構検出面がほぼ住居の最終段階の床面と考えられる。その床面は灰茶色土で、そこで検出される柱穴や土坑の埋土は、黄褐色土と灰茶色土の混合層や暗灰色土であった。床面で硬化面は未検出で、水分を含んだ際は足にまとわり付く粘土質となる。中央やや東側に 2.1×1.9m、深さ 0.57m の円形土坑（中央土坑）が検出された。埋土は黒茶色土や黒色土で僅かに下層に炭が混じる程度で、明瞭な焼土は検出されず、炉と確定するには至っていないが、位置的にはその役目を持つ土坑と考えられる。また、この中央土坑北側を中心にひと回り大きい形状で、埋土が黄灰色土・黄色土・黒灰色土の混合層の部分がある。これは古い段階の中央土坑と推測される。土坑内の周壁部にはピットが多く検出された。

B は南北約 8m、東西約 9m のやや楕円形で、北側に幅 3.5m、長さ 1.5m 程の張り出した部分があった。床面に硬化した部分は検出されなかったが、ここが入口であった可能性が考えられる。入口は形状から A に伴うものより B に伴うものとした方がバランスは良いため、B のものと推測した。埋土は A のものと同じであったが、A のところで述べた中央土坑のひと回り大きな土坑は、B と同時期のものと推測される。柱穴は 1m 前後の間隔であるが、A と重複している部分もある。また、床面は柱列付近から竪穴で掘り下がっている部分が多いことから、A を建替え、若干拡張して B を建てたと推測される。

貼り床については、上記の状況から考えると、B段階で地盤を掘り下げ、貼り床を行ったと推測され、遺構検出面でみられた灰茶色土がA・B両方とも住居の床面であったと推測される。そして、最初の貼り床については明瞭な箇所もあるが、地山との区別がつきづらい所も多い。貼り床自体の土質は主に黄褐色土で一見地山に近いが、灰茶色土が混じっているので、それを持って地山と区別した。

また、A・B以外にも、住居内にはさらに小さい径を描くようにある柱穴など明確にまとめきれない柱穴が多く存在する。これらはAやBと同時期にあった住居内の柱の可能性が高いが、それぞれの柱の取り換え等も考えられる。また、西側を中心に柱穴のうち一部で礫を敷いたものがあったが、全てにあるわけではなく、礫敷きだけでは建物が成立しない状況である。

また、南東方向に溝（SD224）が検出され、SI001と同じ埋土であった。その切り合いは確認できなかったため、住居に伴う溝である可能性が高い。溝はSX025に向かって流れており、住居内からの排水路の可能性が考えられる。

出土遺物については、後述するとおりであるが、それ以外にも黒曜石の剥片が多量に出土した。

7SI035（Fig.63、Pla.11）

SI001の西側で検出されたピット群であるが、調査区全体の検出状況からするとピットや土坑がかなり集中していることがわかる。これらピット群はSI001の状況から考えて、円形の竪穴住居の上面が削平された状態の可能性が考えられる。住居の外側に柱穴が並ぶとした場合、直径約10.4～12mの楕円形の大型竪穴住居と推測される。炉と言える明確な遺構はないが、礫入り土坑（SK005）や土器集中遺構（SK010）が検出された。東側がSI001と切り合っているが、新旧は不明瞭である。外回りの柱穴以外にも住居内には多くのピットがあるが、明確に柱穴とは決め難い状況である。

SK005は礫がまとまって置かれている土坑で、大きさは0.7m×0.55m、深さ0.4m。底面は中央がピット状に深い。礫は中央の礫が平らな石を使用しているが、その周りに置かれている礫は花崗岩の川原石である。SI001で礫敷の柱穴が多く検出されたため、竪穴住居の柱穴の可能性が考えられる。SK010は弥生土器の甕がまとまって出土した土坑で、住居内の土坑と推測される。大きさは0.74m×0.64m、深さ0.24m。甕は割れた状態で、置いている状況ではなく、破片も全て残っている状況ではない。弥生時代中期。

掘立柱建物

7SB015（Fig.64、Pla.12）

振れが約E-26°　2′　-Nの東西棟で、現段階では1×3間（3.1～3.4×9.6m）であるが、西側調査区外に続く可能性はある。柱間は桁行・梁間とも3.2m前後だが、西側ほど柱間がやや広くなっている。掘り方は大きさ0.5～1.2m、深さ0.29～0.45m、柱痕は土層断面から0.2m程と推測される。弥生中期前半～中頃？。

7SB040（Fig.64、Pla.12）

調査区際のため掘り方は2個のみ検出した。柱間は4.1mで、振れが約E-16°　23′　-Nの掘立柱建物と考えられる。北側の国分松本遺跡第11次調査では未検出のため、この調査地の北西側にかけて展開するものと考えられる。2つの掘り方とも南側に中段があり、大きさは南北に長く、aが1.2m×0.96m、深さ0.78m、bが1.25m×0.86m、深さ0.86mで、北側端に柱材が残存していた。aの柱材は径23.5～26.0cmで、建物の重さのため柱材の底部には地山の砂粒がめり込み、固くなっていた。bの柱材は径23.6cmで、柱材の底に平らな花崗岩礫を敷かれていた。これは沈み込み防止もしくは高さ調整のためと考えられる。弥生時代中期中頃前後。

7SB045（Fig.65）

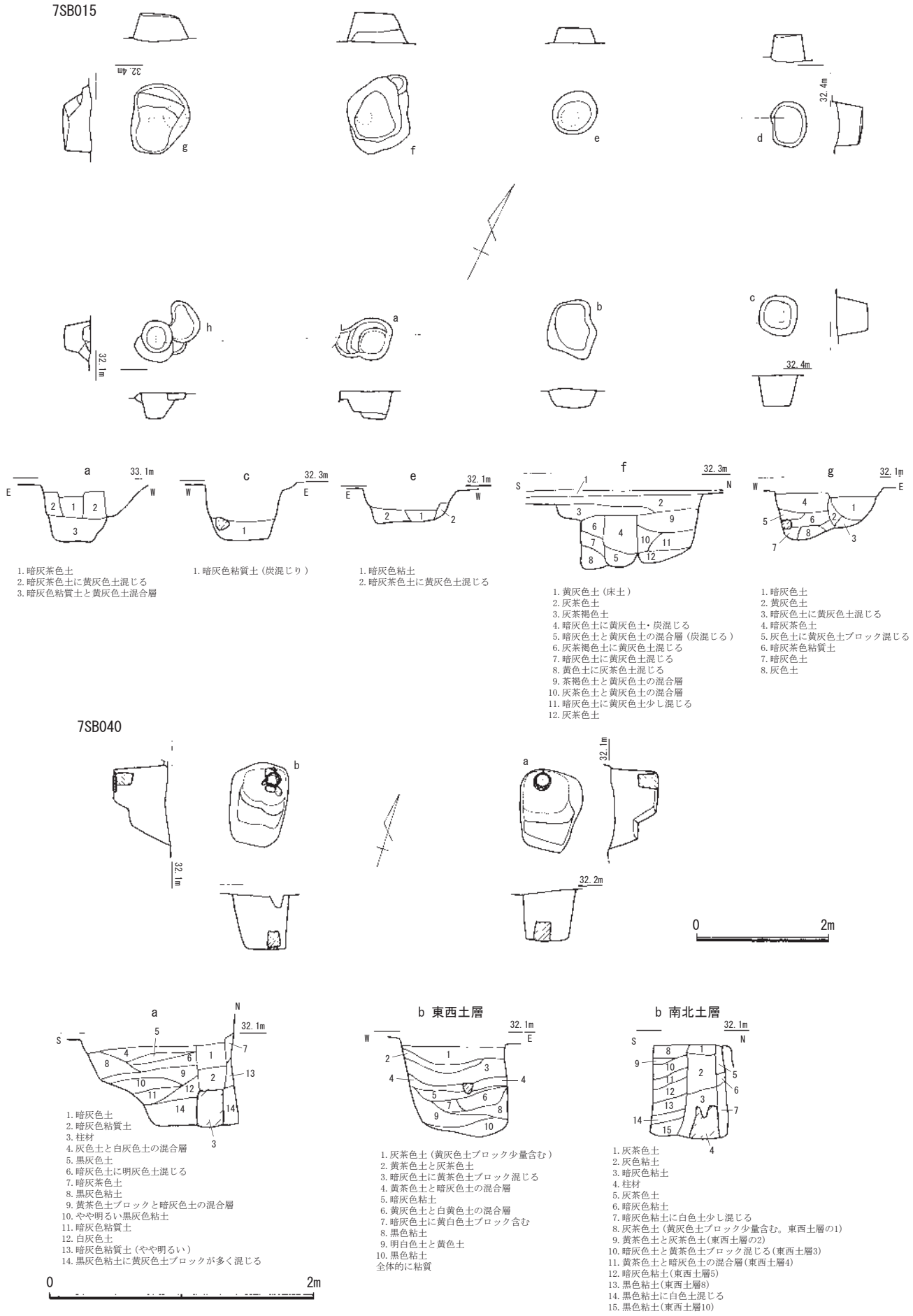


Fig.64　7SB015・040 遺構実測図（1/40、1/80）

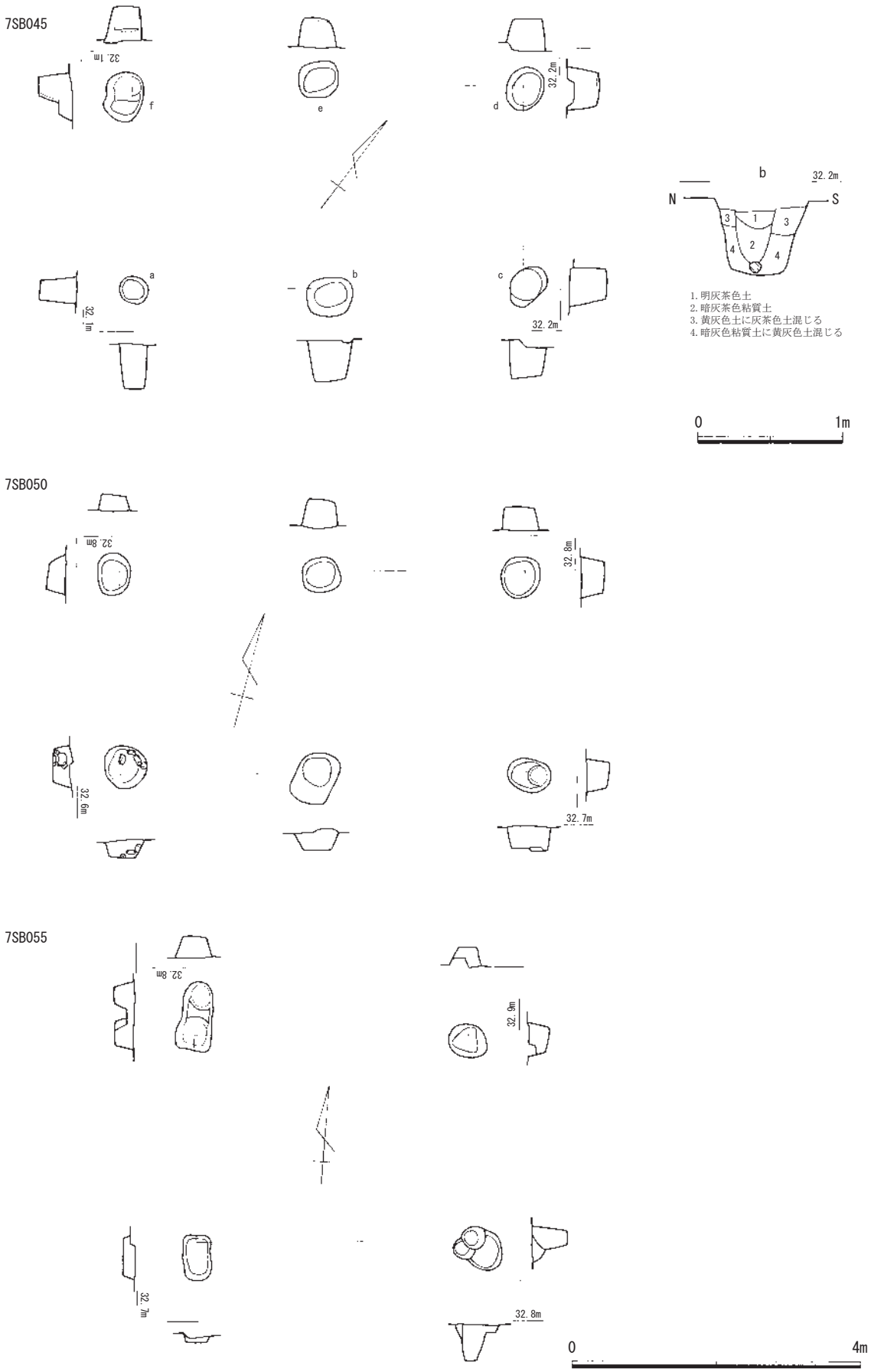


Fig.65　7SB045・050・055 遺構実測図（1/80、1/40）

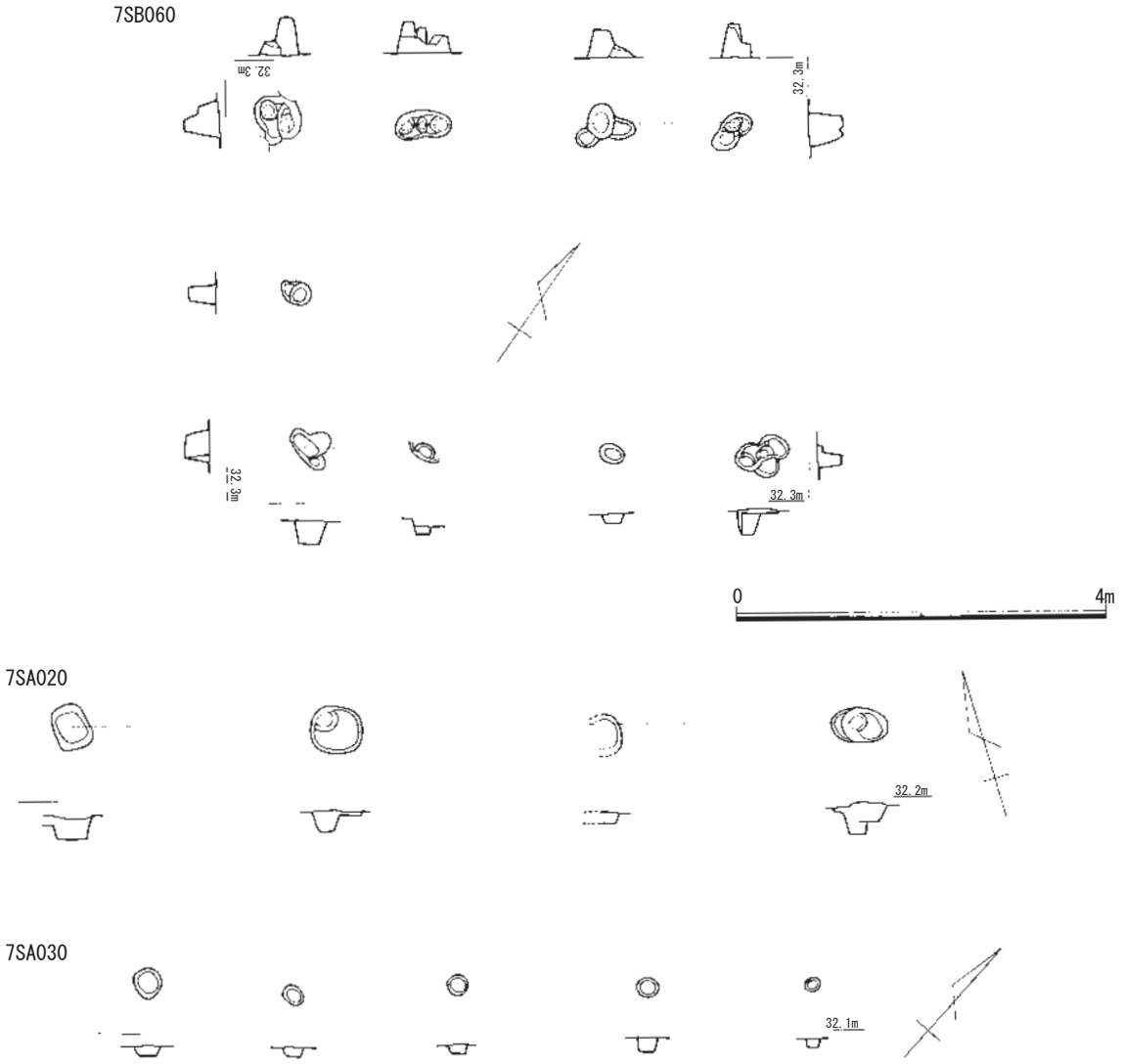


Fig.66　7SB060、7SA020・030 遺構実測図（1/80）

1×2 間（約 2.8×5.4m）で、振れが約 E-37°　35′　-N。掘り方は円形で、径 0.5m 前後、深さ 0.4 ～ 0.6m、柱間は約 2.7m。整理中に確認した建物で、調査段階で柱痕跡は未確認である。弥生時代中期前半。

7SB050（Fig.65）

1×2 間（約 2.8×5.6m）で、振れが約 E-15°　9′　-N。整理中に確認した建物で、掘り方は径 0.6m 前後、深さ 0.25 ～ 0.4m の円形である。柱痕跡は未確認であるが、南西隅の掘り方では礫が検出され、柱を安定させるためのものと推測される。建物の規模は、SB045 と同規模とみられる。古墳時代以降。

7SB055（Fig.65）

1×1 間（約 2.8×3.8m）で、東西にやや長い建物で、振れが約 E-5°　42′　-N。整理中に確認した建物で、掘り方は大きさ 0.4 ～ 0.6m 前後、深さ 0.18 ～ 0.5m、調査段階で柱痕跡は未確認である。古代。

7SB060（Fig.66）

流路（SX025）沿いにある建物で、2×3 間（約 3.6×4.8m）で、振れが約 E-36°　26′　-N。整理中に確認した建物で、調査段階で柱痕跡は未確認である。柱穴の大きさは、径 0.3m 前後、深さ 0.3m 前後と小さい。周囲には同様のピットがまとまって検出されているため、他にも建築物があった可能性が高い。弥生時代中期。

柵列

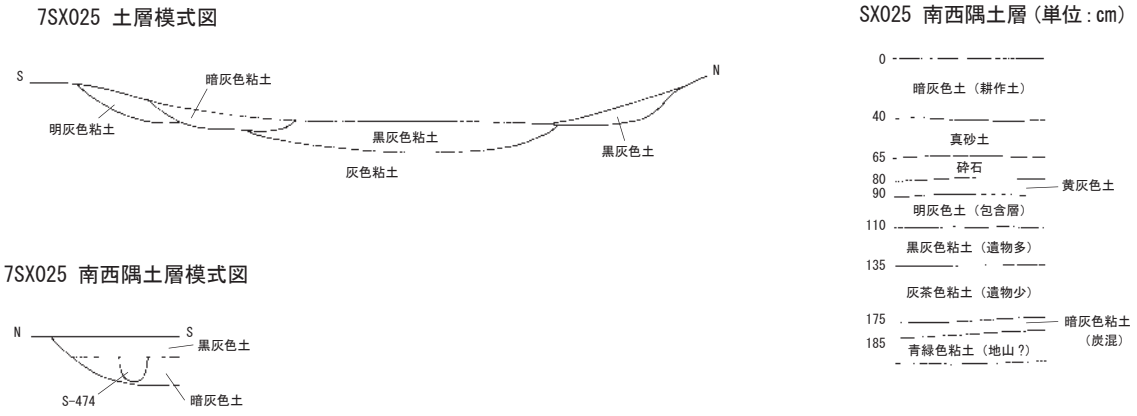


Fig.67　7SX025 土層模式図

7SA020（Fig.66）

調査区南側で検出されたため、現状では建物として成立していないため柵列とする。検出長 8.4m で、柱間は 2.8m の 3 間分確認された。掘り方は隅丸方形や楕円形で、大きさは 0.5m 前後、深さ 0.1 ～ 0.35m である。振れは約 E-16°　21′　-S を示す。弥生時代中期中頃前後。

7SA030（Fig.66）

検出長 7.2m で、柱間は 1.6 ～ 2m の 4 間分が確認された。SX025 の流路の岸辺に同じ方位で検出された。柱穴の大きさは径 0.25m 前後、深さ 0.1 ～ 0.15m で、北端の柱穴には木質が遺存していたが、腐植著しく端部を含め柱の状況は掴めなかった。振れは約 E-41°　54′　-N を示す。弥生時代中期か。

流路

7SX025（Fig.67）

調査区の南側を横切る流路で、調査は擁壁工事で遺構が破壊される部分をトレンチ状に行った。地盤が軟らかく、周囲の土砂の崩落が目立ち、東側は両岸を確認したが、底面まで到達できなかった。西側については北岸のみだが、底面には到達した。しかし、隣接地に危険がおよぶ状況であったため、バックホウで底面を確認した。流路の振れは約 N-43°　25′　-E で、幅約 13m、深さ約 1 m。流路の埋土はほとんどが黒灰色粘土で、底面近くが灰色粘土で、両肩近くは粘質が弱くなり、流路北辺に礫を含む黒灰色土がある。黒灰色粘土は弥生土器を多く含むが、灰色粘土は遺物の包含が少ない。最上面こそ古代の遺物が少量出土するものの、遺物のほとんどが弥生時代中期前半～中頃のものである。

この調査地を含め、近隣の調査でも石包丁が出土するため、このような粘土質の場所が水田であった可能性が考えられるが、それを実証する根拠は得られなかった。

(4) 出土遺物

竪穴住居

7SI001 茶褐色土出土遺物（Fig.68）

弥生土器

壺（1）　内外面磨滅するが、外面に一部タテハケが残る。色調は暗黄色や茶褐色を呈する。

石製品

石包丁（2）　半分欠損する。両面研磨し、紐穴を開ける。輝緑凝灰岩製で立岩産とみられる。

7SI001 灰茶色土出土遺物（Fig.68）

弥生土器

甕（3 ～ 16）　胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は橙色や茶褐色などを呈する。全体的に磨滅し調整不明。3 は口縁部があまり突出しない断面三角形の口縁部である。4 ～ 10 は断面が長い三

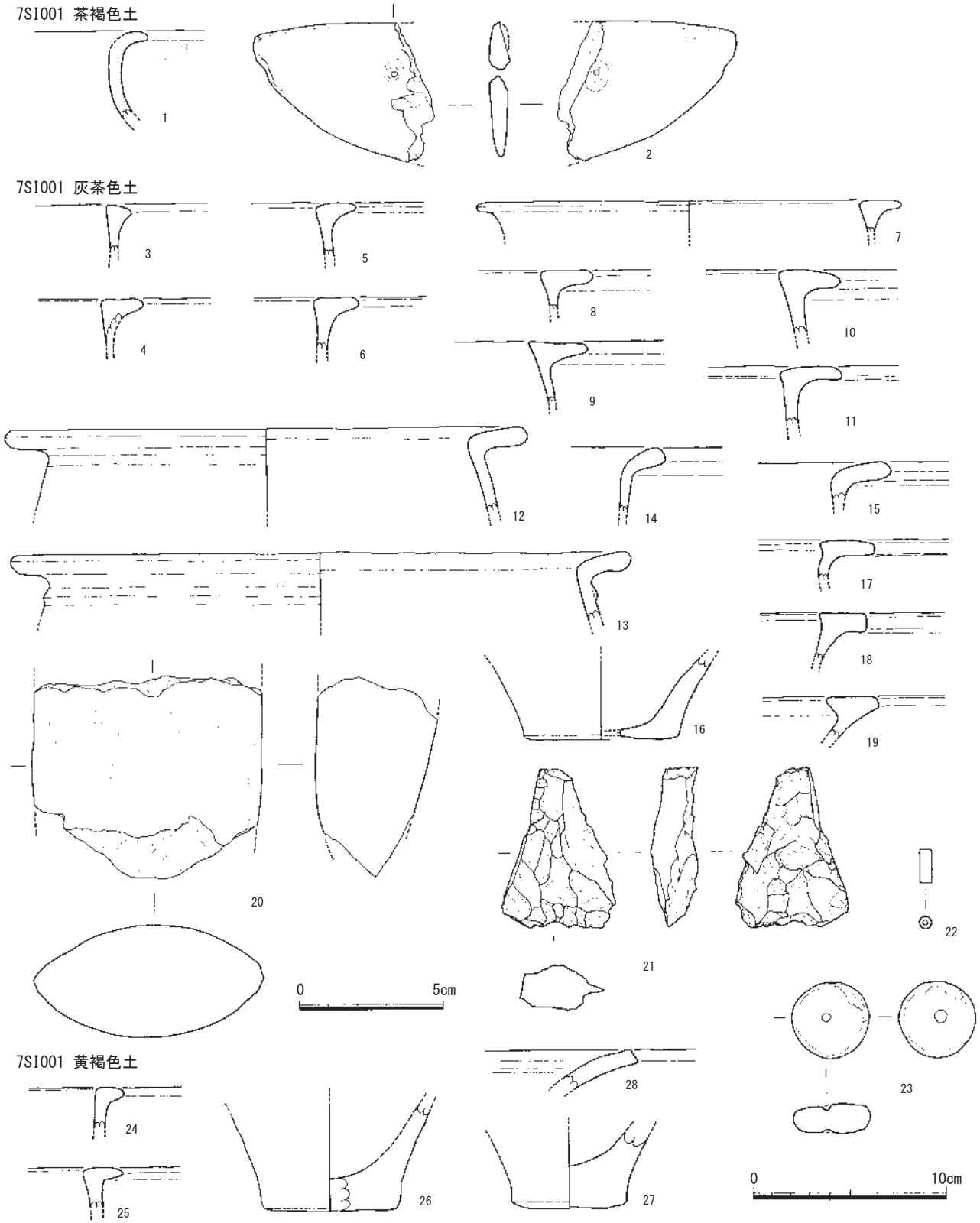


Fig.68　7SI001 茶褐色土・灰茶色土・黄褐色土出土遺物実測図（1/3、石製品は 1/2）

角形の口縁部である。7 は復元口径 22.0cm。11 は逆 L 字形の口縁部で、口縁部内面もヨコナデが強く、稜線がしっかりしている。12 ～ 15 は口縁部を逆 L 字形に曲げるが、内側に明瞭な稜線を付けない。色調は黄褐色を呈する。12 は復元口径 27.0cm。外面に僅かにタテハケが残る。13 は口縁部下に低い断面三角形の突帯を巡らす。復元口径 32.0cm。16 は僅かに上げ底で、復元底径 8.0cm。外面は橙色を呈し、内面には炭化物が付着する。

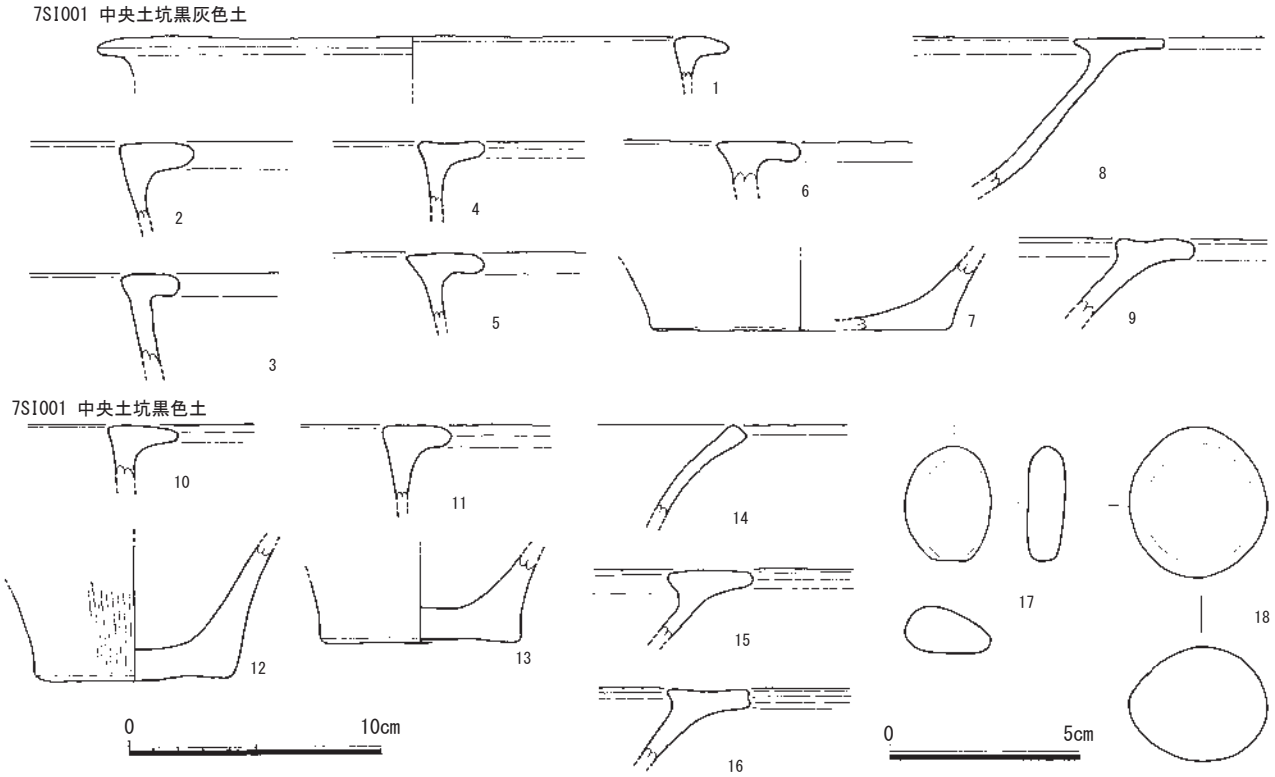


Fig.69　7SI001 中央土坑出土遺物実測図（1/3、17・18 は 1/2）

壺（17 ～ 19）　口縁部は粘土を貼付し肥厚させ、さらに内側に稜線を付け突出させる。全体的に磨滅し調整不明。胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は淡橙色を呈する。

石製品

石斧（20）　両端を大きく欠損する。現存長 6.9cm、幅 7.9cm、厚さ 3.9cm。玄武岩製。

掻器（21）　側面が欠損する。現存長 5.5cm、最大幅 3.9cm、厚さ 1.6cm。内外面とも加工し、先端部を細かく加工し刃部を作り出している。安山岩製。

管玉（22）　縦 1.1 cm、径 0.4cm、中央に径 0.2cm の円孔が貫通する。石材は暗緑色を呈し、緑色凝灰岩製と推測される。

土製品

紡錘車（23）　径 4.0cm、厚さ 1.0cm。中央両面に径 0.4cm の円形の穴を開けるが、貫通していない。紡錘車の未完成品か。全面著しく磨滅する。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡灰色や灰黒色を呈する。

7SI001 黄褐色土出土遺物（Fig.68）

弥生土器

甕（24 ～ 27）　24 は口縁部を短く曲げ断面三角形とする。胎土は白色砂粒を多く含む。25 は逆 L 字形に曲げた口縁部で体部より薄い。26・27 は平坦な底部で、色調は淡橙色を呈する。内外面磨滅し調整不明。26 は平底で復元口径 7.0cm。27 は平底で復元口径 6.0cm。

壺（28）　外面磨滅するが、内面にはヨコハケが残る。色調は茶黒色を呈する。

7SI001 中央土坑黒灰色土出土遺物（Fig.69）

弥生土器

甕（1 ～ 7）　全体的に色調は淡橙色を呈する。内外面磨滅し調整不明。1・2 は断面が長い三角形の口縁部で、1 は復元口径 25.0cm。3 は短く逆 L 字形に曲げた口縁部で、外面に僅かにタテハケが残る。4 ～ 6 は口縁部が逆 L 字形で端部が若干垂れる。7 は復元底径 12.0cm。

高坏（8）　鋤形口縁で、胎土は砂粒を含むが精製されている。色調は淡橙色を呈する。全面磨滅し調

整不明。

高坏もしくは壺（9）　やや短い鋤形口縁で、色調は茶褐色を呈する。

7SI001 中央土坑黒色土出土遺物（Fig.69）

弥生土器

甕（10 ～ 13）　10 はやや長い断面三角形の口縁部で、色調が黄白色を呈する。11 は短めの逆 L 字形の口縁部である。12 は平底で、底径 7.8cm。13 は僅かに上げ底で、底径 8.0cm。

壺（14）　外反する直口縁である。内外面とも磨滅するが、外面の一部に丹塗りが残る。

高坏もしくは壺（15、16）　2 点とも口縁部に粘土を貼付し肥厚する。内外面磨滅し調整不明。15 の色調は黄白色を呈する。16 の色調は淡橙赤色を呈する。

石製品

丸石（17、18）　17 は丸く仕上げるが、人工物かどうか明確ではない。大きさは 3.1×2.2cm、厚さ 1.2cm。18 は全面的に丸く仕上げ、一部強く研磨している。大きさ 4.0×3.6cm、厚さ 3.0cm。

7SI001 底面ピット群出土遺物（Fig.70・71、Pla.15）

弥生土器

甕（1 ～ 37）　全体として内外面とも磨滅し調整不明。1 ～ 12 は口縁部が断面三角形。1・2 は S-249 下層より出土。3 は S-254 下層より出土。4 は外面屈曲部にヨコナデ調整が残る。S-384 より出土。5 は S-381 下層より出土。6 は S-328 より出土。7 は S-301 より出土。8 は S-266 より出土。9 は S-342 より出土。10 は S-268 より出土。11 は S-371 より出土。13 ～ 27 は口縁部が逆 L 字形。13 はやや短い口縁部で、復元口径 26.6cm。S-348 より出土。14 は S-328 より出土。15 は S-371 より出土。16 は S-268 より出土。17 は S-394 より出土。18 は復元口径 30.6cm。口縁直下はヨコナデが確認できる。S-279 より出土。19 は復元口径 26.6cm。口縁部上部に僅かにヨコハケが残り、その他はヨコナデ調整。S-336 より出土。20 は復元口径 26.8cm。S-361 より出土。21 は復元口径 26.0cm。S-311 より出土。22 は S-271 より出土。23 は S-408 より出土。24 は外面に僅かにタテハケが残る。S-273 より出土。25 は屈曲部外面にヨコナデが残る。S-316 より出土。26 は S-371 より出土。27 は S-301 より出土。28・29 は口縁部が逆 L 字形で端部が若干垂れている。28 は S-359 より出土。29 は S-371 より出土。30 は口縁部が明瞭な稜線を付けずに逆 L 字形に曲げる。屈曲部外面に僅かにヨコナデが残る。S-348 下層より出土。31 は厚い底部で、若干上げ底である。胎土は白色砂粒を多く含む。底径 6.3cm。S-256 より出土。32 ～ 35 は僅かに上げ底である。32 は S-269 より出土。33 は S-372 より出土。34 は若干上げ底の底部で、底径 6.6cm。S-266 より出土。35 は S-283 より出土。36・37 は平底である。36 は復元底径 8.0cm。S-254 より出土。37 は復元底径 7.8cm。外面には細かいタテハケが残る。S-341 より出土。

甕もしくは壺（38、39）　38 は丸味のある口縁部である。S-313 より出土。39 は若干上げ底気味で、復元底径 8.6cm。全面磨滅するが、外面に僅かにタテハケが残る。S-319 より出土。

壺もしくは高坏（40）　口縁部内面に粘土を貼付する。内外面磨滅し調整不明。S-348 より出土。

壺（41）　口縁部内面に粘土を貼付し、内側に突出させるが、外側への突出は小さい。S-357 より出土。

蓋（42）　内外面とも磨滅し調整不明。色調は白黄色を呈する。S-367 より出土。

石製品

石剣（43）　先端部と下半を欠損している。現存長 7.3cm、最大幅 2.6cm、厚さ 0.6cm。両面中央に鎬が作り出されている。全面が劣化する。泥岩製。S-469 より出土。

石包丁（44、45）　44 は一部欠損するが、ほぼ完形に近い。全面研磨され、2 ヶ所に紐穴を開ける。使い込んだためか細くなっている。大きさは 11.1 ㎝、幅 3.6cm、厚さ 0.85cm。暗紫色の輝緑凝灰岩製。

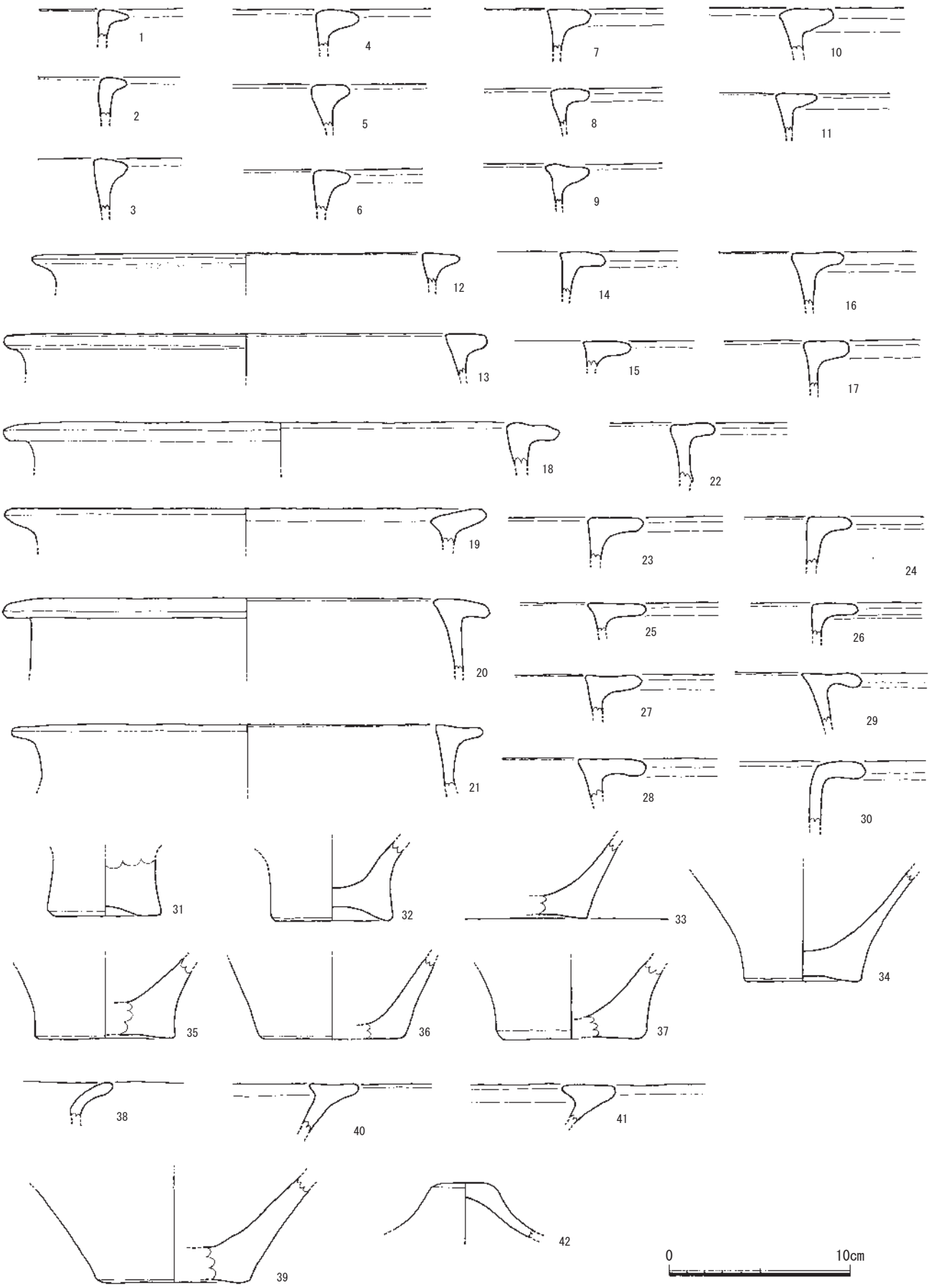


Fig.70　7SI001 底面ピット群出土遺物実測図① (1/3)

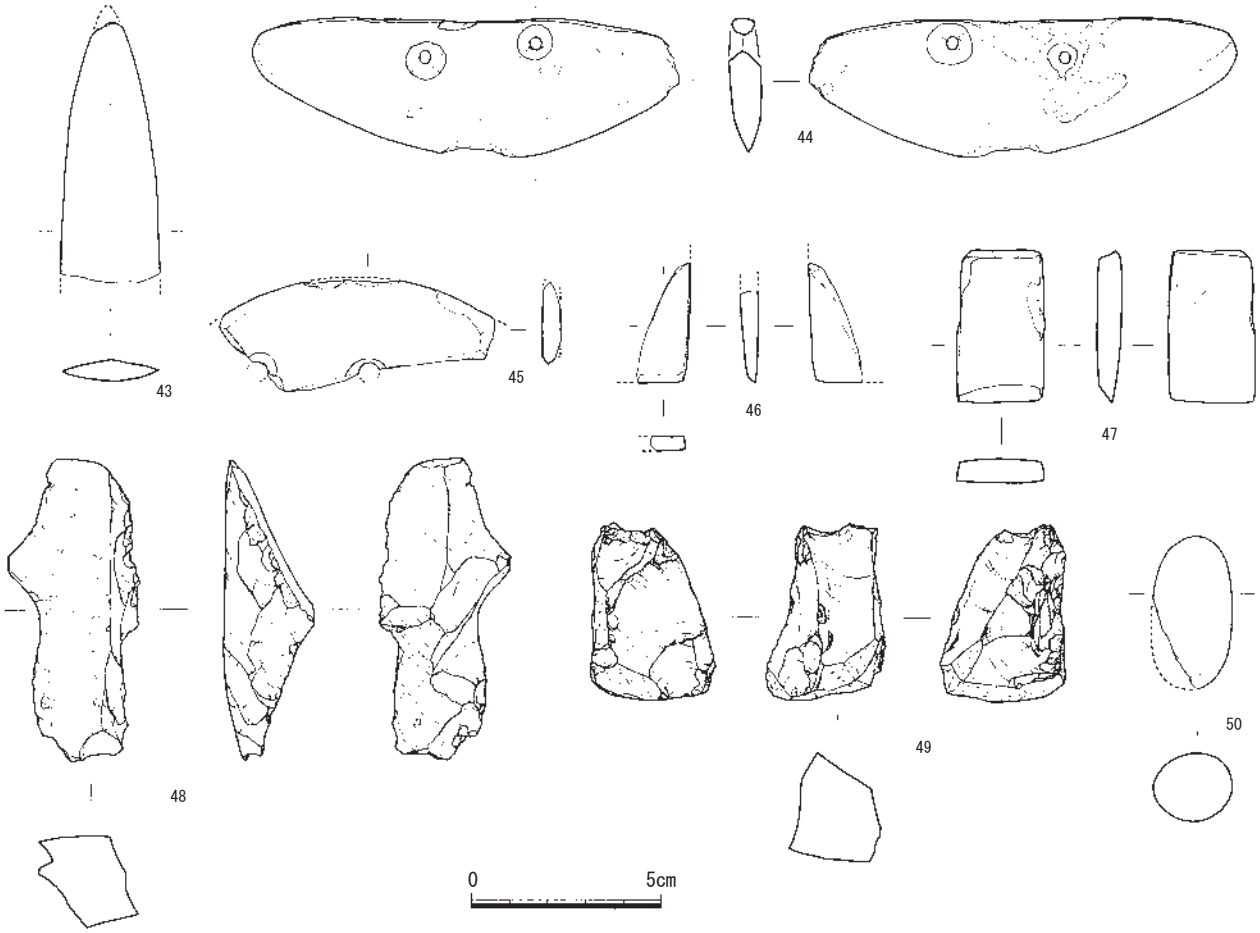


Fig.71　7SI001 底面ピット群出土遺物実測図②（1/2）

S-301 より出土。45 は欠損が目立つが、2 ヶ所に紐穴が穿たれている。刃部は欠損しているが、背部加工がみられる。泥岩製。S-371 より出土。

扁平片刃石斧（46、47）　46 は刃部付近の破片で、全面研磨するが、刃部はより研磨されている。厚さ 0.2 ～ 0.5cm。珪質泥岩製。S-369 より出土。47 は全面研磨され、さらに刃部を削り出す。ほぼ完形で、縦 4.0cm、幅 2.3cm、厚さ 0.65cm。珪質泥岩製。S-383 より出土。

剥片（48）　縦 8.0cm、横 2.4×3.4cm。安山岩製。S-371 より出土。

石核（49）　大きさは 4.6×3.1×3.0cm。一部自然面が残る。黒曜石製。S-371 より出土。

丸石（50）　丸味のある石材で、一部欠損する。人為的な加工かどうかは明確ではないが、調査地内でこのような石が出土しなかったため、人が何かしら使用したものと推測した。縦 4.0cm、径 2.1×1.8cm。S-367 より出土。

7SI035 出土遺物（Fig.72）

弥生土器

甕（1）　SK010 より出土。復元底径 7.8cm。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は橙黄色を呈する。

壺(2、3)　SK010 より出土。内外面とも磨滅し調整不明。2 は復元底径 9.0cm。色調は白黄色を呈する。3 は胴部付近で最大径に突帯を巡らす。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は橙黄色を呈する。

器台（4）　径 7.8cm の円柱で、中央に径 0.8 ～ 1.8cm の円孔が穿たれている。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は淡橙色を呈する。S-159 より出土。

石製品

扁平片刃石斧(5)　上半部を欠損する。全面研磨し、さらに刃部を作り出している。現存長 4.3cm、幅 3.1

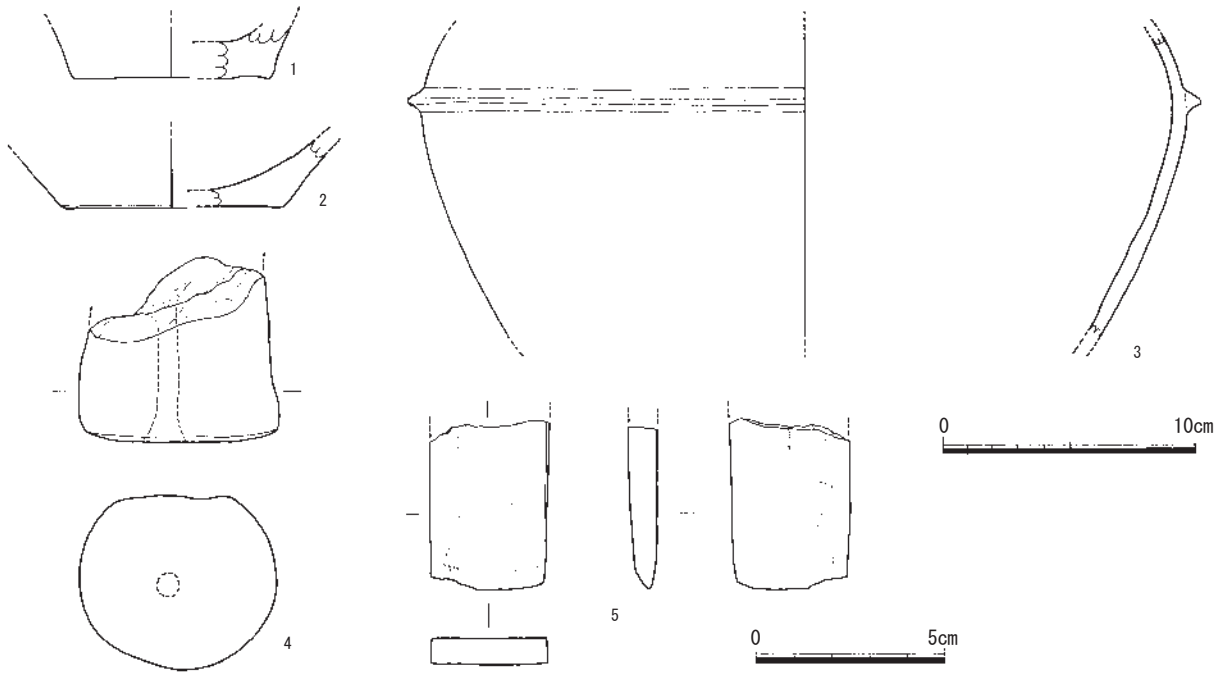


Fig.72　7SI035 出土遺物実測図（1/3、5 は 1/2）

cm、厚さ 0.75cm。珪質泥岩製。S-71 より出土。

掘立柱建物

7SB015a 出土遺物（Fig.73）

弥生土器

甕（13）　口縁部はやや長い断面三角形を呈する。内外面とも磨滅し調整不明。

7SB015b(S-133) 出土遺物（Fig.73）

弥生土器

甕（14）　口縁部は明確な稜線を付けず曲げる。色調は黄白色を呈する。

高坏もしくは壺（15）　口縁部を肥厚させ、断面三角形に仕上げる。

7SB015c 出土遺物（Fig.73）

弥生土器

甕（16、17）　16 は口縁部を肥厚させたような断面三角形を呈する。色調は白黄色を呈する。17 は内湾する口縁部で、粘土を貼付し口縁部内側を長く引き出している。色調は黄茶色を呈する。

壺もしくは高坏（18）　口縁部を肥厚させ、口縁部内側を短く突出させる。

7SB015e 出土遺物（Fig.73）

弥生土器

甕(19)　逆L字形の口縁部で、端部が若干垂れる。内側端部を強くヨコナデし、稜線を作り出している。

7SB015f 出土遺物（Fig.73）

弥生土器

甕（20、21）　20は短い口縁部。21は厚い底部で、底面中央を僅かに上げ底としている。底径5.5cm。

7SB015g 掘り方出土遺物（Fig.73）

弥生土器

甕（22、23）　2点とも口縁部が断面三角形。色調は淡橙黄色を呈する。内外面とも磨滅し調整不明。

小壺（24）　平坦な底部で内外面磨滅し調整不明。

7SB040a 出土遺物（Fig.73、Pla.15）

弥生土器

甕（1～3）　1の口縁部は逆L字形で、口縁部下に低い断面三角形の突帯を巡らす。2の口縁部は短く屈曲し、内側にも突出が目立ち、断面がT字形のような形状をなす。3の口縁部は逆L字形で、端部が垂れている。

木製品

柱材(4)　径23.5～26.0㎝、残存高34.5cm。底面は大きく削り調整し、その痕跡を明瞭に残す。また、側面下端には伐採時のものとみられるカット痕が残る。側面に樹皮は残っていない。

7SB040b 出土遺物（Fig.73）

弥生土器

甕（5～8）　5はやや長い断面三角形。6の口縁部は逆L字形で、端部が垂れている。7・8は平底の底部で、7は内面に薄く炭化物が付着し、外面には僅かにタテハケが残る。

小甕（9）　くの字形の口縁部で、色調は淡黄白色を呈する。

甕もしくは壺（10）　やや薄い体部で、内外面磨滅し調整不明。

壺（11）　肩部付近の破片。内外面磨滅し調整不明。

木製品

柱材（12）　直径23.6㎝、残存高32.0cm。底面に僅かにカット痕が残る。側面に樹皮や加工痕は残っていない。

7SB045b(S-436) 出土遺物（Fig.73）

弥生土器

甕（25）　断面三角形の口縁部で、内外面磨滅し調整不明。

石製品

窪み石（26）　大きさは9.3×8.9cm、厚さ5.7cm。全体として表面は粗く未加工であるが、中央に径3.5cm、深さ0.6cm程の円形状の窪みがあり、若干研磨される。花崗岩製。

7SB045e(S-392) 出土遺物（Fig.73）

弥生土器

甕（27、28）　27は断面方形状の厚い底部。復元底径6.0cm。28は厚く高い底部で体部との境はくびれる。内部には有機物が付着している。復元底径7.0cm。

7SB045f(S-464) 出土遺物（Fig.73）

弥生土器

甕（29）　欠損が目立つが、厚い底部である。

7SB055a 出土遺物（Fig.73）

弥生土器

甕もしくは壺（30）　平底の底部。

7SB055b 出土遺物（Fig.73）

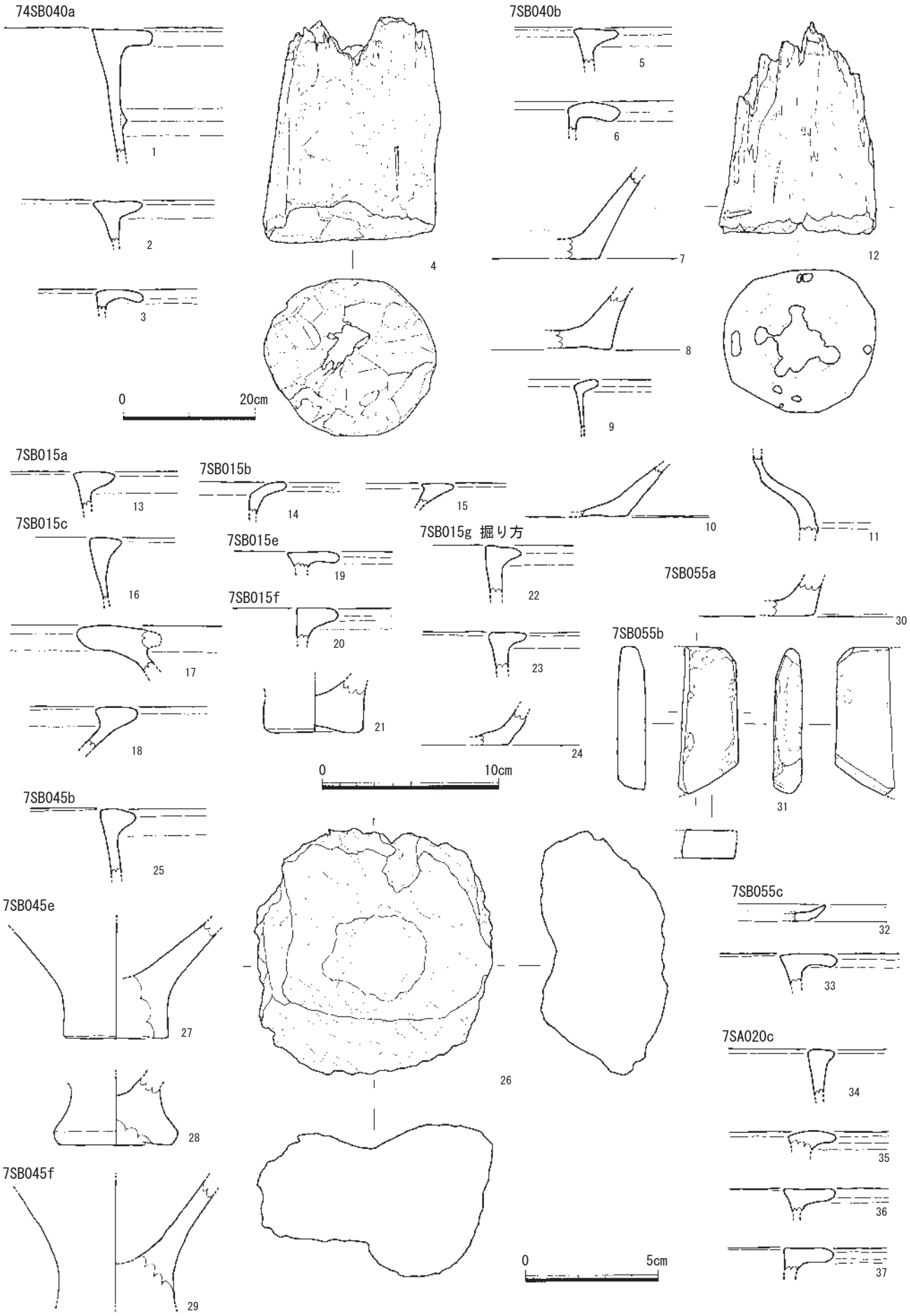


Fig.73　7SB015・040・045・055、7SA020 出土遺物実測図（1/3、4・12 は 1/8、26・31 は 1/2）

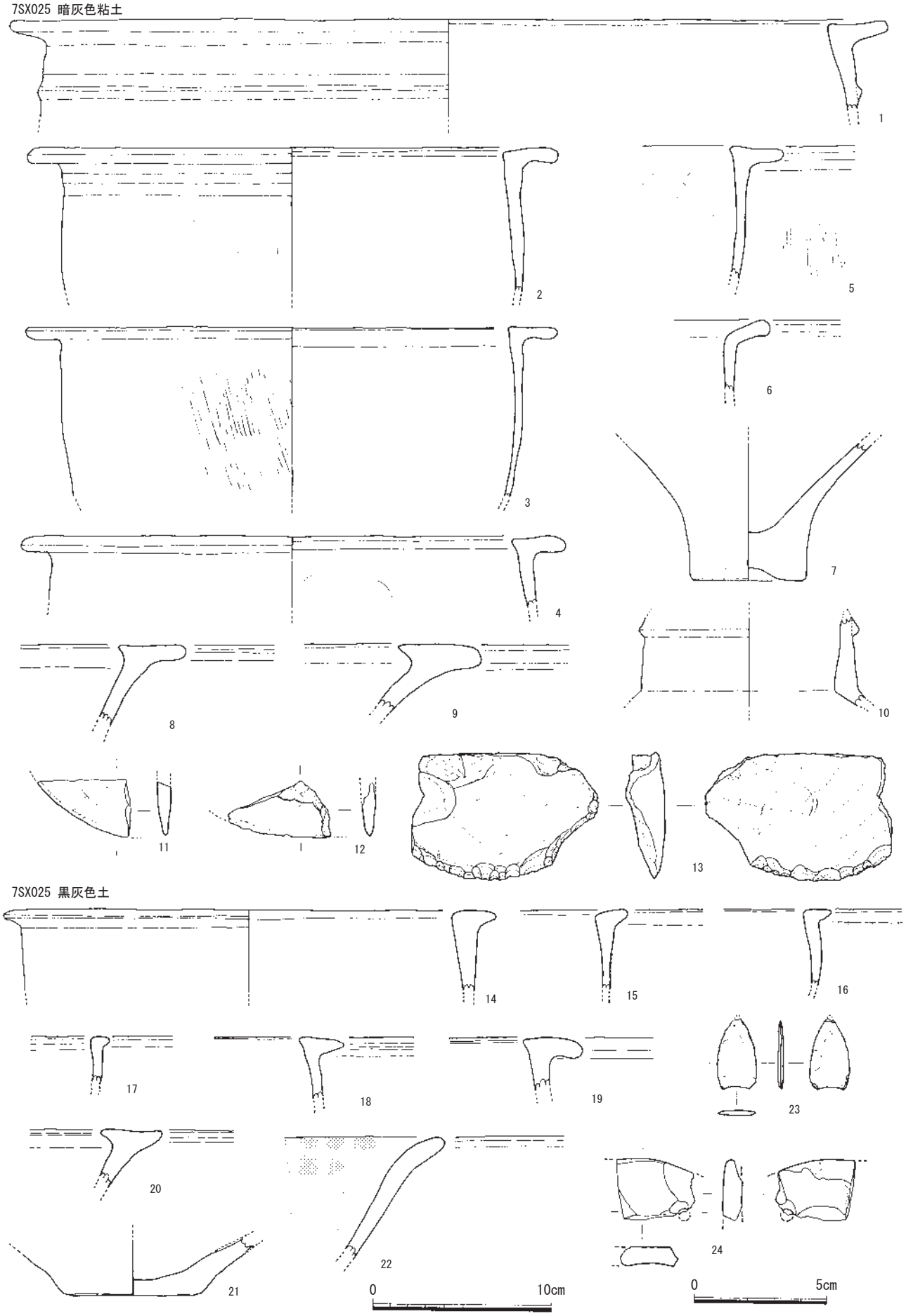


Fig.74　7SX025 暗灰色粘土・黒灰色土出土遺物実測図（1/3、石製品は 1/2）

石製品

砥石（31）　現存する大きさは5.5×2.2cm、厚さ1.1㎝。1面を除いて全面研磨する。片刃石斧の二次加工品の可能性がある。珪質泥岩製。

7SB055c 出土遺物（Fig.73）

土師器

小皿a（32）　器高1.0cm。内外面磨滅し調整不明。色調は淡橙色を呈する。

弥生土器

甕（33）　口縁部は逆L字形で、端部が垂れている。

柵列

7SA020c 出土遺物（Fig.73）

弥生土器

甕（34～37）　全体的に磨滅し調整不明。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は淡橙色を呈する。34は肥厚させた程の短い口縁部。35～37は逆L字形の口縁部である。

流路

7SX025 暗灰色粘土出土遺物（Fig.74）

弥生土器

甕（1～7）　1～5は口縁部が逆L字形である。1は復元口径49.2cm。口縁直下外面に低い断面三角形の突帯を巡らす。2は復元口径29.8cm。口縁端部が若干垂れる。外面には細かいタテハケがうっすら残る。3は復元口径29.8cm。外面タテハケ。4は復元口径28.6cm。現存範囲はヨコナデやナデ調整で、内面に指頭圧痕が残る。5は口縁部が逆L字形で、外面タテハケ調整。6は稜線を付けずに口縁部を逆L字形に屈曲させる。7は厚い底部で上げ底とする。外面に僅かにタテハケが残る。底径6.3cm。

壺（8）　鋤形口縁で、磨滅し内外面とも調整不明。

高坏もしくは壺（9）　口縁部に粘土を貼付し肥厚させる。内側を大きく突出させる。高坏もしくは壺である。

壺（10）　頸部は直上しながら薄くなる。口縁部は欠損するが、口縁部が断面三角形とする。内外面ヨコナデ調整。

石製品

石包丁（11、12）　2点とも大きく欠損するが、刃部側の破片である。11は暗紫色の輝緑凝灰岩製。12は泥岩製。

掻器（13）　長辺の端部両面を細かく加工し、刃部を作り出している。大きさは4.85×7.05cm、厚さ1.5cm。安山岩製。

7SX025 黒灰色土出土遺物（Fig.74）

弥生土器

甕(14～19)　14～17は断面三角形の口縁部。14は復元口径25.6cm。外面に僅かにタテハケが残る。18はやや長い断面三角形の口縁部。19は逆L字形で、端部が若干垂れる。

壺（20、21）　20は口縁部内側に粘土を貼付し突出させる。全面ヨコナデ調整。21は平らな底部で、復元底径7.7cm。外面底部近くには赤色顔料が残存する。

鉢（22）　口縁部が若干曲げる。全体的に磨滅するがナデが残る。内面には指頭圧痕が残り、炭化物が付着する。

石製品

石鏃（23）　先端が欠損し、現存長2.65cm、最大幅1.5cm、厚さ0.2cm。全面研磨されている。緑灰

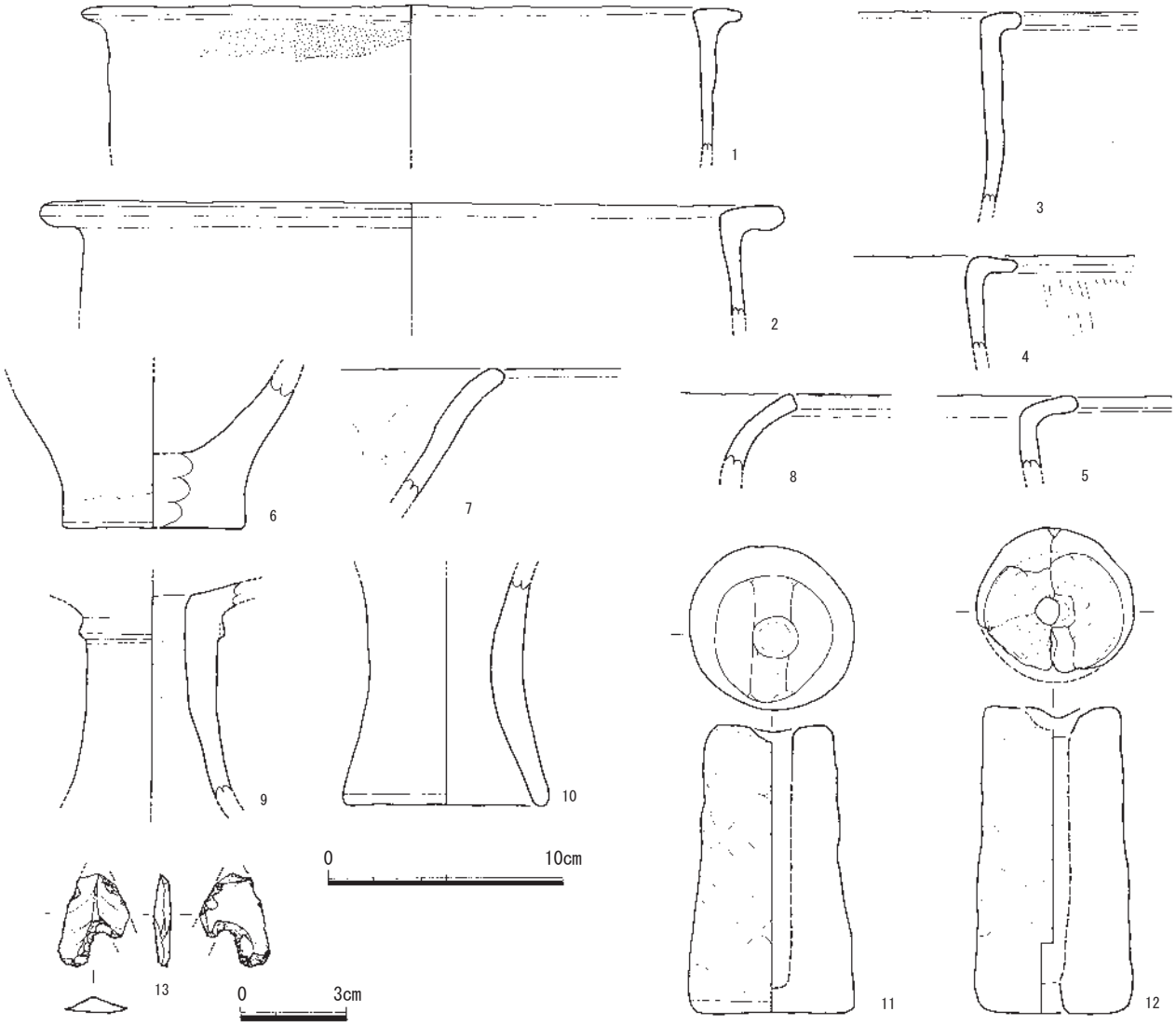


Fig.75　7SX025 明灰色粘土出土遺物実測図（1/3、13 は 1/2）

色の滑石製である。

石包丁（24）　石包丁の一部で、紐穴が確認できる。両面研磨される。厚さ 0.75cm。

7SX025 明灰色粘土出土遺物（Fig.75、Pla.15）

弥生土器

甕（1 ～ 6）　1 は復元口径 28.0cm。口縁部断面はやや長い三角形で、体部に張りがなく直線的である。外面タテハケ、その他はヨコナデ調整。口縁部外面直下に煤が付着する。2 ～ 5 は口縁部が稜線を付けずにＬ字形に曲げている。体部に張りがなく直線的である。2 は復元口径 31.6cm、外面に僅かにタテハケが残る。3・4 は外面タテハケ。6 は平底で若干厚い底部である。復元底径 7.8cm。

壺（7、8）　7 には指頭圧痕が残り、口縁部はヨコナデ調整。8 は緩やかに外反する口縁部で、内外面ともナデ調整。口縁端部には刻み目が施されている。

高坏（9）　脚部外面には縦方向のナデ、内面はナデ調整。脚部上部に低い突帯を巡らす。

器台（10）　下端の復元径 8.8cm。外面磨滅、内面ナデ調整。

支脚（11、12）　11 は器高 12.2 ㎝、上部径 5.1 ㎝、底部径 7.0cm。中央には径 1.6cm 程の円孔があるが、貫通していない。また、上面には幅 1.5cm ほどの浅い溝が設けられている。胎土は白色砂粒を含み、色調は黄橙色を呈する。外面は指押さえが明瞭に残る。12 は器高 13.0 ㎝、上部径 5.8 ㎝、底部径 7.0cm。中央には径 1.5cm 程の円孔が貫通する。また、上面には浅い溝が設けられている。外面は指押さえが明

瞭に残る。色調は黄褐色を呈する。

石製品

石鏃（13）　先端部と基部の一部を欠損する。現存長 2.7cm、厚さ 0.5cm。黒曜石製。

7SX025 黒灰色粘土出土遺物（Fig.76 ～ 87、Pla.15）

弥生土器

甕（1 ～ 120）　1 ～ 85 は口縁部の破片。1 ～ 8 は稜線を付けずに曲げる口縁部。1 は如意形の口縁部で、内面はヨコナデ、外面はタテハケで低い三角形突帯を巡らす。2 は如意形の口縁部で、端部には刻み目が施され、煤が付着する。内面はヨコナデ、外面はタテハケで薄く煤が付着する。3 は復元口径 29.7cm。4 は外面タテハケ調整。7 は外面タテハケが僅かに残る。9 ～ 11 は僅かに突出する口縁部。9 の胎土は白色砂粒を多く含む。10 は外面に煤が付着する。11 は内面ナデ調整、外面はヨコナデで煤が付着する。12 ～ 41 は断面三角形もしくは若干長い三角形の口縁部。全体的に磨滅するが、外面調整が残るものはタテハケ、内面はほとんどがナデ調整。13 は外面に粗いタテハケがうっすら残る。17 は内外面ともナデ調整。18 は磨滅するが内外面ナデ調整か。20 は内外面ともハケ調整で、外面には煤がうっすら付着する。21 は外面に煤が付着する。22 は外面にうっすら煤が付着する。26 は外面に低い三角形突帯を巡らす。28 は口縁端部外面に刻み目を施し、外面に煤が付着する。29 は口縁部が細い三角形で、外面タテハケ調整。30 は復元口径 18.2 cm。口縁部には径 0.5cm の円孔が施されている。31 は復元口径 31.6cm。口縁部外面には刻み目を施す。内面上半部は粗いナデ、下半は使用で劣化する。外面はタテハケで焼きしまり黒光りし、口縁直下には煤が付着する。32 は復元口径 21.0cm。外面に断面三角形の低い突帯を巡らす。33 は復元口径 23.8cm。34 は復元口径 29.0cm。口縁端部下半に煤が付着する。35 は復元口径 25.0cm。口縁部下には煤が付着する。36 は復元口径 29.2cm。外面にはうっすらと煤が付着する。37 は復元口径 27.0cm。38 は復元口径 27.0cm。39 は復元口径 27.8cm。40 は復元口径 25.0cm。外面にはミガキを施し、2 条の三角形突帯が巡る。41 は復元口径 26.4cm。外面に 2 条の低い三角形突帯を巡らす。42 ～ 49 は僅かにくの字形に曲がった口縁部。42 は復元口径 24.6cm。43 は外面にうっすらと沈線が巡る。44 は復元口径 27.6cm。45 は復元口径 25.0cm。外面には僅かに煤が付着する。46 は復元口径 28.6cm。外面には煤が付着する。47 は復元口径 25.3cm。48 は復元口径 31.2cm。49 は復元口径 28.0cm。50・51 はやや短い逆 L 字形の口縁部。50 の外面には煤が付着する。52 ～ 72 は逆 L 字形の口縁部。外面調整が残るものはタテハケ、内面も磨滅が目立つがほとんどがナデ調整。57 は復元口径 21.6cm。外面がヨコナデで、低い三角形突帯を巡らす。58 は復元口径 28.6cm。59 は復元口径 29.4cm。外面には低い三角形突帯が巡り、口縁下に僅かに煤が付着する。60 は復元口径 29.2cm。61 は復元口径 29.4cm。62 は復元口径 29.4cm。63 は復元口径 29.6cm。外面に煤がうっすら付着する。64 は復元口径 29.7cm。外面に断面三角形の低い突帯を巡らす。65 は復元口径 30.0cm。65 は復元口径 30.6cm。67 は復元口径 31.0cm。口縁部下に煤が付着する。68 は復元口径 32.0cm。69 は復元口径 32.0cm。外面には煤が厚く付着する。70 は復元口径 32.8cm。外面ヨコナデ。71 は復元口径 33.0cm。72 は復元口径 45.0cm。外面に低い三角形突帯を巡らす。73 ～ 81 は端部がやや垂れた逆 L 字形の口縁部。73 は復元口径 23.6cm。74 は復元口径 29.2cm。口縁下の一部にうっすらと煤が付着する。75 は復元口径 31.0cm。口縁端部の一部に煤が付着する。76 は復元口径 31.4cm。口縁部外面に煤が付着する。77 は復元口径 31.8cm。口縁部には煤が付着する。78 は復元口径 32.0cm。79 は復元口径 32.8cm。外面に低い三角形突帯を巡らし、部分的に煤が付着する。82 ～ 85 は胴部に張りがあるため、口縁部を鋭角に曲げる。82 は復元口径 43.4cm。口縁下に外面に低い三角形突帯を巡らす。口縁付近はヨコナデ、下半はタテハケ調整。84 は内外面ともナデ調整。

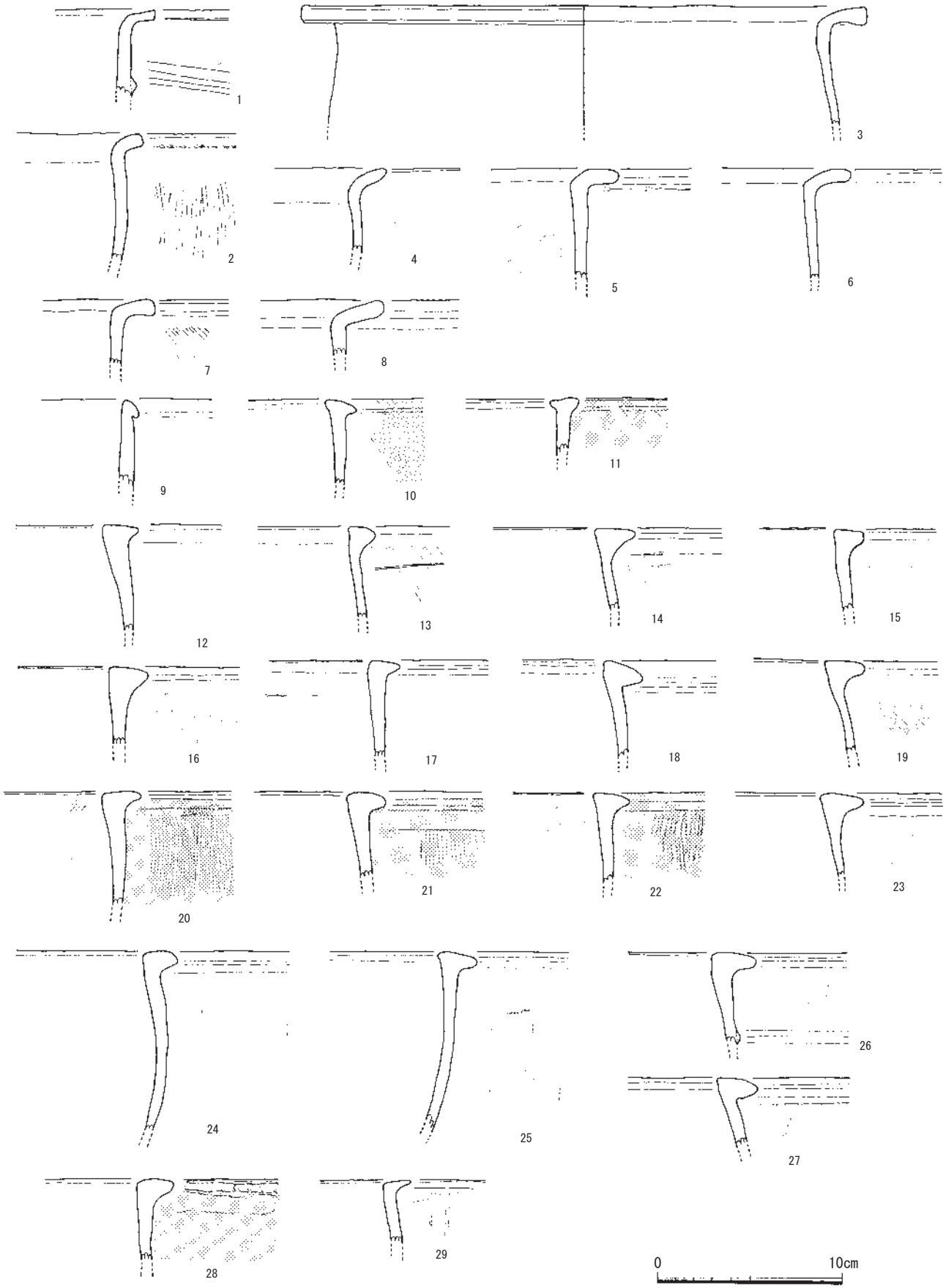


Fig.76　7SX025 黒灰色粘土出土遺物実測図① (1/3)

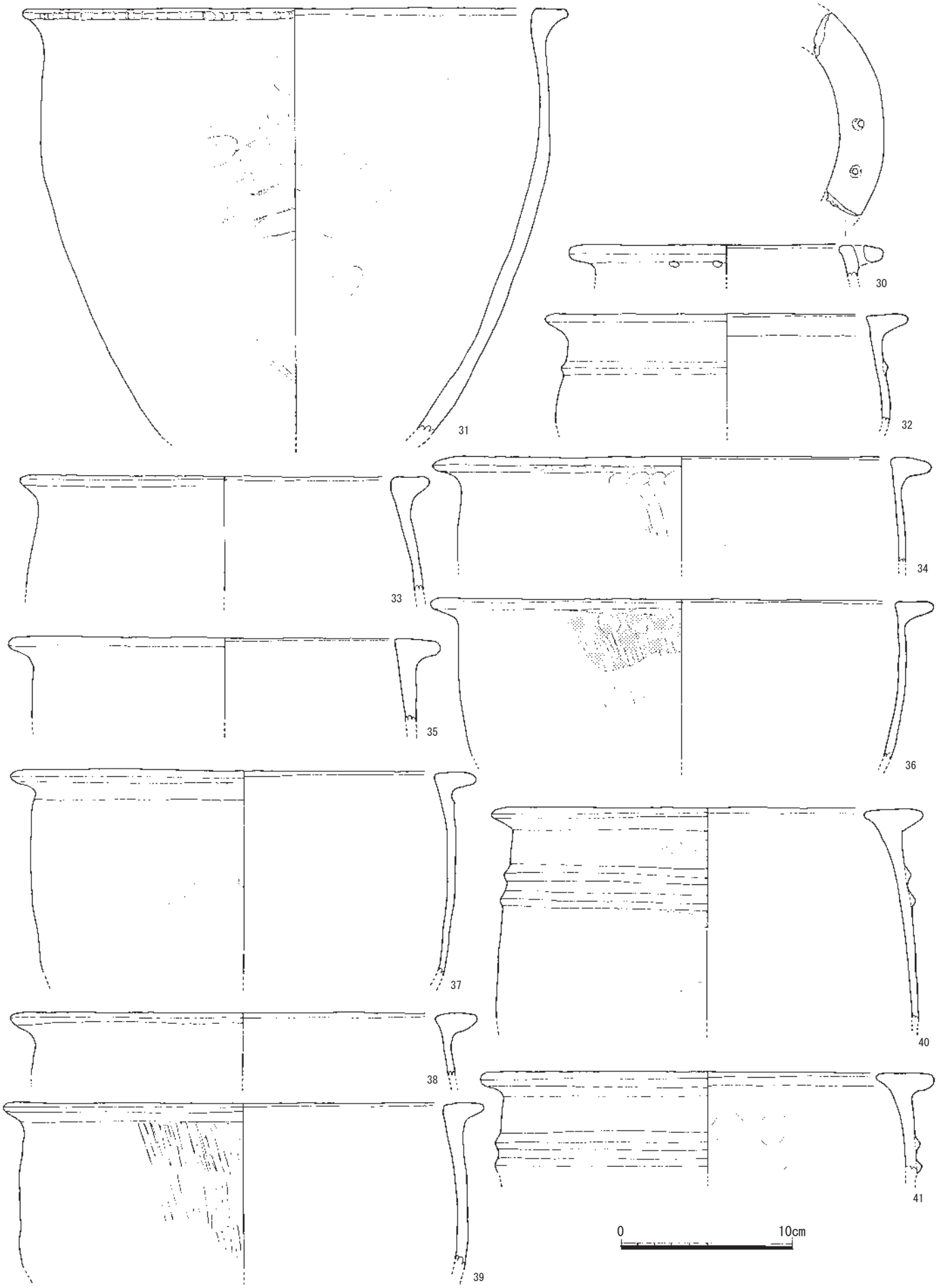


Fig.77　7SX025 黒灰色粘土出土遺物実測図② (1/3)

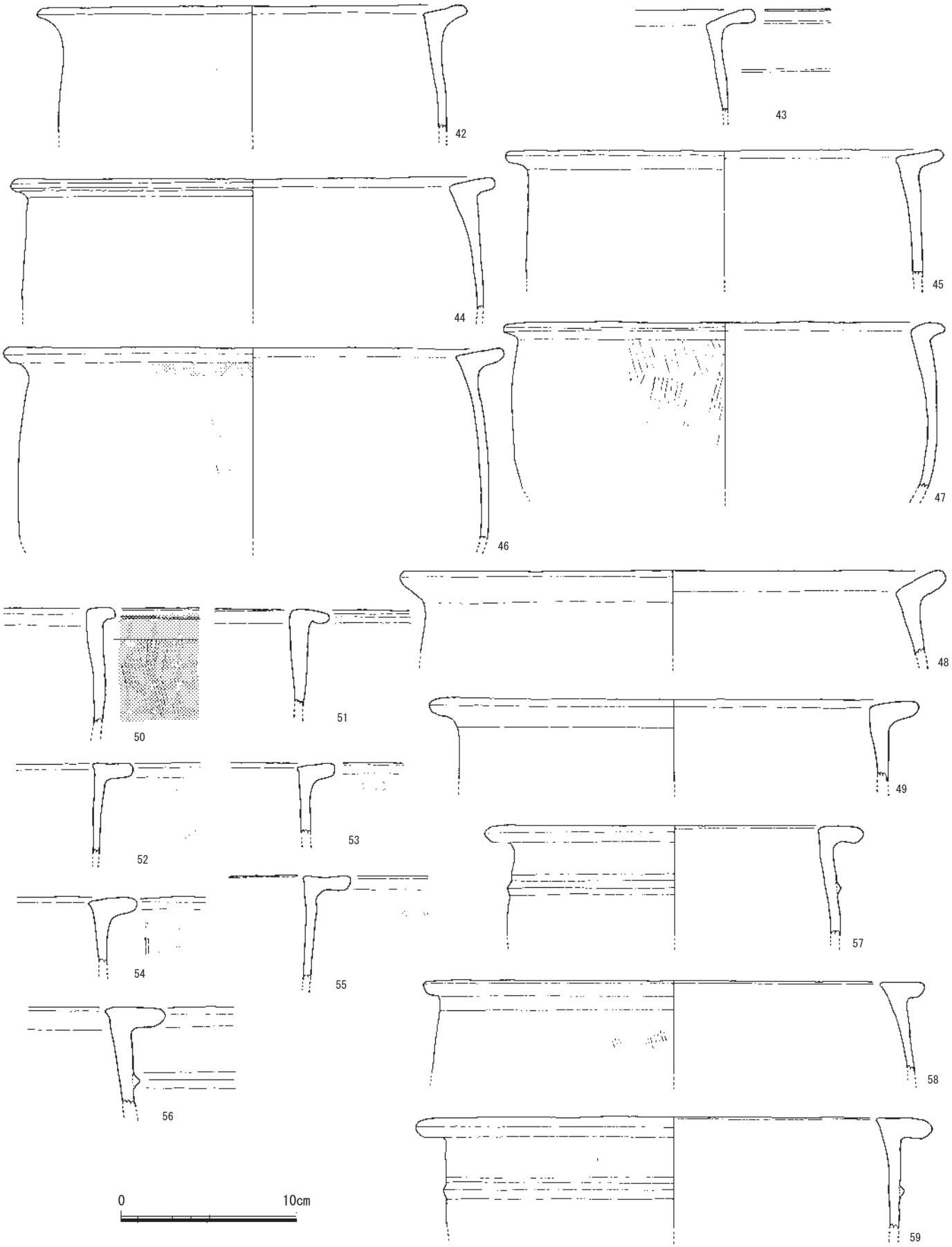


Fig.78　7SX025 黒灰色粘土出土遺物実測図③ (1/3)

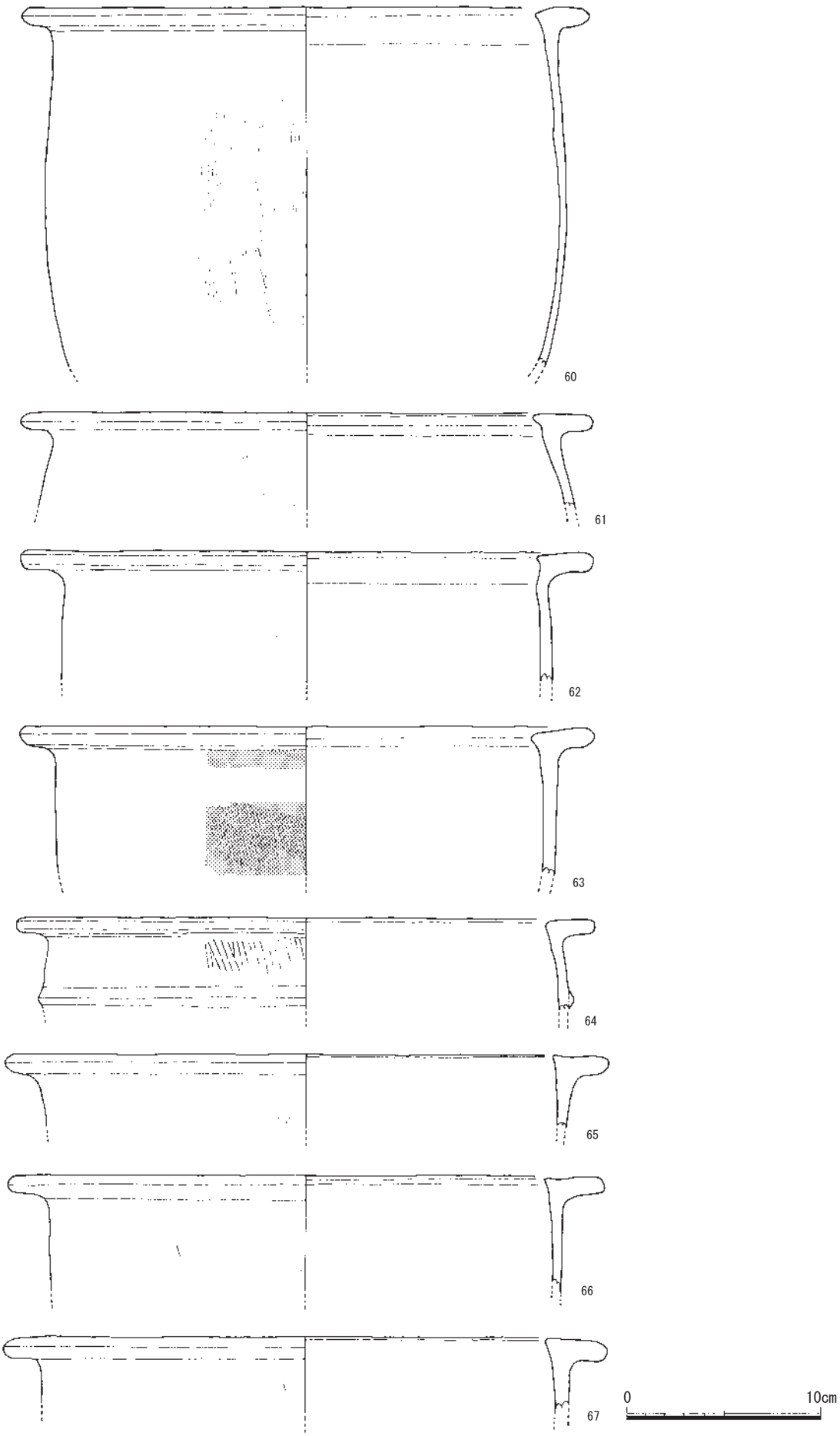


Fig.79　7SX025 黒灰色粘土出土遺物実測図④ (1/3)

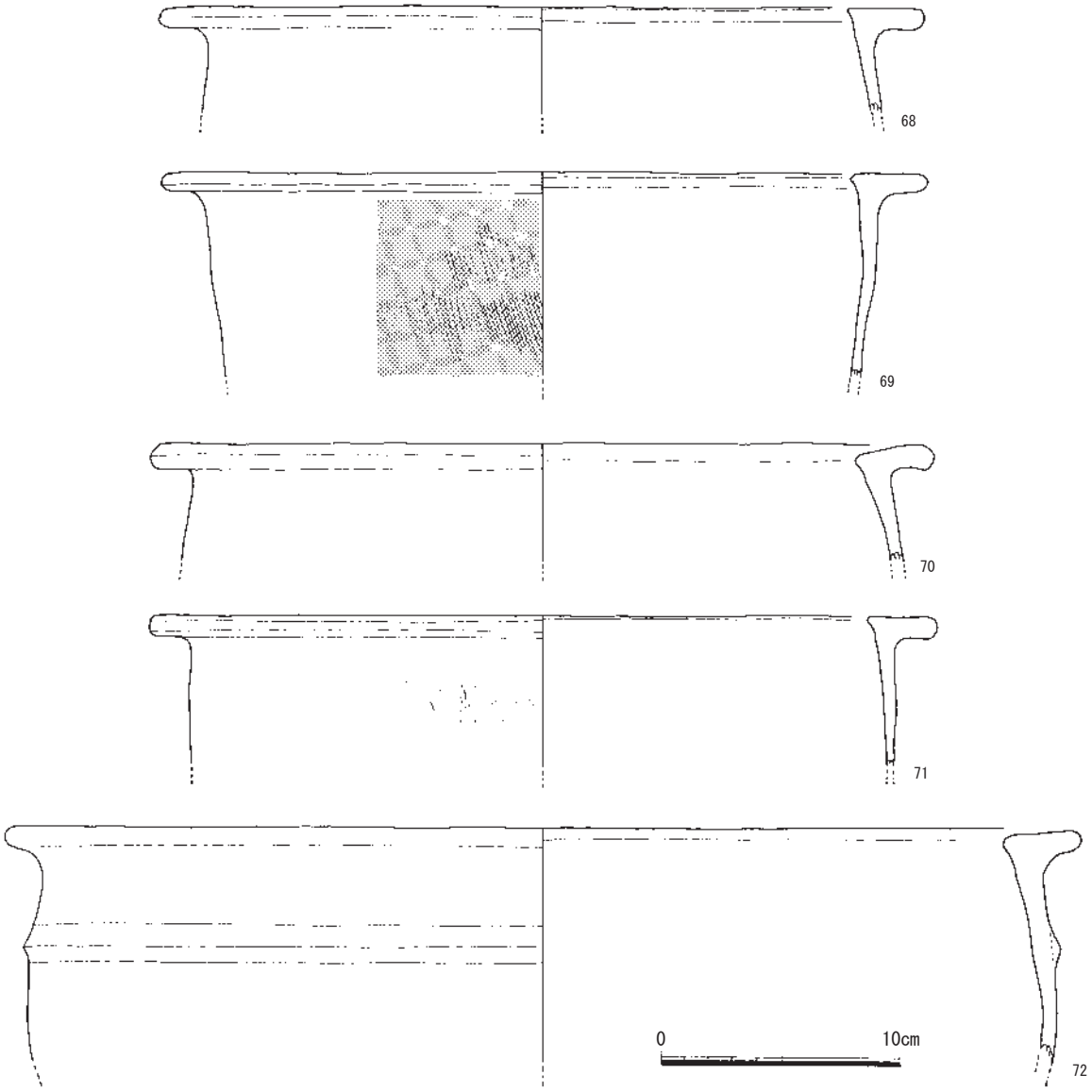


Fig.80　7SX025 黒灰色粘土出土遺物実測図⑤ (1/3)

86 ～ 121 は底部の破片である。外面タテハケ、内面はナデ調整である。86 ～ 96 は厚い底部で上げ底とする。86 は底径 6.4cm。外面はタテハケ調整。87 は底径 7.3cm。内面に黒褐色の有機物が付着する。88 は底径 7.7cm。底部のくびれ外面には指頭圧痕が残る。89 は底径 7.0cm。90 は復元底径 9.1 cm。91 は底径 6.6cm。92 は底径 6.2 cm。93 は底径 8.2 cm。94 は底部径 8.4cm。95 は復元底径 9.1cm。96 は底径 6.4cm。97 ～ 114 は平底だが、全体的に若干上げ底である。97 は底径 6.85cm。98 は復元底径 6.6cm。99 は底径 6.65cm。100 は復元底径 7.2cm。101 は底径 7.4cm。102 は底径 5.8cm。103 は底径 7.0cm。104 は底径 6.2cm。105 は底径 6.6cm。106 は復元底径 6.8cm。107 は底径 5.2cm。内面には有機物が付着する。108 は復元底径 10.4cm。109 は復元底径 7.2cm。110 は復元底径 6.6cm。111 は復元底径 7.0cm。112 は復元底径 10.5cm。外面は細かいタテハケ調整。113 は底径 9.3cm。114 は底径 6.4cm。外面タテハケ、内面ナデ調整。119 は外面タテハケの後やや粗いが細かいミガキを施す。内面には黒色付着物がみられる。外面底部は粗いナデ調整。

甕もしくは壺（115 ～ 120）　115 は復元底径 7.0cm。116 は底径 4.4cm。117 は復元底径 6.8cm。118 の外面はミガキと丹塗りを施す。復元底径 8.3cm。120 は底径 6.8cm。

甑（121）　焼成後に底部に径 1.6cm 程の孔を穿っている。復元底径 7.8cm。

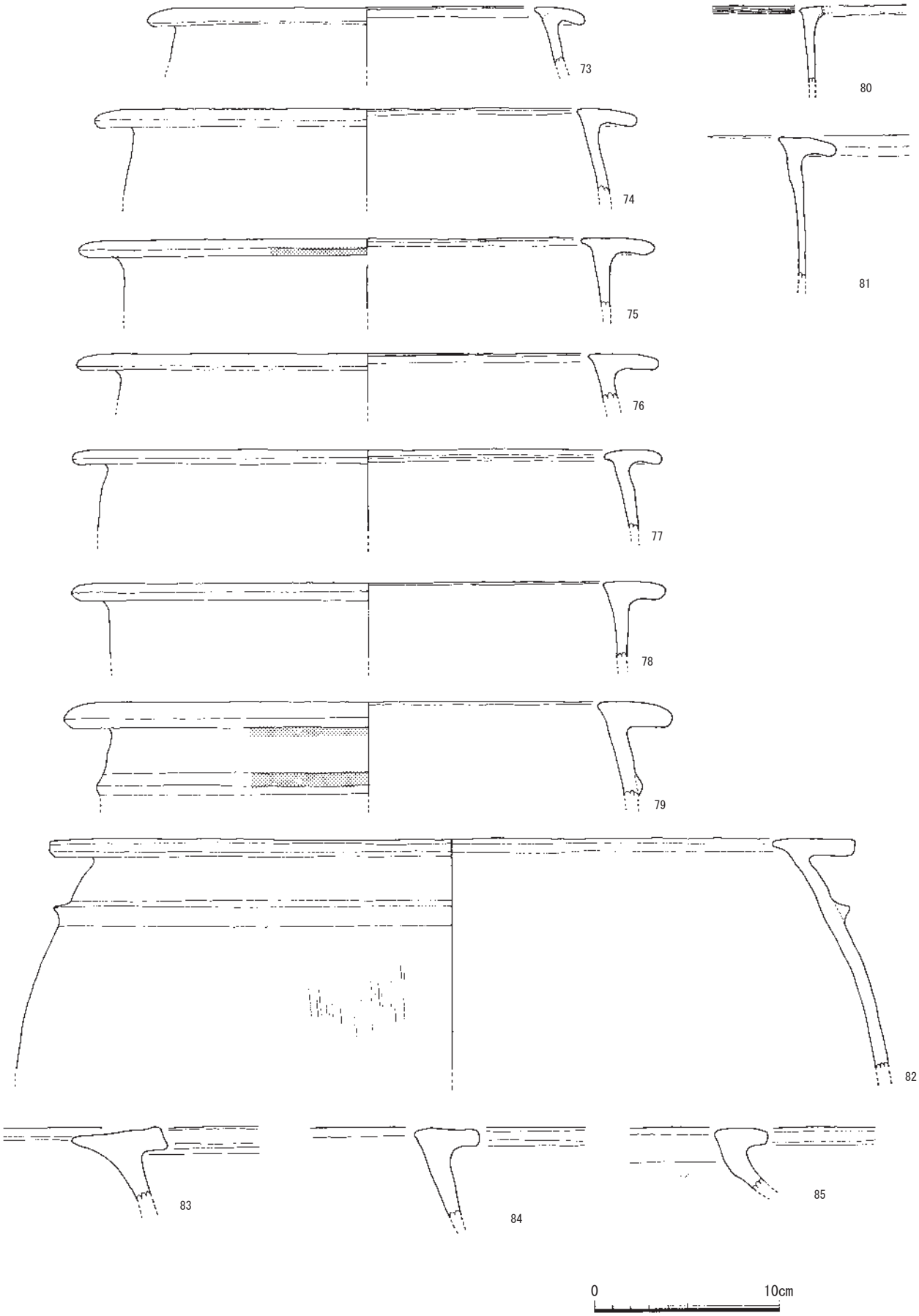


Fig.81　7SX025 黒灰色粘土出土遺物実測図⑥ (1/3)

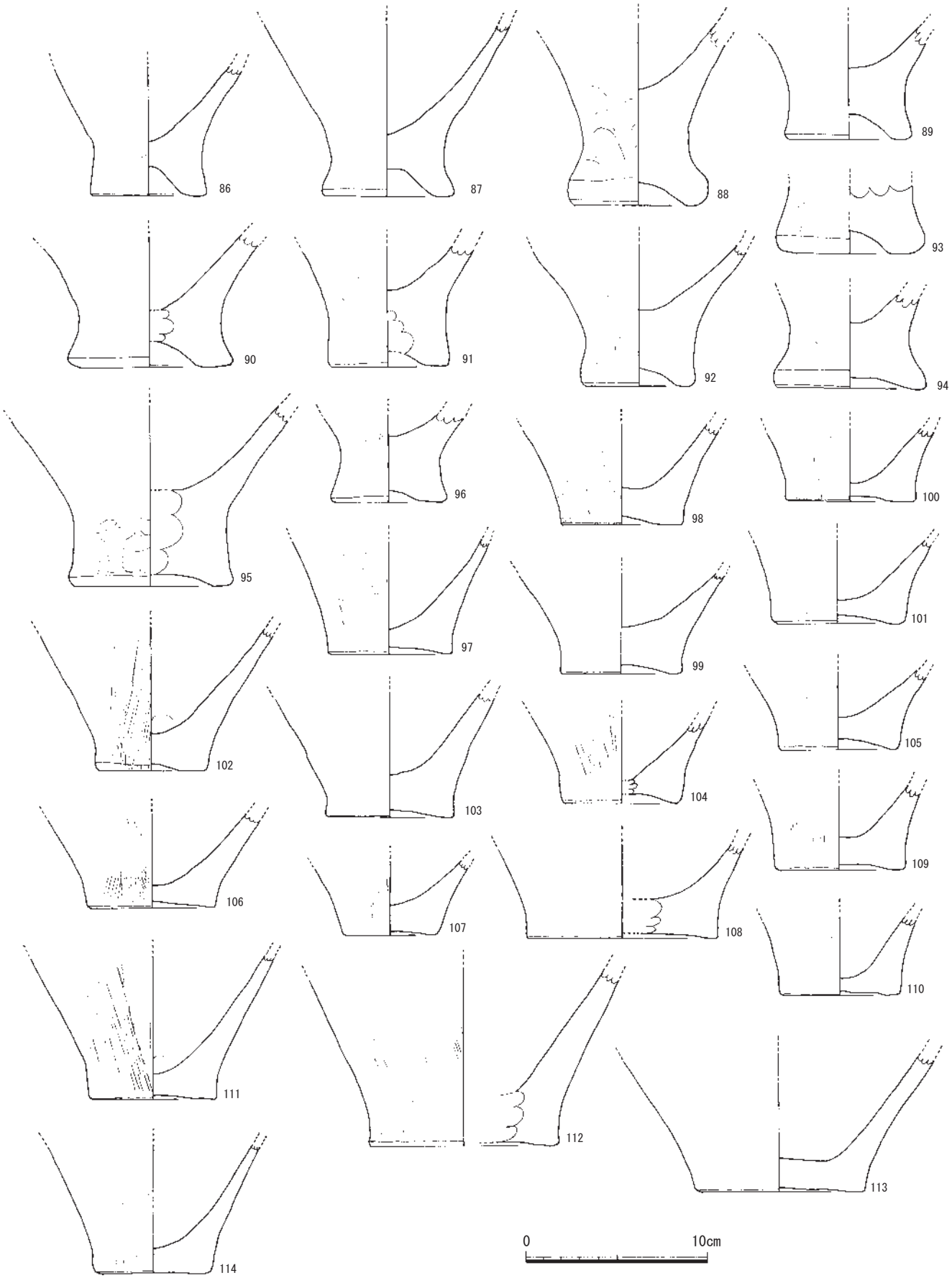


Fig. 82　7SX025 黒灰色粘土出土遺物実測図⑦ (1/3)

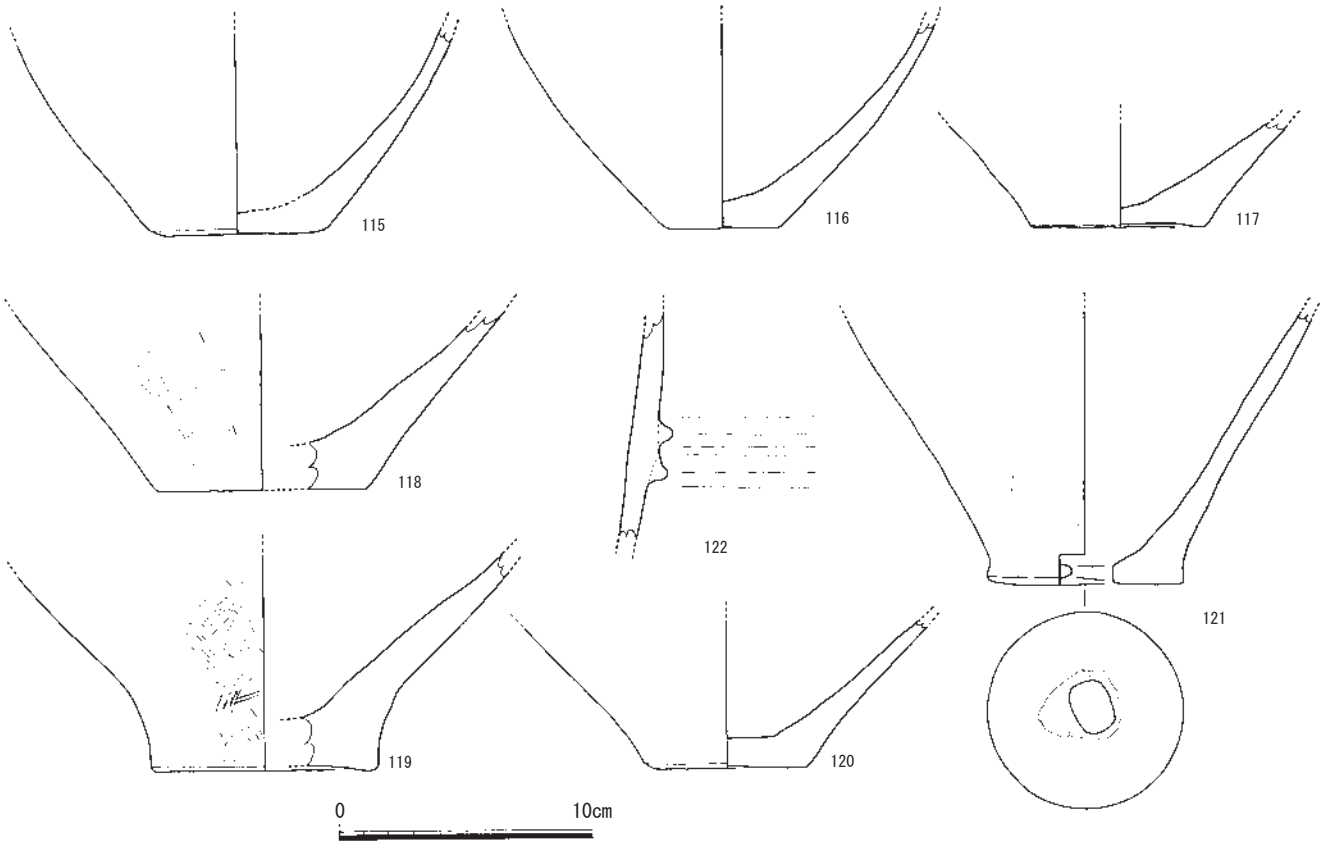


Fig.83　7SX025 黒灰色粘土出土遺物実測図⑧ (1/3)

甕もしくは鉢（122）　胴部の破片で、M 字状の突帯を巡らす。

壺（123 ～ 154）　123 ～ 131 は鋤形口縁。123 は復元口径 17.6cm。124 は復元口径 24.2cm。口縁部上面に丹塗りが残る。125 は復元口径 24.8cm。口縁端部には刻み目が施されている。126 は復元口径 25.8cm。127 は復元口径 26.2cm。内外面とも磨滅するがナデもしくはミガキ調整。128 は復元口径 27.4cm。129 は復元口径 28.0cm。130・131 は粘土を貼付し口縁部を肥厚させる。130 は端部に刻み目を施す。その他はヨコナデ調整。132 ～ 136 は外反する直口縁。132 は復元口径 20.8cm。133 は復元口径 14.0cm、器高 13.9cm、底径 6.0cm。体部最大径に突帯が巡り、突帯付近以下には煤が付着する。134 は復元口径 31.4cm。口縁部外面直下には暗文のようなミガキがみられる。内面に横方向のミガキが施されている。135 は復元口径 18.0cm。136 は内外面ともミガキもしくはハケ調整である。137・138 は短口縁。磨滅し調整不明。137 は復元口径 16.4cm。138 は復元口径 17.4cm。141・142 は頸部片である。141 は丁寧なナデもしくはミガキ調整。142 は頸部外面にうっすらとミガキが残る。体部外面には斑に丹塗りが残る。143 ～ 147 は胴部片である。143 は外面ヨコナデで M 字形の突帯を巡らす。144 は断面台形の低い突帯が 2 条巡らしている。145 は頸部の破片とみられ、内外面ともミガキの後に丹塗りされている。146 は胴部最大径とその上部の 2 ヶ所に断面三角形の突帯を巡らす。147 は外面ヨコナデで M 字形の突帯を巡らす。148 ～ 153 は底部の破片。148 は底径 6.4cm。外面は明橙色を呈する。丹塗りが劣化した状況か。149 は底径 7.15cm。150 は上げ底で、復元底径 6.8cm。外面には縦方向のミガキを施す。151 は復元底径 7.6cm。152 は底径 6.8cm。153 は復元底部径 3.8cm。外面はナデもしくはミガキ調整。内面は横方向のケズリ。

小壺（154 ～ 156）　154 は復元口径 12.2cm。155 は胴部中位に突帯を巡らす。内外面ともナデ調整、底部はケズリで、外面の半分ほどが黒斑である。復元底径 3.2cm。156 は復元底径 5.6cm。

二重口縁壺（139、140）　139 は口縁部がヨコナデ、その他はハケ調整。屈曲部外面には刻み目が施

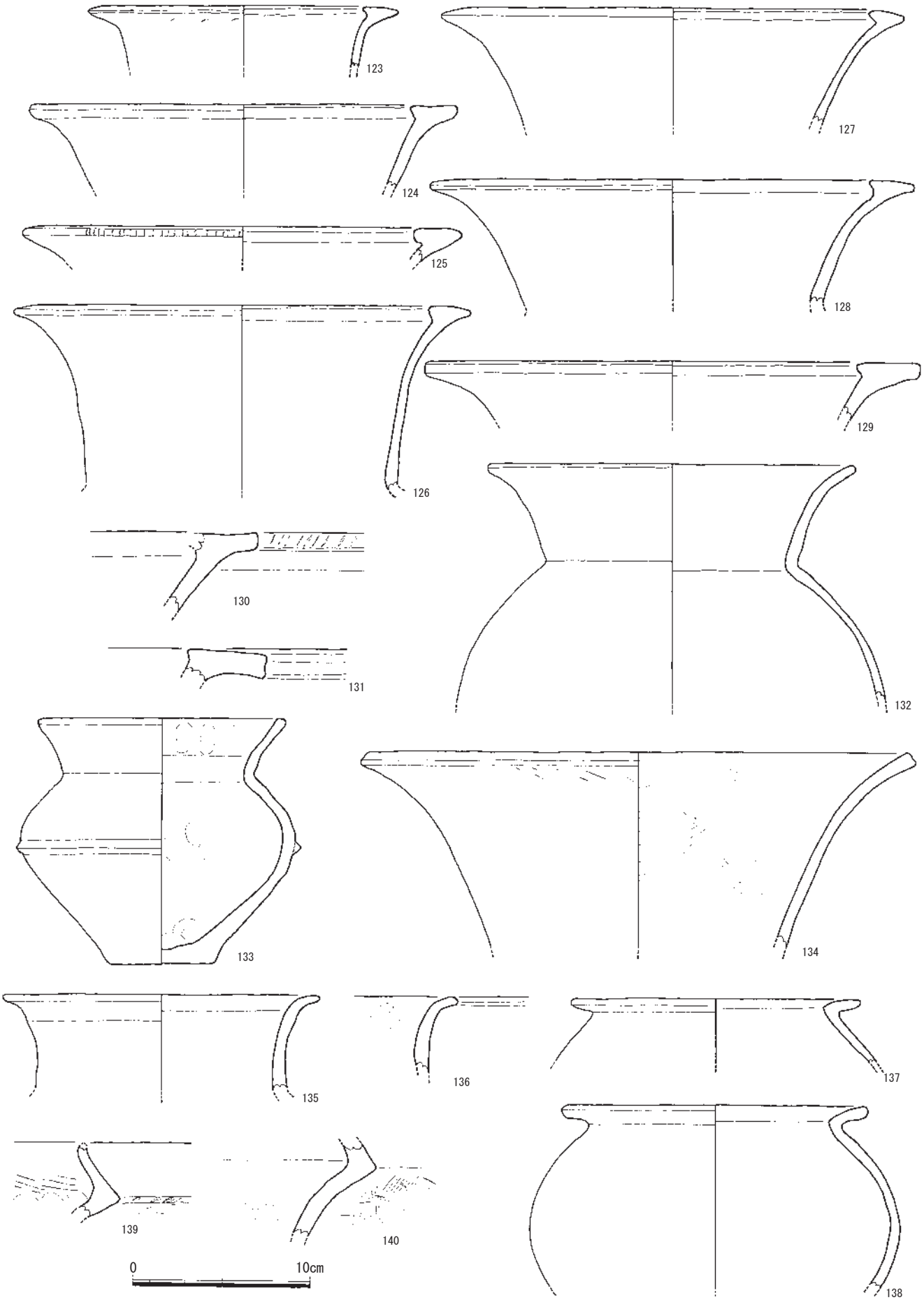


Fig. 84　7SX025 黒灰色粘土出土遺物実測図⑨ (1/3)

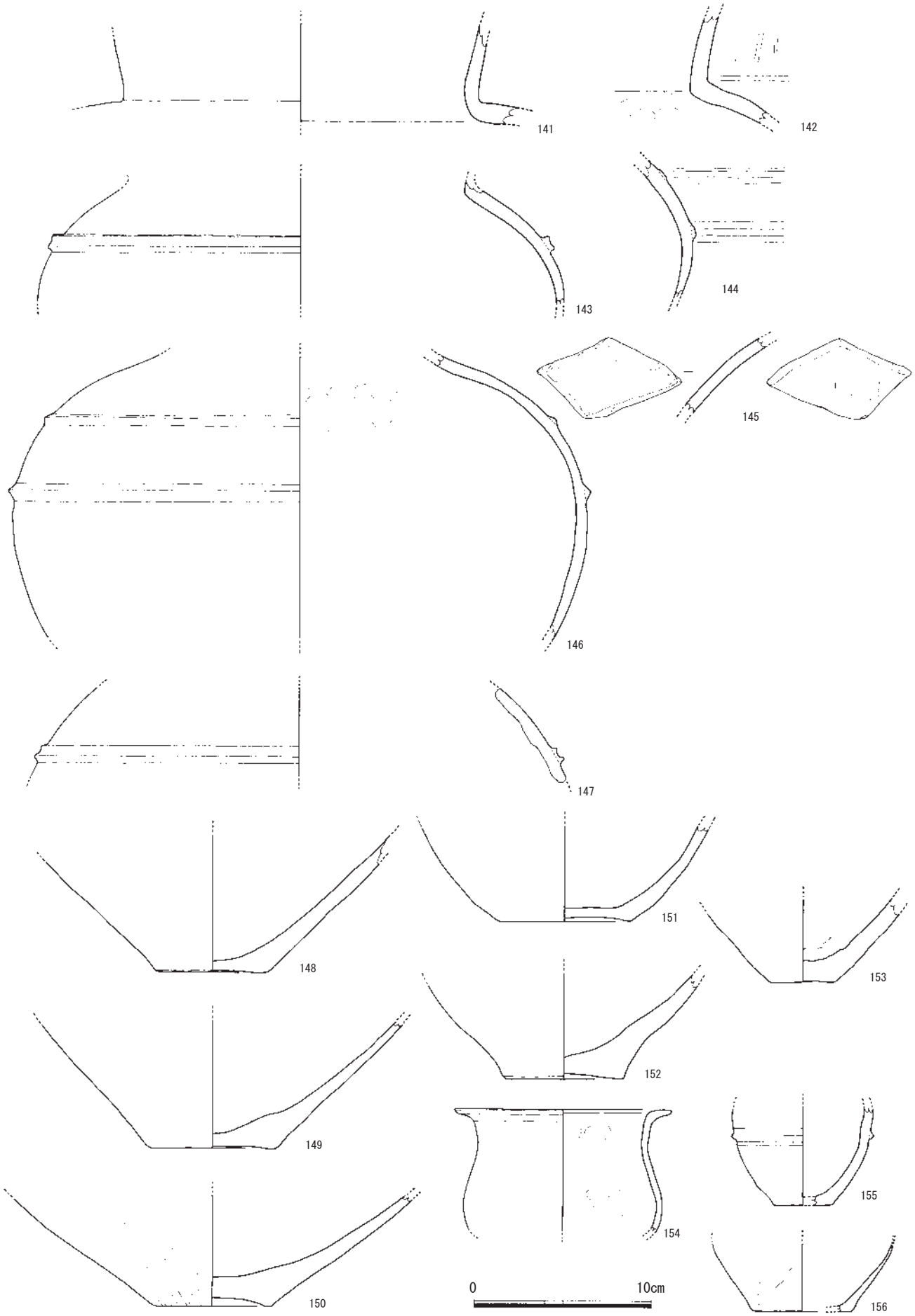


Fig.85　7SX025 黒灰色粘土出土遺物実測図⑩ (1/3)

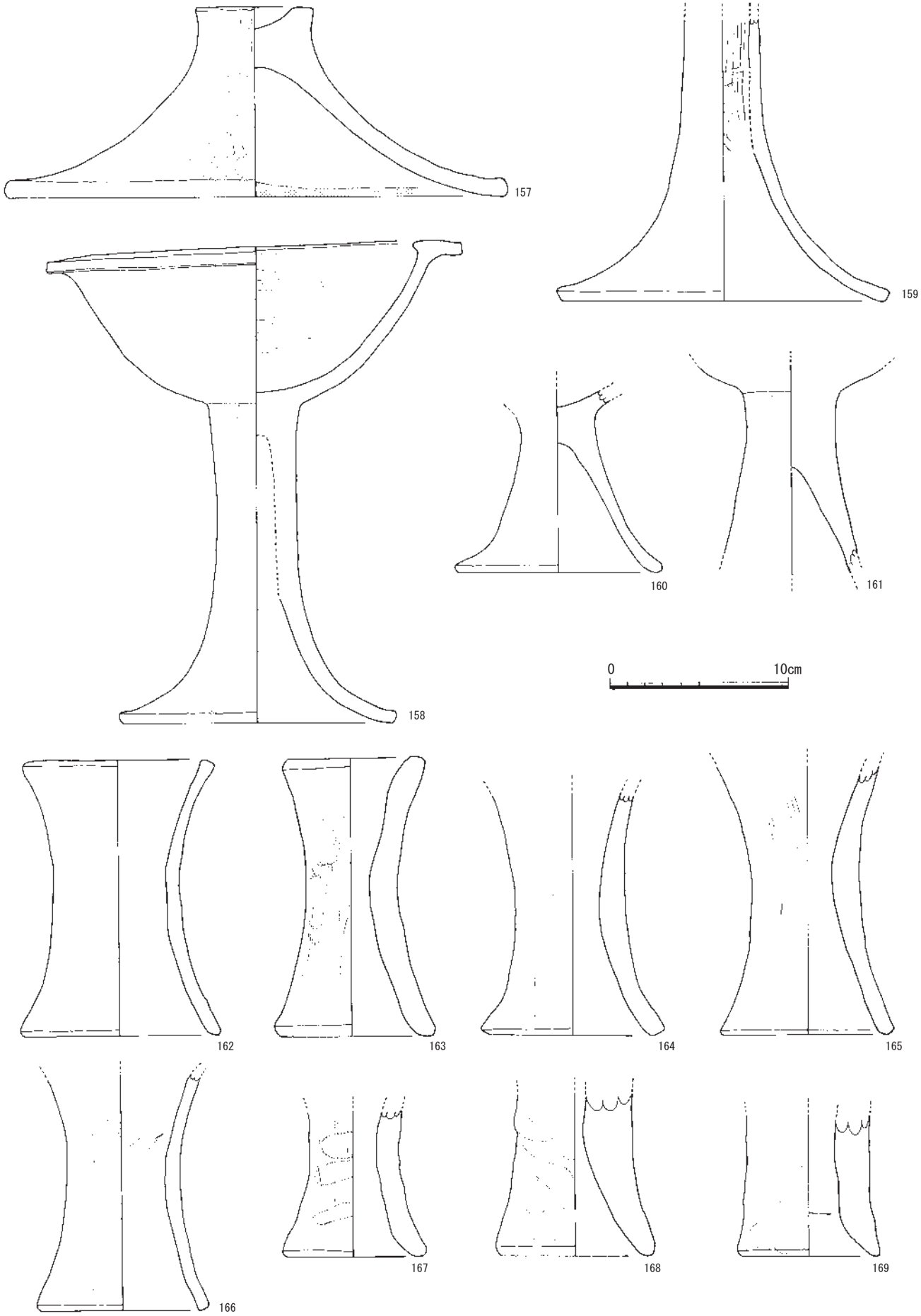


Fig.86　7SX025 黒灰色粘土出土遺物実測図⑪ (1/3)

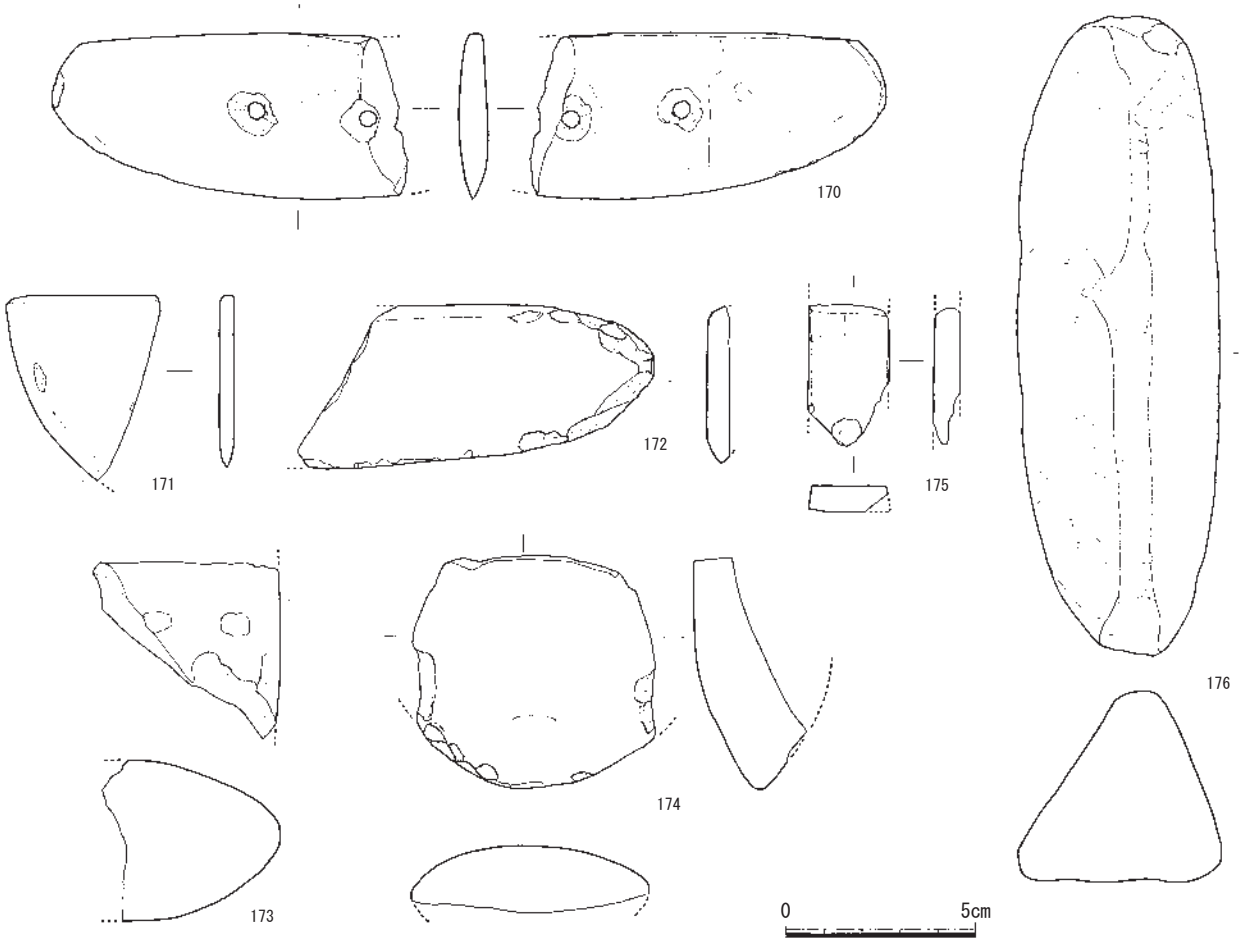


Fig.87　7SX025 黒灰色粘土出土遺物実測図⑫ (1/2)

されている。140 は頸部外面がタテハケ、内面がヨコハケ調整。

蓋（157）　復元口径 28.1 ㎝、器高 10.6㎝、上部径 6.6㎝。外面細かいハケ調整、内面はナデ調整。口縁端部内面と頂部窪みには煤が付着する。

高坏（158 ～ 161）　158 は口径 23.2㎝、器高 25.7 ～ 26.9㎝、復元脚部径 15.0㎝。坏部内面と脚部上部はミガキ調整で、内外面に部分的に朱が付着する。特に坏と脚部の境や脚部下半によく残る。159 は底部径 18.6㎝。外面には部分的に朱色が残る。内面上部には絞り痕、他はミガキのような痕跡が見られる。160 は脚部径 11.6㎝。161 の脚部外面はハケもしくはミガキ調整。

器台（162 ～ 169）　全体として外面タテハケ、内面ナデ調整。162 は上端復元径 10.7㎝、器高 15.35㎝、下端径 11.2㎝。162 は上端径 7.9㎝、器高 15.6㎝、下端径 8.9㎝。164 は下端径 10.3㎝。165 は下端径 9.85㎝。166 は下端径 9.5㎝。167 は下端復元径 8.0㎝。外面は指押さえの後タテハケ調整。168 は下端径 8.9㎝。169 は下端径 8.0㎝。内面上半部はケズリのような痕跡が残る。

石製品

石包丁(170、171)　170は半分ほど欠損する。幅4.5㎝、厚さ0.8㎝。径0.5㎝前後の紐穴を2ヶ所開ける。右図の面に擦痕がよく残る。輝緑凝灰岩製。171 は石包丁の一部で、両面とも粗く研磨され、刃部はさらに細かく研磨している。泥岩製。

用途不明石製品（172）　細長く扁平な石材で両端は研磨され、端部は加工されている。堆積岩製。

石斧（173、174）　173 は石斧の一部で、欠損部以外全面研磨される。174 は先端部の破片で、研磨し刃部としている。玄武岩製。

扁平片刃石斧（175）　両端とも欠損する。現存長 3.7㎝、幅 2.1 ㎝、厚さ 0.7㎝。灰色の珪質泥岩製。

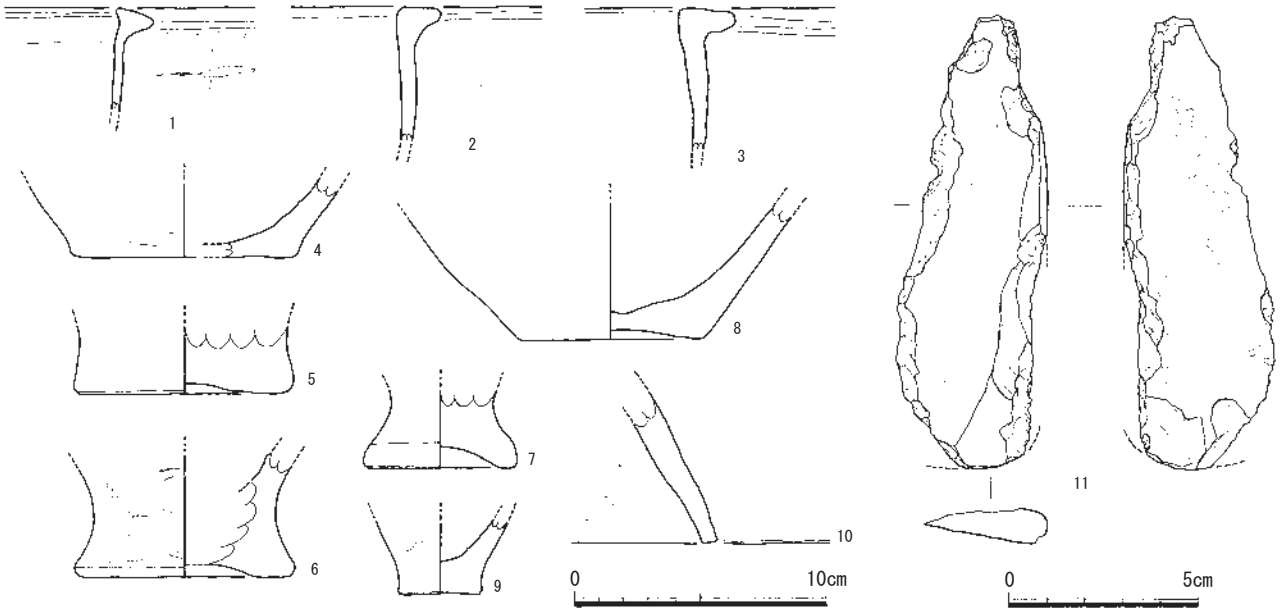


Fig.88　7SX025 灰色粘土出土遺物実測図（1/3、11 は 1/2）

砥石（176）　大きさは縦 16.9cm、幅 5.4×5.05cm。断面三角形で 2 面が研磨され、中央付近がより研磨され、擦痕もみられる。

7SX025 灰色粘土出土遺物（Fig.88）

弥生土器

甕（1 ～ 7）　1・2 の口縁部は、断面三角形で外面タテハケ、内面ナデ調整。3 の口縁部は若干短めの逆 L 字形である。内面ヨコナデ、外面タテハケ。4 は復元底径 9.0cm。外面にはミガキのような痕跡を残す。その他はナデ調整。5 は厚い底部で底径 9.8cm。6 は復元底径 8.8cm。高い底部は若干上げ底である。外面はタテハケ。7 は高い底部で上げ底である。内外面はナデ調整。復元底径 6.1 cm。

甕もしくは壺（8）　上げ底気味の底部で底径 7.2cm。

小壺（9）　底径 3.35cm。外面タテハケ、内面ナデ調整。色調は黄橙色を呈する。

高坏（10）　内面ヘラケズリ、外面ナデ調整。破片で明確ではないが、径が大きい場合は鉢の可能性がある。

石製品

石斧（11）　側面を中心に加工されているようにみえるが、破損による剥離で、人為的な加工ではない可能性がある。表裏および側面残存部に部分的に研磨痕が残る。現存長 12.0cm、厚さ 0.9cm。安山岩製。

第 7 次調査その他の遺構出土遺物（Fig.89）

石製品

石鏃（1）　基部を一部欠損。長さ 2.95 cm、現存最大幅 2.3cm、厚さ 0.55cm。安山岩製。S-32 より出土。

石包丁（2）　半分ほど欠損するが、形状が石包丁である。しかし、刃部など加工しているが、紐穴等は見られず、研磨加工もされていないため製作途中の可能性が高い。泥岩製。S-158 より出土。

太型蛤刃石斧（3）　両端を大きく欠損する。全体を丸く加工するが、表面は劣化する。幅 7.1 cm、厚さ 4.7cm。表面には擦痕が見られる。玄武岩製。S-471 より出土。

第 7 次調査灰褐色土出土遺物（Fig.89）

土製品

投弾（4）　長さ 4.0cm、断面不整円形で 2.6×1.8cm。胎土は 0.1cm 以下の砂粒を多く含み、色調は淡灰黄色や暗灰色を呈する。

石製品

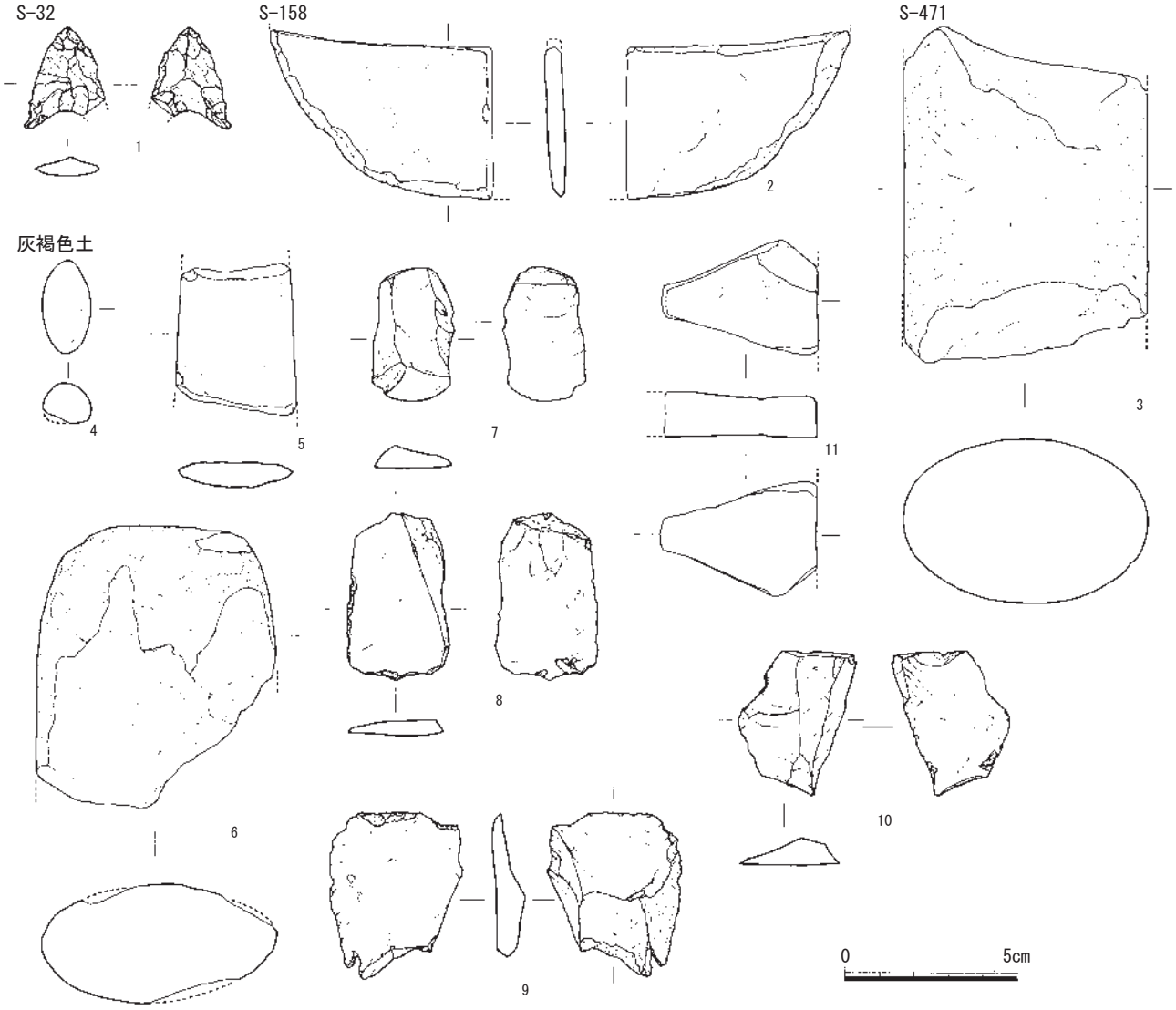


Fig.89　その他の遺構・灰褐色土出土遺物実測図（1/2、4は1/3）

石剣(5)　両端を大きく欠損する。現存長4.45cm、現存最大幅3.5cm、厚さ0.7cm。全面を整えているが、表面が劣化し研磨は残存していない。泥岩製。

太型蛤刃石斧（6）　石斧の上部片で、現存幅6.9cm、厚さ3.45cm。玄武岩製。

剥片（7～10）　全て安山岩製。7は3.9×2.3cm、厚さ0.7cm。8は一部自然面が残る。大きさは4.9×3.0cm、厚さ0.5cm。9は一部自然面を残す。大きさは4.75×3.9cm、厚さ1.0cm。10は4.3×3.4cm、厚さ0.8cm。

用途不明石製品（11）　欠損が目立ち全形が不明である。両面・側面とも若干研磨する。両面同じ位置に幅0.2cm、深さ0.1cm程の溝が彫られている。緑灰白色の泥岩製。

(5) 小結

今回の調査で確認された遺構・遺物の多くが、弥生時代中期前半のものであった。

明確な竪穴住居であるSI001と、ピット群の集合体をSI035として竪穴住居の残骸として報告したが、この他にもSX025の流路沿いに小ピット群があり、SI001の北東側や調査区西端中央付近にもピットが集中する場所があった。これらについては明確にくくれていないものの、住居・掘立柱建物・柵列である可能性は十分考えられる。過去の調査でこの周辺では弥生時代中期の遺構が多く検出されており、さらに補充する結果となった。今回の調査区に限ると、全体的な遺構の傾向としては流路（SX025）の方位

を意識した集落であったと推測される。よって、全体的に流路を目の前にして、竪穴住居や掘立柱建物が点在する当時の風景が想像できる。また、今回の竪穴住居は過去の調査の中では最大級であり、この一帯の集落の中心的な建物であった可能性が高い。

出土遺物のほとんどが弥生時代中期前半のものであり、この調査地については、この時代から人が住み始めたことが理解できる。弥生時代以降については、北側を中心に古代の遺物が散見された。調査区北東隣接地では木簡などが出土した古代の遺構が展開しており、その周縁部に当たるものと推測される。

Fig. 90　第７次調査遺構略測図（1/200）

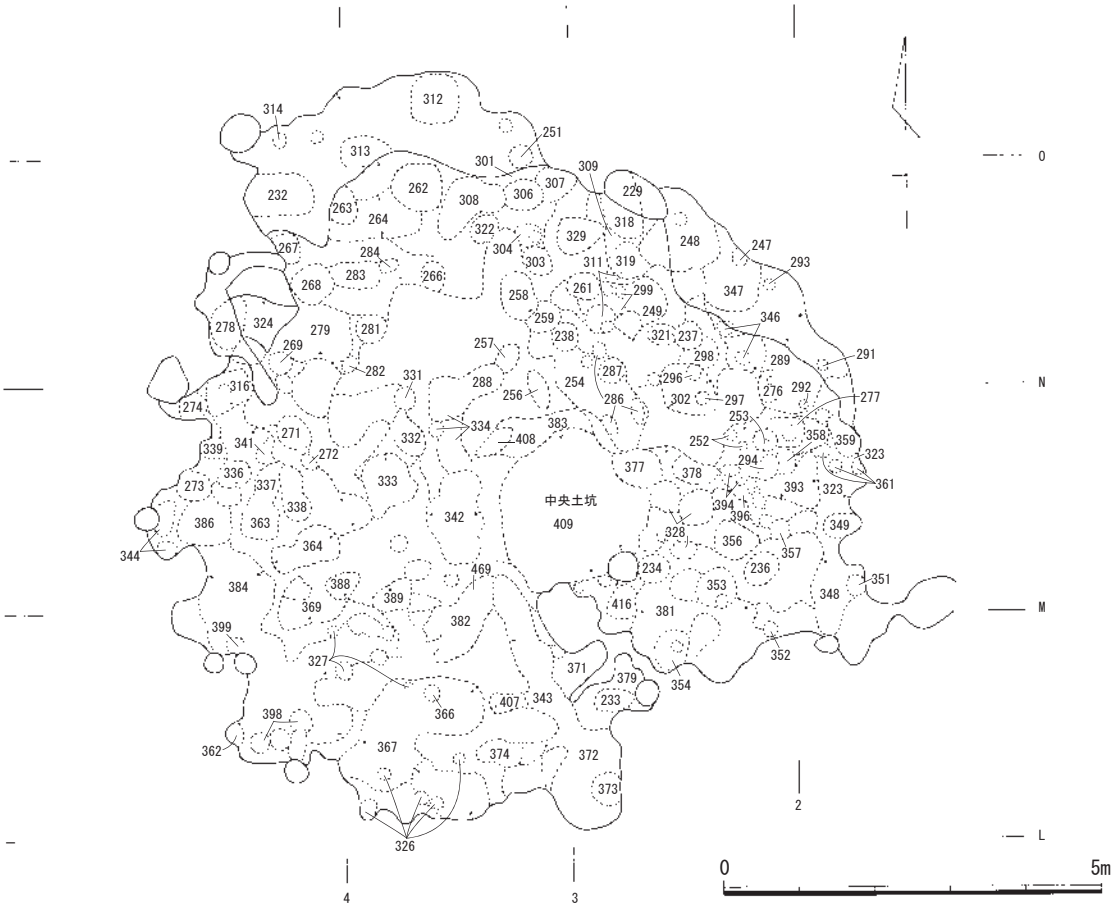


Fig.91　7SI001 内の遺構略測図 (1/100)

表.7　国分千足町遺跡第7次調査　遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	7SI001	竪穴住居	円形住居	弥生時代中期前半～中葉	L～0.1～4
2		ピット群			O3
3		ピット群			O2
4		溝			O1・2
5	7SK005	土坑	礫敷き。SI035の一部か	弥生時代中期	L5
6		ピット群			N1
7		ピット		平安時代	N1
8		ピット群			Q3
9		ピット			Q3
10	7SK010	土坑	弥生土器集中。SI035の一部か	弥生時代中期	M6
11		ピット群			Q6
12		ピット			Q5
13		ピット群			OP4
14		ピット		古墳時代？	P4
15	7SB015	掘立柱建物	1×3間	弥生中期前半～中頃	J～L.5～7
16		ピット			O5
17	7SB050	ピット	S-50の一部	古墳時代以降	O2
18		ピット		平安時代後期	O3
19		ピット群			O2
20	7SA020	柵列	3間以上	弥生時代中期中頃前後	H5～8
21		ピット	灰色土	古代	P2
22		ピット群			P2・3
23		ピット			P3
24		ピット			P3
25	7SX025	流路		弥生時代中期前半～中頃	B～K.1～8
26		ピット			P2
27		ピット			Q1
28		ピット			Q1
29		ピット群			Q1
30	7SA030	柵列	4間以上	弥生時代中期？	GH2・3
31	7SB055	ピット	S-55の一部	古代	P3
32		ピット		古代？	P2
33		ピット群			Q1
34		ピット群			N5・6
35	7SI035	竪穴住居	ピットの集合体。円形住居	弥生時代中期	K～M・4～7
36		ピット群			O5・6
37	7SB050	ピット	S-50の一部	古墳時代以降	O4
38		ピット			P3
39	7SB050	ピット	S-50の一部	古墳時代以降	P3
40	7SB040	掘立柱建物	柱材遺存	弥生時代中期中頃前後	Q7～9
41		ピット			P3
42		ピット			P3
43	7SB055	ピット	S-55の一部		P2
44		ピット			P1
45	7SB045	掘立柱建物	1×2間。S-87・102・392・436・464・468含む	弥生時代中期前半	KL7・8
46		ピット群			Q2
47		土坑		古代？	P1
48		ピット群			P2
49		ピット		古代	P2
50	7SB050	掘立柱建物	1×2間。S-17・37・39・54・73の一部・312含む	古墳時代以降	OP2～4
51	7SB055	ピット	S-55の一部	古代	Q2
52		ピット			P3
53	7SB055	ピット	S-55の一部	古代	Q3
54		ピット	S-50の一部	古墳時代以降	P2
55	7SB055	掘立柱建物	1×1間。S-31・43・51・53含む	古代	PQ2・3
56		ピット			Q2
57		ピット			P2
58		ピット			P2
59		ピット群		古代？	Q2
60	7SB060	掘立柱建物	2×3間	弥生時代中期	H～J3～5
61		ピット群			O6
62		ピット			P7
63		ピット群			P7・8
64		土坑			M5
66		土坑			M5
67		ピット群			MN6・7
68		ピット群			L4
69		ピット			N4
71		ピット			M5
72		溝	灰茶色土		N6
73		ピット群	一部S-50		NO4
74		ピット群			L5
76		ピット			M5
77		ピット群			M7
78		ピット群			M6
79		土坑			N5
81		ピット群			N6
82		ピット			N4
83		ピット			N5
84		ピット群			N5

86		ピット群			MN8
87	7SB045	ピット	S-45の一部		M7
88		ピット群	灰色土		L7
89		ピット群			M5
91		ピット	灰色土	平安後期	K6
92		ピット群			K6
93	7SB040	掘立柱建物	S-40aに変更		Q7
94		ピット	灰色土　　新しい？	古代	Q8
96		ピット			L6
97		ピット			L6
98		ピット群			K6
99		ピット群			L5
101		ピット			M7
102	7SB045	ピット	S-45の一部	弥生時代中期前半	L7
103		ピット			L7
104		ピット			K7
106		ピット			J7
107		ピット群			J7
108		土坑			J7
109		ピット群			J7
111		ピット群		奈良時代～	IJ７
112		土坑	下層は灰色粘土		L7
113		ピット			M5
114		ピット			M5
116		ピット群			M5
117		ピット群			L5
118		ピット			L5
119		ピット群			HI7
121		ピット			L5
122		ピット			L5
123		ピット			M4
124		ピット群			M4
126		ピット			M5
127		ピット群	S-64の底面		M5
128		ピット群			KL7
129		ピット群			K1
131		窪み			L1
132		ピット群			IJ6
133	7SB015	掘立柱建物	S-15b		J6
134		土坑	淡灰色土		LK1
136		ピット			K3
137		窪み			I6
138		ピット群			H5
139		ピット群			J6
141		ピット群			KL4
142		ピット群			L4
143		ピット群			K5
144		ピット群			K5
146		土坑	黄灰色土混じり灰褐色土		H6
147		ピット			K4
148		ピット群			L4
149		ピット			L4
151		窪み			K5
152		窪み			K5
153		窪み			K5
154		ピット			L4
156		ピット			L4
157		ピット群			K4
158		窪み群			H4・5
159		ピット			K4
161		土坑			L6
162		土坑			L6
163		ピット			L6
164	7SB015	掘立柱建物	S-15d	弥生中期前半～中頃？	L6
166		ピット群			K6
167		ピット			L6
168		ピット			L6
169		ピット群			H4
171		ピット群			I4
172		ピット群			H5
173		ピット群			H5
174		ピット群	S-158の下		H4
176		ピット群	S-158の下　　S-20d	弥生時代中期中頃前後	H5
177		溝			H5
178		ピット群			H4
179		ピット群	灰色土で砂利多い。		J2
181		ピット群			K4
182		ピット			L5
183		ピット			L5
184		ピット			L5
186		ピット群	S-152の底面		K5
187		ピット			K5
188		ピット			K5

189		ピット			M5
191		ピット			L5
192		ピット	S-151の底面		K5
193		ピット			L6
194		ピット群			H5
196		ピット			H5
197		ピット			I5
198		ピット群			I4
199		ピット群			I5
201		ピット群			J4
202		窪み	灰色土	古代	J4
203		土坑	灰色土に細かい石含む		J4・5
204		ピット			K5
206		ピット	S-152の底面		K5
207		ピット			L5
208		ピット群			L5
209		ピット			M6
211		ピット			M5
212		ピット			K6
213		ピット			K6
214		溝	灰色粘土		N4
216		ピット群			K5
217		ピット群			H3
218		土坑			L1
219		土坑群			L1
221		窪み	灰色土		L2
222		土坑			L2
223		溝	灰褐色土　S-224との切り合い微妙		K2
224	7SD224	溝	灰褐色土　SI001に伴う溝か	弥生中期？	JK2
226		溝群	灰褐色土		K2
227		窪み		古墳時代以降	K3
228		ピット群			L2
229		ピット		古代？	N2
231		ピット			H6
232		土坑			N4
233		ピット			L2
234		ピット			M2
236		ピット			M2
237		ピット			N2
238		ピット			N3
239		ピット			C2
241		溝			IJ2
242		窪み			J2
243		窪み		奈良時代～	L2
244		ピット群			J2
246		ピット			M1
247		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
248		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
249		土坑	S-1内。黄褐色土と茶褐色土の混合層。底面にピット。	弥生時代中期前半～中葉	N2
251		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	O3
252		ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
253		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
254		土坑	S-1内。底面にピットあり。	弥生時代中期前半～中葉	MN2
256		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
257		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
258		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
259		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
261		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
262		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
263		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
264		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
266		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
267		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
268		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
269		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
271		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
272		ピット	S-1内。木質残存。	弥生時代中期前半～中葉	M4
273		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
274		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
276		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
277		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
278		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
279		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
281		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
282		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
283		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
284		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
286		ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
287		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
288		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
289		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
291		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N1
292		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M1

293		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
294		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
296		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
297		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
298		ピット	S-1内。木質残存。黄灰色土と黒灰色土の混合層	弥生時代中期前半～中葉	N2
299		ピット群	S-1内。S-249の底面	弥生時代中期前半～中葉	N2
301		土坑	S-1内。底面にピット	弥生時代中期前半～中葉	N3
302		ピット	S-1内。黄灰色土・黒灰色土の混合層	弥生時代中期前半～中葉	M2
303		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
304		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
306		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
307		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
308		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
309		土坑	S-1内。底面にピット	弥生時代中期前半～中葉	N2
311		ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
312		ピット	S-1内。S-50の一部	弥生時代中期前半～中葉	O3
313		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	O3
314		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	O4
316		ピット	S-1内。下に礫	弥生時代中期前半～中葉	N4
317		ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
318		ピット	S-1内。S-309の底面	弥生時代中期前半～中葉	N2
319		ピット	S-1内。S-309の底面	弥生時代中期前半～中葉	N2
321		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
322		ピット	S-1内。S-301の底面	弥生時代中期前半～中葉	N3
323		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M1
324		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
326		ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L3
327		ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L4
328		ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
329		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
331		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M3
332		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M3
333		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M3
334		ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M3
336		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
337		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
338		ピット	S-1内	古代？	M4
339		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
341		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
342		ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M3
343		溝	S-1内。黒灰色土。S-224の延長？	弥生時代中期前半～中葉	L2・3
344		ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
346		ピット群	S-1内。S-347→247	弥生時代中期前半～中葉	N2
347		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
348		土坑	S-1内。S-349・351→348	弥生時代中期前半～中葉	M1
349		ピット	S-1内。S-349・351→348	弥生時代中期前半～中葉	M1
351		ピット	S-1内。S-349・351→348	弥生時代中期前半～中葉	M1
352		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L2
353		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
354		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L2
356		窪み	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
357		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
358		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
359		ピット	S-1内。S-323の底面	弥生時代中期前半～中葉	M1
361		ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M1
362		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L4
363		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
364		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
366		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L3
367		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L3
368		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L3
369		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
371		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L2・3
372		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L2
373		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L2
374		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L3
376		ピット群			H13
377		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
378		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
379		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L2
381		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L2
382		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L3
383		土坑	S-1内。黄灰色土・黒灰色土・灰色土の混合層	弥生時代中期前半～中葉	M3
384		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
386		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
387		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
388		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
389		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M3
391		ピット			J7
392		ピット	S-45の一部	弥生時代中期前半	K7
393		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
394		ピット群	S-1内。灰色粘土	弥生時代中期前半～中葉	M2
396		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2

397		ピット群	S-1内。S-384の底面	弥生時代中期前半～中葉	L3
398		ピット群	S-1内。S-384の底面	弥生時代中期前半～中葉	L4
399		ピット	S-1内。S-384の底面	弥生時代中期前半～中葉	L4
401		ピット群			I3
402		ピット群			J3
403		ピット			L8
404		土坑			L8
406		ピット			J7
407		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L3
408		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
409		ピット群	中央土坑内のピット群。S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2・3
411		土坑			I4
412		ピット群			I4
413		ピット群			I3
414		ピット群			H3
416		ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
417		ピット群			H6
418		ピット			Q5
419		ピット			O7
421		ピット			Q7
422		ピット群			I2
423		土坑			Q8
424		ピット群			Q8
426		ピット群			R8
427		ピット			Q9
428	7SB045	掘立柱建物	S-45b	弥生時代中期前半	Q9
429		ピット群			O9
431		土坑	黒灰色粘土		P8
432		ピット群			M9
433		ピット群			N9
434		ピット群			L8
436	7SB045	ピット	S-45の一部	弥生時代中期前半	L8
437		ピット群			L8
438		ピット群			L9
439		ピット群			M8
441		ピット			L9
442		ピット群			L9
443		ピット群			I8・9
444		ピット群			I8
446		ピット群			I8
447		ピット群			I8
448		ピット群			H8
449		ピット			H8
451		ピット群			I8
452		土坑			K8
453		ピット			K8
454		窪み群			K8
456		ピット群			K8
457		ピット			K8
458		ピット群			K9
459		窪み			K9
461		ピット群			K9
462		ピット群			J8
463		ピット群			K9
464	7SB045	ピット	S-45の一部	弥生時代中期前半	K8
466		ピット群			L9
467		ピット			L9
468	7SB045	ピット	S-45の一部	弥生時代中期前半	L9
469		ピット群	S-1内。S-382の底面	弥生時代中期前半～中葉	L3
471		土坑	茶灰色土		N8
472		ピット群			F8・9
473		ピット群			E8
474		ピット群			C8
476		ピット			M5

表.8　国分千足町遺跡第7次調査　出土遺物一覧表

S-1 茶褐色土

須恵	器	蓋1、蓋c、坏、坏c、甕、破片
土師	器	坏a
龍泉窯系青磁		椀；Ⅱ-b(1)
青白	磁	破片(1)
弥生土	器	高坏坏部、高坏脚部、甕、壺、破片
瓦	類	丸瓦、破片(格子)、破片
金属製	品	鉱滓
石製	品	剥片(黒曜石､安山岩)、石包丁、石鏃

S-1 黄褐色土

弥生土	器	甕、破片
石製	品	剥片(黒曜石)

S-1 灰茶色土

弥生土	器	高坏、甕、壺?、器台?、破片
石製	品	剥片(黒曜石)、ｽｸﾚｲﾊﾟｰ、石斧、丸石、管玉
土製	品	紡錘車

S-1 中央土坑黒灰色土

弥生土	器	高坏坏部、甕、壺、器台、破片(丹塗り)、破片
瓦	類	剥片(黒曜石､安山岩)、丸石

S-2

弥生土	器	破片

S-3

弥生土	器	椀?、破片

S-4

弥生土	器	破片

S-5

弥生土	器	甕、破片
瓦	類	剥片(黒曜石)

S-6

須恵	器	破片
弥生土	器	破片
石製	品	剥片(黒曜石)

S-7

白	磁	椀；破片(1)

S-8

弥生土	器	破片

S-9

弥生土	器	破片?

S-10

弥生土	器	甕、壺、破片

S-11

弥生土	器	甕、破片

S-12

弥生土	器	甕、破片

S-13

弥生土	器	破片
土製	品	土塊

S-14

古式土師	器	坏?
弥生土	器	甕?、破片

S-15a

弥生土	器	甕、壺、破片
石製	品	剥片(黒曜石)

S-15c

弥生土	器	甕、壺×高坏、壺
石製	品	剥片(黒曜石)

S-15e

弥生土	器	甕、破片

S-15f

弥生土	器	甕、破片
石製	品	剥片(黒曜石)

S-15g

弥生土	器	破片

S-15g 柱痕

弥生土	器	甕?、破片

S-15g 掘り方

弥生土	器	甕?、破片
石製	品	剥片(黒曜石)

S-15h

弥生土	器	甕、破片
石製	品	剥片(黒曜石)

S-16

弥生土	器	甕、破片

S-17

須恵	器	甕
土師	器	破片
弥生土	器	破片

S-18

土師	器	破片
白	磁	椀；破片(1)
弥生土	器	甕、破片
石製	品	剥片(黒曜石)

S-19

弥生土	器	破片

S-20a

弥生土	器	破片

S-20b

弥生土	器	破片

S-20c

弥生土	器	甕、破片

S-21

弥生土	器	破片
瓦	類	平瓦(縄目)、破片
石製	品	丸石、砥石?

S-22

弥生土	器	甕、破片

S-23

弥生土	器	破片

S-24

弥生土	器	甕、破片
石製	品	剥片(黒曜石)

S-25 黒灰色土

古式土師	器	二重口縁壺
弥生土	器	高坏坏部、小甕、甕、壺、器台、破片
石製	品	石鏃、石包丁?、石斧?、剥片(黒曜石)、丸石

S-25 明灰色粘土

弥生土	器	高坏、甕、壺?、器台、支脚、破片
石製	品	石鏃(黒曜石)

S-25 灰色粘土

弥生土	器	甕、壺、鉢?、破片
石製	品	石鏃、剥片(黒曜石)

S-25 暗灰色粘土

弥生土	器	高坏、甕、壺、器台、破片
石製	品	石包丁?、剥片(安山岩)

S-25 黒灰色粘土

弥生土	器	高坏、甕、壺、二重口縁壺、器台、丹塗り土器、破片
石製	品	石包丁、石包丁加工品、石包丁未製品、磨製石斧?、石斧、石斧?、軽石、砥石、丸石、剥片(黒曜石､安山岩)

S-26

弥生土	器	甕、破片

S-27

弥生土	器	甕、破片

S-28

弥生土	器	甕、破片

S-29

弥生土	器	破片
石製	品	丸石

S-30

弥生土	器	破片

S-31

土師	器	破片

S-32

須恵	器	坏
弥生土	器	甕、破片
石製	品	石鏃

S-33

弥生土	器	破片
石製	品	剥片(黒曜石)

S-34

土師	器	破片

S-36

土師	器	破片?
弥生土	器	甕

S-37

土　師　器	破片
弥　生　土　器	甕

S-38

土　師　器	坏?、破片?
弥　生　土　器	甕

S-39

土　師　器	破片?
弥　生　土　器	甕、破片

S-40a

弥　生　土　器	甕、破片

S-40b

弥　生　土　器	甕、壺、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)、丸石

S-40b 柱痕

弥　生　土　器	破片

S-41

弥　生　土　器	甕、破片

S-42

弥　生　土　器	破片

S-43

須　恵　器	甕
土　師　器	小皿ａ、破片
弥　生　土　器	甕、破片

S-44

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-46

弥　生　土　器	甕、破片
土　製　品	土塊

S-47

須　恵　器	破片
土　師　器	破片

S-48

弥　生　土　器	甕、破片

S-49

須　恵　器	坏
土　師　器	椀c
弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-51

土　師　器	破片?
弥　生　土　器	破片
石　製　品	丸石、剥片(黒曜石)、砥石

S-52

土　師　器	破片?

S-53

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-54

土　師　器	破片?
弥　生　土　器	甕、破片

S-56

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-57

弥　生　土　器	壺、破片

S-58

弥　生　土　器	破片

S-59

須　恵　器	甕
土　師　器	破片
弥　生　土　器	甕、破片
瓦　類	破片

S-61

弥　生　土　器	甕
金　属　製　品	鋳型?

S-62

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-63

土　師　器	破片?
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-64

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-66

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-67

土　師　器	破片?
弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-68

土　師　器	破片?
弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)、丸石

S-69

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-71

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	石斧、剥片(黒曜石)

S-72

弥　生　土　器	破片

S-73

弥　生　土　器	甕、壺?、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-74

弥　生　土　器	破片

S-76

弥　生　土　器	壺×甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-77

弥　生　土　器	壺、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-78

弥　生　土　器	甕、破片

S-79

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(安山岩)

S-81

弥　生　土　器	甕?、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)
土　製　品	焼土塊

S-82

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-83

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(安山岩)

S-84

弥　生　土　器	破片

S-86

弥　生　土　器	甕、丹塗り土器、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-87

弥　生　土　器	甕、破片

S-88

弥　生　土　器	壺?、破片

S-89

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石、玄武岩?)

S-91

須　恵　器	甕、破片
土　師　器	小皿a
瓦　質　土　器	鉢
白　磁	椀；Ⅷ(1)
瓦　類	平瓦

S-92

弥　生　土　器	甕、壺、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-93

弥　生　土　器	甕、鉢?、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-94

須　恵　器	壺
土　師　器	破片
瓦　類	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-96

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-97

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)
土　製　品	焼土塊

S-98

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-99

弥　生　土　器	甕?、破片
石　製　品	石斧、丸石

S-101

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-102

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-103

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-104

弥　生　土　器	甕、破片

S-106

弥　生　土　器	甕

S-107

弥　生　土　器	破片

S-108

弥　生　土　器	甕、破片

S-109

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-111

須　恵　器	蓋c
土　師　器	破片
弥　生　土　器	破片

S-112

弥　生　土　器	甕、丹塗り土器、破片
石　製　品	剥片(黒曜石、安山岩)

S-113

弥　生　土　器	甕、丹塗り土器、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)、丸石

S-114

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-116

弥　生　土　器	甕、破片

S-117

弥　生　土　器	甕、破片

S-118

弥　生　土　器	甕、破片

S-119

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-121

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-122

弥　生　土　器	甕×壺
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-123

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-124

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-126

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-127

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-128

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-129

弥　生　土　器	破片

S-131

弥　生　土　器	甕、破片

S-132

弥　生　土　器	甕、破片

S-133

弥　生　土　器	甕、壺×高坏、破片

S-134

須　恵　器	坏
弥　生　土　器	甕、破片

S-136

弥　生　土　器	甕、破片

S-137

石　製　品	剥片(黒曜石)

S-138

弥　生　土　器	甕

S-139･164

弥　生　土　器	甕、丹塗り土器、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-141

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-142

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-143

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-144

弥　生　土　器	破片

S-146

弥　生　土　器	甕、甕×壺、破片
石　製　品	丸石、剥片(黒曜石)

S-147

弥　生　土　器	破片

S-148

弥　生　土　器	甕、破片

S-149

弥　生　土　器	破片

S-151

須　恵　器	破片
弥　生　土　器	甕
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-152

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-153

弥　生　土　器	破片

S-154

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-156

弥　生　土　器	破片

S-157

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-158

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)、扁平加工品

S-159

須　恵　器	破片
弥　生　土　器	高坏、器台?、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-161

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-162

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	丸石

S-163

弥　生　土　器	甕
瓦　類	平瓦(格子)
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-166

弥　生　土　器	破片

S-167

弥　生　土　器	破片

S-168

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-169

弥　生　土　器	破片

S-171

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-172

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	平玉石

S-173

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-174

弥　生　土　器	甕、破片

S-176

弥　生　土　器	破片

S-177

弥　生　土　器	甕
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-178

弥　生　土　器	甕、壺?
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-179

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-181

弥　生　土　器	甕、破片

S-182

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-183

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-184

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-186

弥　生　土　器	甕、破片

S-187

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-188

弥　生　土　器	破片

S-189

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-191

弥　生　土　器	破片

S-192

弥　生　土　器	甕
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-193

弥　生　土　器	破片
石　製　品	破片

S-194

弥　生　土　器	器台?、破片
石　製　品	石鏃、剥片(黒曜石)

S-196

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-197

弥　生　土　器	甕、器台

S-198

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-199

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-201

弥　生　土　器	甕、破片

S-202

土　師　器	破片
弥　生　土　器	甕、破片
瓦　類	平瓦(縄目)

S-203

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	丸石

S-204

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-206

弥　生　土　器	甕、破片

S-207

弥　生　土　器	甕
石　製　品	剥片(黒曜石)、丸石

S-208

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-209

弥　生　土　器	甕、丹塗り土器、破片

S-211

弥　生　土　器	破片?

S-212

弥　生　土　器	破片?

S-213

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-214

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-216

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-217

弥　生　土　器	甕、破片

S-218

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-219

弥　生　土　器	破片

S-221

弥　生　土　器	甕

S-222

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-223

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-224

須　恵　器	破片
弥　生　土　器	高坏、高坏?、甕、器台、丹塗り土器、破片
石　製　品	丸石、剥片(黒曜石)

S-226

弥生土器	甕、器台、破片
瓦類	破片
石製品	丸石、剥片(黒曜石)

S-227

須恵器	破片?
弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-228

弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)、丸石

S-229

須恵器	破片
土師器	坏、破片

S-231

土師器	破片?
弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-232

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-233

弥生土器	甕、壺×甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-234

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-236

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-237

弥生土器	甕、丹塗り土器、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-238

弥生土器	破片

S-239

弥生土器	破片

S-241

須恵器	坏、甕
弥生土器	甕、破片
石製品	丸石、剥片(黒曜石)

S-242

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-243

須恵器	長頸壺
土師器	破片?
弥生土器	甕
瓦類	破片(縄目)
石製品	丸石

S-244

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-246

弥生土器	破片

S-247

弥生土器	甕、破片

S-248

弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-249

弥生土器	破片

S-249 下層

弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-251

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-252

弥生土器	破片

S-253

弥生土器	甕、破片

S-254

弥生土器	甕、破片
土製品	土塊

S-254 下層

弥生土器	甕、破片

S-256

弥生土器	甕、破片

S-257

弥生土器	破片
石製品	石包丁?

S-258

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-259

弥生土器	甕、破片

S-261

弥生土器	破片
石製品	剥片

S-262

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-263

弥生土器	破片

S-264

弥生土器	破片

S-266

弥生土器	甕、破片
石製品	丸石

S-267

弥生土器	破片

S-268

弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-269

弥生土器	甕、破片

S-271

弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-272

弥生土器	甕
石製品	剥片(黒曜石)

S-273

弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-274

弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)、丸石

S-276

弥生土器	壺、破片

S-277

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-278

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石、玄武岩)

S-279

弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-281

弥生土器	破片

S-282

弥生土器	甕
石製品	剥片(黒曜石)

S-283

弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-284

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-286

弥生土器	甕

S-287

石製品	剥片(黒曜石)

S-288

弥　生　土　器	破片

S-289

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-289 下層

弥　生　土　器	器台、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-291

弥　生　土　器	破片

S-292

弥　生　土　器	破片

S-293

弥　生　土　器	破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-294

弥　生　土　器	破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石、玄武岩)

S-296

弥　生　土　器	破片

S-297

弥　生　土　器	破片

S-298

弥　生　土　器	破片

S-299

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-301

弥　生　土　器	甕、壺、破片
石　　製　　品	石包丁、剥片(黒曜石)

S-302

弥　生　土　器	破片

S-303

石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-304

弥　生　土　器	破片

S-306

弥　生　土　器	甕、破片

S-307

弥　生　土　器	甕
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-308

弥　生　土　器	破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-309

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	石包丁?

S-311

弥　生　土　器	甕

S-312

弥　生　土　器	破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-313

弥　生　土　器	甕、破片

S-314

弥　生　土　器	破片

S-316

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-317

弥　生　土　器	破片

S-318

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-319

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-321

弥　生　土　器	破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-322

弥　生　土　器	破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-323

弥　生　土　器	甕、破片

S-324

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-326

弥　生　土　器	甕、壺?、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-327

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)、丸石

S-328

弥　生　土　器	甕、器台?、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)、丸石

S-329

弥　生　土　器	破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-331

弥　生　土　器	破片

S-332

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-333

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	丸石、剥片(黒曜石)

S-334

弥　生　土　器	甕、器台、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-336

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-337

弥　生　土　器	甕?、破片

S-338

弥　生　土　器	破片
金　属　製　品	鉱滓、鉄釘
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-339

弥　生　土　器	破片

S-341

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	丸石、剥片(黒曜石)

S-342

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-343

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石、安山岩)

S-344

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-346

弥　生　土　器	甕、器台、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-347

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-348

弥　生　土　器	高坏、甕、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)、丸石

S-348 下層

弥　生　土　器	高坏?、器台?、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-349

弥　生　土　器	甕、破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-351

弥　生　土　器	破片
石　　製　　品	剥片(黒曜石)

S-352

石　製　品	剥片(黒曜石)

S-353

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-354

弥　生　土　器	器台?、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-356

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-357

弥　生　土　器	壺×高坏、破片

S-358

弥　生　土　器	甕

S-359

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-361

弥　生　土　器	甕、破片

S-362

弥　生　土　器	破片

S-363

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石、安山岩?)

S-364

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-366

弥　生　土　器	破片

S-367

弥　生　土　器	蓋、甕、壺?、破片
石　製　品	丸石、剥片(黒曜石)

S-368

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-368 下層

弥　生　土　器	破片

S-369

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	磨製片刃石斧、剥片(黒曜石)

S-371

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)、石核(黒曜石、安山岩)、石包丁

S-371 下層

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-372

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-373

石　製　品	剥片(黒曜石)

S-374

弥　生　土　器	甕、破片

S-376

弥　生　土　器	甕、壺、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)、丸石

S-377

弥　生　土　器	丹塗り土器、破片
石　製　品	剥片(黒曜石、安山岩)

S-378

弥　生　土　器	破片

S-379

弥　生　土　器	破片

S-381

弥　生　土　器	甕
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-381 下層

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-382

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-383

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)、磨製片刃石斧、石斧?

S-384

弥　生　土　器	甕、壺×蓋、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-386

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)、石斧?、丸石

S-387

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-388

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-389

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-391

弥　生　土　器	甕、壺?、破片

S-392

弥　生　土　器	蓋、甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)
土　製　品	土塊

S-393

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-394

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-396

弥　生　土　器	甕

S-397

弥　生　土　器	破片

S-398

弥　生　土　器	甕

S-399

弥　生　土　器	破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-401

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-402

弥　生　土　器	破片

S-403

弥　生　土　器	甕、丹塗り土器、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)、丸石

S-404

弥　生　土　器	破片

S-406

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)

S-407

弥　生　土　器	破片

S-408

弥　生　土　器	甕、破片

S-409

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)、磨製石斧?

S-411

弥　生　土　器	破片

S-412

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)、丸石

S-413

弥　生　土　器	甕、破片

S-414

弥　生　土　器	甕、破片
石　製　品	剥片(黒曜石)、丸石

S-416

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-417

弥生土器	甕、破片

S-418

弥生土器	破片

S-419

弥生土器	甕

S-421

弥生土器	壺、破片

S-422

弥生土器	破片

S-423

弥生土器	甕、器台、破片

S-424

弥生土器	甕、破片
石製品	丸石

S-426

弥生土器	破片

S-427

弥生土器	甕、破片

S-428

弥生土器	甕、破片

S-429

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-431

弥生土器	甕、破片

S-432

弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-433

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-434

弥生土器	破片

S-436

弥生土器	甕、壺、破片
石製品	剥片(黒曜石)、叩き石、磨製石斧?
土製品	土塊

S-437

弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-438

弥生土器	壺
石製品	剥片(黒曜石)

S-439

弥生土器	甕、破片

S-441

弥生土器	破片
石製品	丸石、剥片(黒曜石)

S-442

弥生土器	甕、破片
石製品	丸石

S-443

弥生土器	甕、器台、破片

S-444

弥生土器	破片
弥生土器	破片

S-446

弥生土器	破片

S-447

弥生土器	甕、破片

S-448

弥生土器	高坏、甕
石製品	剥片(黒曜石)

S-449

弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-451

弥生土器	甕
石製品	剥片(黒曜石)、石剣?
土製品	土塊

S-452

弥生土器	壺、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-453

弥生土器	破片

S-454

弥生土器	破片

S-456

弥生土器	甕、破片

S-457

弥生土器	丹塗り土器、破片

S-458

弥生土器	甕

S-459

弥生土器	破片

S-461

弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-462

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-463

弥生土器	破片
石製品	剥片(黒曜石)

S-464

弥生土器	甕

S-466

弥生土器	蓋?、甕、破片

S-467

弥生土器	甕、破片
石製品	剥片

S-468

弥生土器	甕、破片
石製品	丸石、剥片(黒曜石)

S-469

石製品	石剣、丸石

S-471

石製品	石斧

S-472

弥生土器	破片
石製品	砥石?、剥片(黒曜石)

S-473

弥生土器	破片

S-474

弥生土器	甕、壺、破片
石製品	丸石

S-476

弥生土器	甕、破片
石製品	丸石、剥片(黒曜石)

灰褐色土

須恵器	蓋1、蓋3、蓋c、坏蓋?、坏、坏身、坏c、皿、高坏 甕、壺?、鉢、破片
土師器	坏、坏a、坏a?、坏a×小皿a、器台、把手、破片
古式土師器	坏、甕、破片?
須恵質土器	鉢(東播系)
国産陶器	擂鉢
白磁	椀；Ⅳ(1)、Ⅷ(1)　白磁破片(1)
同安窯系青磁	椀；I-1a(1)
弥生土器	高坏坏部、高坏脚、甕、甕×壺、壺、破片
瓦類	平瓦(縄目、格子、破片)、丸瓦(無文)、瓦玉、破片(格子)
石製品	剥片(安山岩、黒曜石)、石斧、軽石、石剣、鋳型? 平玉石、丸石
土製品	楕円形土製品

表土

須恵器	蓋?、蓋3、坏、甕、破片
土師器	坏、破片
龍泉窯系青磁	椀；Ⅱ-b(2)
肥前系磁器	皿
国産陶器	擂鉢
弥生土器	高坏脚、甕、甕×壺、壺、鉢?
瓦類	平瓦(格子、破片)、丸瓦(無文)、軒先瓦?、破片(縄目)
石製品	剥片(黒曜石)、軽石、石斧?
土製品	土塊

5、国分千足町遺跡第４次調査出土遺物補遺

第４次調査は国分３丁目に所在し、1993（平成５）年７月に調査を実施した。この調査成果については、2004（平成16）年に『太宰府・国分地区遺跡群1』（太宰府市の文化財第73集）で報告したが、未報告の遺物があったため、今回報告することとなった。

黒色粘土出土遺物（Fig.92、Pla.15）

石製品

抉入柱状片刃石斧（1）　上部が欠損する。現存長12.1cm、幅4.7cm、厚さ2.8cm。抉り部分と背面には細かい敲打痕が残り、刃先付近は敲打の後研磨しているが、敲打が残っている。その他の面は研磨されている。泥岩製。

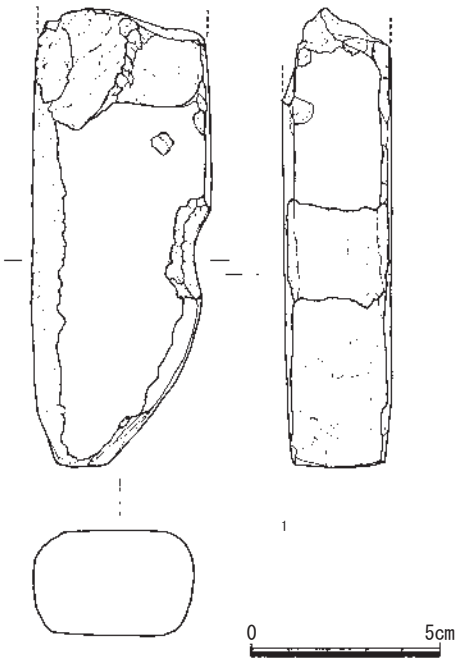


Fig.92　第４次調査黒色粘土出土遺物
(1/2)

Ⅴ、調査まとめ

今回の報告地周辺一帯は、北端に陣ノ尾川、南側に大谷川があり、2つの河川によって扇状地状の緩やかな傾斜地となっている。今回の報告した国分千足町遺跡をはじめ、国分松本遺跡、筑前国分尼寺跡の調査で、弥生時代中期の遺構が確認されているが、第7次調査で検出した流路（7SX025）より、南側で調査された国分千足町遺跡第2・3・6次調査では弥生時代の遺構が検出されていない。また、東側の筑前国分寺跡や川添遺跡でも弥生時代の遺構は確認されていない。調査地点が限られているため明確に言い難いところであるが、弥生時代中期の集落が展開すると想定される範囲は、Fig.93のように、陣ノ尾川から7SX025までの南北300m、東西はおよそ500mの範囲と推測される。集落の西端や北側の陣ノ尾丘陵に墓地が営まれている。集落南側を流れていたとみられる流路は、北東の四王寺山を水源として御笠川に流れ込んでいたと考えられ、今でも近くに水路として残る部分もある。各調査地で石包丁が出土しているが、明確に水田痕跡を確認していないため、これら流路の埋没湿地で稲作が営なまれた可能性が高い。その流路は、一部湿地として奈良時代まで残っていたとみられ、7世紀末の戸籍計帳関係木簡（国分松本遺跡第11・13次調査）などが出土している。

また、流路の東側で調査された第2・3次調査では、弥生時代の遺構はほとんどなく、奈良時代後半～平安初期の掘立柱建物などの遺構が確認されている。7世紀に遡る遺構は未確認で、遺物もほとんどないことから、木簡に関連した遺構は、第2～3次調査付近には展開していないと考えられる。

今後未調査個所や調査済みの現場を整理することで、国分地区の弥生時代中期の景観や7～8世紀の古代大宰府の重要な成果があることが期待できる。

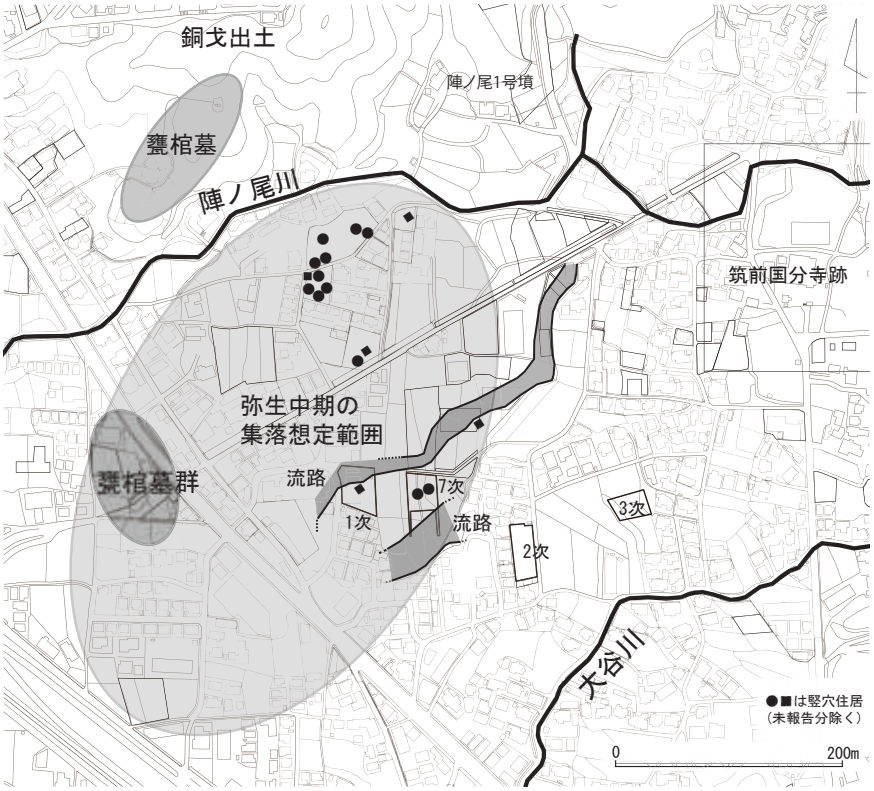


Fig.93　国分千足町遺跡周辺の遺構状況図

参考文献

太宰府町教委『筑前国分尼寺跡・陣ノ尾遺跡』1981

太宰府市教委『筑前国分尼寺跡Ⅱ』1991

太宰府市『太宰府市史』1992

太宰府市教委『筑前国分尼寺跡Ⅲ』1995

太宰府市教委『筑前国分寺跡Ⅰ』1997

太宰府市教委『筑前国分寺跡Ⅱ』1999

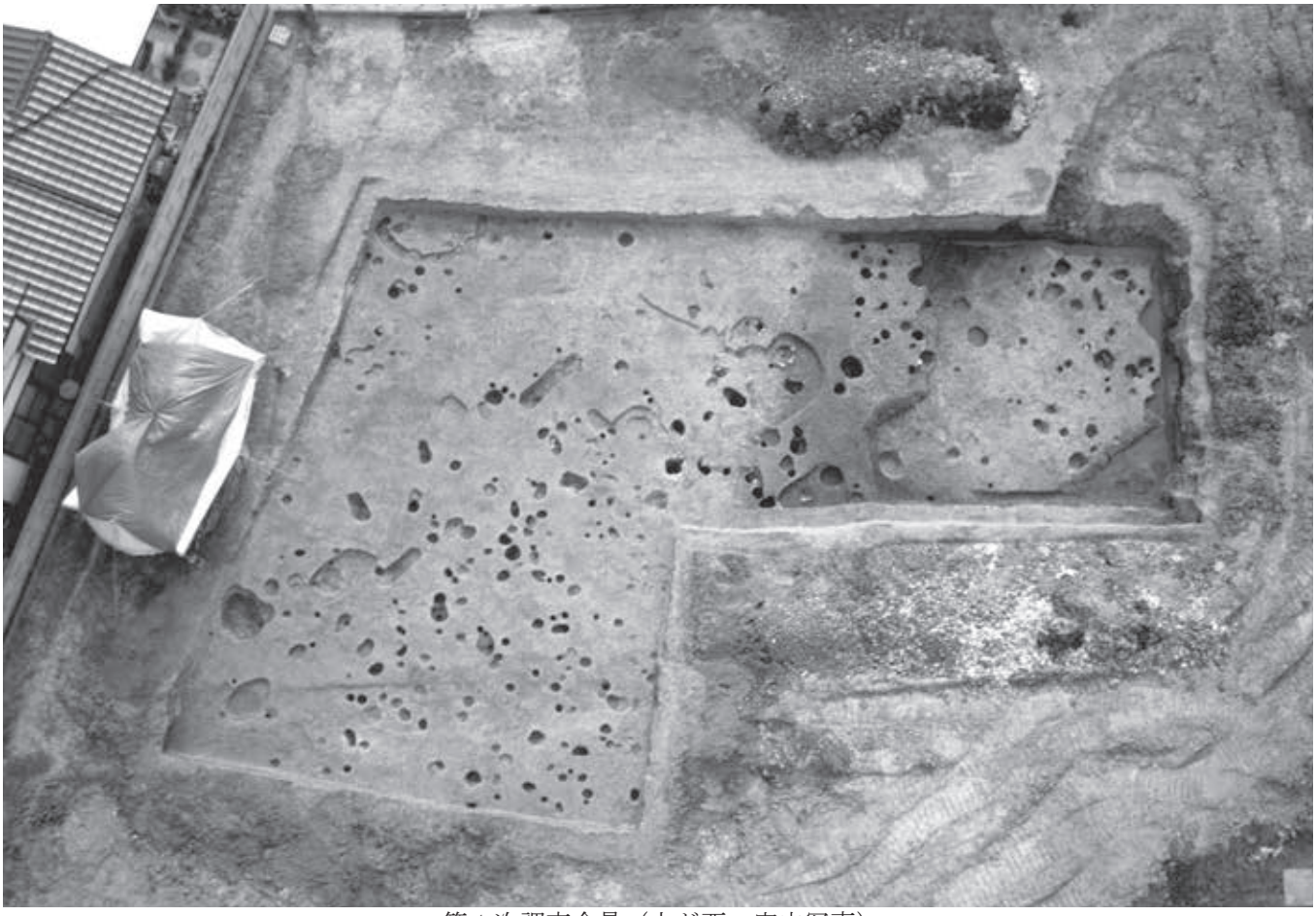
太宰府市教委『太宰府・国分地区遺跡群1』2004

太宰府市教委『太宰府・国分地区遺跡群2』2007

太宰府市教委『筑前国分寺跡3』2009

太宰府市教委『太宰府・国分地区遺跡群3』2014

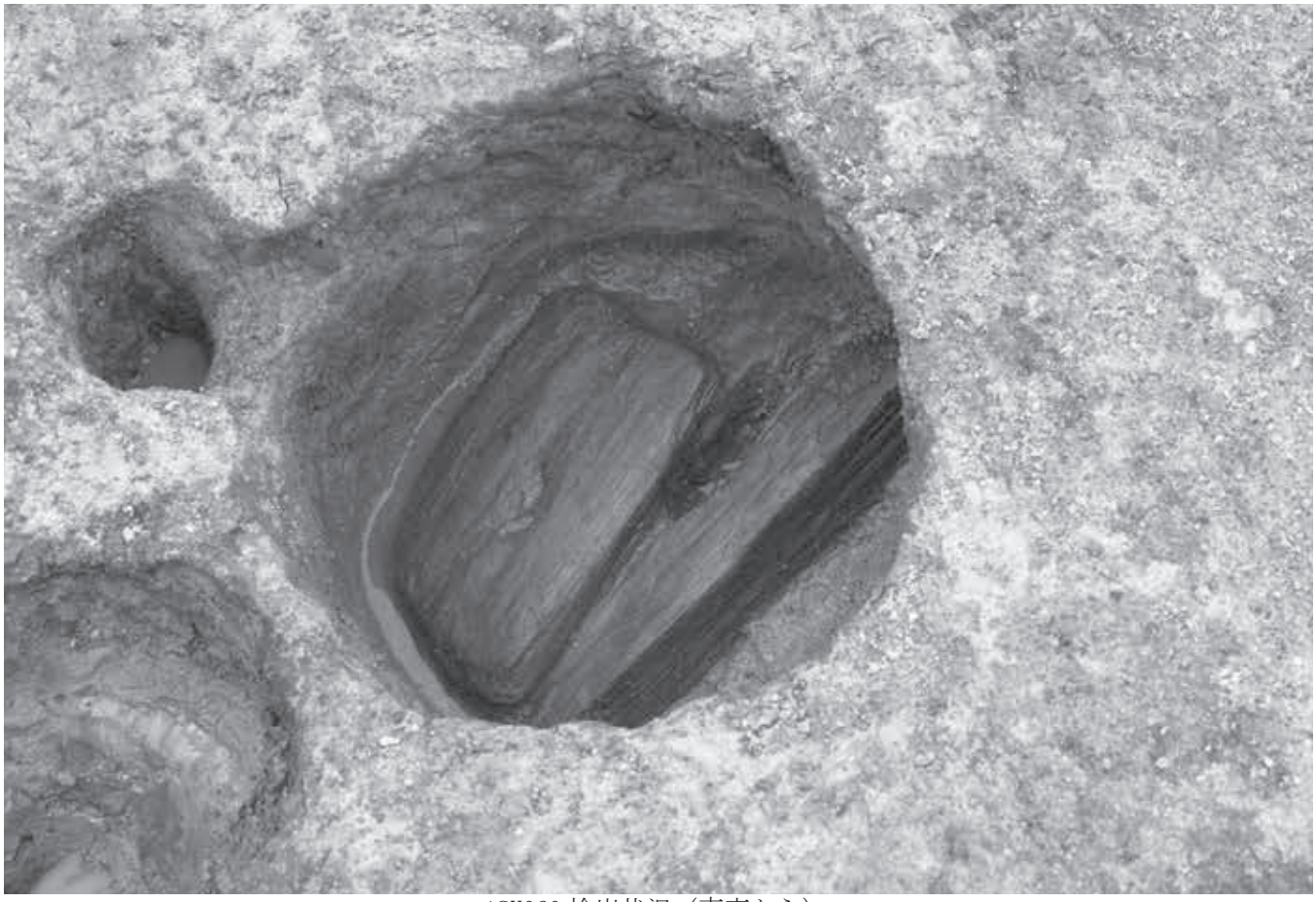
写真図版



第 1 次調査全景（上が西、空中写真）

1SI015 検出状況（南西から）

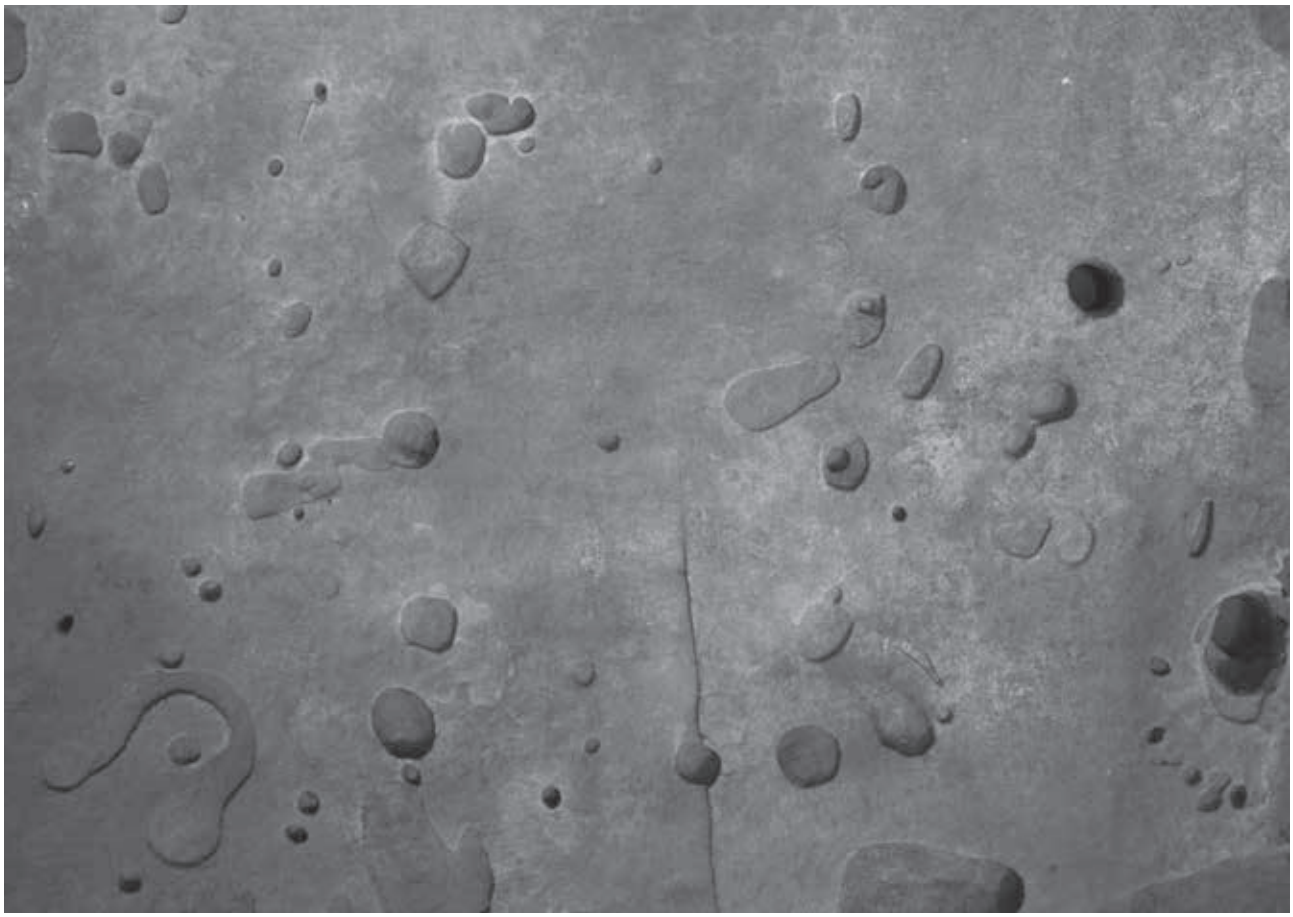
1SX030 検出状況（南西から）



1SX060 検出状況（南東から）

第 2 次調査全景（上が北、空中写真）

2SB040 全景（上が北、空中写真）



2SB045 全景（上が北、空中写真）

2SE020 完掘状況（北から）

2SK005 完掘状況（西から）

第 3 次調査全景（左が北、空中写真）

3SB040 全景（北から）

3SB010・040 全景（北西から）

3SI020 全景（西から）

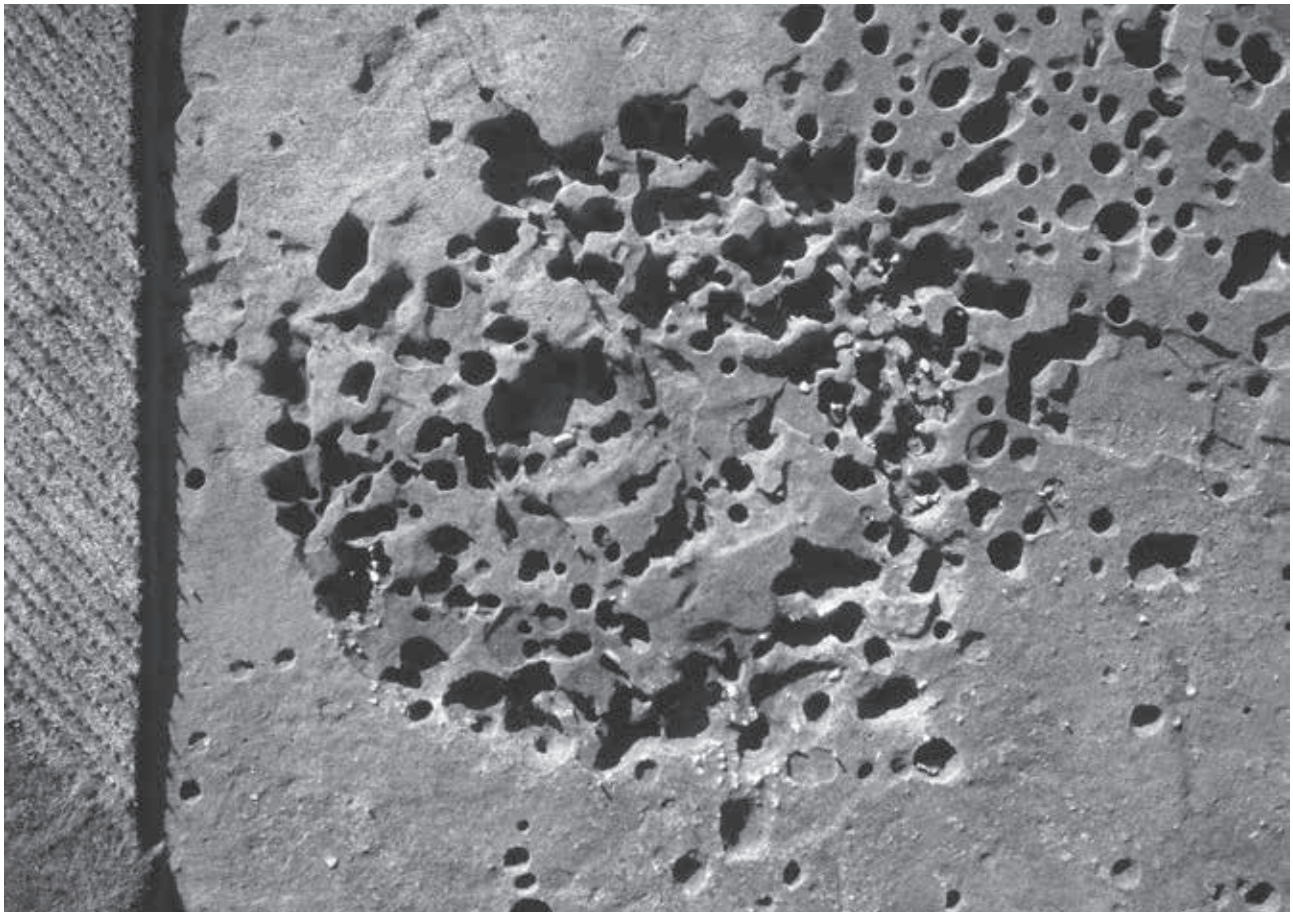
3SI030 完掘状況（北東から）

3SE002 完掘状況（北から）

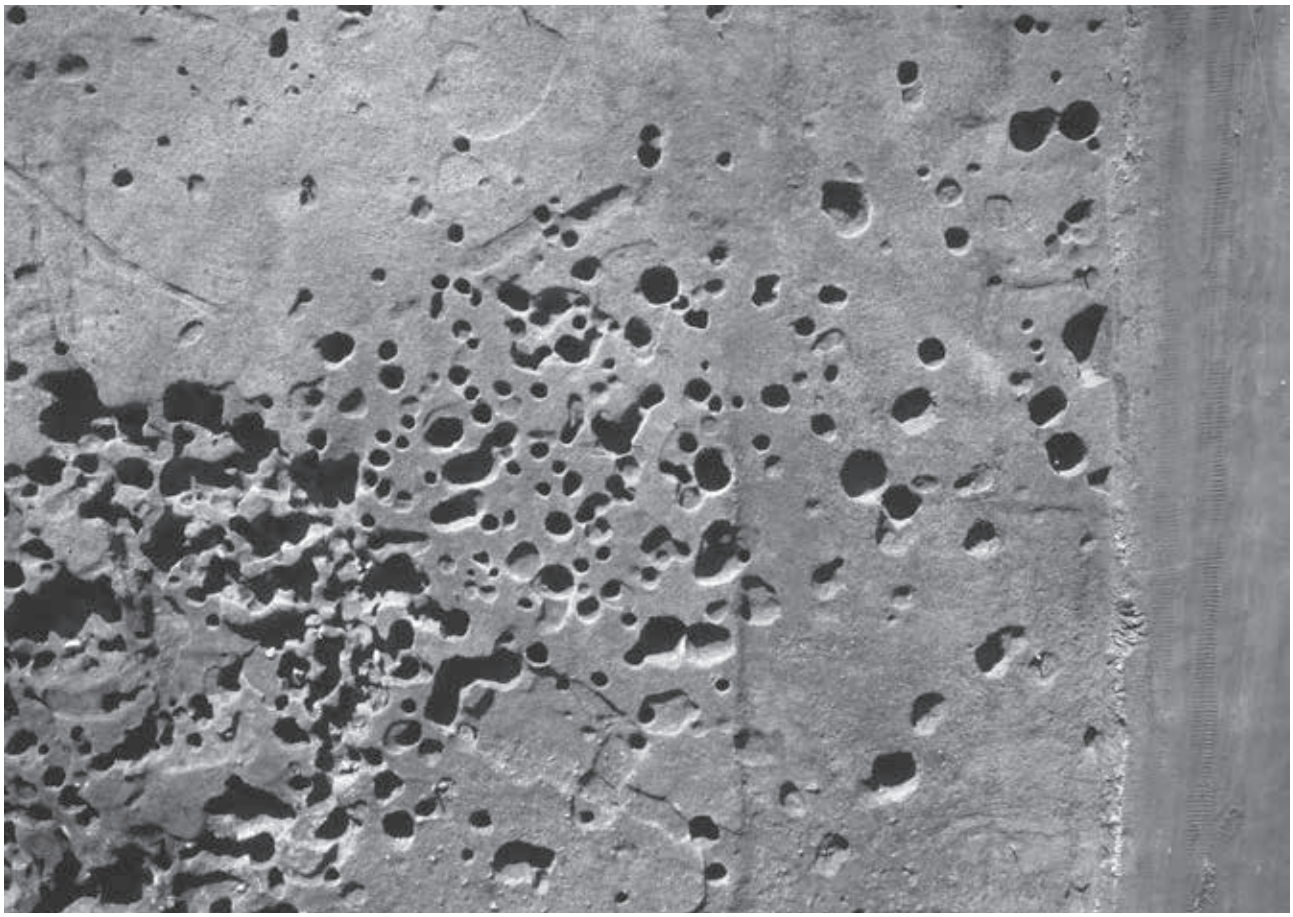
3SE036 石組み状況（北東から）

第７次調査全景（上が西、空中写真）

第７次調査西側全景（上が西、空中写真）



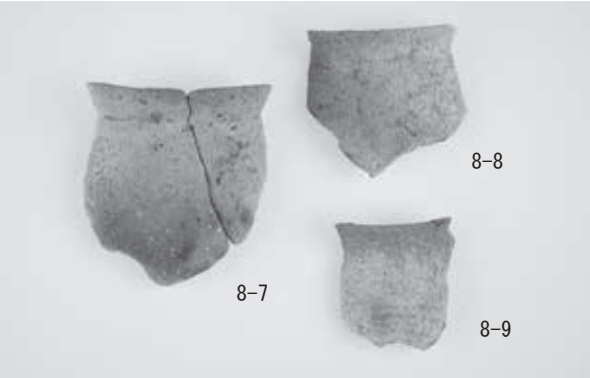
7SI001 全景（上が南、空中写真）



7SI035 全景（上が南、空中写真）

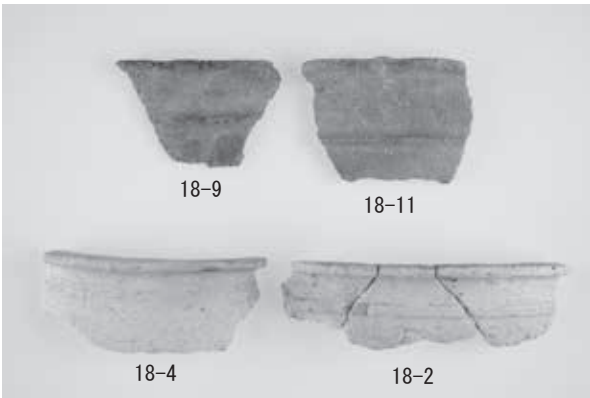
7SB015 完掘状況（南西から）

7SB040 完掘状況（北東から）



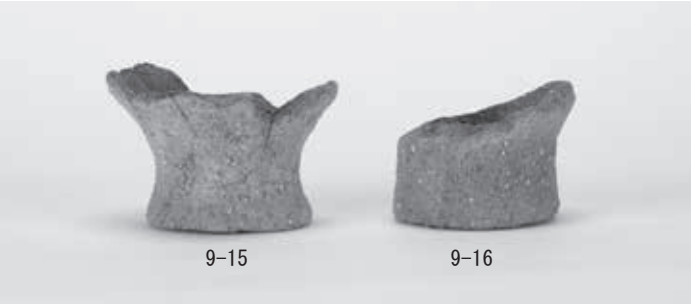
1SB065c（S-11）出土弥生土器甕（Fig. 8）

1SX001 上層出土石包丁・削器（Fig. 17）

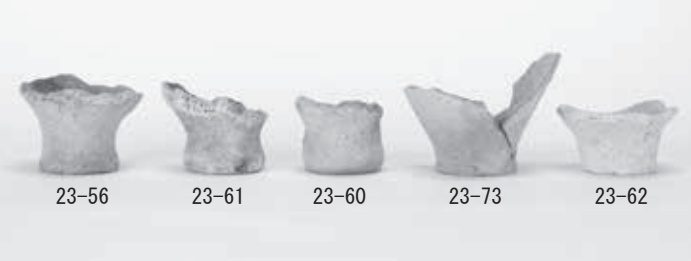


1SX001 下層出土弥生土器甕（Fig. 18）

1SX001 灰色粘土出土弥生土器甕（Fig. 30-1）

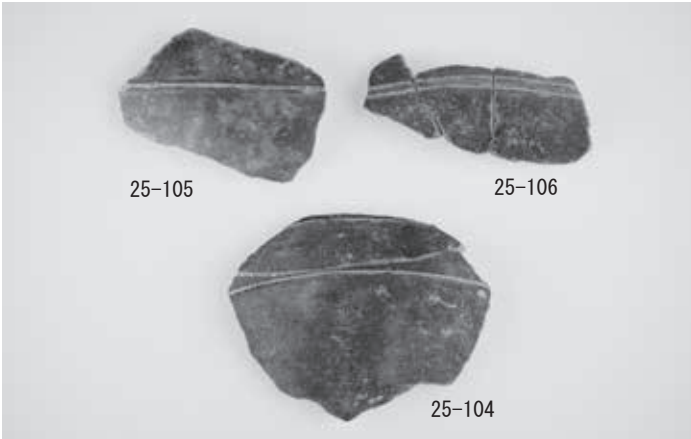


1SK010 出土弥生土器甕（Fig. 9）

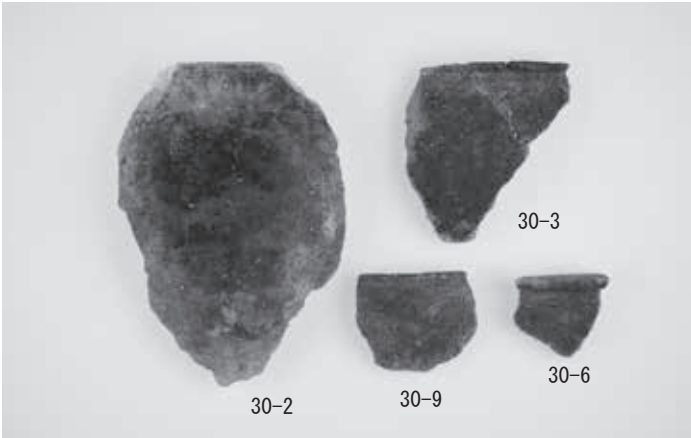


1SX001 下層出土弥生土器甕（Fig. 23）

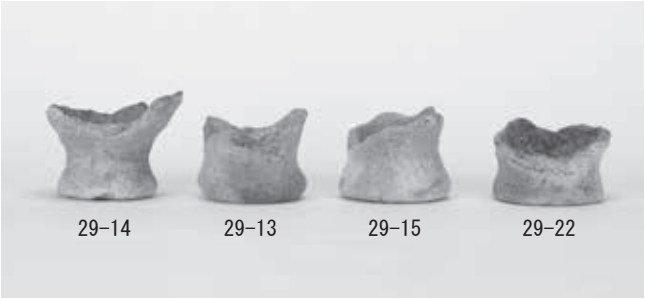
1SX001 下層出土弥生土器甕（Fig. 23）



1SX001 下層出土弥生土器壺（Fig. 25）



1SX001 灰色粘土出土弥生土器甕（Fig. 30）



1SX001 暗茶色粘土出土弥生土器甕（Fig. 29）

1SX030 出土円盤状板材（Fig. 31-10）

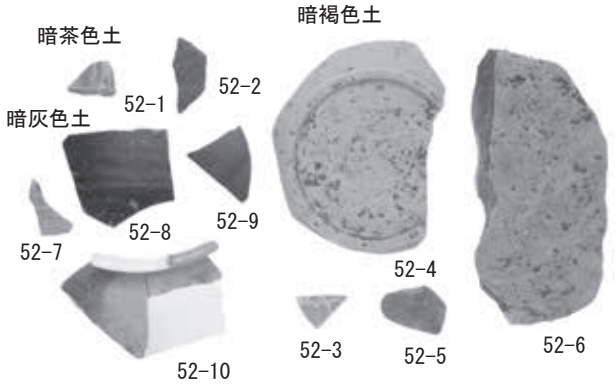
2SK001 出土軒平瓦の瓦当面（Fig. 40-10）

1SX060 出土板材（Fig. 31-13）

3SI020e 出土土師器高坏（Fig. 50-4）

3SI020 出土土師器小型丸底壺（Fig. 50-9）

3SI030 出土土師器甕（Fig. 50-16）



3SE002 暗茶色土・暗褐色土・暗灰色土
出土遺物外面（Fig. 52）

3SE036 暗灰色出土軒平瓦（Fig. 55-17）

7SI001 内出土石包丁（Fig. 71）

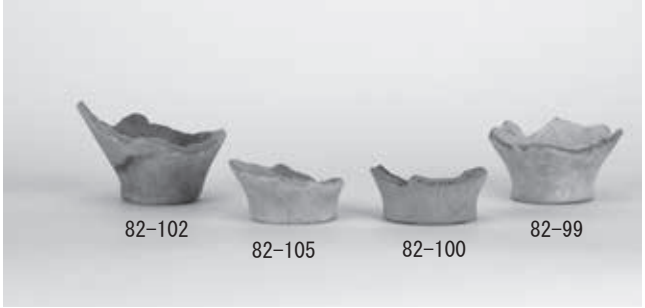
7SI001 内出土石製品（Fig. 71）

7SB040a 出土柱材（Fig. 73-4）

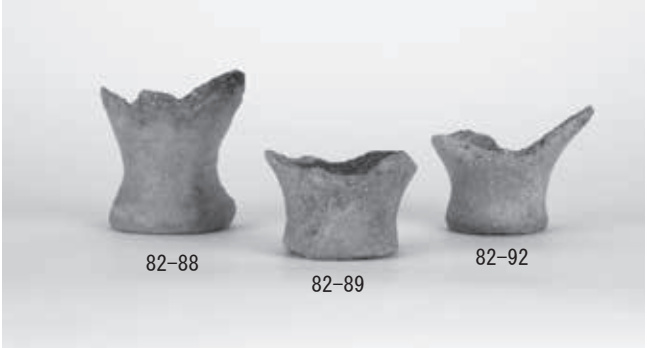
7SX025 明灰色粘土出土弥生土器支脚（Fig. 75）

7SX025 黒灰色粘土出土弥生土器器台（Fig. 86-163）

7SX025 黒灰色粘土出土弥生土器甕蓋（Fig. 86-157）



7SX025 黒灰色粘土出土弥生土器甕（Fig. 82）



7SX025 黒灰色粘土出土弥生土器甕（Fig. 82）

第 4 次調査黒色粘土出土柱状片刃石斧（Fig. 92-1）

報告書抄録

ふりがな	だざいふ　こくぶちくいせきぐん
書名	太宰府・国分地区遺跡群　4
副書名	国分千足町遺跡第1・2・3・7次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	130集
編著者	宮崎亮一、山村信榮
編集機関	太宰府市教育委員会
所在地	福岡県太宰府市観世音寺１丁目１番１号
発行年月日	2017（平成29）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	条坊 【鏡山推定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了	㎡	
こくぶせんぞくちょういせき 国分千足町遺跡　第1次	条坊外	こくぶ 国分3丁目	402214		57290.0	-46000.0	19850516	19850617	281	共同住宅建設 記録保存調査
こくぶせんぞくちょういせき 国分千足町遺跡　第2次	条坊外	こくぶ 国分3丁目	402214		57243.0	-45850.0	19900807	19900930	427	宅地造成 記録保存調査
こくぶせんぞくちょういせき 国分千足町遺跡　第3次	条坊外	こくぶ 国分3丁目	402214		57300.0	-45755.0	19910624	19910904	840	共同住宅建設 記録保存調査
こくぶせんぞくちょういせき 国分千足町遺跡　第7次	条坊外	こくぶ 国分3丁目	402214		57285.0	-45940.0	20121012	20130125	780	共同住宅建設 記録保存調査

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
国分千足遺跡　第1次	集落	弥生	竪穴住居、掘立柱建物 流路、土坑	弥生土器、石包丁	
国分千足遺跡　第2次	集落	奈良　平安	掘立柱建物、柵、井戸	弥生土器、須恵器、土師器 軒平瓦	
国分千足遺跡　第3次	集落	奈良　平安	竪穴住居、掘立柱建物 井戸、土坑	須恵器、土師器、緑釉陶器 瓦	
国分千足遺跡　第7次	集落	弥生　古代	竪穴住居、掘立柱建物 流路	弥生土器　須恵器、土師器	

太宰府市の文化財　第 130 集

太宰府・国分地区遺跡群 4

－国分千足町遺跡第 1・2・3・7 次調査－

平成 29（2017）年 3 月

編集　太宰府市教育委員会

発行　太宰府市観世音寺 1-1-1

印刷　株式会社　四ヶ所

福岡県朝倉市馬田 336